

ハリー・ポッターRTA  
ヴォルデモート復活  
チャート

純血一族覚書

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この小説は何番煎じかもわからないRTA小説の一つです。

ヴォルゲモート復活後の分霊箱全破壊、再殺を目指したチャートとなっております。

先駆者様、b i i m兄貴、J. K. ローリング女史にお辞儀をするのだ、ポッター。偉大なる先人には敬意を払わねばならぬ。ダンブルドアは礼儀を守れと教えただろう……。

より大きな善のために。

スペシァリス・レベリオ！ 化けの皮剥がれよ！

謎の囚人、暴露完了です……。

# 目次

ハリー・ポッターと賢者の石編

1 / ? 予言の日 / 入学直前まで

1

2 / ? / 組分け帽子まで | 13

アルバス・ダンブルドア 偉人か愚人

か | 27

3 / ? / 三頭犬の部屋まで | 45

4 / ? / ニコラス・フラメル発見ま

で | 60

死喰い人の娘とネビル・ロングボトム

| 74

5 / ? / 黒ローブ戦まで | 92

了

6 / ? ハリー・ポッターと賢者の石、

106

トロールのようにとろい旅路を

123

ハリー・ポッターと秘密の部屋編

7 / ? / サイン会直前まで | 147

8 / ? / ロックハート・テストまで

161

確実に魔女を惹きつけた十一の少年

177

9 / ? / 「秘密の部屋」開始まで

197

10 / ? / 半純血のプリンス蔵書ま

					で
					——
					213
					230
					255
					1 1 / ?
					↳ ダンブルドア追放まで
					1 2 / ?
					ハリー・ポッターと秘密の
					部屋、了
					——
					273
					297
					私はマジックではなかった
					——
					ハリー・ポッターと謎の囚人編
					1 3 / ?
					↳ 登校準備まで
					——
					333
					1 4 / ?
					↳ DADA教師邂逅まで
					347
					権力を求めた監督生
					——
					369
					1 5 / ?
					↳ 幸運の液体入手まで
					2 0 / ?
					↳ 夜襲まで
					——
					530
					2 1 / ?
					ハリー・ポッターと謎の囚
					2 1 / ?
					↳ 「三本の箒」会談まで
					511
					1 9 / ?
					純血一族端書
					——
					486
					466
					1 8 / ?
					↳ 道場稼ぎタイムまで
					450
					1 7 / ?
					↳ ——を制する者誕生まで
					427
					最も邪悪なる魔術
					——
					410
					1 6 / ?
					↳ 忍びの地図入手まで
					392

人、了	551
ムーニー、ワームテール、パッドフツト、プリンス	580
ハリー・ポッターと??の??編	
22/?	クイディッチ・ワールド
カップ・バザールまで	628
23/?	「三大魔法学校対抗試合」
クエスト開始まで	650



ハリー・ポッターと賢者の石編

1／？ 予言の日々入学直前まで

はい、よいスタート。

混血お辞儀を純血エリートでぶつ頃すRTA、はーじまーるよー。

計測開始は予言スタートの1981年10月31日、計測終了は復活後お辞儀様も  
う一度天に召されるまでとします。これは……インゲームタイム<sup>G</sup>な？（ガバ推論）

それはともかくキャラクリエイトですが、今回のRTAでは諸般の事情により、入力  
速度を考慮せず名前を「ズイラ・レストレンジ」、主人公と同年代の性別女の子、略して  
ズレちゃんとしています。

「ちよつと待つて！ ホモが入ってないやん！」や「レズすら入ってないやん！」と  
ご意見もあるかと存じますが、大丈夫だつて安心しろよく。ヘーキヘーキ、ヘーキだか  
ら！ 114514回に渡るチャート構築のケツ論、見とけよ見とけよく？

さて、開始早々ですが、このチャートは開幕と同時に早くも第一のリセポイントが  
待つています。（絶望）

というのもズレちゃんのご両親はほんへでは種無しインポ野郎のロドルフ・アス・レス  
トレンジ氏と、一級犯罪者の癖に非戦闘員であるロンのカツチャマに負けた婆ことペラ  
トリックス・レストレンジ女史の二人だからですね。

彼らはさるハロウインの日、「育成枠の至宝」と称されるネビル兄貴のご両親のご自宅  
へ、お友達のクラウチ君たちと四人で拷問パーティーへと向かいます。リドル氏の所在を  
知るためですね。ですがお辞儀様は既に霞以下であつたため、あえなく御用となつてし  
まうわけです。

残される一人娘のズレちゃんですが、今後の処遇は開始時の乱数で多数のルートに分  
岐します。場合によってはプレイヤーの行動を待たずして詰みに陥る場合もあります。  
ちよつとレストレンジ家ハードすぎんよ。

「開ける！ 闇祓い局だ！」

おつと解説途中ですが早速ホモコップの登場ですね。ここでクラウチ・シニアがやつ  
てきたら高確率でアバダります。(3敗)

しもベ妖精がドアを開ける間、死ぬ気で祈りましょう。それしかできることはありません  
せん。

クラウチは嫌だ、クラウチは嫌だ、クラウチは嫌だ……。

「闇祓いのロバーズだ。この家には搜索令状が出ている」



ガウエイン・ロバニーズッ!

ダンブルドア、ムーデー程ではありませんが、そこその当たりです。これは幸先がいい!

ガウエイン君は後の闇祓い局局長となる人物ですが、当時はまだまだペーペーの新人です。闇祓い局特有のスレ方をしていない実直な青年な訳ですね。これから十年近くたまたま金も杖もしゃぶり尽くしてやりましょう。

「……彼女は?」

「ズイラお嬢様でございます。闇祓いのお方。どうか……どうかお嬢様だけは……!」

ズレちゃんを発見したガウエイン君が守護霊で上司と連絡を取っているようですが、問題ありません。レストレンジ家の遺児（大嘘）をはじめに発見したキャラに対してのみ、憐憫からか好感度ボーナスが付くように設定されています。善側のキャラなら余程のクソ乱数じゃない限り安全が保障されるでしょう。

「——しかし彼女はまだ子供だぞ!」

中でもガウエイン君が持つ特徴の一つに、若くて独身というものがあります。

既婚キャラや老人キャラの場合引き取って育てるという選択肢が提示されますが、本チャートにおいては多大なるロス、あるいはリセットの危機に直面してしまいます。ダニ爺やマッドアイは例外的に加速要素ですが、TASさん並みの豪運と操作精度を必要

とするため人力ではガウエイン君が無難でしょう。

「ええと……」

「カーンでございます。闇祓いのお方」

さて、そんな無駄話をしているうちに展開が進みました。なぜガウエイン君が本RTAに適しているか。それは詰まる所――

「――すまない。君をこんな家に一人残していくなんて……」

――レストレンジ邸残留ルートの為ですね。発見者がある程度の年齢、資産を所有するか又は既婚者だった場合、引き取ってその家の子供として育つルートに突入します。このゲームに不慣れな方は、死喰い人孤児で始めた場合は誰かしらの養子になるルートをお勧めします。風評被害からなる精神値の汚染が激しく、下手を打てばスクイブ墮ちもあり得ますので。

しかしこれはRTA。十年のフリータイムとある重要アイテム回収のためには愛なぞフヨウラ！

というわけでもべ妖精と二人、めでたく屋敷残留が許されました。やったね、ズレちゃん！

……とはいきません。自由行動が許される3歳児に到達するとすぐに、第二のリセポ

イントに突入します。

闇祓い局によって強制捜査（意味深）されたレストレンジ家ですが、ここで接収されるアイテムは実のところ確定していません。最悪にクソ乱数の時はマーリンの髭一本残らずむしり取られることもあります。それどころか初期配置のアイテムすら決まっていないと攻略Wikiには書いてありました。こんなんじやRTA壊れちゃう！

第一次家探しイベントで今後のタイムと生存率が大きく変わります。最低限のアイテムすら無ければズレちゃんの運命はここまです。（8敗）

具体的にはとある重要アイテムと呪文練習用の杖は必須です。後から調達するのは極めて困難なため、ない場合リセしまししょう。

その他には「基本呪文集」、「変身術」の通年セットが欲しいところです。ただしこれに関してはトツチャマ達のお古があることが多いので心配していません。この二種からは大抵の低位の呪文と、一部高位の呪文まで覚えられます。既プレイ兄貴の中には入学時動物もどき習得を目指した方もいるのではないのでしょうか。本プレイでは時間の都合上難しいですが、習得しておくとホグワーツでの深夜徘徊が解禁されるのでおすすめです。

また、「通常の呪いとその逆呪い概論」、「闇の魔術の裏をかく」、「自己防衛呪文学」、「呪われた人のための呪い」のうちいずれか一冊があれば短縮要素になります。これらの本

からは失神と盾という二大呪文が習得できます。DADAさんは神的に良い授業だから……（血を裏切るもの）

三歳児で屋敷内を自由に動き回れるのかという疑問については問題ありません。以前ロツクハートルートを進めていた際、ロンの杖逆噴射イベントを忘れた結果、歩行機能を忘却したままバジリスクから逃走した過去があるので。蛇にだって足はないんだから人間もその程度、多少はね？（岩心の記憶）

というわけで第一次遠征にイクゾー！ デッデッデデデッ。

「いけません、お嬢様。危のうございます。どうか私めに「命令を」

カーン!?（しもべ妖精）

気を取り直して屋敷しもべ妖精に背負われてイクゾー！

——おう親父。<sup>カーン</sup> 使える杖あったら持ってきてくれや！

えっカツチャマ達が用意していたプレゼント……？ ありがとナス！

——ベラ女史の部屋にのりこめー。

とある重要アイテムセット、ヨシ！ 教科書セット、ヨシ！

これでリセの恐怖は無くなりましたね……。

——さてさて、失礼して書齋へ……。

おい、見つかったよ。「幻の動物とその生息地」だよ（ONDISK）。一応ハグ

リッド兄貴の好感度上げには使えるので覚えていきましょう。

最後の防衛術関連の本ですが、D A D A（届かぬ呪い）……。闇筆頭の家系だけあつてやっぱりありませんね。イモリレベルとは言わないまでもフクロウ程度はあつて欲しかったんですが……。

んゝ闇の魔法、闇の魔術、闇の秘術……つてファツ?!?!?

なんで？　なんで？　なんで？　普通持つてないじゃーん！　あつ、カーン君ちよつとあつち行つて。

……「深い闇の秘術」を入手しました。クオレハとんでもない加速& a m p；事故要素ですね。出来るだけ読まずに隠しておきましょう。カーン君、これトツチャマ達の遺品だから、いい感じに取つといて！

さて、既プレイの方、ご安心ください。これはチートではありません。

「深い闇の秘術」はホグワーツ図書館の禁書にすら存在せず、ダンブルドアの隠し書齋にのみ配置されるアイテムです。入手方法にも隠し書齋のみしか記されていない為、イベントアイテムのように誤認しがちですが、実のところこのアイテムは通常プレイでも入手可能です。

入手条件は三つです。

一つ目は純血の家系、それもブラック家に近い闇寄りの純血であることです。

二つ目は闇祓いの捜査を受けていない、あるいは捜査の手が及びきつてはいない場合のみプレイヤーが保持可能です。ほんへでマルフォイ家がアーサー・ウィーズリー氏によつて家宅捜査されたように、時間経過とともに接收される可能性が高まります。なんらかの対策を施していない場合、「賢者の石」章までには確実に失われるでしょう。今回はガウエイン君の調査ガバによる賜物でしょう。ちよつとガウエイン君目ガババすぎんよ。おおタスカルタスカル。

そして三つ目ですが……恐ろしいほどの低乱数の突破です。このゲームの攻略本から一部抜粋します。

『いずれも入手できる確率は0パーセントと表示されるが、このゲームでは小数点以下を切り捨てているため、実際は小数点以下の確率で入手できる。気が遠くなるほど低い確率だがゼロではない。何度も何度も挑戦すれば手に入れることが可能』

とのこと。同世代キャラの場合両親が持っているかはキャラクリ段階で判定される為死ぬほど面倒ですね。一応闇の帝王の側近であれば確率が上がると聞いたことがあります。通常プレイでの入手は現実的ではないでしょう。

#### 閑話休題。

謎の豪運により、五年生時チャートの一部を修正することになりそうです。ガマガエル姉貴に媚を売らなくて良くなったのでイイゾーコレ。

何はともあれ。ホグワーツに入るまで十年程度時間があります。ここから先はひたすらに呪文の修練に励みましよう。

失神と盾の本がなかった為それはガウエイン君におねだりするとして……。幼少期に取得する目標の高位呪文は大正義「守護霊の呪文」です！

この呪文は腐れマントを追い払うのみならず、伝令としても非常に優秀です。フクロウと違って鹵獲される場合が無く、超スピード!? での伝達が可能です。

またゲーム的には、この呪文は習得するだけでアライメントが善に偏るという効果があります。善陣営のキャラの好感度も上がり、ついでにフクロウ試験の点数も上がります。まさしく伝令もできる、守護霊もできる、ビキビキビキニ、1. 2. 3. な有能呪文です。

さらにさらに、三年生時において、ハリー友人ルートの場合には友情値にボーナスがかかるという特典まであります。このルートを進むなら、余裕があれば習得しておきましよう。まあ、本RTAには関係ないんですけどね、初見さん。

ここから先、年単位でズレちゃんか呪文を修練するだけの稼ぎ期間なんで、倍速です。

.....

.....

.....

ただ倍速で流されているだけだとお暇だと思われれます。

そんなみーなーさーまーのーたーめーにー。

R T Aにおける初期条件考察を行います。

結論から言えば、純血一択、最悪でもトンクス家のような純血に近い魔法使い親子の混血以外で走ることはお勧めできません。

純血には、教育、環境、資産、人脈、血統、その他諸々、何より十年間の時間という絶対的なアドバンテージがあります。マグル生まれとは隔絶した差があることは、イトン校入学予定だったジャスティン君がハッフルパフの一生徒であったことからわかるでしょう。やっぱり穢れた血は駄目だな！

ハーマイオニー？ あれはラマヌジャンみたいなチートだから（震え声）

特に本R T Aにおいてはマグル生まれではとある重要アイテムを絶対に入手できないので——と等速に戻りましたね。なんらかのイベントが発生したのでしょうか。

来客イベントですね。恐らく闇祓い関係の誰かでしょう。クラウチ君は失脚したのでへーきへーき。

ふむ、身長180センチで、銀色の髪、片眼鏡に折れ曲がった鼻。

……ダンブルドアですか。入学証明書を渡しに来たんですね。

さて、通常プレイでも使えるテクニクですが、ダンブルドアに会った時には目に関



する描写に注意しましょう。隠しパラメーターとして、ダンブルドアには<sup>G</sup>爺値、正式名称「<sup>よ</sup>Great<sup>大</sup>er<sup>き</sup> Good<sup>善</sup>の値」が設定されています。この値は高ければ高いほどダンブルドアは「より大きな善のために」非道もやむなしと行動します。そして忌々しいことにこの公式ホモ野郎の値は初期値ランダムかつプレイヤーでは把握不可能なマスコデータとなつていているんですね。ちよつとこのゲーム初期値ランダムすぎんよ。

プレイヤーが爺値を見分けるにあたって、最も確実な手段は初見の彼の瞳の描写に注目することです。

「朝焼けに照らされた海面のようにキラキラと輝く彼の青い瞳。若々しさと老成さが同居したそれは、少女の心に深く焼きついた」

この描写が出た場合、爺値は低めから通常程度でしょう。仮に高くとも警戒されていないため、なんら問題ありません。

「深い知性を秘めた青い瞳に、少女は吸い込まれるかのような錯覚を覚えた」

この描写が出た場合、御愁傷様です、あなたは開心術を掛けられています。言うまでもなく爺値は高めで、その上あなたは要警戒対象です。その時のアライメント次第ではリセもやむなしでしょう。

さて今回のズレちゃんは――

「よろしくお願いします、ダンブルドア先生」

ズイラは一礼し、老人に対し真正面から向き合つた。朝焼けに照らされた海面のよう  
にキラキラと輝く彼の青い瞳。若々しさと老成さが同居したそれは、少女の心に深く焼  
きついた。

——やったぜ。

今回は爺値は低めですね（確信）

これならホグワーツ生活においては間違ひなく安定するでしょう。

頼もしい味方もできたことなので、今回はここまで！

ご笑読ありがとうございます。

## 2 / ?      く組分け帽子まで

ロジックをマジックが破壊するRTA、行くぞオラア！  
チャート

さて、前回ダンブルドアより入学許可証をもらった今、やるべき事は各種道具を揃える事ですが、ここで焦ってはいけません。

そのままガウエイン君に話をした場合、高確率で休みの日にダイアゴン横丁に買い物に行こうと提案されます。以下のように対応しましょう。

——準備して♡（提案）

——嫌です……（即答）

実のところ理由はなんでも構いません。ガウエイン君のことを適当に気遣ってあげましょう。お仕事頑張ったね、とかなんとか。

なぜこの様な問答が必要かと言うと、これを挟まない場合ガウエイン君が休みの日、つまりは日曜日に買い物に連れて行ってしまいうからです。

これはいけません。

any %を走る兄貴達には釈迦に説法でしょうが、ハリー・ポッター君が初めて買

い物に行く日、ドラコ・マルフォイ君との初接触を果たす日、序でにクイリナス・クイレル教授がダイナミック強盗を敢行する日は、確定イベントとして定まっています。

そのものズバリ1991年の7月31日。曜日にして火曜日です。これら三種の時限イベントに関わる場合はこの日に横丁に向かいます。

本RTAでも好感度調整の都合上、この日に買い物に向かいます。

当日。カーン君のしもべ流姿くらしに相乗りさせてもらうのも乙ですが、今回は煙突飛行を使ってみましょう。チャートの意味はありません。忘れ物はどう、無いかない？ ちよつとしたお買い物のために、杖と財布、貸し金庫の鍵とレストレンジの家紋が入った指輪を忘れないようにしましょう。

この日漏れ鍋を訪れると、運が良ければ——おつと、いましたね。ハリポタ界のターバンのガキ。お辞儀様を後頭部に貼り付けた男ことクイレル教授です。一部レギュレーションのRTA走者から死ぬほど憎まれていた教授。そういった悲喜こもごもについての解説はのちに回すとして、とりあえずお辞儀だけしておきましょう。

過食や少食といったバステによる極端な体型変化がなければ、後頭部のトム君にもレストレンジ家の娘であることが伝わるはずです。存在を知られておくことにより、クイレル教授が忖度してくれる場合があります。一年生のDADAごときに必要かどうかはともかく、損はしないのでやっておきましょう。

特定地点まではハーマイオニー級の好成績を残す必要があります。既プレイヤーならご存知の、例のチートアイテムの確保のためです。

次に店主のトム君の様子を窺いましょう。彼の様子は——ああ、興奮していますか。ハリー達はどうかやら去った後の様です。急いで追いかけて——いや、先回りしておきましよう。

因みにですが、仮にハリー達と遭遇しても、同行することはありません。これはハリーがどうこうと言うよりも、同伴のハグリッド兄貴の対応が困難だからです。レストレンジの人間というだけで、「グリフィンボール」並びに「騎士団」所属の人間の好感度が野獣先輩の人間性並みに削れています。反面、蛇寮からの好感度はやや高めです。

ハグリッドとロンという二大防壁が同席していた場合、こちらの対応に関わらずハリーの好感度が減少してしまう危険性があります。

だから、ハリーと初接触する際にはハグリッドがおらず、マルフォイとエンカウントできる、かの洋服店で会う必要があるんですね。

気を取り直して、店の裏手に回って石レンガの扉を杖でノックすれば、あら不思議。そこには WIZARDING<sup>魔</sup> WORLD<sup>法</sup>が広がっています。

ハリーはこの景色に感動した様ですが、私はいやーもう十分堪能したよ（リセット）。早く（記録）出してくれ！ と言う感想しか、もはや出てきません。RTAは愛を削る。

はつきりわかんだね。

マダム・マルキンの店で、偶然を装ってハリーとマルフォイに接触するために、張り込みを行いたいと思います。とはいえ店先に立ち尽くしているのも怪しすぎるため、近場の店で時間を潰しましょう。

本チャートでは、フォーテスキューのアイス屋さんを選択しました。ここを馴染みの店に選択していた場合、三年時のポッター大脱走時に容易に接触することが可能です。レストレンジ家キヤラでは、ある程度ハリーとの友好を外部に示しておかないと、黒犬に噛みつかれる危険性があります。そういった意味では安定行動かもしれません。

——ここからは余談ですが、店主であるフロリアン・フォーテスキュー氏には隠しルートがあります。通常プレイでは、「謎のプリンス」章開始時にオリバンダー老と共に拉致られて頃されるフォーテスキュー氏ですが、ウィーズリーの双子関連のイベントを進めておくことで、横丁での発言権を得るイベントが発生します。ここで「ダイアゴン横丁の防備を固める」を選択すると、拉致られるのはオリバンダー老一人に変化します。アイス屋一人助けたところ……と思うかもしれませんが、彼を助けることで六年生終了時に、「ニワトコの杖」と「レイブンクローの髪飾り」の情報を入手することができます。

これは彼の先祖がホグワーツ校長、デクスター・フォーテスキュー氏であり、アイス屋の中に彼の肖像画が置いてあることに由来するイベントです。このイベントの発見により、髪飾りの早期取得、それに伴うクラブ生存ルートが開拓されました。

ハリー・ポッターは血縁が入り乱れている関係上、そこらのサブキャラが重要なフラグを隠し持っているかもしれません。次回プレイ時には探してみてもうどうでしょうか。俺もやっただからさ（同調圧力先輩）。

### 閑話休題。

イベントが発生するまで、ストロベリーサンデーでも食べながら待ちましようか。

おう親父、その美味そうなサンデー、端から順に持つてきてくれや！

……えっちよつマジ!?（サンデーが）いっぱいいっぱい裕次郎……。

——ズレちゃんがサンデーと格闘している間、本RTAでは貴重な何もすることのない時間なので。今のうちに本レギュレーションの概略についてお話しします。

本RTAはタイトル通り、死の飛翔兄貴を復活させ、分霊箱を7つ全て破壊し、再札するレギュレーションとなっております。

speedrun.com並びにニコ生RTAにはany%の記録はいくつかありましたが、本レギュレーションの記録は公式記録の1998年5月2日が最速記録と

なっております。

走者くは居ると思うんですけど、なぜ走らなかつたんでしょかね？ 不思議ですね。(すつとぼけ)

本チャートは114514回に渡って検討に検討を重ねた結果、1996年の6月18日、イベント的には「神秘部の戦い」編までの短縮に成功しました。

「ハア〜……あほくさ……。そんだけしか短縮できんかつたんか。お前ホンマ使えんわ。はーつつかえ！ もーホンマ使えへんわ。辞めたらこのRTA？」

と仰られる方もいらつしやるでしょう。申し訳ございません！

フアツキンクソ蛇さえいなければさらなる短縮も可能でしょうが、血の呪い姉貴が分霊箱になるのが1994年の夏である以上、本レギュレーションではそれ以前までの短縮は不可能と結論づけました。そこまでもハブ酒作成には事故要素が絡みます。クソ蛇ほんまクソ蛇。

……賢者の石によるお辞儀復活イベントをこなした場合、蛇姉貴が分霊箱になることが早まる場合がありますが、完全に未知のエリア!? なのでキャンセルだ。

話を戻して。本チャートは「神秘部の戦い」までに「分霊箱の破壊方法の構築」「分霊箱の発見および全破壊」、「ハリー・ポッターの育成」の三つのタスクをこなす必要があります。みんな見とけよ。



そうこうしている間に、マルフォイ君が現れましたね。いい加減サンデーを食っているズレちゃんの暴食をやめさせましょう。おなか壊れちゃう！

さて、店内に入るとポッターとマルフォイが話をしていますね。乱入しましょうか。すみませ〜ん。ズイラ・レストレンジですけど〜。ま〜だ時間かかりそうですかね〜

？

ここではフルネームを名乗って構いません。ハリーに友好的に話しかけつつ、マルフォイ君に家名をアピールしましょう。体感ですが、ベラトリックスの娘である場合、魅力値判定にプラス補正がかかることが多いような気がします。魔法族の遺伝は強い。

しばらく話をすると、マルフォイ君が立ち去って行きます。おう坊ちゃん、蛇寮でまたな！

ポッター君との個別面談では、スタンスの選択が提示されます。「純血以外は入学させるべきではない」「血縁も大事だけど、本人の資質の方が大切だ」「これからの時代、マグル生まれとの融和もやむなし」の三つが提示されますが、今回は二つ目を選択しましょう。

これらの選択は、上から順に蛇寮資質、鷲寮資質、獅子寮資質が上昇します。蛇寮前提なら一つ目でも構わないんですが、ポッター君の好感度が下がるし、多少はね？ 別レギユの先駆者兄貴も選択している、由緒正しき回答です。

そうこうしている間に、半巨人兄貴が合流しましたね。名前だけ名乗ってちやつかり合流しましょう。先にポッター君を落としておいたおかげで、ベラカツチャマの面影は隠しきれませんが、気のいいハグリッド君は気にせず同行を許可してくれます。てめー、頭脳がマヌケか？ 馬を射んとせんものは、まず将を射よってやつです。あつアイス奢つてくれるの？ ありがとナス！ ……先程食べたばかりですが、心意気を無駄にははいけません。美味しそうに食べましょう。

「おや、いらつしやいませ。杖をお探しですか？」

オリバンダーの店に着きました。ここでは杖を購入することができます。

ズレちゃんには既に杖を持っていますが、もう一本予備で買っておいの方がいいです。戦闘中に杖を折られた場合、高確率でそのままキングス・クロス行きとなってしまう。直前呪文対策も必要ですので、今後に備えておきましょう。

オリバンダー老はクツソ優秀な人物ですので、杖を通じてキャラの性格値を判別することができます。フレーバー程度に気にかけておきましょう。

今回の杖は……杖材・トネリコですか。固い信念（最速）や目的（完走）を持ち、精神力があり（ガバらない）自惚れない（謙虚）。なんだこれは、たまげたなあ。

木がトネリコの場合、素材は自動でユニコーンの毛になります。ふむ、ほぼ一貫して

安定した魔法を繰り出せる（安定チャート）。願掛けにはいい結果ですね。闇の呪文に不向きなのが欠点ですが、墮ちろ……墮ちたな（犯行予告）。

杖の長さは……なにこれ？ カチカチじゃん！

……目を背けていましたが、最後に長さです。

これは、115（ミリ）くらい？ ヒエツ（戦慄）。ああ、（性格値）落ちたねえ……。杖の長さが極端に短い場合、性格に問題があるとされていますが、これは短すぎませんかね……。ガマガエルですら20センチは切らないんですがそれは……。

ひよつとすると設定されている最低値付近を引いたかもしれません。後で攻略Wi kiの方に報告しておきましょう。

これでハリーたちとの同行は終わり！ 閉廷！ 以上、みんな解散！

ここからは自由行動です。

尺も長くなってきましたし、学校指定の道具は割愛して、今回はRTAで必須のものだけ解説しましょう。

まずは本屋。ここで買うのはノット著「純血一族一覧」・ポケット文庫版です。これにはレストレンジ家を含む、聖28族の家系図や住所が載っています。防犯意識ガバガバじゃねえか（呆れ）。

次に銀行。貸し金庫に行くと、分霊箱破壊ルートの大敵、ハツフルパフのカップ君が

鎮座しておられます。通常プレイにおいてカップ君が最強の難敵となる場合が多いのですが、レストレンジキャラの場合はフリーパスです。三年後に再会を約束して、金貨だけ持つて帰りましょう。

最後にノクターン横丁。一般キャラだとかなり危険なポイントですが、死喰い人の娘にとつてはホームグラウンドのようなものです。アドバンテージを活かしていきましよう。

今回購入するのは……透明マントツ！ デミガイズ製のパチモンですが、高級品ともなれば半年は持ちます。休みのたびに補充すれば無問題。本RTAの三種の神器の一つです。チートアイテムをぶん回してこそそのRTAつてそれ一番言われてるから。

というわけで帰って寝ましょう。今日はなにもない素晴らしい1日でした。

8月も全部なにもない素晴らしい1日です。純血一覽だけは覚えておきましょう。蛇寮の社交は超スピード!? なので乗り遅れないように。呪文の練習は言うに及ばず。……ポケツト文庫版の純血一覽がクツソ読みにくいことが判明しました。エンゴージオでリカバリーだ。(準備万端)

9月1日。ようやくホグワーツ特急まで辿り着けました。ここに来るまでに実に二桁数のズレちゃんが「死」に誘われています。

このレギュレーション、というよりハリポタRTAの大半がそうなのですが、リセツトポイントのほとんどが入学前に設置される傾向にあります。ホグワーツ城に入城してからは、天下無敵爺に守られながら、適度に授業をこなし、年末調整のごとくその年ごとのイベントを終えるだけなので楽なものです。本RTAでも、ここまでくれば安心。次に通常プレイと大きく外れて動くのは、「a s sガバガバの囚人」編となります。ん？ 間違ったかな……。

気分がいいので適当にホグワーツ生に絡んでおきましょう。風聞は個別キャラの好感度にすら影響する重要ステータスです。現在のズイラ・レストレンジの風聞はクツソ悪いですが、そこは手のひらドリル並みのホグワーツ生。ちよつと優しく振る舞えばすぐに改善されるので楽なものですね。

——蛇寮の先輩！ 好きっす！（唐突）

——おつ、非魔法族出身者かな？ 魔法界楽しいところだよ。善なる魔法使い・レストレンジをよろしく。……ぺっ、穢れた血が！

——か、わ、い、い、な、あ、赤毛の、お、嬢ち、や、ん。来年入学なのかな？ 待つてるよ！（野獣の眼光）

——婆と孫かな……ってやばいやばい。初期値でロングボトム家とは敵対済みなので、接触は避けましょう。ハリポタ老人の例に漏れず婆は強キャラで、その上口も強い

です。口でも杖でも勝てず、心が折られかねません。

……怖いばあちゃんにあったので、今宵はここまでにしとうございます。ホグワーツ特急にのりこめ。

特急内ですが、特にやることはありません。寧ろ、誰とも接触してはいけません。

ハーマイオニー・ネビルペアは言うに及ばず。強いていうなら、トレバー君を捕獲できた時にはハーマイオニー経由で渡してあげましょう。呼び寄せ呪文なんて使ったら穢れた血にまわりつかれるのでキャンセルだ。

蛇寮集団とはまだ関わらないほうがいいです。それ以外の好感度が下がります。

そしてハリー・ロンペアですが、論外です。

何故なら血を裏切るものであるウィーズリー家の餓鬼がいるからです（純血思想）。

……真面目な解説をします。皆さんは疑問に思いませんか？ 何故ハーマイオニーが驚寮じゃないのかと。攻略Wikiを舐めまわした兄貴ならわかると思いますが、これについては明確な理由があります。

というのもですね。ウィーズリー家の人間は、友好的に接触するだけで、対象の獅子寮資質を上昇させるという特徴があるのです。このポジ感染が発見されるまで、多くの驚寮調整、蛇寮調整キャラが獅子墮ちしてしまいました。本チャートでのズレちゃんは、ハットストール調整をしているため、関わりと獅子行きです。気をつけましょう。

(無敗)

「アボット・ハンナ！」

「——ハツフルパフ！」

さて、組分けです。

先ほども説明したようにズレちゃんはハットストール調整をしています。団結主義の蛇寮において、これは多少の友好度的デメリットではあるのですが、反面他の三寮との友好度の低下が緩和されるといふ特徴があります。蛇寮でハリーに関わるなら調整しておくほうが無難です。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

ハーマイオニーも呼ばれましたね。彼女も獅子と鷲のハットストールです。天秤はロンと関わるかどうかで傾きます。これは運命の二人ですね。

ところで、ズイラちゃんはZiiraちゃんなのでアルファベット順だと最後にあたります。最後だなんて遅い遅い遅い遅い遅い！ とお考えの皆様、ご安心ください。ここでの名前読み上げだけ、何故かファミリーネームを先に呼ぶという特別仕様がなされております。ですの——

「レストレンジ・ズイラ！」

——おめでとう！ズレちゃんはレズちゃんに進化した！

猫姉貴のお墨付きもいただいたので、今後はこの子をレズちゃんと呼ぼうと思います。

帽子をかぶりました。こんなところで短縮しても仕方ないのでじっくり悩んで選んで欲しいところですね。

蛇寮にしてくれよなく頼むよ。蛇寮にしてくれよなく頼むよ。蛇寮にしてくれよなく頼むよ。

「——しかし君の夢は紛れもなく勇氣に満ちておる。それならば、グリフィンドール！」  
フアツ!? クウーン………（死亡）。



# アルバス・ダンブルドア 偉人か愚人か

「お母様が仰っていました。闇の帝王は永劫不滅。一度御隠れになられても、いずれまたお戻りになられると。……だったら、その日に向けて、備えておくべきだと思いますん？　ダンブルドア校長。そう——」

——より素晴らしい未来のために。

そう言つて、ズイラ・レストレンジは静かに微笑んだ。

奇妙な子供がいる。

そのような報告を最初にアルバス・ダンブルドアが受けたのは、1990年の冬だった。

例のあの人が姿を消してから、ちょうどホグワーツ一世代分ほどの時間が経過した頃。未だ名前を呼べぬものが大半とはいえ、徐々にイギリス魔法界からも、ヴォルデモートの恐怖が薄らぎ始めていた。誰も彼もが安寧と言う名の沼に浸っている中、次を見据えた男たちは懇々と話し合う。

「——しかしのう、アラスター。いくら死喰い人の子供とはいえ、それはあまりにも酷じやろう」

目の前の男をやんわりと諫めながら、ダンブルドアは手元のバタービールに口をつけた。……相変わらず山羊臭い。こういった密談を行うには最適な店だが、いかんせんそれだけはいただけない。

老人がバーテンダーの嗜好に辟易していると、対面に座った男がギョロリと目を剥いた。鼻を鳴らしてまくし立てる。

「ふん。やつらの娘だぞ？ それもロングボトムの二人を壊した、まつこと最悪なやつらの娘だ。悪党の娘だ。ええ？ 警戒しすぎることはあるまい。そう——」

マッド・アイ・ムーデイは持参したスキットルをぐいと呷り、気炎とともに言葉を吐き出す。

「——油断大敵だ。ダンブルドア」

ニヤリと笑った口からは、強いウイスキーの香りが零れ落ちた。

それはヤギの体臭と混ざり合い、より一層不快な臭いとなってあたりに充満した。

ダンブルドアは杖を軽く振って店内を消臭した後、テーブルの上に広げられた資料にちらりと目をやった。

老人の目線の先では、少し前に8歳になったばかりの少女が、写真越しに微笑んでいる。

アラスター・ムーデイが闇祓い局経由で彼に持ち込んだのは、とある少女に関する資料であった。

ズイラ・レストレンジという名の少女は、その家名が示す通り、先の戦いで大罪を犯したロドルファスとベラトリックスの娘である。

とはいえ、先の魔法大戦では、俗に旧家と呼ばれる一族の者がごまんと闇の陣営側に回っていたのだ。休戦時に子供がいたのは、何もレストレンジ夫婦だけではない。逮捕されただけでも、クラウチ、ルックウッドそれからドロホフと純血の成人は大勢いた。彼らの中に息子娘を抱えた者がいても何ら不思議ではないし、服従の呪文を口実に罪を免れた者の子供も含めれば、同条件の子供はそれこそ両の指では収まりきれない。となると、例の少女はただ死喰い人の娘であるだけではないのだろう。

そう考えたダンブルドアはムーデイに先を促した。

「ふむ。おぬしがそこまで警戒するのは——まあいつものことじゃが、わざわざわしに話を持ってくるくらいじゃ、何か理由があるのであろう？」

ムーデイはヒクリとしゃっくりをしたのち、資料の一つを節くれだった指——彼の体の中では貴重な生身の部位の一つだ——で指した。

ダンブルドアは資料を手に取り、目を通し始める。

そこにはズイラの簡単な生い立ちと行動経歴、とりわけ彼女が習得した呪文がリストとしてまとめられていた。

『ズイラ・レストレンジ。1980年6月15日生まれ。運命の日の翌日に、ガウエイン・ロバーズにより身柄を保護される。それ以前の経歴は一切不明』

「生まれて暫くについて、調べはついておらんのかの？」

「連中が子育て日記なんぞつけてると思うか、ええ？ しもべ妖精に任せつきりで、そのしもべも口を割らんときた」

なるほど、道理だ。

「ついぞ愛を教えてあげられなかった教え子たちに後悔を覚えながら、ダンブルドアは資料を読み進める。」

『発見以来、闇祓い局の保護下に置かれており、定期的に職員が訪問している。担当職員・ガウエイン・ロバーズ』

義眼の男が口を挟んだ。

「優秀な男だが、甘い男だ」

『非常に好奇心旺盛。3歳の頃より邸宅内を動き回ることが多い。4歳の頃にしもべ妖精より両親の残した杖を受け取る。杖については闇祓い局で調査済み。異常な点は

発見できず。材木はナナカマド、芯材はドラゴンの心臓の琴線』

「ほう……。好奇心豊かであることはいいことじゃ」

老人は手に持った杖を、軽く撫で付ける。ニワトコのそれは、主人の手の動きに合わせて、緩やかにしなった。

ページは進む。

『杖を受け取って以来、邸宅に残された書物で呪文の練習を始める。習得リストは別紙参照』

ダンブルドアが羊皮紙をめくると、そこには——予想より遥かに少ない呪文が、列をなしていた。

ど　う　や　ら、　リ　ス　ト　に　あ　る　の　は　ル　ー　モ　ス　に　ノ　ツ　ク　ス、  
浮　ウインガー道ディアム・レビオ呪ーサにエネルベ蘇ートの呪ような実用的な呪文ばかり。呪

文学で時折教える、「元気が出る呪文」のような局所的な呪文は除かれていたようだ。

「ほっほっ。随分優秀な子供のようじゃな、アラスター。インペ妨ディメンタ呪に  
武エクスペリア解ームス除までであるとは」

あとはプロテ盾ゴ呪とステュー失ピー神ファイ呪、ブラキア腕ビ縛ンド呪さえあればいっばしの闇祓い  
 じゃな。

そう嘯くダンブルドアに、ムーデイは短く返した。

「ふん。確かに優秀だ。気味が悪いほどに」

その声色に何かを感じ取ったのか、ダンブルドアはリストを読む手を早めた。

もともと長いリストではない。30ほどの呪文集は、エンゴージオとレデュシオと続

き、終わりへと向かっていった。その中には、老人が危惧したような闇の魔法はおろか、

コンフリンゴのような危険性の高い呪文すらなかった。

いよいよもって訝しげにリストを読み進め、ファイニート・インカンターテムを越え

て最後の呪文を迎えた時。

「むう」

アルバス・ダンブルドアは思わず声を漏らした。

リストには一言、こう記されていた。

守<sup>守</sup>護<sup>護</sup>霊<sup>霊</sup>の呪<sup>呪</sup>文<sup>文</sup>のエクスペクト・パトロナム、と。

守護霊の呪文は闇の魔法か？ 否。死喰い人には扱うことのできないそれは、対極の存在と言えるだろう。

それでは守護霊の呪文は習得が憚られるような呪文なのか？ これも否である。法

と秩序を司るウイゼンガモットのメンバーに求められるように、優れた魔法使いのみ扱える呪文である。

だが、それでも、守護霊の呪文はその他多くの呪文とは、決定的に違うのだ。多くの呪文は魔法力によって行使される。

その為、適切な呪文詠唱と杖の操作で体内の魔法力を引き出すことさえできれば、子供であっても魔法を扱うことは不可能ではない。

事実、ミネルバ・マグゴナガルやフィリウス・フリットウィック、それに方向性は違えどセブルス・スネイプといった彼の教え子の中でもいつとう優秀な者たちは、入学時点で既にある程度の魔法を使いこなしていた。

しかし守護霊の呪文となると話は別である。守護霊の呪文を発動するのに必要なのは、その者自身の幸福な思い出、ひいては強靱に成熟した精神である。

ダンブルドアがもう一度資料に目を落とせば、くだんの少女は守護霊を数秒ながら既に有体で呼び出せると記されている。

果たしてこの呪文を、未だ人格形成期にある未熟な子供が、それも屋敷に軟禁されていて多大なる幸福を感じる機会のなかった子供が発動できるのか。長年ホグワーツで教職に携わってきた老人でさえも、即答できかねる疑問だった。

意図せず自然と眉が寄り、表情が歪む。それを見たムーディは同意を得たと思ったのか、ニヤリと笑って話し出す。彼のマッド・アイは羊皮紙の束を貫通し、例の少女の写真を射抜いていた。

「どうだ、ダンブルドア？ ええ？ 来年そいつがホグワーツに入学してくるぞ。そいつがただのまっこと優秀な子供なのか、それとも正体を隠したおぞましい闇の魔法使いの卵なのか。」

——油断大敵！——

話は終わりだ。彼の標語でもって一喝したアラスター・ムーディは、机の上に並べられた羊皮紙を引っかき集める。資料をカバンに詰めた後、スキットルからウィスキーをグビリと呷り、カツンカツンとパーツの音を響かせて慌ただしげに店の外へと出て行った。

薄い壁越しにポン、という姿くらし術特有の音を聞きながら、ダンブルドアはパーティービールの杯を傾ける。その脳裏では、今後の行動——少女に対してのそれである——についてのあれこれが駆け巡っていた。

数分かけて杯の中を空っぽにしたアルバス・ダンブルドアは、考えがまとまったのを得心げにうむと軽く頷き、薄汚れた椅子からすくりと立ち上がった。

「——アバーフォース」

勘定を済ませようと老人は静かに店員の名を呼ぶ。すると店の奥からのそのそと一人の男が顔を出した。その男の顔はアルバスのそれと比べると随分とくたびれていて、二人とも老人であるというのに、なお店員の男の顔の方が幾分か老けて見える。



だが、彼の瞳——アルバスとそっくりなブルーの瞳だけは、爛々と輝いていた。アルバスにはそれが自分を睨みつけているように感じられた。

店員は不快さを隠そうともせず、ぶっきらぼうに客に話しかける。

「……なんだ」

「勘定を頼む」

「……2シツクルだ」

二人の会話はたったそれだけだった。

店員の一言一言から漏れる憎々しげな感情の発露に、アルバスは自分が歓迎されていないことを再確認した。

だがそれでいい、とすら感じた。

偉大なる大魔法使い、アルバス・ダンブルドア。外の世界では、誰も彼もが——旧友のエルファイアス・ドージでさえも——その虚像を見て、尊敬し、頼ってくる。

だがここでは、彼はただの愚かな老人だ。

ひしひしと伝わってくる敵意が、彼の巨大な過ちを自覚させてくれる。

「——また来るよ」

アルバス・ダンブルドアは一言言葉を残して、ホッグズ・ヘッド・バーを後にした。

返事はついぞ、帰ってこなかった。

ダンブルドアが新入生に直接入学証明書を手渡すというアイディアは、軽度の驚きをもって受け止められた。

「行つてらっしゃいませ、校長先生」

某日。ミネルバ・マグゴナガルに見送られたダンブルドアはホグズミード村のハニーデュークスへちよこちよこ、マグル界の駄菓子屋へちよこちよこ寄り道した後、レストレンジ邸を訪れた。

黒い大鴉をあしらつたドアノックカーを二、三度鳴らすと、すぐさま家の中からトタトタと駆け寄る音が聞こえる。ダンブルドアが扉から一歩引いて待っていると、ギイと音を立てて扉が開き、中から一匹のハウスエルフが顔を出した。

「魔法使いのお方！ お名前とご用件をお聞かせいただいてもよろしいでしょうか！」

ハウスエルフ特有の高い大声が辺りに響く。ダンブルドアは茶目つ気を込めてフルネームを口にした。

「ふむ。わしの名はアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。ホグワーツ魔法魔術学校の校長じゃ。今日はミス・レストレンジにホグワーツの入学の届けを渡しにきたんじゃよ」

途端。ただでさえ腰の低かったハウスエルフがより一層深く腰を折り、その頭は地面

に着かんばかりに下げられた。

「ありがとうございます、校長先生！　ズイラお嬢様も大変お喜びになるとカーンはお思ひになります！」

感極まつたのか、おかしな敬語を用いたカーンと言う名のハウスエルフは、門を開け放ち老人を招き入れた。

レストレンジ邸は、ダンブルドアにプレーンな印象を抱かせた。てつきりかつて見たブラック邸のような有様になっていると思つていた校長は、その疑問をハウスエルフにぶつけた。

「随分と落ち着いた家じゃな」

「はい！　旦那様方がいらつしやつた頃はもつと飾りがいっぱいおありになられたのですが、お嬢様が要らないとお言いになられたのでカーンがお片付けになりました！」

なるほど。やはり以前はもつとそれらしい内装であつたらしい。そして例の娘は優生の思想には染まつてはいないようだ。

ダンブルドアたちは寒々しい廊下を歩いて、娘のいる部屋へと向かった。

検知不可能拡大呪文のかかった屋敷は、外見からは考えられないほど広い。何十もある部屋を横目に歩くこと数分。屋敷の最奥にて、遂に娘の部屋へとたどり着いた。

中からは時折ドサリ、ドサリと物音が聞こえる。

ハウスエルフが扉をノックして、キーキーとした声で呼びかけた。

「ズイラお嬢様！ ホグワーツのダンブルドア校長先生がお見えになられてございます！」

「そう、入っていただいて。……アロホモラ」

ガチャリ。サムターンが回る。

噂通り少女は既に魔法を嗜んでいるらしい。ついでにかなりものぐさ——あるいは効率重視か？——であるとダンブルドアは感じた。

ささどうぞ、と言わんばかりにハウスエルフが扉を開く。意を決して、ダンブルドアはドアをくぐり、くだんの娘と対峙した。

そこに立っていたのは、ベラトリックス・レストレンジそっくりの少女だった。

黒い髪、白い肌、年齢に似合わぬ鋭い眼光に将来を感じさせるようなすつとした顔立ち。ダンブルドアがかつて見た、ベラトリックスの学生時代の生き写しのような娘だった。

ああ、だが、唯一瞳の色だけはベラトリックスとも、あるいは夫のロドルファスとも違う。彼らの瞳が茶色と灰色だったのに対し、彼女の瞳の色は、深い青を湛えている。

それはブラック家において時折見られる——ナルシツサ・マルフォイのような——色

ではあるが、アルバス・ダンブルドアには何かもつと、別の人物を思い起こさせた。

校長が見つめていることに気がついたのか、ズイラは立ち上がるとローブの端をちよこんと摘み、カーテシーをした。その様は酷く、いつそ不気味なまでに大人びていた。

「お初にお目にかかります、アルバス・ダンブルドア校長先生。わたくしがレストレンジ家の当主、ズイラ・レストレンジでございます」

「……おお、これはご丁寧に。わしはアルバス・ダンブルドア。ホグワーツの校長をして。おる。それから、そう。イギリス魔法界ソックス品評会の会長でもあるの」

それはまた。ズイラはクスクスと笑っておどけた。

「今後ソックスに困った時には、どうかよろしくお願いします、ダンブルドア先生」

ズイラは一礼し、老人に対し真正面から向き合った。深く深く、深海を思わせるような少女の青い瞳。若さに似合わぬ円熟を示したそれは、老人の心を激しく攪拌した。

その青い瞳には見覚えがある。そう、それはまるで――。

ダンブルドアは、そこで半ば意図的に思考を堰き止めた。場合によつては良からぬことを考えてしまうやもしれぬ、と。

気を取り直してとばかりに、ダンブルドアは用件を済ませる。

「うむ、うむ。若者とソックスの素晴らしさを語り合うのも吝かではないのじゃが、今日はおぬしに、そう。ホグワーツの入学届けを渡しに来たのじゃよ」

「校長先生自ら?」

「そう、わし自らじゃ。……ああ、ズイラと呼ばせてもらっても?」

「ええ、構いませんわ」

「ありがとう。ズイラ、おぬしはそう、ちよつとした問題を抱えておる」

ホグワーツ校長は、言葉を切つて生徒に向き直つた。

「だからこそ、ホグワーツ校長であるわしは、おぬしが求める全てを用意する義務がある」

まごう事なきアルバス・ダンブルドアの本心だつた。

目の前の少女を——例え闇に堕ちかけていたとしても——迎え入れないという選択肢は彼にはなかつた。

何故か? それは、彼がホグワーツ校長であり、アルバス・ダンブルドアだからである。

ズイラ・レストレンジは彼の言葉を聞き、何事かを考え、そして発言した。

「——ならば杖を。来たるべき時に、杖をお貸しください」

術、あるいは力までなら予想していた。だが、まさか助力を乞うとは。

ダンブルドアはわずかばかり面食らい、然りとて怯んだ様子を見せずに言葉を返した。

「ふむ、何故じゃ？　そう、それに、おぬしは酷く先進的な勉強をしていると聞いておる。まるで何かを恐れるかのよう」

その言葉にズイラは反応し、語り出した。

——昔々、わたくしがまだ幼かった頃に聞いたお話ですので、話半分に聞いてくださいね？

そのような前置きこそあったものの、少女自身はそれを完全に信じ切っているようだった。

凝り固まった妄執の念が見て取れた。

「お母様が仰っていました。闇の帝王は永劫不滅。一度御隠れになられても、いずれまたお戻りになると。……だったら、その日に向けて、備えておくべきだと思いませんか？　ダンブルドア校長。そう——」

——より素晴らしい未来のために

そう言つて、ズイラ・レストレンジは静かに微笑んだ。

その笑みは、見た目はおろか性別すら違うというのに、どこか在りし日の誰かに重なつて見えた。

「——そうじゃのう」

ダンブルドアは臍腑に溜まった息と共に、それだけの言葉をじっくりと吐き出した。

そして、淀んだ空気を振り払うかのように本題へと続ける。

「おお、そうじゃ、ズイラ。おぬしはその年でもう守護霊を生み出せると聞いておる。どうかわしに見せてくれぬかの？」

少女は恥ずかしげに答えた。

「ええ、構いせんわ。まだ数秒しか維持できず恐縮ですが……」

——エクスペクト・パトローナム！」

ズイラの持つナナカマドの杖から、シューという音と共に銀色の煙が吹き出す。それはだんだんと実態を持ち、四つ足の獣の姿となった。

馬？ いや、ロバだ。

銀のロバはそのまま廊下へと駆け出し、霞のごとく消えていった。

「お見事。——それで、おぬしはどんな幸せを思つて呼び出したのかな？」

ズイラ・レストレンジは胸を張つて、はつきりと答えた。

「——未来です。みんなが笑つて過ごせる未来。それが一刻も早く訪れることを願つて」

アルバス・ダンブルドアは、羨ましげに、寂しげに、答えた。

「結構。君の望む大きな幸福は、今はまだ未来にしかないのじやな。

——君がホグワーツで、幸せに迫いつく事を祈つておるよ」



そう言つて、ダンブルドアは部屋を後に――

「おうそうじやつた、そうじやつた。わしは昔からお菓子が好きでこのう。ここに来るまでもついつい買いすぎてしまつたんじや。どうか少しばかり、もらつてくれぬかのう。最近はこのレモン・キャンデーに夢中なんじやよ」

――した。

「レストレンジ・ズイラー！」

アルバス・ダンブルドアは少女の組分けを見つめている。

他の学生の注目、あるいは敵意を向けられてもなんのその。少女は唯我独尊とばかりに振舞つていた。

「――しかし君の夢は紛れもなく勇氣に満ちておる。それならば、グリフィンドール！」

長い、長いハットストールの後、少女は自身と同じ、獅子寮へと配属された。ステージを見れば、少女はしばし放心し、その後少しばかり取り乱している。

だが、アルバス・ダンブルドアはその結果を、奇妙な納得と共に受け入れた。

ミネルバ・マクゴナガルに手を引かれてグリフィンドール席へと向かう少女。

彼女はより素晴らしい未来に焦がれている。

だが、ダンブルドアの目には、その姿は彼の旧友、ゲラート・グリーンデルバルドには重なって見えなかった。

寧ろ彼の青き瞳には、若き頃、愚かだった頃のアルバス・ダンブルドアが重なって見えた。

故に、かつて過ちを犯した身として、若人に同じ轍を踏ませてはならぬ。

アルバス・ダンブルドアは己が杖と、今は遠き彼女に誓った。

## 3 / ? ~三頭犬の部屋まで

ガバ? なんで僕はガバなの? ガバじゃない、僕はガバじゃない!僕はガバじゃない!!!  
なRTA、もう始まつてる!

「!?!?!?!?!?」しかし君の夢は紛れもなく勇氣に満ちておる。それならば、グリフィンドール!」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」  
「!?!?!?!?!?」

ええと、すみません。チャート確認しますね。

……。

……………。

……………。

ふむ、やはりチャート上では蛇寮調整はミスしてないんですが、バグですかね? それ  
れかいつのまにかガバったかな?

レズちゃんか惚けている間、ちようにいいので組分け帽子君の判断基準について説明  
します。

まず最初にお伝えしなければならぬこととして、本ゲームの組分けは酷くシステム

チツクなものとなっております。

組分け基準は寮資質の累積方式です。具体的には獅子寮、鷲寮、蛇寮の三つの中でも資質が高くなった寮に配属されるという形式ですね。

穴熊寮に関してですが、三つの寮の資質が全くない場合は強制で配属されます。三つの寮の資質が低くて同値程度であった場合は、組分け帽子が穴熊寮を勧めてくるイベントが発生し、それを受諾することで配属されます。

よく本人の意思で操作できると誤解されがちですが、あれはほとんどデマですね。希望した寮の資質値を1上昇させ、さらに複数寮の資質値が同値であった場合のみ希望を叶えるという効果しかありません。その為ゴリゴリの純血主義者は蛇寮以外になることは、ほとんどありません。

例外的に穴熊寮を希望した場合のみ資質値を無視してハツフルパフになります。ヘルガ・ハツフルパフは拒むことを知らない（風評被害）。

本チャートでは、それぞれの資質値は以下のようになっております。

蛇寮が「純血の血統、両親の所属寮、本人の希望」で3ポイント。

鷲寮が「実力主義、秀才、入学前の呪文習得」で3ポイント。

獅子寮が「守護霊習得、目標・闇の魔法使いの打倒、ハリー・ポッターと友人」で3ポイントとなっております。

三寮のハットストールを蛇に傾けることによって、寮生の好感度の変化を抑えるという完璧な調整だったはずなのですが……。どこかでガバったのでしょうか？

さて、再走吠えメール爆撃が送られてきそうですが、これはこれで続行しようと思いません。

というのも配属寮というのは結局のところ攻略の安定要素であって、短縮要素にはなり得ないとケツ論づけられたからです（暴論）。

本RTAのチャート構築においては、いかにして「神秘部の戦い」でタイマーストッブを迎えるか、という点を念頭において構築しました。

その際、それぞれの寮に配属された場合について検討を行ったのですが、それぞれ別種のメリットがあることが明らかになったのです。

まず獅子寮ですが、言うまでもなくハリーとの関係構築です。クリア条件に「ハリー・ポッターの分霊箱」の破壊と「ハリー・ポッターによる決着」がある以上、彼を避けて走ることは不可能です。その為、「ハリーポッターとの友好」を目標にするなら獅子寮に配属されるべきです。今ならおまけでハーマイオニー先生も付いてきます。

次に驚寮ですが、驚寮に所属された場合、プレイヤーキャラの育成にボーナスがかかると言う特典があります。その上、驚寮生徒は基本的に相互不干渉・利益最優先という特徴があるため、不審な行動を取っても教員に話が回りません。おう聞いているか、ネビ

ル兄貴？ 纏めると、「キヤラの強化・暗躍」を進めるなら驚寮がおすすめです。おまけでルーナ姉貴も付いてくるため、イベントへの参入も容易です。

最後に蛇寮ですが、これについてはたった一つ。ファツキンクソ蛇の暗札が比較的容易であるということにつきます。名家ボーナスでレアアイテム入手等もありますが、そんなものとは比べ物になりません。

ナギニの何が問題か？ それは例の呪われ蛇女が分霊箱の中で唯一、所在が確定しておらず、お辞儀様と共に動き回る分霊箱である、と言う点です。364回の検討の結果、彼女を蒲焼きにするためには、四年生終了後に死喰い人堕ち、レストレンジ一家合流後のクソ蛇の位置把握、そして予言周りのどさくさに紛れて暗札、が一番安定していると結論づけられました。

穴熊寮？ お料理教室でも開いてろ、ぺっ。

通常プレイにおいては全ての好感度変化に微量なプラス効果があることから重宝される穴熊寮ですが、本RTAではフヨウラ！

ちなみにですが、現在穴熊寮でプレイされる場合には、「炎のゴブレット」編までに何らかの手段で肥らせ呪文への対策をしておきましょう。最近のアップデートで低確率の強制バッドエンドが実装されたそうです（絶望）。投稿者はアップデートの研究を進めていない為詳しくはありませんが。でもねセドリツクさんはほんとに神的にいい人だか

ら……。

纏めると、RTA的なおすすめ度は蛇、獅子、鷲、穴熊の順になっております。

仮に穴熊なら問答無用でリセットですが、獅子なら以前構築した獅子寮チャートを流用できるので問題ありません。

ファツキンクソ蛇の討伐を固定エンカに頼る必要性がありますが、代わりに最終戦の安定度が増すのでプラマイ……少しマイナスですね。そもそも最終戦にたどり着けないパターンがあるので。グリフィンドールにマイナス1919点。

習得呪文の齟齬はまだ調整可能なレベルでしょう。

……そろそろ目をそらしていた現実にも目を向けましょうか。

前パートでもお伝えしたように、ホグワーツの組分け順は、ファミリーネームのアルファベット順となっております。

その為、Lのレズちゃんの前は、少し空きますがGのグレンジャー女史が先に座っているわけですね。ハーマイオニー姉貴オッスオッス！

では、次に呼ばれるのは誰かというと……

「Longbottom・ネビル！」

ネビル君です。

気まずいですね、これは気まずい。

彼の寮資質値は、「純血の血統」で蛇一点、「祖母からの教育」で鷲一点、「両親の所属寮」で獅子一点と低資質で拮抗しています。当初は穴熊を希望していましたが、最終的にはそれを「本人の希望」と、同時に発現した「勇氣」によつて獅子寮に傾けました。発現しかけの「勇氣」資質に気づいていたから帽子くんは獅子寮を勧めたんですね。特級の原石を持つていくとは汚いさすがグリフィンドールの帽子汚い。

「――グリフィンドール！」

おつとネビル君が歩いてきました。

なんか静かですね（凍った空気）。蛇寮チャートとはえらい違いだ。

ネビル君と目があつたのでにつこり微笑んでおきましょう。レズちゃんの美少女笑顔見とけよ見とけよ。

――遠くの席に座られたので今宵はここまでにしとうございます。二週間後覚えてろよ（犯行予告）。

ネビル君は後回しにして、組分けを楽しみましょう。

あつ、ポッター君こつち来て。何？ スリザリンと迷われた？ わたくしもソーナノ。

ロン君は……駄目みたいです（好感度）。ですが後々利用するので気にかけておき



ましょう。

……他にはガバは無さそうですね。以降の組分けに変化はありませんでした。食事です。

今晚から忙しくなるので食事は文字通り思いつきりかつこみます。睡眠不足による発育不良を健康な食事でリガバリーだ。屋敷しもべ妖精君を反<sup>S. P. E. W.</sup>吐を吐きたくなるくらいにてんてこ舞いにさせてあげましょう。

食べ終わったたら校長からのありがたいたわ言です。適当に聞き流して獅子寮に向かいます。いましょう。ん？ 校歌？ どうでもいいわ（レ）。

向かっている途中にポルターガイストくんに出会いますが、彼は本RTAの鎖マン枠です。目をつけられないように注意しましょう。三年生までは優等生である必要があります。

さて、獅子寮につくと部屋割りが発表されます。十中八九、グレンジャー・パチル・ブラウン姉貴たちと同室です。というか魔法族の人数が少なすぎて選択肢がありません。魔法省と純血はもつと仕事して、どうぞ。

適当に挨拶したら、皆が寝るまで待ちます。野獣先輩のようにアイステイ（生ける屍の水葉）を振舞ってもいいのですが、区間練習で試した結果皆目覚めることが無く

なったので、本走ではやめました。

墮ちろ（意識）、墮ちたな（熟睡）。

早速ですが、今晚より第一次ホグワーツ深夜徘徊遠征を行います。

というのも、獅子寮チャートへのシフトへのしわ寄せで、約二週間後、9月12日までにとある呪文を習得できなかったらリセットになってしまうからですね。通常の授業と余暇だけでは習得は困難なので、やむを得ない。こんな強行軍を組んだのは誰だあ！ カツチャマ達の呪文集に載っている呪文であくよかった（両親の愛）。

事前に持ち込んだデミガイズ製透明マントを用いて脱出します。本RTAでは積極的に使用するため、効果があるものを常に一つは所持していきましよう。髪なんか必要ねえんだよ！（デミガイズ乱獲）

……レズちゃんやんが獅子塔を駆け下りている間に、目的地について解説します。今回向かう先は——はい、そうです。既プレイの方なら誰でもわかると思いますが、天文台塔の8階に位置する、「必要の部屋」ですね。あつたりなかつたりと言いつつ条件さえ知っていれば乱数が絡まず利用できるの而走者に優しい仕様です。

ところで、グリフィンドールの談話室は、東塔に隣接するグリフィンドール塔の8階に位置しています。

同じ8階なのに階段駆け下りるのか……（困惑）とお思いの方もいるかと思いますが、

獅子塔と天文台塔は4階以下でないと連絡通路が設置されていないのでやむを得ない！（レ）

飛翔術によるショートカット？ 無理無理無理！ 飛べない！（能力不足）

飛翔術の習得条件は「杖無し魔法」ワンドレス・マジックの習得を前提として、「レビコーパス等の浮遊系呪文のコンプリート」もしくは「死喰い人ルートでお辞儀様に教えてもらう」のどちらかを満たす必要があります。

はい、無理です。後者は時間が足りず、前者は能力が足りません。一年生が魔法族の上位0.01%になれるわけないだろ！ いい加減にしろ！

とかなんとか言っているうちに目的地付近まで着きました。バカのバーナバスくんオツスオツス！ お願い事をしましょう。「防衛術練習に向いていて、自分以外は入れない部屋」頼むよ。頼むよ。

心を込めてもう二回！ 「防衛術練習に向いていて、自分以外は入れない部屋」頼むよ。 「防衛術練習に向いていて、自分以外は入れない部屋」頼むよ。

わーい、いりぐちら。

「レイブンクローの髪飾り」ですが、この段階で無理に回収する必要はありません。それどころかレズちゃんの精神値を汚染し始めるので触らずにおきましょう。

部屋内部です。既プレイ兄貴には見覚えがあるのではないでしょうか。そうです。

DAが行われる部屋ですね。

まずは……アクシオ!

はい、「通常の呪いとその逆呪い概論」です。今は使いませんがまた再来週使います。持ち出すことはできませんが、補充はされないので無くさないようにしましょう。

——これから呪文の練習ですが、やることというと高く投げたボールに呪文を打ち付けるだけなので、申し訳ないが超スピード!?

……。

……。

……。

今日は駄目みたいです。寮に戻って仮眠しましょう。早めに閃いてくれよなく、頼むよ。

朝です。ハグリッドの雌鶏君が鳴いています。うるせえ! (TKNUC)

日常パートは尺が足りないので倍速だ。

半小人兄貴の授業は真面目に受けましょう。何故ならレズちゃんの習得していない汎用性に乏しい呪文を多く教えるからです。成績を無駄に落としてはいけません。「トランクに綺麗にものを詰める魔法」ってなんだよ(困惑)。

猫姉貴の授業も同様です。こちらは実践的な意味ですが。

霊兄貴の授業は癒しです。最低限勉強して残りはチャートを確認しておきましょう。

薬草姉貴の授業は、ネビル兄貴……駄目みたいですね。

天文学？ 知らなくい。深夜徘徊出来ないでロスそのものです。

おつとDADA。クイレル君の授業は、あまり変に振る舞わないようにすればそれで十分です。

クイレル君ですが、any%においてはいかに彼ごとお辞儀様を早く暗札出来るかが競われています。先駆者様が考案した「吸魂鬼によるディープキス法」をはじめとして、「秘密の部屋経由のバジリスク同行法」、「予言者チャートによる校長覚醒法」と更新合戦が行われた結果、現在では7月31日の漏れ鍋以前にどれだけ早く見つけられるかにかかっているとかなんとか。その上ランダム行動のせいで実質運ゲーらしいです。お前しわしわ角スノーカックかよお!?

気を取り直して、最後に半純血のプリンス兄貴です。彼本人について詳しく述べるのは後ほどとして、盗む予定のアイテムを先に語っておきましょう。

スネイプ先生の研究室には、彼が学生時代に使用していた教科書があります。書き込みがあつたりと随分くたびれていますが、物持ちがいいんですかね？ 来年盗みに行きます（怪盗）。

残るは飛行訓練ですが——ぎりぎりですが、呪文習得が間に合いました。リセツト回避です。ちよつとすれすれすぎんよ。

ここで箒に初めて乗る場合、キャラクターの箒適性が判明します。レズちゃんはどう？（クイディッチの試合）出そう？

上がれ、上がれ、上がれ、上がれ、上がって、上がってください、すみません上がってくださいなんでもしますから……上がれって言ってる頃すぞ（豹変）。

どうやら箒適性は無いみたいです。チャートに本採用はしていませんでしたが、空中移動が解禁されると四年生時の多少の安定につながるので残念です。

まあここでの本題は——

「ロングボトム、戻ってきなさい！」

——レズちゃんの好感度上昇です。ネビル兄貴が箒で飛び出したのち高所から落下するというイベントがあります。

ネビル君が大怪我を負うのは忍びないので（大嘘）——

「アレスト・モメンタム！ 動きよ、止まれ！」

——減速呪文で助けてあげましょう。あえて軽い捻挫程度にとどめておくのがポイントです。ハリーの飛行能力を落としたくないので。

ネビル兄貴が不思議そうに見てくるので微笑んでおきましょう。レズちゃんの美少

女笑顔だオラア！（二回目）

このイベントを行うことで、聖人のネビル君はころっと騙されて好感度が上昇します。ちよろいな。

それだけでなく、ネビル兄貴の好感度上昇に伴い、友人のロン君もレズちゃんを見直してくれます。なにこれ？ 甘々じゃん！

さらにさらに、弟が友好的になったことで、態度を決めかねていた双子兄貴も積極的に絡んできてくれます。

結果として、インフルエンサーである悪戯名人の好感度が確保できたことで、レズちゃんの風聞が「両親と違ってロングボトムを助けたレストレンジ」になるわけです。やったぜ。

これがレストレンジ家直伝・好感度連鎖です。

デメリットとして蛇寮の好感度は著しく落ちますが……どうでもいいわ（レ）。蛇寮チャートでないなら関係ありません。

まあないよりはマシなので取り繕っておきましょう。純血が死んだら勿体無いだろお!?（建前）

そうこうしている間に、ポッター君が飛んでいきました。うわあ、これが一世紀ぶりの最年少シーカーですかあ。こんなに凄いととは思わなかったなあ（箒適性ガバ）。

さて、この箒授業は三つのイベントからなるキャンペーンイベントの一つ目となっております。このイベントの翌日朝、マルフォイ君が、「真夜中の決闘（大嘘）」イベントを発生させます。このイベントにはグレンジャー姉貴と一緒に参加しましょう。次の呪文取得までは、まだひと月ほど余裕があるので好感度上昇に回します。

日常パートを36倍速にして夜です。ネビル君も元氣そうで何よりです。好感度は無事上がってますね。

一週間歩いてもはや勝手知ったる他人の城ですが、今回はマントを使用してはいけません。というより、クリスマスまでは三人組にマントを目撃されてはいけません。ハイマイオニー姉貴に通報されます（2敗）。ポルターガイストくと飼猫さんに気をつけて進みましょう。

決闘予定地ですが……あれ？ おかしいね、誰もいないね（すつとぼけ）。

「生徒がベッドから抜け出した！ 『妖精の魔法』教室の廊下にいるぞ！」

はい、三つ目のイベントです。ピーブズ君がイベントトリガーです。ポルターガイストくんは全てを見ていた……？（事実）

4階の禁止部屋に逃げ込みましょう。そこには野獣と化した三頭犬がいらつしやいますので足元の仕掛け扉だけ確認して帰ります。早急に戻りますんで（命乞い）。



これらのイベントを全てこなすことで、グラウンドクエスト「賢者の石」がようやく解放されます。忘れると年末イベントに参加できなくなるのでリセットの憂き目にあいます（無敗）。

尺も丁度いいですので今回はここまで、ご笑読ありがとうございました。

## 4/? ～ニコラス・フラメル発見まで

クイレル脅迫！ スネイプ先生の逆襲（後頭部）、なRTA、はくじまくるよ。

前回のラスト、ついに「賢者の石」クエスト序章を発生させました。これからは関連イベントに間に合うように、レズちゃんを育成していきます。

今は犬エンカの翌日の朝ですが、丁度ポッター兄貴にニンバスくんが届きました。コノハズク六匹で運ぶ細長い包みとか箒以外にあり得ないでしょ（超速理解）。汚いぞポッター。

マクゴナガル女史は有能な聖人ですが、クイディッチに関しては脳みそ壊れちゃうような悪癖がありますね。

今晚練習があるそうですが、特に関わることもないのでニコニコ話を聞いていましょう。はえくすつごい。

奇遇なことに、レズちゃんも今晚から第二次深夜徘徊遠征があります。ハリーに鉢合わせないようにイクゾー！ デッデッデデデ。

「必要の部屋」に着きました。これからは主に一つの必須呪文といくつかの補助呪文の習得を目指します。期限はハロウィーンの夕方までです。

せつかくでするので、その際に使う杖は、短小トネリコくんではなく、カツチャマ達からの遺品（大嘘）であるナナカマドくんを使いましょう。その理由についてですが。

ナナカマドについて、お話しします。

みんな、ナナカマドって、知ってるかな？ ナナカマドというのはね、例えば、「エピソード

スキー 癒えよ」と唱えると、（他の杖より）気持ちがいいとか、あるいは、「プロテゴ 護れ」と唱えると、（他の杖より強く護れて）気持ちがいい、といった杖をナナカマドというんだ。

ナナカマドの杖の特性は、「癒しと守護」に、あるんだよ。そして、「癒しと守護」と、「闇の魔術」はどちらが、上かな？（死喰い人の誘い）もちろん、「癒しと守護」のほうが、杖の適性があるから、上だよね？（騎士団員）

ナナカマドの杖の、先の部分に、「闇の魔術」が集中するとね。その杖（の忠誠心）は、下の世界（最低値付近）に、生まれ変わるんだって。イヤだねえ。

今、「闇の魔術」を行なっていない子は、これから先「闇の魔術」を、しないようにしようね（DADA）。今、闇の魔術を行なっている、半純血のプリンスは、やめようね！

そして、お父さんお母さん（獄中）を含めた、みんなを大事にして、みんなのために、生きようね！

というわけです（説明放棄）。

ゲーム的な効果といたしましては、防御・治療魔法使用時に効果上昇のパッシブ効果が発生します。また、対魔法使いの決闘の際に全魔法に補正がかかります。はやくすつごい（ホグワーツ生）。

ただしデメリットとして、バランス調整の為なのか、敵にダメージを与える攻撃魔法使用時に効果減少の効果が発生し、闇の魔術に至っては効果・杖の忠誠心共に最低値になります。ふざけんな！（手のひら返し）

その為本RTAでは、攻撃・闇の魔術にトネリコくん、防御・回復並びに普段使いにナナカマドくんを割り振っていきます。「ちよつと待つて！ 複数杖とか忠誠心が入つてないやん！」とお思いの方もいらつしやるかと思いますが、その辺りは多少はね？（妥協点）

幼い頃から使ってきた杖と、自分に最適な杖なら両用できるとケツ論づけられました。他人の杖を使つてるロンやネビルよりマシでしょ（名推理）。

というか短小トネリコくんは11.5センチとか短すぎるんですよ……。一方のナナカマドくんは36、普通だな！ 使いやすさが違います。

……長々説明してきたことでお分かりかと思いますが、今回習得する重要魔法は「盾の呪文」です。「通常の呪いとその逆呪い概論」には、総論として「優れた魔法使いなら盾の呪文を使いこなすことで殆どの逆呪いの効果を擬似的に得ることができる」とあり

ました。え、なにそれは。

ですが一つの真理でもあるので大人しく従っておきましょう。残りの習得呪文は機会があれば解説します。

稼ぎタイムなんて退屈なんだから加速です。

「——言い方がまちがってるわ」

気がつけばハロウィーンの呪文学の授業です。レズちゃんはハリー君と仲良く練習してありますが、ロン君とハーマイオニーちゃんは……ああ、(テンション)落ちたねえ……。

酷い空気ですがブランドクエストなので諦めましょう。

授業後ロン兄貴が暴言を発しています。そんなんじや甘いよ(好感度調整)。

夕食前に穢れた血の元に行つて好感度上昇並びに安全確保を兼ねて慰めに行きましょう(純血思想)。助けに行かなかった場合、低確率ですがハーマイオニー姉貴がパンプキンパイの生地のようになることがあります。もれなくリセットです。

トイレに着きました。

手っ取り早く慰めましょう。大丈夫だって安心しろよ。へーキへーキ、へーキだから！

さて、グレンジャー姉貴を口説いていると、外からブアーブアーという鳴き声と、クソデカな足を引きずる音が聞こえてきます。いったい何でしょうか（すつとぼけ）。

トイレの入り口からのそのそ入ってきたのは、薄い灰色がかった男でした。どうやら彼が鳴らした鼻音のようですね。

はえ〜すつごいおつきい。

え、身長・体重はどれぐらいあんの？

え〜、身長が370cmで、体重が740kgです（自問自答）。

ステロイドをキメたのか頭頂部は禿げていて、体臭が信じられないほど臭いです。

確実に野獣先輩のアニメーガスですねクオレハ……。野獣先輩新説として学会に誰か報告しておいてください。

「!!」

というわけで本RTA初のボス、マウンテン・トロール戦です。じゃオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

既プレイ兄貴の中にはトラウマになっている方もいらっしやるのではないでしょうか。初戦にしては明らかに強ボスです。

トロールの魔法省分類はX X X X！ 危険で、専門知識を持った専門の魔法使いなら対処可能な奴らです。他に該当するのはしわしわ角スノーカックの原作であるエルン

ペントくんや、日本在住の河童くんなんかです。モンゴル出身じゃありません、聞いてるか、プリンス？（煽り）

身近なところでは、不死鳥くんや本RTAの犠牲者であるデミガイズくんなんかもあります。この例から分かるように、必ずしも魔法省分類イコール危険度とまでは言い切れません。

しかしトロールに関しては危険度と言い切ってもいいでしょう。

「フリペンド 撃て！」

ハーマイオニー姉貴が行動できるまで時間稼ぎと注意引きつけに衝撃魔法を撃ってみますが、全然効いてません。魔法生物特有の装甲が大抵の魔法を弾いてしまいます。ナナカマドくんは無罪です。

その上、魔法界にあるまじきパワーファイターです。今も盾の呪文を使っています。決して正面から受けてはいけません、押し切られます。逸らすように受け流しましょう。

何よりトロールくんの一番のファツキンポイントですが……。

「——インペディメンタ 妨害せよ！ レデュシオ 縮め！ つ、ヴェンタス 風よ！」  
あつぶね?! 危うくハーマイオニーがつぶれマイオニーになるところでした。

何が起こったか解説します。まずトロールが右手で棍棒を振りかぶっていました。

これは問題ありません。ところが、その半ばほどで突然足元の壊れた洗面台を予備動作なしで蹴り飛ばしてきたわけです。盾では破られる危険性があった為、妨害で動きを遅めて洗面台を縮小、その後風で吹き飛ばしました。生きてるく、アツハツハ！

初見兄貴はトロールくんの事を「お前いつからそんな、テクニシャンになったんだ」とお思いかと思いますが、違います。

トロールくんはMUR大先輩にも劣る智能しかないため、つい先ほどまで自分がしていたことすら忘れてしまうのです。これがRTA的に何を意味するかというところ……。

「——プロテゴ！ ヴェンタス！ ロコモーター・ドア！ エンゴージョー！」

トロールの行動は全て乱数行動で、一つも固定行動のない運ゲーとなってしまうわけです。硫酸に浸さなきゃ……（クソゲー）。

耐久戦です、ひたすらに耐えましょう。早く来てくれハリーツ！

「こつちに引き付けろ！」

遅い遅い遅い（疲労困憊）。

途中からグレンジャー姉貴も加勢してくれましたが、やはり一方向からではジリ貧です。ほぼ逝きかけました。

ですがもう安心、勝ち確です（日刊予言者新聞）。



繰り返しますが、トロールくんは死ぬほど知能に劣っていて、つい先ほどの自分の行動すら忘れてしまいます。つまり。

「やーい、ウスノロ！」

「フリペンド！」

複数方向から同時に攻撃されると、脳内CPUが過負荷に陥ってしまう訳ですね。

消化試合よろしくロン兄貴が浮遊術でとどめを刺してくれました。やったぜ。

おっとり刀で駆けつけたマクゴナガル姉貴たちが点数をくれましたが、どうでもいいわ（レ）。三人組の中に潜り込めたことの方がはるかに重要ですね。

次のボス戦は対人です。攻撃呪文にそろそろ手を出しましょうか。闇の魔術は来年から始める予定です。

！  
（予言者）  
お前を芸術sん……てあげんだよ！（トネリコの杖）お前を芸術s、品にしたんだよ

日常パートを超スピード!? で進めた結果、あつという間に11月になりました。ハリーのクイディッチ初試合が迫っています。知らなくい。等適性ガバガバのレズちゃんにできることは何もあります。大人しく失神呪文でも練習してろ！

困みにですが、これ以降ハーマイオニーちゃんとの呪文練習が解禁されます。チャー

ト上必須でない呪文は彼女に教えてもらいましょう。穢れた血だけどなかなかやるじゃない！（実力主義）

ん？ 何？ スネイプが窃盗を企てていた？

スネイプだと！ ふざけんじやねえよお前！ スネイプ先生だろお！（論点のすり替え）

明日はハリーの初試合ですが、レズちゃんは変わらず第三次深夜徘徊遠征に向かおうと思います（そして伝説へ）。

親の顔より見た連絡通路を渡って……つてファツ!? クイレルくんデミガイズマントが見破られてしまいました。5ヶ月経ったので寿命間近だったんですかね……。というからお辞儀様の入れ知恵でしょ（断定）。

まあそんなことはどうでもよくて、それよりもなお見過ごせないことがあります。

クイレルくんなんで左腕怪我してるの？ しかもそれ明らかに犬系の爪痕だよね？ ああん？ なんで？（レ）

これは「賢者の石」の基本ルートでは起こりえないイベントです。どうやらどこかでランダムイベントが引かれたようですね……。

そうです。レズちゃんがイベントフラグを踏み抜いたのでは（恐らく）なく、無関係にイベントが発現したのです。

これこそがこのゲームをRTA的にクソゲーたらしめる仕様の一つ、「プレイヤーの行動に関わらずキャラが動き回る現象」です。低確率に発生するこれらのイベントは、チャートに深刻な影響を与えてきます。良イベならともかく、場合によってはチャート壊れる。

——さて、今回のランダムイベントの正解は……。

「エピソード スキー 癒えよー!」

うん、これでしょいか。

クイレルが怪我していると、ハリーたちがスネイプが手を出したと誤認してしまう可能性があります。それどころか、万一準備無しにクイレルに手を出した場合、リセット不可避です。ハリーが無事でも他が死にます。

ここはクイレルくんを治療して元のルートに戻し、ついでにこれを対価に深夜徘徊を見逃してもらえるところを期待しましょうか。お大事に、じゃあな! (ゆうさく)

……もつとも、低位の治療では回復量はたかが知れているでしょうが。切り裂き呪文にすら有効なヴァルネラ・サネントウールのような最高位の呪文でないとういにもなりません。なんでスネイプ先生は使わなかったんでしょね? セクタムセンプラ専用の逆呪いだっただのかな?

出鼻がくじかれたので今宵はここまでにしとうございます。獅子寮に帰ります。

……ん？ 何か物音がしましたかね？ まあポルターガイストくんの仕業でしょう。

クイディッチは基本見なくてもいい……とりたい所さんですが、そうはいきません。クイレルくんの攻撃が成功した場合、ハリーが大地にキスしてしまいます。

ニンバスくんの乱心を見兼ねたグレンジャー姉貴が放火に向かいましたが……よし。クイレルくんに悪質タックルを決めていきました。

「ラカーナム・インフラマレーイ」

スネイプ先生が文字通り炎上してませんが、箒呪いが停止したので問題ありません。

そうこうしている間にハリーがスニッチを捕まえ……というか飲み込みましたね。イベントフラグ「肉の記憶」が設置されましたが、本RTAではフヨウラ！

それよりも、試合後にハグリッド兄貴の失言により、「ニコラス・フラメル」のイベントキーが回収されたほうが重要です。まずは「賢者の石」クエストを走りきることを心がけましょう（安定チャート）。

クリスマスは家に帰ってデミガイズのマントを補充します。あつ、そうだ（唐突）。バレンタインではありませんが、プレゼントを贈るのは忘れないようにしましょう。好感度稼ぎは一日にしてなりません。劇的なイベントと、日々の積み重ねの組み合わせが重要です。

レズちゃんにもプレゼントが届いていますね。さてさて、失礼して手づかみで。

ガウエイン兄貴は……防衛術の指南書ですか。必要の部屋で補充できますが、ありがとナス！

ハーマイオニーちゃんは……マグル製の髪留めですか。ぺつ、穢れた血め！ ありがとうに使わせてもらいましょう。

他には魔法族の旧家からいつぱい来てますね……。社交辞令ですが返しておきましよう。マルフォイ君にはクイディッチ用のグローブでいいかな？

他には……何これ（困惑）？ 贈り主不明の包みがありました。やばそうなのでしもべのカーン君に開けさせましょう。

……非魔法界の高級チョコレートですね。ダンブルドアでしょうか？ 手紙もないのでハリー宛の荷物と比べることすらできませんね……。ま、いいや（ガバの素）。

ハリー君とロン君からはありませんでした。はっつつかえ！ ハリー君は育ち的にもかくロン君はもう少し頑張って、どうぞ。

……欲を言えばロンのカツチャマからセーターが来ていれば最良なのですが、まだそこまで好感度は上がっていませんか。もう少し頑張りましょう。

「みぞの鏡」イベントはキャンセルだ。「みぞの鏡」は「蘇りの石」に並ぶ精神破壊アイテムです。精神値が持っていかれかねないのでスルーするー（激ウマギャグ）。

学校に戻るとポッター君がフラメル搜索の失敗と、みぞの鏡の事を話してくれました。そう……。

ここでネビル君が「足縛りの呪い」を受けたまま寮に帰還する小イベントが発生します。二階の図書館から八階の獅子談話室まで登るとかガッツありスギイ！ 報酬に呪いを解いてあげましょう。はいはいフィニートフィニート。

これで好感度がさらに……あれ々おかしいね思ったより上がってないね。クリスマスプレゼント贈ったほうが良かったかな？

ネビル君のバツチャマに配慮して贈らなかつたんですが、来年からはプレゼントをあげるようにしましょう。「地中海の水性情魔法植物とその特性」とかどう……出そう？

レズちゃん悩んでいる間にフラメル老が発見されたみたいですね。蛙チヨコレートカードでいくらでもリカバリーが利くので大丈夫ですが、一安心です。

いつのまにやらハリー君の二回目の試合です。スネイプ先生が審判で天下無敵爺まです。連日の深夜徘徊で寝不足なので休憩しましょう。順当に獅子寮が勝ちました。よかったね（他人事）。

試合後ハリーが深刻な顔をして帰ってきました。どうやらスネイプ氏がクイレル氏の教員免許を奪って土下座を強要していたようです（大嘘）。

話の中からはクイレル氏の怪我等は一切出てきませんでした。無事にリカバリー完了です……。

アクシデント対応力の高さを見せつけたところで今回はここまで、ご笑読ありがとうございました。

## 死喰い人の娘とネビル・ロングボトム

ズイラ・レストレンジはネビル・ロングボトムのことをよく気にかけている。

「フィニート・インカンターテム 呪文よ、終われ！」

——ふふつ、大丈夫かしら？ ネビル？」

ほら、今もだ。

「ばあちゃん。またトレバーがいなくなっちゃった」

今思えば、それがネビル・ロングボトムのホグワーツ生活についた一つ目のけちだった。

キングス・クロス駅、9と4分の3番線。ホグワーツ生とその家族が一堂に会するそこは、まるでマグル界の鉄道のごった返していた。彼らの所有するフクロウはホーホーと鳴き交わし、色とりどりの猫たちが自由気ままに歩き回る。ドジを自認しているネビルは、足元に注意しながら、おっかなびつくりそろそろと歩を進めた。ずんずん先に進む祖母を追いかけて。



「おっと、気をつけろよ」

……それがいけなかった。注意が地面に向き過ぎていたのか、目の前から来た大柄の少年——緑の意匠を纏っている。蛇寮だろうか——にネビルは激突してしまった。

怒らせてしまつてはいけない。そう考え、ネビルはペコペコと頭を下げる。相手もそんなさえないガキに興味をなくしたのか、ふんと鼻を鳴らして立ち去つていった。助かった、ネビルはほつと肩をなでおろした。

安心したのもつかの間、ネビルはより大きな問題に気がついた。胸ポケットにいたはずのヒキガエルのペット、トレバーが姿を消していたのだ。今日彼がいなくなつたのは、既に二回目だった。

そうして、ネビルは急いで祖母に追いつき、ペットの不在を報告したのだった。

フクロウをカートに乗せたメガネの少年がそばを通り過ぎるのを横目に、祖母であるオーガスタはネビルの泣き言にため息をつく。

「まあ、ネビル——」

「——ごめんよばあちゃん！ もう行かなくちゃ！ 探しておくけどもしホームにいたら捕まえてて！」

いつものお小言だ。そう思つてネビルは、満員列車を理由に早々に話を切り上げる。祖母が二の句を継ぐ前に、彼は荷物を持ってホグワーツ特急へと駆け出した。

人混みをかき分けて、進む、進む。背後からは数人の悲鳴が聞こえていた。

特急の席は、何処もかしこも埋まっていた。まずは重いトランクをなんとかしようと思いついたネビルは、空いているコンパートメントを探してホームを練り歩いた。

満室、満室、満室、空きがあるが怖そうな角刈りの上級生、満室、黒髪のオリエンタルな美人さん、満室……。駄目だ、何処もネビルには座れそうにない。

やつとの思いで見つけたそこは、ホグワーツ特急の最後尾付近。ネビルはトランクを——近くの親切な三つ編みの少年に助けられながら——客室におさめてホッと安堵のため息をついた。

さて次はトレバーを探さねば。そう思ったネビルだが、席を立とうとしたちようどその時、コンパートメントの扉が開いて、栗毛色をしたふさふさした髪の少女が入ってきた。

「( )空いてる？」

ネビルの向かい側の席を指差して尋ねた。

「他はどこもいっぱいなの」

そう言つて少女は、ネビルの返答を待たずして席に腰かけ、彼の方を見据えてきた。そして少女は、間髪入れずに話し出す。

「私、ハーマイオニー・グレンジャー。あなたは？」

「えっと、僕はネビル。ネビル・ロングボトム」

「そう、よろしくネビル。ところであなた、魔法族の家の子？ 何かもう魔法は使えるの？ それにご両親からホグワーツについて何か聞いてない？ 特に組分けのこととか。どこの寮がいいとか知らない？ もしかしたらテストがあるんじゃないかと思うと……ああ、心配だわ！ まだ私、教科書の暗記しかしていないのに！」

ネビルが一言話す間に、少女——ハーマイオニーは口を三度は開いた。その口から見える前歯は、やや大きかった。

あまりの口撃に、ネビルは全てを聞き取ることができなかった。かろうじて覚えている内容にのみ、少年は答える。

「うん。親戚みんな魔法使いだよ。それと魔法だけど——」

ネビルはちよつぱり嘘をついた。

「——子供は魔法を使つちやいけないって、ばあちゃんが言つてたんだ。だから僕はただ何も使えない」

いや、嘘というには語弊があるか。確かに未成年の魔法使用は禁止されているが、ホグワーツ未就学の子供は罰されることはない。

だが、ネビルの意識にあつたのは、そういつた法解釈のあれこれではなく、単なる見栄だった。

ネビル・ロングボトムに魔法力が確認されたのは、彼が八歳の時である。大叔父であるアルジーが誤って彼を二階の窓から転落させた際、彼の体がまりのようになる形で発現した。

これは魔法族の子供としては、非常に遅い発現である。彼の親族は皆、ネビルが魔法力を持たないスクイブではないかと疑っていた。大叔母のエニドに至っては、彼が Hogwarts に入學できないと考えて「クイックスペル」を取り寄せていたくらいだ。

だからこそ、その時のロングボトム一族の喜びはひとしおだった。厳格な祖母であるオーガスタでさえ、その時ばかりは涙を流してネビルに抱きついたほどである。

しかし、彼の魔法力が他の子供より劣っているのは事実だ。その上おっちょこちょいでもあった。故に、ネビルはこれまで呪文の練習を一度もさせてもらえなかった。箒に乗ることも禁止されていた。それどころか、彼個人ののための杖すら買い与えられていない——それについてはネビルも賛成したのだが。

そんなわけで、恐らくはマグル出身であろう少女に対し、ネビルはちよつぴりばかり見栄を張ってしまった。

なおも何事かを口挟もうとする少女に対し、ネビルは彼の抱えていたタスクを口にして遮った。

「ごめん。さつき僕のヒキガエルがいなくなっちゃったんだ。これから探さない」と

ネビルの言葉に、手荷物から本を引つ張り出していた少女は、顔を上げて提案した。「あらそう。よければ私も手伝いましょうか？ 私も列車の中を歩いて回る予定だったの。色んな人にホグワーツのことについて聞きたかったし」

ありがたい提案だった。少年が快諾すると、少女はさっさと客室を出て行った。ネビルは慌ててその後を追いかけた。

「駄目ね。どこにもいないわ。……ほら泣かないで、ネビル！ 次はあつちを探してみましよう」

搜索は難航していた。トレバーの不運を考え泣きべそをかくネビルに、いつのまにかローブに着替えたハーマイオニーが叱咤し、指示を出す。いつのまにか主体が逆転していた。ネビルがふと覗いた窓の外には、薄暗く不気味な森が広がっていた。

いくつかあるコンパートメント群を、ハーマイオニーと手分けして探す。その中の一つにノックして入ると、中ではメガネの男の子と赤毛の男の子が百味ビーンズを食べていた。メガネの子を、ネビルはどこかで見かけた気がした。

「ごめんね。僕のヒキガエルを見かけなかった？」

二人は首を横に振った。それを見たネビルは無性に悲しくなり、ついには瞳からは涙がこぼれ落ちてきた。

泣き言を漏らす少年に対し、メガネの子が「きつと出てくるよ」と励ましの言葉を贈る。ネビルはそれに一言感謝を述べ、見つけたら教えてくれるよう頼んで客室を後にした。

外に出て辺りを見渡すと、ちょうどハーマイオニーが別のコンパートメントから出てきたところだった。彼女は駆け寄ってきて話が出した。

「そっちはどう、ネビル。見つかったは……いないみたいね。大丈夫よ、きつと見つかるわ」

そう言ってハーマイオニーは先ほどネビルが搜索した、男の子たちのコンパートメントへと入っていく。ネビルが止める間もなかった。

中では赤毛の男の子が何やら呪文を唱えようとしていた。

「お陽さま、雛菊、とろけたバター。デブで間抜けなネズミを黄色に変えよ」

……失敗。

ハーマイオニーが呪文に対する講釈を垂れる。流れのままに彼らは名乗り合い、ネビルはそこでもうやく赤毛の子の名前がロン・ウィーズリーであることを知った。

そしてなんと！　メガネの男の子はあのハリー・ポッターだったのだ！

ハリー・ポッター。生き残った男の子。「例のあの人」を倒した偉大な子供。

幼い頃からネビルは彼について、祖母によく聞かされてきた。彼の両親はネビルの両

親と共に「例のあの人」の軍勢と戦ってきたこと。ネビルとハリーは同い年であるということ。

そして祖母は決まって言うのだ。「お前もハリー！ポッターのように、なすべきことを成せる魔法使いになるのですよ」と。

ただ、魔法力に劣っている自覚のあったネビルは、こうも思っていた。きつと自分と彼では、パフスケインとマンドゥウほどに違うのではないかと。

……どうやら当のハリー本人は、そんな彼の逸話が本になっていることを知らなかったらしい。呆然としているハリーをよそに、ハーマイオニーはネビルの手を引っ張った。

「——行きましょ。ネビル」

コンパートメントの外に出るや否や、彼女は続けて口にした。

「残念だけでもう時間ね。そろそろ切り上げましょう。あなたは着替える必要もあるし。……大丈夫よ。きつと先生方に言えば見つけてくださるわ」

そう言つて、ハーマイオニーはスタスタと立ち去った。後に残されたネビルは、泣きの一回とばかりに未搜索のコンパートメントに向けて歩みを進める。

怖い人だったら嫌だな。ふとそう思ったネビルは扉の窓から中を覗き見て……思わず自分の目と脳を疑った。

そこに座っていたのは、黒髪で切れ長の目をした、彼が写真で見たことのある、恐ろしい女だった。

慌てたネビルは、我を忘れて自らのコンパートメントに駆け戻り、ハーマイオニーが来るまでずっと震えていた。

いや、そんな、まさか、あり得るはずもない、だってあいつは今もアズカバンにいます。はずじゃないか——。

学校に着く直前に森番からトレバーを渡してもらった時もお、彼は心の中で祈っていた。

どうか、自分の目が錯乱していただけでありますように、と。

「レストレンジ・ズイラー」

——願いは叶わなかった。

レストレンジ。ベラトリックス・レストレンジ。ズイラー・レストレンジ。

新聞で祖母に見せられた女そっくりの少女が、組分け帽子を被っていた。目を瞑っているその少女は、どこからどう見てもベラトリックスにしか見えない、まさしく生き写しだった。

死喰い人の娘。ベラトリックスの娘。両親を壊した奴らの娘。本人ではないとわ



かっけていても、ネビルにはそれがたまらなく恐ろしい。

「——しかし君の夢は紛れもなく勇氣に満ちておる。それならば、グリフィンドール！」  
だからこそ、帽子の選択は意外だった。十中八九、スリザリンと想っていたのに！

そして、「自分にはふさわしくない」という理由にもう一つ、「少女が恐ろしい」という理由が、ネビルのグリフィンドールを選べない理由に加わった。

少女の組分けが終わって、次は誰だ？

「ロングボトム・ネビル！」

僕だ。

ネビルはオタオタと帽子の下に向かって歩くが、途中でつんのめって転んでしまった。

「落ち着くのです。ロングボトム」

式の進行をしていたエメラルド色のローブを着た魔女が手を差し伸べてくれたことが、唯一の救いだった。

帽子をかぶる。途端に、ネビルの視界は暗闇に覆われた。

低く重苦しい声が、少年の頭蓋に響き渡った。

「フーム。なるほどなるほど。純血ではあるがそれを重視してはおらず、才能の欠片はあるが今はまだ形にならず、勇氣の燭台はあるが火が灯されておらぬ。……さて、どの

寮が相応しいかな?」

——僕はグリフィンドールには相応しくない。ハッフルパフで構いません。

「そうかね? 君が自分で思うほど、君の勇氣は捨てたものではないよ。それに、ヘルガの創った寮は決して劣等などではない」

——なら他の寮を! 僕はレストレンジが怖いんだ! 僕は戦う勇氣なんて持ってない! それどころか機知も、狡猾さも、忍耐さえも!

「本当に? 本当に君は何も持っていないと? よく思い出してみたまえ」

——僕は……。

ネビルのローブのポケットにある、杖とガムおの包み紙ずりが、ほんのりと熱を帯びた気がした。

「そうだと。我があるじが小鬼を真に打ち倒さなかつたように、敵と戦うことだけが勇氣ではない。戦うべきでないときは杖を収めることもまた勇氣なのだ」

「故にこそ、君のような者が真にゴドリックの寮にふさわしい。」

——グリフィンドール!

信じられない! まさか自分がグリフィンドールに選ばれるなんて!

呆然としたネビルは、帽子を被ったまま歩き出す。慌てて駆け寄ってきた黒髪の魔女が、帽子を彼の頭から取り上げた。ほんの一言囁いて。

「おめでとう、ロングボトム。オーガスタも喜びますよ」

ミネルバ・マグゴナガルの声を背に、ネビルは獅子寮のテーブルに向かった。

大広間がしんと静まりかえるのも気にせず、彼は知己であるハーマイオニーの元へ向かおうとしたが。

「おめでとう。ミスター・ロングボトム。これからよろしくお願いしますね？」

彼女の隣に陣取っていた、レストレンジがニコリと笑いかけてきたのを見て、足がすくんでしまった。それはどうしようもなく、日刊予言者新聞に載っていたそれと同じだった。

思わずネビルは、近くの席——彼女達から離れた席に腰を下ろしてしまう。

——大丈夫だ。まだこれからだ。

ネビルはそう自分を励ました。

……結論から言ってしまうえば、ネビルの心配事は全くの杞憂だった。ズイラ・レストレンジは全く暴力的ではなく、それどころか周りのグリフィンドール生に——一部からは半ば煙たがられていたのに——自分から友好的に関わろうとしていた。

かくいうネビル自身も、命を助けられたことがある。

「アレスト・モメンタム！ 動きよ、止まれ！」

——ふう。大丈夫ですか？ ミスター・ロングボトム？」

六メートルもの高さから転落した時。教員ですら対応できなかったネビルのトラブルに、それは見事な魔法で対処してくれた。突然だったせいで無傷とは言えず、手首を捻挫をしてしまったが、それでもネビルは彼女に心から感謝した。

「ありがとう、レストレンジ。僕の話はネビルでいいよ」

「ふふつ、どういたしまして、ネビル。わたくしのこともズイラと呼んで構いませんわ」  
医務室に連れて行かれる直前、ネビルが見たのは彼女の綺麗な微笑みだった。

ネビルとズイラが和解した。それを機に、多くのグリフィンドル生、ひいてはホグワーツ生が、彼女に対して友好的に——あるいは普通に接し始めた。

一月が過ぎ、二月が過ぎ。ハロウィーンも終わった11月には、ズイラは最早他のグリフィンドル生となんら違いがなかった。

より正確に言えば、ハーマイオニーに匹敵するくらいの成績であり、社交的で上級生ともよく話す彼女は、皆の人気者だった。

ネビルにとっても彼女は既にレストレンジの娘ではなく、友達のスィラだった。

そんなある日。肌寒くなってきた11月の月夜。ハリーが翌日にクイディッチの初試合をするということで、ネビルは自分が出るというわけでもないのに緊張していた。

開幕戦がスリザリンというのもあって、相手選手に攻撃されないか、ブラッジャーに当たって怪我をしないか。ハリーのことを心配で、眠れやしなかった。

ネビルは徐に自分のベッドからまろび出て、談話室へと降りていった。特に理由があつたわけではないが、なんとなくじつとしてゐるのも嫌だった。

談話室には当然ではあるが誰もいない。暖炉の火がパチパチと燃える音が聞こえるだけの、静かで薄暗い部屋だった。ネビルは一人、ソファアに座つて物思いに耽る。

十分かはたまた一時間か。ただじつと炎を見つめていたネビルに、ようやく睡魔が訪れた。

さて、そろそろ眠るか。ソファアから腰を上げ、自分たちの部屋に戻ろうとした時。ばかり。

「太った婦人」の肖像画が開く音がした。反射的にネビルは物陰に身を隠して、息を潜めた。

談話室に入ってきたのは、ヌラヌラとした不気味な物体だった。ちようど暖炉の揺れる炎で照らされ、尚且つ集中して注目していなければ気がつかないような存在だった。ネビルは思わず叫びそうになる声を、ぱつと両手で押さえた。

それは声を止めるのには成功したが、代償としてネビルの腕は壁にぶつかり音を立てた。

少年は息を飲む。ひたすらにじつとそれを注視した。

そして彼は耳にした。

「——ポルターガイストの仕業かしら？」

ズイラ・レストレンジの声を。

それから変わらなず、ネビルとズイラはよくやっている。よくやっではいるが、少年にはあの日の夜のことを問いただせなかつた。それはただ、恐ろしかった。

そんな折、ネビルは一つのこと気がついた。ズイラがよく関わる人は、なんとか、皆凄い人ばかりなのだ。

ズイラはハーマイオニーといつも一緒にいる。

——ハーマイオニーはマグル生まれにも関わらず、学年一番の才女だ。

ズイラはロンとも仲がいい。

——ロンの視野はとにかく広い。ほとんどのグリフィンドール生は、彼とチェスをしてそれを思い知った。

ズイラはパーシーによく授業について尋ねに行く。

——パーシーは監督生で、首席間違いなしとされる秀才だ。

ズイラは双子と悪戯をして遊んでいる。

——双子はホグワーツのムードメーカーで、とにかく顔が広い。  
ズイラはオリバーに箒を教えてもらっている。

——クイディッチ・チームのキャプテンである彼のことは、学校の誰もが知っていた。  
ズイラはマルフォイとも友好的だ。

——悔しいが、マルフォイ家が名家なのは否定できない事実だ。

そして、ズイラはハリーの親友だ。

——生き残った男の子。言うまでもない。

……ではネビル・ロングボトムは？

ズイラ・レストレンジはネビル・ロングボトムのことをよく気にかけている。

「フイニート・インカンターテム 呪文よ、終われ！」

——ふふっ、大丈夫かしら？ ネビル？」

ほら、今もだ。

それは何故だ？ ネビルは未だ一度も加点されたことのないような、誰もが認める劣等生だというのに。一体ネビルのなにが彼女の琴線に触れたのだ？

ネビル本人には語るべき特別なことが何一つないということは、彼自身が誰よりも知っていた。

考え過ぎかもしれない。だが、あの日の夜のことがそれを杞憂だと断じさせてはくれなかった。

「ありがとう。これで普通に歩けるよ」

「どういたしまして。ドラコにはこんなことやめるように言っておくわ。……まあ無駄でしょうけど」

「だろうね……。——あのさ」

「なにかしら?」

意を決して問いただそうとしたネビルを、ズイラは真正面から見据える。

その顔はベラトリックスそっくりだ。だがその切れ長の青い目だけは、彼女の母とは違っていた。

ネビルを見つめる青い瞳。それがどこか爬虫類のように——蛇のようにネビルは錯覚した。

「ううん、なんでもない」

「そう? ふふつ、ネビルったらおかしな人」

ネビルが今日も問いただせずにいると、ズイラはクスリと微笑<sup>ニヤリ</sup>つてその場を後にした。

グリフィンドールは勇気あるものの寮。対応する四大元素は火。



ネビルの勇気の燭台には、火が灯されてはいなかった。

——今は、まだ。

## 5/? ~黒ローブ戦まで

眠らずドラゴンをくすぐっていくRTA、もう始まつてる！

前は「ニコラス・フラメル」のイベントキーを回収しました。早速ですが、グラウンドクエスト「賢者の石」を進行させようと思います。

……と言いたい所さんですが、残念ながらそうは問屋が卸しません。日程的にはイースター☆に突入するのですが、そうするとハーマイオニーちゃん勉強を強要してくためクエスト進行は一時中断となります。チャート工程的にも一定期間までの高成績は必須なので、この機会に魔法史・天文学といった教科のステータスを上げておきましょう。フヨウラ！ と言えないのが学生の悲しい所さん。

昼間は社会的で図書館通いの優等生。

深夜は「必要の部屋」への第三次遠征——そして伝説へ——の継続。

こんなんじゃないレズちゃんの身体、壊れちゃうよ……。いくら食事である程度回復できるとはいえ、こんな成長期の無茶苦茶な生活リズムでは肉体的成長が色々心配ですが、でもこれRTAなのよね、仕方ないね♫

さて、そんなこんなで今日も仲良し四人組で図書館に向かうのですが……おっと、ハグリッド君がいますね。読んでいる本は「イギリスとアイルランドの竜の種類」、「ドラゴンの飼い方——卵から焦熱地獄まで」……。

はい。毎年恒例の「ハグリッドのアニマルクエスト」ですね。1991年度はノルウェー・リτζバツクのノーバートくんの飼育です。魔法省だ！（法律違反）

アニマルクエストには、年度ごとのグランドクエスト進行に必須なものと、そうでないものがあります。ノーバートくん育成は「賢者の石」クエストには必ずしも必須ではありません。仮にハリー一行を含めて関わらなかつた場合でも、ドラゴンについては天下無敵校長が全て解決してくれます。ちよつとこの爺万能すぎんよ。

アニマルクエストが開始されましたが、ここからレズちゃんの取れる行動は大別して三つに分かれます。

一つは「ドラゴン出荷ルート」、二つ目は「ドラゴン育成途中離脱ルート」、最後に「ドラゴンノートツチルート」です。それぞれについて詳しく解説します。

一つ目ですが、基本ルートと同様にノーバートくんを育成、その後ロンの兄貴のチャリーに出荷するルートです。このルートのメリットとしては、ハグリッド並びに三人組の好感度大幅上昇。それとエリア・禁じられた森に入場でき、イベントボス戦に参加できます。デメリットとしては、禁じられた森行きは罰則なので、レズちゃんの風

間が悪くなり、蛇寮を除いた多くの人の好感度が下がるということでしょうか。また、優等生ムーブをしていなかった場合、個人の成績の減点とともに、寮の点数の減点が致命的なものになり獅子寮の優勝杯獲得が壊れる危険性があります。今回は大丈夫ですが。

二つ目のルートですが、これは一つ目のルートの亜種です。ノーバートくん育成中にわざと噛まれることで、噛まれた箇所が野獣先輩のクソデカ枕並みに腫れ上がる為、禁じられた森以降のイベントをスキップできます。特有のデメリットとしましては、噛まれた箇所の治療に時間を要する為、「必要の部屋」での育成が遅れるといった所さんでしょうか。

最後のルートに関しては、他のルートで得ることのできるメリット・デメリットを全て得られないというだけです。あえて付け加えるなら三人組の好感度が1か2くらい減少するという些細なデメリットがありますが、その程度なら問題ありません。ハグリッド兄貴の好感度は下がりません。これは人間の鑑。でもドラゴンに人喰い蜘蛛、生物兵器に巨人を hogwatts にぶち込むのは森番の屑以外の何者でもないんだよなあ。ちよつと hogwatts の鍵と領地ガババすぎんよ（hogwatts 理事会）。

ここでの選択は一つ目と三つ目の可変式チャートとなっております。ここまでに十分な風間が稼げていれば育成、足りなければ放置しましょう。二つ目は中途半端すぎる

上育成計画が壊れちゃうのでキャンセルだ。

さて今回のプレイでは、そうですね……、やつぱりわたくしは王道を征く、育成ルートですかね。各方面に地道に媚を売りまくった結果、予定以上の好感度が稼げていました。これにより、好感度が底値に達することによる排斥・襲撃ルートに陥ることはありません。人脈つなぎは大切、はつきりわかんだね（スラグホーン）。

一時間後、ハグリッドの小屋を訪ねますが、卵が孵るためには竜の吐息並みの温度が必要なので、小屋の中はクツソ高温多湿です。

アツウイ！ すいませへええくん！ 暑いっす！ 暑いっす！ アツ！ 暑い！  
暑い！

そう泣き喚いても、ハグリッド兄貴は無視して暖炉に薪を投げ入れ、窓は開けさせてくれません。諦めてください。

あつそうだ（オリチャー）。人力ドラゴンの卵孵化RTAを行なっていらっしやるハグリッド兄貴ですが、今まさに、木製の小屋で大規模卵焼きを作るといふガバ行動を行なっています。

注意一瞬ガバ再走という諺もあります。ここは先駆者走者としてリカバリーしてあげましょうか。インパービアス！ 防水・防火せよ！

数日経ちました。そろそろ卵が孵るそうです。見に行きましょう。背後からマル

フオイ君がついて来てますが、そんなことどうでもいいわ。彼の行動に関わらず我々はフィルチに捕まります。スクイブ如きが、ぺっ。

そうこうしているうちに、ノーバートくんが誕生しましたね。おくほつほつほく元気だ（レ）。数週間の間可愛がってあげましょう。チャーリー兄貴早く来てく早く来てく。

早速ですがロン君がガバリました（規定路線）。餌のネズミを与える際に、誤って噛まれてしまいました。ノーバートくんはまだ赤さんですが、その牙には毒が含まれています。そのまま放置すると野獣先輩の枕並みのサイズに腫れ上がります。はえくすつごいおつきい（炎症）。マダム・ポンフリーの医務室なら現段階だと治療できますが、そうするとロンまで禁じられた森遠征に向かう羽目になります。流石に減点が大きく、年度末ダンブルドアブーストで補えないので涙を飲んで放置しましょう。ロンはベッドで寝てな！

というわけでノーバートくんの出荷当日です。流石にハリーの透明マント（真）に三人とドラゴン入り木箱は入らないので、ここでレズちゃんの透明マント（偽）を開帳しましょう。ハーマイオニーちゃん達には、この日の為に取り寄せたと言っておきます。

もし透明化の手段が無かった場合、残念ですが誰か一人はここでお留守番となります。これで透明マントを所持している正当な理由付けができましたね（論拠捏造）。

……これより先、「必要の部屋」遠征の際のハーマイオニー判定が強化されます。絶対

にガバらないようにしましょう（無敗）。

目的地は天文台塔屋上です。「必要の部屋」の近くなので、もはや親の顔より通い慣れた道ですね。ハーマイオニーももつとこっち来て（透明化）。

ドラゴンを運んでいる途中で、マルフォイ君がマクゴナガル姉貴に逮捕されているのを見つけました。じゃあな！

さて屋上まで着きました。しばらく待つていると……来ましたね。箒に乗ってやって来たのは、チャーリーの友人である青いローブを纏った四人のいい男です。うほつ、いい男♂。まずここさあ、屋上なんだけど……焼いてかない？（ドラゴンプレス）

彼らはこれからノーバートくんをチャーリーの待つルーマニアまで輸送します。これは……密輸じゃな？（名推理）いくらドラゴン使いでも出生場所等一切不明のドラゴンを国外輸送はまずいですよ!!

まあこれから彼らが a s s ガバガバの囚人になろうがレズちゃん達には知ったことがありません。ご冥福をお祈りしましょう。

「これは困ったことになりましたねえ……」

なんだお前!?!（素）

管理人だ！（アーガス・フィルチ）

階段下で待ち構えていたフィルチ君にねっとり声で絡まりました。

ここでの逮捕イベントですが、実は発生条件、正確に言えば非発生条件がよくわかっています。当初はマルフォイの密告がトリガーかと思われていたのですが、彼に一切知られずドラゴンイベントを進めた場合でもこのイベントは発生します。その後Wiki議論上での推察では、「ノーバートを天文台塔屋上に運ぶ間にミセス・ノリスに発見された」という説が主流となりましたが、これも有志による検証（ミセス・ノリスの排除）の結果否定されました。現在では「そもそも禁じられた森イベントがアニマルクエストに含まれているためフィルチの行動は固定である」と暫定的に結論づけられています。情報をお持ちの方、至急メールくれや。

もつとも、単純に罰則を避けたいだけなら、屋上に脱ぎ捨てた透明マント回収を忘れなければいいだけなのですが、今回は罰則を受けたのでキャンセルだ。

話をゲーム内に戻して。いつものように御用されたので、大人しくマクゴナガル姉貴の元へ向かいます。

既に先客にはネビル君がいました。ネビル君オツスオツス！

「あきればてたことです」

猫姉貴のお説教です。初めて先生に怒られたのかハーマイオニーちゃんが泣きそうになっています。か、わ、い、い、な、あ、ハ、ー、マ、イ、オ、ー、ニ、ー、ち、ゃ、



ん。(野獣の眼光)。

「二晩に五人もベッドを抜け出すなんて——ミス・レストレンジ、あなたは優秀な生徒だと思っていたのですが……。どうやら私の目が曇っていたようです」

レズちゃんは入学初日から毎晩のように出歩いているんだよなあ……。遅い遅い遅い。猫は節穴。

「いかなる事情があろうとも、ホグワーツは生徒が夜歩き回ることを認めてはおりません。よって一人五十点、全員で二百点グリフィンドールから減点です」

そう……。(無関心)。いくらでもリカバリーできるので、というより究極的には今年優勝せざるもいいので問題ありません。

あつ、そうだ。優勝を目指す理由ですが、ハリーの守護霊習得率を上げる以外の理由はありません。これにしても、殆どの場合三年生時のクイディッチでいくらでも挽回できるのです、本当にどっちでもいいです。

むしろ重要なのは、悪行を積み重ねることで例のチートアイテムを入手できなくなる危険性があることです。ハーマイオニー姉貴と同レベルなら問題ありませんが、それ以上積み重なるとリセットの憂き目にあいます。

翌日。ホグワーツ生がホグワーツ生特有の手のひら返しを始めます。一晩で二百点失ったら当然なんだよなあ……。

風聞がクツソ悪くなる上、好感度がガタ落ちしましたが、年度末にいくらでも取り返せます。無視して毎日を通ごしまししょう。流石にハーマイオニー姉貴に捕まるので「必要の部屋」には今はいけません、次のボス戦用の呪文は幼少期に習得済みです。問題ありません。

というわけで皆で第四次公認深夜徘徊遠征に向かいます（導かれし者たち）。

今回のパーティーメンバーは、レズ！ メガネ！ 穢れた血！ ビビリ！ フォイ！  
半巨人！ 犬！

……なんだこのゴミバ!? こんなんじや勝負になんないよ。

ハグリッド兄貴の采配により、

ズイラ、ハリー、マルフォイ、犬のフアングチームと

ハーマイオニー、ネビル、ハグリッドチーム

に別れました。これは名采配。ズイラちゃんはハリーとドラコの緩衝材としての役割ですね。

パーティー編成を終えたところで、ユニコーン襲撃犯を探しにイクゾー！ デッデッ  
デデデデ。

「今日は火星が明るい」

しばらく先に進むと、半人半馬が現れました。赤い髪に赤い髭、赤い毛をした彼はこの森に住むケンタウロスくんです。オッスオッス！

「今日は火星がとても明るい」

おつ、そうだよ（同意）。彼らは予言系のスキルを保持していると言われています。しかし、人間キャラでは彼らとの正確な意思疎通は極めて困難です。私はケンタウロスプレイをやったことがないので、正直情報の真偽さえよくわかりません。経験者は攻略Wikiに情報提供オナシヤス！ センセンシャル！

「今日は火星がいつもと違う明るさだ」

それしか言えんのかこの猿ウ！

対応も面倒なので、とりあえず先に進みましょう。

おつと。ユニコーンくんを見つけてました。あれくおかしいね息がないね。辺りには彼女がのたうち回った血の跡が散乱しています。

さて――

「ぎゃああああアアア！」

――イベントボスのお時間です。

小藪の陰から黒フードの存在が這い出て、ユニコーンくんの血液を啜り始めました。いったい彼は誰なんでしょうか（すつとぼけ）。

突然の襲撃と凶行に、びびったマルフォイ君とファングくん達が悲鳴をあげて逃げに行きました。はあくつつかえ！ 彼らの悲鳴でこちらの存在が気づかれてしまいました。

戦闘開始です。じゃオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

戦闘の解説をします。

本戦闘は、イベントによる耐久戦です。

勝利条件は、ケンタウロス・フィレンツェが駆けつけるまで敗北条件を満たさないこと。

敗北条件は黒フードによるハリーへの接触です。正確には本戦闘はあくまでイベント戦闘なので被害はありませんが、「賢者の石」クエストの最終戦での敗北が確定するたぬどっちみち詰みです。「リリーの護り」を学習してしまうからですぬ。

戦闘開始とともに、ハリー君はなぜか傷跡を押さえて蹲ってしまいました。不思議ですぬ。その為本戦闘では彼を庇って戦う必要があります。

……プレイヤーキャラがいなかった場合？ フィレンツェ兄貴のご機嫌次第でリセットだ。

黒フードですが、彼は基本的にハリーに対して接触しようとは行動しません。その為一度だけ先制で攻撃することが許されています。

ただし、一度でも手を出すと攻撃者を排除してこようとしては、盾の呪文で防御も行う為、生半な攻撃では通用しません。

またフィレンツェくんが駆けつけるのは彼が異常に気がついた後です。その為、必要耐久時間は彼のさじ加減、言い換えると乱数で変動します。ふざけんな！

この戦闘は、これら二つの問題を解決する必要があります。

だから――

「ルーマス・ソレム！ 太陽の光よ！」

――閃光魔法を覚える必要があったわけですね（メガトン構文）。

夜間による暗順応も相まって、閃光魔法は確実に有効打を叩き出してくれます。彼が怯んでいるうちに、ひとまず距離を稼ぎましょう。

「ヴェンタス・マキシマー！ 暴風よ！」

ナナカマドくんも活性化しています。決闘判定が出ているので、どうやら相手は魔法使用のようですね。風で吹き飛ばしましたが、黒ローブは空中で身を翻して難なく着地しました。いよいよ本格的な戦闘といった所ですが……。

だけど今晚はもうおしまい！

閃光の知らせに気がついたのか、遠くから蹄の音がこちらに近づいてきました。黒ローブ君はそれに気がつくや否や撤退しました。イベント戦闘終了です。お疲れ様で

した。

「大丈夫かい？ ポッター家の子と、ズイラ・レストレンジ」

駆けつけたファイレンツェ兄貴が語りかけてきました。ヘーキヘーキ、ヘーキだから大丈夫だって安心しろよ。お前の救援が好きだったんだよ！

彼が二人を乗せて安全な場所まで運んでくれます。途中でケンタウロスのベインクんに会いますが、ベインは人を乗せて走り回るといふロバのような行動をしたがらないため、彼に分乗することはできません。

えっベインくんわたくしの守護霊馬鹿にしますの？（守護霊・ロバ）

移動中に、ファイレンツェ兄貴が黒幕・ヴォルデモート説を提唱します。これは予言者・ハリーもそれに同意したようです。そうだよ（同意）。

これによって、ハリーが成長キーである「ヴォルデモートの配下との邂逅」を獲得しました。やったぜ。

これだけの為に、今回のアニマルクエストを進めたといっても過言ではありません。本RTAを終了させる為にはどうしてもハリーにお辞儀様を傾してもらわなければならないのですが、その為にはハリーの育成を行う必要があります。

ただでさえ「神秘部の戦い」という通常より二年早い段階で決着をつける予定ですので、通常ルートの成長イベントまで落とすわけにはいきません。

ハリーの経験特徴として、座学よりも実技、それもヴォルデモート陣営との戦闘によつてより成長するという特徴があります。ちょうどハーマイオニーと逆ですね。なのでこれからも、回収可能なイベントは積極的に拾っていきます。

と、ハリー育成について触れた所で。

「幸運を祈りますよ、ハリー・ポッター。それからズイラ・レストレンジ。私と君達の惑星は一致しています。読み間違えていないことを互いに願いましょう」

無事にハグリッド達と合流できました。尺も短いですが、今回はここまで。ご笑読ありがとうございます。

……今回は一切ガバのない、完璧なプレイだったな！（自画自賛）

## 6/? ハリー・ポッターと賢者の石、了

ハリー・ポッターと賢者のタイム♫ 完走してるから安心!

前回、禁じられた森でのイベント戦をこなしました。今回で長かったグランドクエスト「賢者の石」は終わりです。一年の総決算、行くぞオラァ♫

罰則を終えて次の日、早速ですがここで一つの判定があります。

「ズイラ、僕のベッドに君のマントと、メモが——」

マント返却イベントです。第一関門突破、やったぜ。万一ここでこの会話が発生しなかった場合、ダンブルドアの爺値G<sub>G</sub>が相当高くなっているとわかります。爺値G<sub>G</sub>は Greater Good値よ<sub>り</sub>大<sub>き</sub>な<sub>善</sub>のです(再掲)。

続いてハリーからメモを確認しましょう。メモには綺麗な細長い字で

——共に悪戯を楽しむ友人ができて結構。夜更かしはほどほどに。

とありました。

うーん(リスト確認)。よし! (ガバ認定)

ひよつとすると「必要の部屋」育成がバレているかもしれませんが、ハリーやハグリッ



ド達との関係を深めていたことで見逃してくれた……のかな？

ここでの文面はこれまでの行動実績に応じた完全ランダムです。一応傾向はあるため類推は可能ですが、真意を知るためには開心術を使う必要があります。出来るわけないだろ！

ですが有志の検証により、ハリーとハグリッドに関わることで良い結果がもたらされる可能性が高いという報告が挙げられています。検証勢ありがとナス！

ハリーに関しては決戦兵器としての運用でしようが、ハグリッドについては……お前、ホモか？（ゲラート・グリーンデルバルド）

なんにせよそこまで危険視されていないようです。この調子で頑張りましょう。

グランドクエストに取り掛かりたい所さんですが、その前にまずは年末試験です。再三申し上げていますが成績は大事です。頑張りましょう。

呪文学——パイナップルをタップダンスさせます。タラントアレグラ みんな踊れよ。

一見ゴミ呪文に見えますが、行動阻害としてはなかなか簡単かつ有用です。カッチャマの同僚のドロホフくんも使った死喰い人公認呪文なので、通常プレイでも覚えておいても損はありません。

変身術——鼠を嗅ぎタバコ入れに変化させます。変身術といえば、襲撃呪文・オパグノとのコンボはあまりにも有名です。本チャートではそこまで出番はありませんが、覚えるに越したことはありません。なお、このカテゴリの魔法は詠唱を繰り返して練習するよりも、理論を学んで熟練度をあげた方が効率的です。

魔法薬学——「忘れ薬」の精製ですか。通常の方法ではステータスの伸びが悪いと有名な魔法薬学ですが、本チャートでは諸々一切を来年に全て解決します。覚悟決めろ（犯行決意）。

残りは座学なのでカットしますウー。

試験が終わった後、ハリーが傷が疼くと喚ぎ始めます。そして彼は「ハグリッドが見知らぬ誰かから禁制品のドラゴンの卵を受け取ったなんておかしい。これはスネイプ、ひいてはヴォルデモートの仕業に違いない」と陰謀論をぶち上げました。

あつ、おい待てい（江戸っ子）。ハリーが知らないだけで禁制品持つてる奴らなんてうようよいるゾ。

一年生の教科書の執筆者、ニユートくんは生物兵器のオプスキュラスやサンダーバードを始めとする禁制魔法生物をアメリカ・マクローザのお膝元に大量に密輸したんだよなあ……。魔法生物をノー・マジ界にばら撒いて、逮捕後死刑室送りになった後も逃亡

したとかマジ？　これは大犯罪者ですな間違いない（グレイブス）。

他にも隣にいるロンのトッチャマはマグルの違法改造品を自分の所属部署で隠蔽して所有していますし、マルフォイのトッチャマも分霊箱なんて特級品を所有しています。なんだこれは、たまげたなあ（イギリス魔法界）。

スネイプ犯人説というケツ論もガバガバですが、それでこそRTA走者のお供や！  
なので今回は許したる。

ハグリッドの口がハグリッドした（動詞）事を突き止めたハリー一行は校長室に向かいますが……校長は偽報に騙されて留守にしていました。はあく、つつかえ！

校内をうろろうロウロウ、うろろうロウロウと徘徊していたら、猫先生とプリンス先生に捕まってしまいました。二人とも要約すると、「危ないから大人しくしてろ、さもなくば減点だ」と話します。そう……（無視）。

というわけで今夜、みんなで第五次深夜徘徊遠征に向かいます（天空の花嫁）。

夜になりました。杖二本とマント、犬を寝かしつける笛を持ってイクゾー！　デッ  
デッデデデデ。

「君たち、何してるの？」

はい。ネビルイベントです。大勢に影響はないのでさっさと流し——

「ズイラ、君もだ。あの日より前にも寮を抜け出していたみたいだけど、一体何を考えて

いるんだ!？」

フアツ!？」

なんで? なんで? なんで? なんで? なんでネビルにばれてるの? そんな

機会なかつたじゃ〜ん!

………よし! ここでもオリチャー発動!

「——それは、全て石を守るためですわ」

どう? (リカバリ) 出そう?

ネビルにばれた時系列がわかりませんが、少なくとも箒事件よりは後なはず。ハロウィーンより後ならこの言い訳も通じる……はず。

これ以上何か口走られてはまずいですよ! ハーマイオニー、早く行かないとスネイ

プが! (犯行教唆)

「ペトリフィカス トタルス 石になれ!」

やったぜ?

口をふさぐ事で少なくともこの段階での破綻は免れました。後は結果さえ持ち帰れば騙し通せます。ラストのネビル加点も加えて、ホグワーツ流の手のひら返しをお見せしましょう!

ハリーたちからいろいろ尋ねられますが、心配だから時折夜監視しに行っていたとで

も言っておきます。通常時ならハーマイオニーは騙せませんが、今は異常時判定！ 思考が鈍っているのので石を前面に出して押し通します！

ミセス・ノリスを抜け、ピーブズを抜け四階の廊下へと着きました。というわけで「賢者の石の試練」にイクゾー！ ……カーン！

まずは「門番の試練」です。対策済み！ ハリーが笛を吹いて解決しました。フラッファイーくんは寝てな！

次に「悪魔の試練」です。対策済み！ ルーマス・ソレム！ 太陽の光！  
ラカーナム・インフラマーレイやインセンディオでも対応可能ですが、炎がこちらに燃え移るとロスです。光の方が安定でしょう。

「鍵の試練」、対応可能！ ハリーの超絶技巧を見せてやれ！（他力本願）

「遊戯盤の試練」。ロン兄貴、オネシヤス！ センセンシャル！ レズちゃんがいることにより難易度が上昇していますが、ロン兄貴ならヘーキヘーキ、ヘーキだから！ 大丈夫だって安心しろよ。……手数は少し伸びましたが、無事ロン兄貴と引き換えに勝利しました。お前の犠牲は無駄にはしない……。

ここで勘のいい方なら「ちよつと待つて!? レズちゃん試練攻略に必要ないやん！ どうしてくれるのこれ」とお思いかもしれません。

そうだよ（自白）。この後の「亜人の試練」は犯人のクイレルルによって気絶済み、「論

理の試練」はハーマイオニーによって解き明かされ、「鏡の試練」と章ボス・クイレル教授はハリーによって解決されます。

実は「賢者の石の試練」はプレイヤーキャラがなんらかの影響を与えていない限り、確定で自動成功します。

最終戦に突入しようにも、「論理パズルの魔法薬」が自動補充されるまで炎の壁を突破できません。途中参戦はできますが、実戦による経験値的にはうま味あじとは言い切れません。「必要の部屋」育成法の方が効率的です。

レズちゃんは試練攻略には不必要とわかったわけですが、じゃあなんで来たのかと言われれば

「ロン——！」

そうですね。役に立たずとも参戦するだけで別種のリターンが保証されるからです。十割打算です。

まずは三人組の好感度。彼らと共に立ち向かうだけで、好感度がうなぎのぼりです。次に闇の魔法使いに立ち向かう、というスタンスの確保。これによりダンブルドア率いる不死鳥の騎士団勢力、闇祓い勢力の好感度が彼らに知られた時に上昇します。大半の味方勢力を網羅しているので費用対効果抜群です。

次に Hogwartz での風聞の回復です。ハリー・ポッターと協力して石を守ったという

風聞は、蛇寮以外に大きく作用します。手のひらホグワーツ。

最後に所属寮点です。罰則で失った獅子寮の点数をリカバリーできます。

参戦するだけでこれだけのうま味あじ。もうこれ参戦するしかねえな？（チャート構築時）今は亡き蛇寮チャートでも、蛇寮点が確保できるため参戦する予定でした。通常プレイでも騎士団勢力なら参加しない手はないでしょう。

ロンに治療魔法をかけて先に進みます。エプスキー 癒えよ！

さて、次は「亜人の試練」ですが……扉をまだ開いていないというのに、野獣先輩もかくやと言わんばかりの異臭が漂ってきます。中ではトロールくんがおねんねしているからですね。先ほども申し上げたように、既にトロールくんはクイレル教授に気絶させられています。

よってこの部屋も対処済みです。二人が先に向かっていきましたね。レズちゃんもさっさと追いかけて抜けま——

「——！！」

——へ？

はえくすつごいおつきい。

え、身長・体重はどれぐらいあんの？

え、身長が400cmで、体重が970kgです（大いなる成長）。

今なんかやってんの？ スポーツ……なんかすごいガツチリしてるよね（錯乱）。

特にはやってないんですけど、撲札はやってます（有言実行）。

つてあかん二人が死ぬう！

「ツ！ スポンジファイ 衰えよ！ ヴェンタス・マキシマー！ 暴風よ！」

いかん危ない危ない……（レ）。

二人が棍棒でミンチにされかけましたが、ぎりぎり吹き飛ばして回避させることができました！ ぶつかる壁も柔らかくできたので大丈夫なはずです。

「二人とも、先に行つてくださいまし！」

「でもズイラ！ 三人で戦つた——」

「——いいえ！ あれには」

三人で勝てるわけないだろ！ 馬鹿野郎お前わたくしは死なないぞお前！

というわけでまさかのボス戦です。こんなんじやRTAになんないよ。……じゃ

オラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

おそらくレズちゃんにとつての章末ボスであろう相手、マウンテン・トロール・ガードマンについて解説します。

本章で戦う予定はなかったため、「不死鳥の騎士団」編のトロール・ガードマンのス



テータスを流用して解説しますが、基本的には以前戦ったトロールと同様のステータスです。

唯一にして最大の違いは、知能の値が通常のトロールと比べて114514倍（当社比）されているところでしょうか。これにより、乱数行動による即死は無くなった反面、多人数での封殺が不可能になっています。

おっと、方針が決まったようです。暫定的ですが、本戦闘の条件確認を行います。敗北条件は死なないこと、三人を死なせないこと。

勝利条件はトロールの撃破または――

「プロテゴ 護れ！」

――アルバス・ダンブルドアが救援に訪れるまでの耐久戦です！  
泥を啜つても生き延びてやりましょう！ もうリセットは嫌じゃ！

ハロウィーンの戦闘でも解説したように、トロールを正面から打倒することはほぼ不可能です。

「不死鳥の騎士団」編をプレイされた方ならお分かりでしょうが、ガマガエルがハグリッドの小屋を襲撃した際、猫先生は失神呪文を四発胸に受けて病院送りになりました。

ところがハグリッドは少なくとも五発受けてもピンピン暴れまわることができます。

半分はヒトなのに！

このことから、魔法生物の耐久性は明らかでしょう。なので、この戦闘で重視すべきは攻撃ではなく防御！ 威力ではなく手数！

というわけでここで本チャート独自要素解禁。

「フリペンド！ ヴェンタス！ プロテゴ！ インペディメンター！」

オリチャー・杖二刀流♂です。

メリットは無言呪文に劣るけど杖一本よりは速い程度の魔法発動速度。デメリットは忠誠心の低下、威力の低下、要求魔法力の増大！

ああん？ 使えねえな？

そこまで有用ではありませんが、無言呪文習得までの裏ゲイとしては十分でしょう。

棍棒の振り下ろし、蹴りつけ、タックル、投石……。予備動作の大きいものは妨害や風を差し込みつつ盾でなんとかそらせます。

つと、薙ぎ払いは躲けません。

「ロコモーター・アイ！」

移動魔法。自分に使うとダメージが入りますが、ミンチよりはマシ！

まずいのはフィールドの破壊ですね。移動可能箇所が少なくなってきました。石飛礫のスリップダメージも馬鹿になりません。

「レパロ！ 直れ！」

ですがまだ大丈夫。トネリコくんをトロール対応に回してナナカマドくんを修復に当てることでぎりぎりやれます。オリチャーの面目躍如。代償に魔法の並行使用でレズちゃんの頭壊れちゃう！

「フリペンド！ デイフィンド！」

もう一つの難題として、手を出さないと他の部屋——ロンまたはハーマイオニーの方へ向かおうとします。お前ガードマンじゃねえのかよ（言いがかり）。

通常なら四年生の「第一の試練」の頃に「結膜炎の呪い」と「昏睡の魔法」を覚えられるため五年生戦闘時はなんとかなりやすいのですが……。いやキッツ！ やつぱトロール強い！

既に攻撃魔法の類も複数飛ばしていますが、何も効いていません。

衝撃は気を引くだけで。

裂傷は少し線が入るだけ。

妨害は心なしか遅くなる分僅かにマシで。

縛鎖は紐をすぐに引きちぎられる。

武装解除は素手でも強いため無意味。

失神に至っては怒らせるだけで逆効果！

その他も風は重すぎて吹き飛ばせず、閃光は乱数行動に移行するためかえって危険ですし……。

こんなん楽に倒せるのダンブルドア級しかおらんやん！ フクロウ試験課に連絡させてもらうね（トロールの評価向上）。

あゝもうやだゝ（5分経過）。

頭トロールのおかげで常に攻撃してくるわけではないのが幸いですが、それでもきつすぎんよゝ。

「レパロ、アクシオ！ 瓦礫よ、来い！」

背後の壁を修復して、呼び寄せで後頭部にぶつけましたが効いていません。さてはハロウインより強个体だな？（ガバ運）

つと、ハーマイオニー姉貴が戻ってきましたね。ここはいいからはよロンのところ行つて！

「私も手伝うわ！」

行けつて言つてんだろ頃すぞ（焦り）。

一人だからヘイトが集中してるのに、二人になったらヘイトコントロールガバによる乱数行動が挟まって死にます（断言）。

よし、ハーマイオニーちゃんはロンのところに行ったな？　これで安心で――

「――！」  
はないです（絶望）。ハーマイオニーを追いかけて小さなドアへタツクルを敢行しましたね。ちよつとサイズ比考えてくれよなく頼むよ。」

「プロテゴ・マキシマー！　最大の防御を！」

ナナカマドくんが長い付き合いでよかつた。杖の補正込みで、盾の上位呪文にぎりぎり熟練度が足りました。やったぜ。

ただそろそろガス欠です。これからは省エネで乗り切りましょう。

壁に激突したトロールくんが怒って今度はこちらにタツクルしてきました。距離的にも流星に対応可能です。そんなんじや甘いよ。

進路上から軽く避けて――床陥没!?

早く立ち上がって、いや浮遊呪文の方が、と思つたら上から棍棒が――

「――」  
あつ、ふーん（走馬灯）。

「おはよう、ズイラ」

……生きてるう〜！ 帰ってこれた〜！ アツハツハ！

ここまでで一番リセットを実感しましたが、なんとか生還しました。戦闘終了です！

「——おはようございます、ダンブルドア校長」

やっぱり最強無敵爺は違うな！ 偽報に騙されたとか言っでごめんね！ これは魔法使いの鑑ですね間違いない。

今は——二日後ですか。ハリーは三日後に起きるはずですのでその間本章の振り返りでもしましょう。

獅子ガバ、ネビルガバとありましたが、一番はやはり先ほどのトロールガバでしょう。正直どこがガバったかすら判りませんが、一門特有の低乱数ガバ運かもしれません。全然わからん！

問題点としては魔法生物への戦闘方法の少なさですか。来年のプリンス本で補完しようという計画ですが、アクロマンチュラ、バジリスク、人狼、ついでに動物もどきも考えるとなんかの対策を事前習得しておいた方がいいかもしれません。チャートにちやーんと書いておきましょう（激ウマギャグ）。

そんなこんなで最終日の学年度末パーティーです。皆に賢者の石のことが知れ渡ったので風聞も回復しましたね。ネビルくんも誤解してたと謝ってくれました。そうだ

よ（大嘘）。

ダンブルドアの寮杯点年末調整を聞きながら本章はお別れしましょうか。

「ズイラ・レストレンジ嬢。友人を守って魔法生物との決闘を制した杖さばきに五十点を与える」

やっただぜ。これで罰則分のリカバリーも完璧です。終わりよければ全てチャート通りってそれ一番言われてるから（一門）。

それでは「ハリー・ポッターと賢者の石」編はこの辺で。ご笑読ありがとうございます！  
次回「ハリー・ポッターと秘密の部屋」編もお楽しみに！

「——したがって飾り付けをちよいと変えねばならぬ所じやが」

……ん？

「その前にわしの話を少しばかり聞いてもらいたい。——今、この場にいらつしやらない方、クイリナス・クイレル教授についての話じや」

「皆が今どんな秘密を知っておるのかはわしには判らぬが、今日、この場で、わしが知っている真実を話させてもらおう」

「実は今年一年間、この城、ホグワーツ城は少しばかり秘密の物を預かっておったん

じゃ。ところが先日、わしがホグワーツ城を留守にしている合間に、それを狙う賊が押し入りおった。まっこと痛恨の極みじや。悔やんでも悔やみきれぬ」

「その際に、クイレル教授が、彼の驚くべき機知でもって賊を退け、秘密を秘密のままに留めておいてくれたのじや」

「だから、どうか、皆の者。クイレル教授に——クイリナスの叡智に、杯を捧げてやってはくれぬかの」

……なにこれ？



## トロールのようにとろい旅路を

「クイレルは——クイレル先生は最期に僕の肩を掴んで言っていました。ミス・レストレンジにありがとうと。」

……それから、ダンブルドア先生に。ホグワーツに迎え入れてくれて、感謝していません、と」

ハリー・ポッターが大魔法使いの苦悩する顔を見たのは、その時が初めてだった。

クイリナス・クイレルという男は、幼少の頃より大変に奇矯な男であった。

半純血の家系に生まれた彼は、幼い頃から魔法界のものと非魔法界のものとの双方に接する機会があった。そういう場合、大抵の子供は魔法界のものに対して興味を示すのだが、彼は非魔法界のものに対して強く関心を抱いた。

友達がゾンコの店に糞爆弾を買いに行く中、クイリナスは一人ロンドン・ストリートにあるおもちや屋ヘトイ・ブロックを買いに行った。

そんな子供は、彼だけだった。

魔法生物。

魔法界をある意味で象徴する生き物たちだ。

彼らは森で、草原で、湖で、庭先で、時にはマグルのおとぎ話の中で、縦横無尽に駆け回る。

とある少年は、ドラゴン使いになりたいと思った。

またある少年は、不死鳥を従える賢者になりたいと思った。

一人の少女は、ユニコーンに魅了された。

そしてある少女は、実際にパフスケインを飼ってみた。

さして珍しくもない、魔法使いの子供にはありふれた欲求だ。大人になってもそう思うかは別にして、子供の頃そう願う子供はごまんと——無論、比喩である——いる。

そんな中、クイリナスという少年は魔法生物の中で、とりわけトロールを好んだ。トロールにバレエを教えようとする男に共感し、トロールのスケッチをしている時に撲殺された男を愚かだとは思わなかった。

友達がハンガリー・ホーンテイル種とスウェーデン・シヨート・スナウト種のどちらがカッコいいか議論する中、クイリナスは川トロールの食性について熱弁した。

そんな子供は、彼だけだった。

成長につれ、クイリナスからは、次第に友人たちは離れていった。

当然である。幼い子供が、どうして話の合わぬ異物と過ごすことを続けようか。たださえ少ない魔法界の子供の中で、クイリナスは緩やかに排斥された。

彼は少しだけ寂しかったが、それでも趣味を曲げようとはしなかった。彼にとつては、それらが一番ファンタスティックだったからだ。

ホグワーツではもしかして、彼はまことの友を得る？

転機が訪れる。

十一歳の誕生日、彼の元にホグワーツから入学届けが送られてきた。

組分け帽子は、本人の性質に応じて子供を四つの寮に振り分ける。

だとすれば、周りの子供たちはたまたま趣味が合わなかっただけで、彼と趣味を同一にする誰かがいるかもしれない！

クイリナスは喜び勇んで、ダイアゴン横丁へと学用品を揃えにいった。

大鍋を買って、教科書を買って、ローブを買って。

両親と連れ立って買い物をした彼は、最後に一番の必需品、杖を買いに行った。

オリバンダーの店。西暦より昔から存在する高級杖メーカー。

外見はとにかく見窄らしかったが、両親が言うには間違いなく世界最高峰の店だそう  
だ。

「いらっしゃいませ」

店内に入ると、銀の目をした老人が奥から声をかけてきた。そのまま老人は両親の拘子定規な挨拶を遮って、彼らの杖に対する品評を始める。

まごう事なき変人だった。だが杖という分野にかけては他の追隨を許さぬという気迫も感じた。

クイリナスは彼を、同好の士ならぬ異好の士だと思った。

オリバンダーが両親の杖を楽しんだ数分後、ようやくクイリナスにお鉢が回ってきた。

彼はクイリナスの目と杖腕を見たのち、ふむふむと呟いて売り物の杖を渡してくる。まずはリングゴの杖……うんともすんとも反応しない。クイリナスは無言で杖を返した。

続いてイチイの杖……暴発。オリバンダーは慌てて取り上げた。

クリの杖……鮮やかな火花が散った。少年はこれだと思ったが、老人にはそうは思えなかつたらしい。次の杖を渡してきた。

そうこうしているうちに、ようやく一本の杖が彼を選んだ。

杖材はハンノキで、芯には一角獣のたてがみ、杖長23センチのよく曲がる彼だけの杖。

「——クイレルさん。その優しさと思いやりさえ忘れなければ、きつと貴方は偉大で有

能な魔法使いになることじやろう」

杖職人のオリバンダーの言葉は、クイリナスの心臓に引つかかった。それはきつと、祝福だった。

ロウエナ・レイブンクロー。賢明公正・蒼き翼のレイブンクロー。

偉大なる大魔女が己が寮生に求めたものは、機知と智慧、独創性にそれから個性。クイリナスがレイブンクローに選ばれたのは、半ば必然だったとも言える。

——計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり！

ここでならきつと、自分も学びの友人を得ることができるかもしれない。クイリナスがそう思うのも無理はなかった。レイブンクローには多くの変わり者がいると彼は知っていたからだ。

——しかし、それは、幻想だった。

確かにレイブンクローは変わり者を受け入れる。だが、そこには一つだけ前提がある。

レイブンクローは叡智の寮。知恵あるもの、賢いものを尊ぶ寮。寮内で成績を争うよ  
うな、学問に意欲的な寮。

クイリナスは、残念ながらそれには該当しなかった。

なにが問題だったか？

マグル趣味、それもある。トロール趣味、それもある。

一番の問題は彼がどうしようもない吃音症だったことだ。

マグルやトロールに関することは饒舌に話すというのに、日常会話になると途端にどもってしまう。

——なによりも吃音症は、呪文を詠唱する魔法使いにとっては、あまりにも致命的なものだった。

いくら座学が出来ようとも、杖さばきが劣っていれば魔法使いとしては不十分。

クイリナスに、「劣等」とそれから「ルーニー」のレッテルが貼られるのもやむなしだった。

マグル学の成績がどんなに良くてもそれは魔法使いにとつてはたいして重視されない知識で、六年生に無言呪文を習った頃には、彼に向けられる偏見は最早どうしようもなくなっていた。

レイブンクロー、ひいてはホグワーツで、クイリナスはついぞまことの友を得ることができなかつた。

ただ、それでもホグワーツを嫌いにはなれなかつた。

レイブンクローの談話室から眺める夜景は、美しかった。

ホグワーツ卒業後、彼は働き口を己が最も自信のある分野に求めた。

つまりはマグルとトロールに関する何かである。

しかしそこでも、彼の奇矯さは悪目立ちした。

レイブンクロー生の主たる就職先である魔法省をクイリナスも訪ねたのだが、そこは彼にとつて期待はずれだった。

魔法事故惨事部？ 確かにそこはクイリナスが求める部署だったが、同時にクイリナスには適していなかった。知識とコミュニケーション能力の双方を振るう職場であったため、片方しか持っていなかったクイリナスは選考に弾かれた。

魔法生物規制管理部？ 悪くない。が、それでもトロールは、殆ど益をもたらさない害獣として認識されていた。保護よりも処分を行う部署だと知ったクイリナスはやむなく撤退した。

マグル製品不正使用取締局？ 論外！ 不確かな知識を元にマグル製品で遊ぶことは、彼の叡智が許さなかった。

そうこうしているうちに、彼の将来は不透明なものになってしまった。寮生の多くが進路を定める中、彼だけはいつまでも決まらない。

そんな彼に手を差し伸べたのも、またホグワーツであった。

「——ほっほっ。クイリナス、ならば君に一つ頼みがある」

マグル学教授。

なんと素晴らしい響きだろうか。

教職という過酷な職務でも、己が得意分野ならクイリナスにも務まるかもしれない！

「ではよろしく頼むよ、クイレル教授」

その晩は興奮して眠れず、ハンノキの杖をピカピカに磨いたことをクイリナスは今でも覚えている。

——しかし、またもやクイリナスは裏切られる。

初回の授業、マグルの素晴らしさについて教えようと、クイリナスは張り切った。

初めにマグルが成し遂げた、彼らの持つ飛翔術・航空機について語った。次にマグルの持つ魔法・電気について語った。そうして徐々に難易度を上げて、物理学、航空力学、

最後にはマグルから見た天文学——つまりは宇宙工学について語るつもりだった。

魔法族の皆にもっとマグルの素晴らしさ、面白さについて知ってもらいたかった。

だが、そんなことは生徒の誰からも求められていなかった。

彼らの持っている知識が、クイリナスが想定していたより遥かに下だったというのもあるが、彼らのマグル学への認識が、クイリナスの心を一番痛めつけた。

純血の生徒は穢れた血の猿知恵だと馬鹿にして受講せず。



マグルの生徒は既に知り得たことだと興味を示さず、受けるのは、知識ではなく単位を求めると学生ばかり。

フクロウを12教科求めるような生徒はまだ熱心に聞いてくれたが、それでも彼らからは魔法省の名門部署に入るまでの繋ぎである、という意味が透けて見えた。

誰もマグル学を重視しなかった。

誰もクイレル教授を重視しなかった。

マグル学の内容を、それこそマグルなら子供でも知っているようなレベルに下げてもなお、生徒たちは理解せず、興味を持たない。

一年間教職を続けたクイリナスは、既に限界に達していた。

クイリナスは自室で一人、ハンノキの杖を見つめる。

「クイレルさん。——きつと貴方は偉大で有能な魔法使いになることじやろう」

かつて杖使いに言われた言葉をクイリナスは思い出した。

もはやそれは、呪いだった。

数日後、クイリナスはダンブルドアに休職願を出した。

一年間の研修という形でそれは受け入れられた。

「この国に『例のあの人』がいる?」

訪問先のアルバニアで、クイリナスはそんな噂話を聞いた。

どう考えてもホラ話だった。「例のあの人」はハリー・ポッターに打ち倒されたのだから。クイリナスは一笑に付して立ち去った。

しかし、そのホラ話は、彼の中でどんどんと膨らんでいった。

——万が一、仮に「例のあの人」が落ち延びていたとしても、きつと半死半生のゴーストのようなものではないか?」

「クイレルさん。きつと貴方は偉大で有能な魔法使いになることじやろう」

——自分でも、勝てるのではないか?

クイリナスの心に、ほんの僅かな野心が宿った。

それは瞬く間にクイリナスの精神に燃え広がった。

——「例のあの人」を打ち倒せば、きつと誰もが自分を、ハリー・ポッターのように讃えるに違いない!

クイリナスは「例のあの人」の残滓を求めて、アルバニア中を飛び回った。

数ヶ月の搜索ののち、遂に彼は「例のあの人」が森に隠れ潜んでいるという、確かな情報を得た。

喜び勇んだ彼は「例のあの人」を打ち果たさんとし。

——闇の帝王の支配に落ちた。

肉体が変容する。後頭部には不気味な顔が貼り付き、クイリナスに対して命令を下す。自分の身体を自分の意思で十全には使いこなせなくなった。

精神が変容する。クイリナスには闇の帝王に逆らうことなどできない。必死の抵抗も無駄であった。自尊心が肥大化し、彼を苦しめていた吃音症は皮肉にも治ってしまった。

記憶が変容する。身に覚えのない闇の魔術に関する知識が山ほど流れ込んできた。いくつかは座学で知っていたものもあったが、実際に使用したという記憶までもが挿入されはじめた。

魂が変容する。闇の帝王のそれが流れ込んだ結果、クイリナスをクイリナスたらしめたあれこれ、マグルとトロールに対する執着が失われていった。穢れた血は劣等な種族で、トロールは汚らわしい生き物。自然とそう思ったことに、クイリナスは心底恐怖した。そんな感情もすぐになくなった。

ホグワーツに戻ったクイリナスに、ダンブルドアが語ったのはたった一言。

マグル学を解任し、新たにDADAの職に就けるということだけだった。

その時のダンブルドアの表情を、クイリナスは思い出せない。

グリーンゴツツの金庫から賢者の石を盗み出す。それが、その日のクイリナスに下されたご主人様からの指令だった。

漏れ鍋で機を窺っていたクイリナスは、その日二人の新入生に出会った。

ハリー・ポッター。

かつてご主人様を打ち倒したという少年。だが、実際に接した彼はひどく痩せぎすで、弱々しく感じた。

ズイラ・レストレンジ。

かつてご主人様に仕えた忠実な僕の娘。だが、実際に接した彼女は姿こそ母親そっくりだったが、少年同様弱々しく感じた。

宿敵と忠臣。

そのどちらよりも、クイリナス・クイレルは遥かに優っていた。

自らの方がご主人様の助けになれると感じた。

クイリナスは自らが求められていると感じた。

その日石を手に入れることに失敗した彼は、ご主人様にたいそう折檻されたのだが、それでも暗い優越感を覚えていた。

ホグワーツに石が運ばれた。

賢者の石を狙っていると、誰からも疑われないように、常に「頼りないクイレル先生」として振る舞うクイリナス。彼がモチーフにしたのは、かつての自分である。

「そ、それじゃあ、こ、今回のじゅ、授業はここまで」

DADAの教師として直接二人の様子を見て、鬱屈した感情はますます膨れ上がった。

ポッターの方はまるで駄目。彼は魔法族なら知ってしかるべき初歩の初歩から学んでいた。

レストレンジも穢れた血と変わらないほどの成績。クイリナスが考慮するに値しないだろう。

マグルに育てられただとか、マグルの子がとびきり優秀だとか、そもそも一年生だとか、そんなことは精神が破綻しかけたクイリナスにはもはや判別がつかなかった。

有り体に言えば、彼は増長し、狂っていた。

ご主人様の指示をいち早く実行するために、クイリナスはハロウィーンの日、トロールという駒をホグワーツにけしかけた。

それだけで魔法の城は動揺した。

大広間に伝えた時には七転八倒の大騒ぎ。生徒は怯えて教員は浮き足立つ。

誰も彼もがクイリナスの掌の上だった。

いける。クイリナスは確信した。

トロールを倒したハリー・ポッター達と別れた後、彼は四階の廊下——賢者の石が隠された部屋へと足早に向かった。ご主人様に石を献上できると信じて。

——傲慢の代償は高かついた。

部屋に待ち構えていたのは、常軌を逸したような化け物、三頭犬。

襲い来る三組の牙。なんとか杖腕を庇ったものの、左腕を爪で引き裂かれた。

二度目の失態に、ご主人様は酷く失望した。

クイリナスは最後の抛り所さえ失いかけていた。

石の護りは突破できず、スネイプによる締め付けも厳しくなっていたある日のこと。

当直として見回りを行っていた際、彼は遠くの景色が一瞬揺らいだように感じた。

訝しんだ彼に囁いたのは、彼の内側に潜むご主人様だった。

「——透明マントだ、クイレル。ベラの娘がそこにいるぞ……」

そう言われて、指示された位置をじっと見つめる。するとどうだろうか、確かにそこだけが不自然にヌラヌラと揺らめいている。

「そ、そこにいるのは、だ、誰だい？」

マントを脱いで現れたのは、やはりズイラ・レストレンジだった。

さてどうしたものか。

クイリナスが対応を考えていると、レストレンジが駆け寄ってきて――

「――まあ、クイレル先生、大変！ どうなさいましたの!？ つ、とにかくエピソード

癒えよ！」

――クイリナスに治癒魔法をかけた。

その時クイリナスの内心は、筆舌に尽くし難いものだった。

学生の時には、呪文を満足に唱えられない子とからかわれ。

マグル学教授の時には、マグル学教授というだけで生徒から軽んじられ。

DADA教授の時には、頼りない先生ということだけでやはり軽んじられ。

クイリナス・クイレルという、ホグワーツで軽んじられ続けた男にとつて、あるいは

それが初めて生徒から受けた純粋な親切だったかもしれない。

ぺこりと頭を下げて立ち去るレストレンジに対し、クイリナスは「グリフィンドール、

十点減点」としか言えなかった。

クリスマス。ホグワーツの教員は、よくお気に入りの生徒にプレゼントを贈る。

当然ながらマグル学を教えていた頃にはクイリナスにそんな相手はいなかったのだが、今年ばかりは贈ってもいいかと思つた。

全くと言つていいほど効果がなかったが治療の礼として、もしくは将来の同僚に対する礼儀として。

クイリナスはわざわざロンドン・ストリートから取り寄せたマグルのチョコレートとレストレンジに贈つた。

ハニーデュークスの方が良かったか、と思つたが、はじめに思いついたのがそこだつた。どうしてそんな店を知つていたのか、クイリナスにもよく思い出せない。

イースターの少し後。

クイリナスはご主人様の望みのままに、ユニコーンの血を求めて禁じられた森を度々訪れていた。

そんな折、彼はポッターに遭遇した。

「——ポッターを殺せ」

彼の脳裏でご主人様が指示を出す。それに呼応するように、目の前のポッターが額の傷口を押さえて蹲つた。

クイリナスはそれを痛ましく思い——何故？——ポッターの元へと歩みを進めた。



彼の歩みを止めたのは、暗闇を切り裂いた光だった。

「ルーマス・ソレム！ 太陽の光よ！」

ポッターの存在に意識を取られていたクイリナスは、その不意打ちを無防備に受けてしまった。

視界が潰される。強烈な閃光で脳までダメージが響く。

確実に数秒間は何もできなかった。それは彼の知識で持つてすれば、なんでもできる時間だった。

だが――

「ヴェンタス・マキシマー！ 暴風よ！」

――少女が唱えたのは、ただの風を吹かせるだけの呪文だった。

何故だ？ クイリナスには訳がわからなかった。

失神、爆発、切断、服従、磔、死。

選べる手段はいくらでもあった。

まさかご主人様も含めて、正体がばれているわけでもあるまいし。

まさかあのベラトリックスの娘が、闇の魔術どころか攻撃魔法すら使えないなんて生ぬるいことを言うはずもなし。

クイリナスにはこれっぽっちも理解できなかった。

年度末。いよいよこれがラストチャンスだ。石を狙える機会としても、ご主人様のご機嫌としても。

偽報でダンブルドアをホグワーツから引き剥がすことに成功したクイリナスは、早速賢者の石の確保に向かう。

悪魔の罠、鍵の鳥、巨大チェス。どれも子供騙しだ。クイリナスにとっては壁でもなんでもない。

次は自分の仕掛けた罠だ。

トロール。この生物に関して、彼ほど知識のある魔法使いは二人とおるまい。クイリナスはトロールの魔法耐性を無視して、かの生物を倒す術を知っていた。

結局は駒だ。処理してしまっても構わんだろう。

「――止まれ」

そう思いながらも、クイリナスはわざわざ時間をかけて意思疎通を図り、トロールを無傷のままに次の扉へと至った。

なぜそんな無駄なことをしたのか、クイリナスにもよくわからない。

スネイプの論理。パズル。

魔法使いには論理的でないものが多い。そのため、このパズルは大魔法使いであつて

も解けないことのある、まさに魔法使いに対する罠だった。

だが、クイリナスは昔から——レイブンクロー寮に入るためには質問に答える必要があつた——この手の論理パズルが得意だった。

なぜこんな、魔法使いらしからぬパズルが得意だったのか、クイリナスにもよくわからない。

一番奥には、鏡が置かれていた。柶には金の装飾が施され、鉤爪状の足に支えられている。

よく見れば、柶の上に「すつうを みぞの のろここ のたなあ くなはで おかのたなあ はしたわ」と彫り込みがされていた。

「私はあなたの顔ではなく、あなたの心の望みを映す」  
ならば鏡に映るのは、当然自分がご主人様に石を献上するところだろう。

宿敵のハリー・ポッターが。

忠臣のズイラ・レストレンジが。

非魔法界出身のハーマイオニー・グレンジャーが。

血を裏切るもののロン・ウィーズリーが。

他にも大勢の生徒たちが鏡に映っていた。

その中心には、クイリナス・クイレルが立っていた。マグル学の授業を教えていた。

クイリナスには最早何が何だかわからなかった。

何故こんなものが鏡に映っているのか。

何故「例のあの人」に石を渡していないのか。

クイリナスには最早何もかもがわからなかった。

彼が自問自答していると、ハリー・ポッターがやってきた。

どうやら石を守りにきたらしい。なんと愚かな、無謀な、危険な。

「例のあの人」の指示に従って——何故?——クイリナスはハリーに石を取り出させようとする。

だが、ハリーは「ダンブルドアと握手している」などと要領を得ない回答を返すばかり。

遂にはクイリナスではなく、「例のあの人」自らがハリーに問い詰めはじめた。

「さて……ポケットにある『石』をいただけようか」

「やるもんか!」

その返事は、クイリナスには心底驚きだった。

こんなにも恐ろしいのに。

こんなにも力の差があるのに。

それでも、ハリー・ポッターは驚くべき勇気でもって、「例のあの人」の誘惑を退けた。「捕まえろ！」

「例のあの人」が叫び、クイリナスの身体が動き出す——何故？

ハリーは逃げ出そうとしたが、それでも大人と子供。すぐに追いついた。身をよじって躲そうとするハリーに、クイリナスは手を伸ばし——

ハリー・ポッターの身体を掴んだ瞬間、クイリナス・クイレルはクイリナス・クイレルに戻った。

クイリナスが最初に思い出したのは、両親と一緒に杖を買いに行った日のことだった。

クイリナスが自己を正しく認識して、最初に取った行動はハリーに掴みかかることだった。

指が焼ける、手が焼ける、腕が焼ける。だが構わない！

呆然とするハリーを尻目に、クイリナスは自分の意思でハリーの肩を掴んだ。

「殺せー！ 愚か者、杖を使えー！」

脳裏にヴォルデモートの声が聞こえる。

しかし、クイリナスの奥底にはもう届かなかった。

彼はその時、トロールのことを、マグルのことを、ホグワーツのことを、生徒のことを、両親のことを思い出していた。

彼が人生で愛したものを思い出していた。

それは、ヴォルデモート卿ですら開けることのできない、満たされて閉じられた心だった。

「クイレル——先生？」

どれほどの時が経っただろうか。

クイリナスの炎症が全身に回った時、もうヴォルデモートは姿を消していた。

クイリナスは目の前の少年を安心させるために話しかけた。

「ああ、もう、彼は、ヴォルデモートはいませんよ」

「それは、どういう……？」

質問には答えなかった。肝心なことはダンブルドアが教えてくれるだろうし、第一彼の身体にはもう時間がなかった。

クイリナスにはダンブルドア達に伝えることがあった。

クイリナスの最期の願いに、ハリー・ポッターは数瞬躊躇い、それからしかと頷いた。「それは良かった。ありがとう」

そうして話している間にも、クイリナスの身体はどんどん焼けただけ、皮がめくれ上がり、灰となって崩れ落ちる。

彼のことを沈痛そうな面持ちで見つめる少年に対し、クイリナスは慰めるように呟いた。

「なに、そう悲しむものじゃないさ。どうせ私の身体はユニコーンに呪われている」

事実、彼の身体はどうしようもないほどに呪われていた。ヴォルデモートが抜け出た後も、彼の身体はひたすらに軋み、歪み、痛むばかり。

死せるユニコーンが、クイリナスという罪人に与えた罰だった。

だからこそ、ハリー・ポッターを護る「愛」に包まれて死ぬのは、彼にとってはある種の救いだった。

しかしそんなことは、まだ一年しか生きていない少年には理解できないのだろう。

——整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険に過ぎないのに。

クイリナスにとって、自分を呪われた生という地獄から救ってくれる少年を悲しませ

るのは本意ではなかった。

「それはそうと、ポッターくん」

クイレル教授は一度言葉を切り、おどけて続きを口にした。

「——わ、わたしは君にとつて、す、少しはいい、せ、先生だったかな？」

——ハンノキの杖は、静かに灰の中に落ちた。

「クイレルは——クイレル先生は最期に僕の肩を掴んで言っていました。ミス・レストレンジにありがとう。」

……それから、ダンブルドア先生に。ホグワーツに迎え入れてくれて、感謝しています、と」

ハリー・ポッターが大魔法使いの苦悩する顔を見たのは、その時が初めてだった。それはどこか、過ちを悔いているかのように見えた。



## ハリー・ポッターと秘密の部屋編

## 7 / ? 〳サイン会直前まで

——皆さん、ご無沙汰しております。

悶絶分霊箱専属調教師のズイラと申します。今回のハリー・ポッター第一巻はいかがでしたでしょうか？ ハリー・ポッター初期作品は、比較的オーソドックスなプレイがたくさん盛り込まれていたかと思えます。これからお見せする書き下ろし小説も、基本的なチャート遵守をお見せしたいと思います。

今回調教する少年はリドルっ。ハンサムなマスクと、均整のとれた体（不変）。まだ16歳（当時）のこの少年は、わたくしの調教に耐える事が出来るでしょうか？

それでは、ご覧下さい。

「だから、どうか、皆の者。クイレル教授に——クイリナスの叡智に、杯を捧げてやつてはくれぬかの」

……なにこれ？ なRTA、はくじまくるよ。

前回グランドクエスト「賢者の石」をガバなく終わらせることができました。現在は

学期末パーティーなのですが……謎のイベントが挿入されていますね。少なくとも私のチャートには存在しないイベントです。

どうやらクイレル君が献杯にたるなんらかの行為を行った——恐らくは最終決戦時にこちらに寝返つたようですね。

そう……（無関心）。

仮にクイレル君が生き残っていた場合、お辞儀様の行動が不明瞭になるためリセットもやむなしなのですが、チャート通り死んでくれたならどうでもいいわ（レ）。

念のためハリーに確認しておきましょう。クイレル教授どしたん？

「先生は、クイレル先生は『例のあの——ヴォルデモートに操られていて、最期には殺されたんだ……。僕の目の前で』」

……全てはチャンス！（レ）

これはガバではなく、ひよつとするとんでもない安定要素かもしれません。

今回のクイレルくんの事故により、成長キー「目の前でヴォルデモートの手により味方陣営のキャラが死亡する」がこの段階で回収できました！

通常プレイの場合、クイレル教授は敵ボスの上、死に際をハリーが直接目に行なうことありません。そのためこの成長キーは、本来なら四年生最終イベント、「セドリックの死」で回収する必要がありました。三年も前倒しのこの段階で成長キーを回収できるの

は、あまりにも豪運です。やったぜ。

ハリー・ポッターの成長は、こういった闇の陣営との因縁に関する成長キーで補正がかかります。通常ルートより二年早く決戦を迎える以上、なんらかのテコ入れは必須だったのですが、チャート外で補填できるとは、うん、おいしい！

クイレル教授、ありがとナス！（手のひらホグワーツ）。

冥福を祈ってご飯をかつこむのじゃ。

さて、パーティーも終わったので、お家に帰ることになりました。

ホグワーツ特急の中でハリーが死刑囚もかくやといった表情をしています。レズちゃんにできることは何もありません。適当に慰めておきましょう。大丈夫だって安心しろよ。どうせこつちが魔法使えないなんてわからないからヘーキヘーキ、ヘーキだから（大嘘）。

あつという間にキングス・クロス駅に着きました。お迎えにはガウエイン君が来ていますね。ガウエイン君オツスオツス！

適当にウィーズリー家と顔つなぎしていきましよう。レストレンジの名前と顔つきがマイナスポイントですが、息子たちの友人と闇祓いの保護下ということ差し引いてグリフィンドール114514点くらいには初期好感度が上昇します（ガバ計算）。彼らはこれからも未永くしやぶり尽くすことになるので、しつかり好感度を稼いでおきま

しよう。

特にアーサー氏に関しては、本チャート最大級のリセポイントと関連しているため、絶対的に仲良くなる必要があります。ハーマイオニーから仕入れたにわかマグル知識で仲良くなるのじゃ。

……べつ、穢れた血と血を裏切るものどもが！

「お帰りなさいませ、ズイラお嬢様」

カーン君、お久しブリーフ♫

レストレンジ家に着きました。ガウエイン君ありがとナス！ じゃあな！

さて、ガウエイン君も帰りましたので、楽しい楽しい夏休みを始めましょう。

今回の夏休みでやることは、大別して三つです。

一つ目は、日刊予言者新聞の購読。より正確に言えば、フローリツシュ・アンド・ブロッツ書店におけるギルドロイ・ロックハートのサイン会の日程確認です。

実は、このゲームにおいて「ロックハートのサイン会の日にハリーたち三人組が揃って買い物に行くこと」は確定していませんが、肝心要の「ロックハートのサイン会の日程」は確定していません。え、なにそれは（7敗）。

どうにもロックハート君の気まぐれ、別名乱数によつてプレイごとに日程が変動する

ようです。フザケンナ！（調査不足）。

もちろん、通常プレイならば、お買い物はハーマイオニーちゃんのお誘いを受けて同行することが可能です。

が、レズちゃんもとい死喰い人の子供キャラにおいては必ずしもそうとはいきませぬ。

このイベントは、「ロックハートのサイン会の日程を確認したハーマイオニーが二人を誘う」という流れで始まるのですが、レズちゃんがこれを受け取ったとしても、確実にその日に行けるとは限らないからです。

というのも、レズちゃんは未だ闇祓い管轄下に置かれているため、勝手な外出が基本的に許されていないからです。ガウエイン君経由の許可が必要になります。

闇祓いの好感度次第によっては即日許可もありうるのですが、ガバムーブを繰り返していた場合、最長で一週間程度申請にかかることもあります。

だから、安定の為に事前にサイン会の日を調べて許可を取っておく必要があったんですね（メガトン構文）。

二つ目は、ハリー・ポッターの誕生日までに彼に対して手紙を最低一回は送るということです。無論、手紙を送っても屋敷しもべのドビーくん盗まれてしまうのですが、手紙が読まれるかはこの際問題ではありません。送ったかどうかが重要です。

なぜそのような処理が必要かと言いますと、ハリー関連の夏休みのイベントの一つに、「ハリー・ポッター1・2歳の誕生日」というものがあるからです。このイベントは簡単に言えば、

「ウイイイイツス！ どうも〜ハリーです。」

まあ今日は誕生日、当日ですけども。

ほんで〜かれこれまあ夏休み中、え〜待ったんですけども。

お祝いは、誰一人来ませんでした……（鉄格子の閉まる音）。

誰一人来ることはなかったです。残念ながら、はい。なんだろう。なんで来なかったんでしょうかね〜。

一体なにがダメだったんでしょうかねえ〜。友達はいると思うんですけどなぜ来なかったんでしょうかね。不思議ですな〜」

というイベントです。

具体的にはドビーくんがハリー宛の手紙を全て検閲していることで発生するイベントです。最終的に奪った手紙をドビーくんはハリーに見せびらかすのですが、その際にプレイヤークアラの名前がなかった場合、いささか面倒なことになります。

実害としては、ハリーの好感度がシャレにならない程度には落ちます。

これは魔法界から引き剥がされたハリーが友人との絆を疑うことに由来する反応な

のですが、ここでお祝いの手紙が確認されなかった場合、ハリーは心のどこかでプレイヤークヤラを信用しなくなります。今後全ての好感度イベントに影響するので、絶対に手紙を送り忘れないでください（2敗）。

忘れぬうちに今出しておきましょう。ガバラぬ先の杖ってそれ一番言われてるから。

さて、最後に行うイベントは――

「ジエミニオ！ そっくり！」

――はい。そうです。いつものように呪文修練です。

「ちよつと待って!?! 『臭い』が入ってないやん! どうしてくれんのこれ? 魔法省魔法不適正使用取締局に連絡させてもらうね」

とお思いの方、ご安心ください。まったくもって問題ありません。

「17歳未満の者の周囲での魔法行為を嗅ぎ出す呪文」、通称「臭い」と呼ばれる魔法があります。この魔法は1875年の制定の「未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令C項」によって施行された未成年の魔法使用を検知する魔法なのですが……。

この魔法、驚くほどザルです。

というのも、「臭い」の魔法の詳細が「未成年の魔法使用」を検知するものではなく、「未成年の付近で使用された魔法」を検知するものだからですね。は? (困惑)

例えば、マグルしか住んでいないとされているプリベット通りの四番地で浮遊術が検知されたとしましょう。その場合、魔法省はハリーが魔法を使用したと認定します。例え屋敷しもべが使用しようと、猫好きの婆が使用しようと、そこに住む登録された魔法使いはハリーだけである以上、魔法省の判定は覆りません。魔法省はガバガバ。

では、翻つてレズちゃんはどうかなのでしょう。

「ジェミニオ！ フィニート！ ジェミニオ！」

先程から魔法を連続使用してはいますが、一切警告は飛んできません。この理由はハリーとは逆の要因ですね。

「——ズイラお嬢様。そろそろご休憩なさりましては」

屋敷しもべのカーン君。お前のことが好きだったんだよ！（唐突）

ダーズリー家と違って、カーン君が身の回りの世話の一切を行うレストレンジ家では、いかなる魔法が日常的に使用されても不思議ではありません。そのためいくら魔法を乱用しようと、レズちゃんが裁かれることはありません！

ちよつと取締役のマファルダ・ホップカーク君ガバガバ過ぎんよ（煽り）。

……好感度調整によっては、ごくごくまれにですが、闇祓いが個別に対策を練っていることがあります。

その際は勉強がてらつかいつかい使ってしまったことにして、大人しく謝りましょ



う。センセンシャル！（リセット恐怖症）

未成年の魔法不正使用はそこまで重大違反ではないため、複数回バレなければリセットを強要されることはありません。まさかこの程度の軽犯罪でウイゼンガモットの大法廷で裁かれることなんてありえないでしょう。なあ、ファッジ、お前もそう思うよな？（煽り予言）

話を戻して、今回習得する魔法は「双子の呪文」、ジエミニオです。効果としては、魔法をかけた対象に触れた際、対象の劣化複製品が増殖するという魔法ですね。この魔法の細かい仕様については使用時に解説しようと思います（激ウマギャグ）。

「双子の呪文」は本チャート上複数回使用する予定なのですが、直近のことを考えると、どんなに遅くとも二年生の十二月二週目木曜日までに習得する必要があります。

その際に要求される熟練度は、「自分でかけた双子の呪文を終了呪文で即終わらせることができる」程度の熟練度です。

……いささかフアジーな目標値ですが、本ゲームにおける魔法効果の判定は明確な数値で表すことができません。仕方ないね。

いい機会ですので、終了呪文を例にとって解説しておきましょう。

まず、終了呪文・フィニートの有効判定は「終了呪文の精度と対象呪文の精度」によって判定されます。

前者については比較的わかりやすく、熟練度の他には呪文省略形かインカンターテム付きの完全形か、有言呪文か無言呪文か、などといった直感的に理解できる指標しかありません。

ですが、後者に関しては検証勢の力をもってしても未だ数式化できていません。自分の魔法か他人の魔法か、持続性があるかないかといった要素で細かく変動し、明確な計算式が定められていないのが現状です。

……少なくとも、「攻撃力―防御力 $\parallel$ ダメージ」のような単純な計算式じゃないです（始祖の愛した数式）。

無論、リカバリー案も用意してはいますが、三年生チャートに響いてくるので死んでも間に合わせましょう。

ノット君著「純血一族一覧」・ポケット文庫版を増やして消してを無心で繰り返します。

……。

……。

……。

熟練度稼ぎプレイは退屈なので加速します。

ロックハート君のサイン会の日になりました。お出かけしましょう。  
今日買うものは……。

『泣き妖精バンシーとのナウな休日』

『グールお化けとのクールな散策』

『鬼婆とのオツな休暇』

『トロールとのとろい旅』

『バンパイアとのバツチリ船旅』

『狼男との大いなる山歩き』

『雪男とのゆつくり一年』

……はあくつつかえ！ やめたらDADA教授！ ほんまアホらし。

まあこれらの小説はどうでもいいのですが、デミガイズ君の透明マントは忘れないようにしましょう。ロックハート君の採点はガバガバなので優等生ムーブは簡単です。教科書はハーマイオニー姉貴やパチル姉貴達に布教して貰えば手に入りますし。

それよりも透明マントの補充を忘れた場合、半年間の「必要の部屋」育成機会をふいにしてしまいます。今年まではまだリカバリーも可能ですが、来年からはリセット確定なので注意しましょう。

気を取り直して。

それではお買い物にイクゾー!

「——ズイラ! ズイラ! ここよ!」

漏れ鍋に煙突飛行で移動してしばらく。ハーマイオニーちゃんが呼びかけてきました。

ハーマイオニーちゃんオツスオツス! ご両親もよろしくお願いします、つて言つてみな! (傲岸不遜)

挨拶も済ませたら、早速ですが、二人でダイアゴン横丁デートに向かいましたよ。行けえ! ボージン・アンド・パークス! 行けえ! (煙突事故)

……だめでした。ご両親も一緒に来るようです。

正直この二人に関しては、本チャートにおいては野獣先輩並みに価値がないのでハーマイオニーちゃんの好感度を優先したいのですが……。二人つきりの方が親密になりやすいですね。

まま、ええわ。今回は許したる(寛容)。

グレンジャー家の両替がてら、みんなでグリーンゴッツにでも向かいましょうか。

「くされマグルめ。俺がそのことを知ってたら——」

なんだあのでっかいモノ♫

グリーンゴッツに向かう途中、聞き覚えのある声に目をやれば、遠くからハグリッド兄貴が歩いてきます。ということは……。

ハリーくんオッスオッス！ メガネ無くしたん？

と、話していると、遠くから赤毛の集団がやってきました。ウィーズリー御一行ですね。

……なんかジニーちゃんの視線が厳しいような？ レストレンジ関連のフラグをどこかで踏みましたっけ？ これからのイベント進行がてら修正しましょうか。

一行揃ったので、皆でグリーンゴッツに行きますよー行く行く。

さて、ここで気をつけるべきポイントですが、決してレストレンジの金庫には近づいてはならない、ということですよ。

レストレンジの金庫には「ハッフルパフのカップ」が安置されているのですが、この段階でハリーとエンカウントすると、ハリーの傷跡が痛み出し、買い物が中止になるというイベントが発生します。

これが起こると何がまずいか。

そうですね。グランドクエスト「秘密の部屋」のチャートが初期から崩壊するということにつながります。ルシウス氏が日記を持たせる相手が完全ランダムになる為、その

後の事件の手順が千差万別に変化します。

仮に獅子寮・鷲寮生徒に日記が渡った場合、持ち主の特定ができれば獅子の場合はそのまま、鷲の場合は謎解き攻略で寮に侵入・窃盗できるのですが、他二つの場合そう言った手段も取れず詰みかねません。

私には残念ながらフレキシブルチャートを御し切れる自信がないのでリセットとなります。

今回のイベントを除いても、分霊箱所持にはデメリットしかないのです、破壊する時以外は触らないを徹底していきましょう。

なので、チャート外で分霊箱を刺激するのは、やめようね！（5敗）

……ウィーズリー家の金庫を見ましたが、ガリオン金貨が一枚しかありませんでした。

ウィーズリーに関してはともかく、ほぼ全滅したはずのプルウェット家の資産はどこに消えたんですかね？不思議ですね？

と魔法界の資産運用に疑問を投げかけたところで今回はここまで。ご笑読ありがとうございました。

## 8 / ?      ↳ ロックハート・テストまで

「暴れ柳」に突撃するRTA、いざあ。

前回、本プレイのインターバル区間である夏休み編をお送りしました。今回から本格的にグラウンドクエスト「秘密の部屋」を開始します。

さて、無事に三人組と合流することができたので、皆で買い物に行きましょう。

——おうフォーテスキューの親父、ストロベリーのアイス売ってくれや！ 三段だよ三段。

——チャドリー・キャノンズ？ あんなクソザコチームが勝てるわけないだろ！

——フレッド君たちお久しブリーフ。悪戯グッズは後々借りるからよろしくね！

——「夜の闇横丁」に行つた？ あんな危ないところ行つたことないですわ（大嘘）。

……と一時間ほど横丁を練り歩いたところで、フローリッシュ・アンド・プロッツ書店につききました。既にロックハート君がサイン会を開いていますね。奥様方が黄色い悲鳴をあげています。

ハーマイオニーちゃんもすっかり夢中のようにですが……？

実物は……はえり、すつごいカッコいい。若草色のローブがバツチリ決まっていますね。

イケメンで有能だなんて、まるで「ファンタスティック・ビースト」の主人公みたいだあ……。

あつ、そうだ（唐突）。

「ファンタスティック・ビースト」といえば、見所はやつぱり俳優さんのアクションと魔法生物の暴れっぷり、学生ではない大人の魔法戦闘、それから魔法使いとノーマジの関わり方……。

語りきれないほど魅力が詰まっているじゃないか、なんだこれは、たまげたなあ。

これは最低114514回は見る必要がありそうですね（宣伝）。

話を戻して。

レズちゃんを感じしている間にハリー君が前に引き出されていきました。引きずり出されたハリーは、ロックハートと握手をし、肩を組んでいます。

その様子を、日刊予言者のカメラマンが激写していますね。これは貴重なツーショットだあ……。

「——今学期より、 Hogワーツにて DADA の教授職をお引き受けいたしました！」  
しばらく演説を行い、ようやくロックハート君も満足し終えたのか、ハリー君が返却



されてきました。両手には彼の著作全巻が揃っています。

ウィーズリー家の家計事情を慮ったのか、ジニーに教科書を譲っているハリーに対し、

「撮影会だなんてさぞやいい気持ちだろうねえ……。その赤毛は君のガールフレンドかな？」

マルフォイ君が話しかけてきました。マルフォイ君オッスオッス！

彼はジニーと仲良くしているハリーをからかい始めますが……。おっと、戻ってきたロンドン君と揉め始めましたね。

一触即発の事態です。

「これはこれは、アーサー・ウィーズリー——」

「——ルシウス・マルフォイ」

それどころか親達まで合流してしまいました。

彼らは子供を諫めるどころか、公衆の面前で罵り合い始めます。

あーもう無茶苦茶だよ（既定路線）。

「ウィーズリー、最近は残業を頑張っているようですが……。おやおや、手当は出ていないようですねえ。まさか子供の教科書すら満足に買えないとは！」

「あいにく君たちのように薄汚い真似をして金を得たくはなくてね」

「薄汚い? ほう、ほう、ほう。どうやら君の方が、よっぽど薄汚い連中と付き合っているようですがね」

「きさま——」

さしものアーサー君も、ゲストのグレンジャー夫妻を馬鹿にされては堪忍袋の緒が切れたようで。

殴りかかつて取っ組み合いの喧嘩になってしまいました。魔法を使わないのは「野良犬相手に表道具は用いぬ」的なあれかな? (適當)

業界のデیفエンディング・チャンピオンであるハグリッド兄貴が来るまでの十数秒間、彼らは殴り合いを続けていました。

ハグリッド兄貴に無理矢理に引き剥がされたルシウス氏は、憎々しげに落ちた変身術の教科書をジニーの大鍋に放り込みます。

「——そら、チビ。君の父親の精一杯だ」

やっただぜ(安堵)。

無事にガバなくルシウス氏がジニーにブツを横流ししてくれました。

ブツとは何か? 言うまでもありません!

分霊箱「トム・リドルの日記」です。

通常プレイでは最初に破壊される分霊箱にして、変則プレイでは「詰み」を生じさせ

ることもある分霊箱。

この分霊箱には、他のものと違って明確な意識・思考が存在します。そのため一度誰かの魂を吸い始め、万一「逃げ」を選択されるとその後の破壊はほぼ不可能です。

その上ルシウス氏所有な以上、事前入手・破壊は例えば政治ルートのような特殊な方法を用いなければ、まさに絶望的な難易度を誇ります。

ジニーにこれが手渡されることよって始まるグランドクエスト「秘密の部屋」で破壊しない限り、安定した破壊は望めません。

オリチャヤを避けるなら、RTAにおいてもここまでは基本ルートに沿うのが妥当でしょう。

だから、本章終わりまでは自由な行動を取るわけにはいかなかったんですね。

こんな詰み要素を解決してくれるルシウス氏は、まさしく名誉不死鳥の騎士団員！  
崇め奉っておきましょう。ありがとナス！

「——それはそうと、レストレンジ嬢。アズカバンにいらつしやる君のご両親もさることながら、君自身随分とわかっていないようで。

せいぜい狡猾に振る舞うことをお勧めするよ」

は？（威圧）

マルフォイ家の皆さんが立ち去って行きました。後は流れで解散となります。じゃあな!

……こつそり戻って「夜の闇横丁」で透明マントを仕入れておきましょう。三度目ともなればもう常連さんです。先方もわかっているのか取り揃えておいてくれました。

なんやかんやあつてホグワーツ登校日です。

「双子の呪文」は目標値まで習熟が終わりませんでした。学校でも引き続き「必要の部屋」育成法を行っていきましよう。

10時半にキングズ・クロス駅にガウエイン君に送ってもらうと……。いましたね。ハーマイオニーちゃんです。合流してコンパートメントの席を取っておきましょう。

二人で話しているうちに5分が過ぎ、10分が過ぎ……。

……すみませくん。ズイラ・レストレンジですけど。まくだ時間かかりそうですかね??

特に事前に何らかの行動を起こしていなかったため、規定通りウィーズリーの皆さんはギリギリまでやってきません。五分前行動は安定チャートの要つてそれ一番言われているから。

11時五分前になってようやく赤毛の集団が滑り込んできました。モリーさんこつ

ち空いています！

ボロボロのトランクごとジニーちゃんが転がり込んできました。

よろしくお願いします、つて言ってみな！（先輩風）

「——あの、その、よろしくお願いします」

ありがとナス！

ハリーとロンの姿が見えませんが、何ら問題ありません。ドビーくんの手によって9と4分の3番線の柵が閉じられてしまったからです。彼らはきつと空飛ぶ車でダイナミック登校を行うことでしょう。

……もちろん、究極的には「空飛ぶフォード・アングリア」イベントを踏む必要はありません。このイベントは、プレイヤーキャラが「隠れ穴」に滞在することで容易にカット可能です。

ですが、その場合代償として三年生からロン君が離脱してしまいます。杖破壊イベントが起こらない故のバタフライエフェクトですね。

このゲームでは、プレイヤーキャラの些細な行動によって物語が無数に変化していきます。安定チャートと心をかけるなら、変化させるポイント、させないポイントを見極めておくべきでしょう。

「ハリーとロンはどっかしら……？」

知らなくい！

ホグワーツ城に着きました。在校生はセストラルの馬車で向かうことになりました。もつとも、レズちゃんにはまだ見えていませんが。

あつそうだ（唐突）。そういえばハリーのセストラル視認フラグが解禁されていますね。何かに使えるかもしれません。覚えておきましょう（オリチャーへの備え）。流れるように組分けです。

「ラブグッド・ルーナー！」

「——レイブンクロー！」

「ウイーズリー・ジネブラ！」

「——グリフィンドル！」

特に変化はありませんでした。ジニーちゃんが他の寮に行つてしまふといささか面倒なのでありがたいことです。どうやらガバつてはいないようですね。

さて、退屈な組分けも終わったので、夕食です。思いつきりかつこみましよう。今年も精一杯屋敷しもべ君達に負担をかけていきます。夕食も終わり、寮に帰つて少しして。

「——ねえ、ズイラ。二人を探しにいかない？ リーなんて二人が空飛ぶ車で飛んでた

なんて言ってたけど……。冗談よね？」

そうだよ（適当）。

いつまでたつてもやってこないことを心配したハーマイオニーちゃんが、搜索を提案してきました。しようがねえなあ（悟空）。

談話室の外に出ると……。おっと、いましたね。二人組です。

見たところ致命的な怪我もなく、無事にロンの杖も折れていました。

合言葉を教えて、さっさと帰って寝ましょう。「ミミダレミツスイ」！

「——ロナルド・ウィーズリー！ おまえには全く愛想がつかしました。おまえもハリーも、一歩間違えれば死ぬところだったんですよ！」

翌日、ロン君に吠えメールが届きました。うるせえ！

吠えメールは、内容如何に関わらず、その轟音により、受けた対象キャラの精神値を削ります。もちろん当事者か否かによって大きく変動するのですが。また、吠えメールを開けないとひどいことになります。どうひどいことになるかは、君の目で確かめてみてください！（攻略本）

そんな厄介な吠えメールですが、これを用いたちよつとした小ネタに、「吠えメール絨毯爆撃」というものがあります。非常に単純なもので、ただひたすらに相手に向かって

吠えメールを送り続けるだけの小技です。ですが、効果は非常に費用対効果に優れ、五分間隔で送り続けることで相手をノイローゼから「狂乱」の状態異常に陥れることが可能です。

ホグワーツ教師レベルには無効ですが、魔法省木っ端役人程度には効きます。「不死鳥の騎士団」章で魔法省にお困りの方はおひとついかがでしょうか。

さて、朝食も終えたので、今期最初の授業に向かいます。教科は薬草学です。

温室に着くとずんぐりとした小さな魔女と、ブロンド髪の男性が立っています。スプラウト教授とロックハート教授ですね。

こちらに気がついたロックハート氏が早速話しかけてきました。

「やあ、おはようみなさん！ 今我々はちょうど『暴れ柳』の治療を行っているところでしてね。おっと、もちろん私が専門家であるスプラウト先生より詳しいなんてことはありませんよ？ ただ私は——」

「——ええ、ええ、ギルデロイ。そのお話はまたの機会にして、早速授業を始めましょうか。」

今日は三号温室で！」

心なしかスプラウト教授も疲れた顔をしていますね。ギルデロイ・ロックハートという優秀な助手がいるのに、何故でしょうか？（すつとぼけ）



気を取り直して、今回の授業では「マンドラゴラ」を取り扱うようです。

この植物は、毒・石化をはじめとする様々な状態異常に対応できるクツソ有能な植物ですが、一つだけ欠点があります。

それは、彼または彼女の鳴き声が、人間の鼓膜を超えて命を破壊するほどの轟音を引き起こすということです。それは吠えメールの比ではなく、目力先輩や音割れポッターに比肩するほどの札人的な音量です。

この授業のマンドラゴラは若い個体なため、死ぬほどのダメージは受けませんが、それでも耳当てを決して外さないようにしましょう（無敗）。

そんなこんなで薬草学の授業が終わりました。土まみれで不快なので掃除しておきましょう。スコージファイ 清めよ！

次は変身術の授業です。

コガネムシくんをボタンに変える課題です。

昨年度の復習課題であるため、ハーマイオニーちゃんおよびレズちゃんは問題ありませんでした。成績維持は必須（再掲）。

意外なのはハリー君も問題なく成功したことでしょうか。通常プレイではこの時期のハリーでは失敗するのですが、昨年度成長キーを取得できたことで、意気込みが上がつているようですね。やったぜ。

残る一人は……ああ……（成績）落ちたねえ……。

ロン君は折れた杖をスペロテープで固定しただけというガバ行動を行なつていたため、無残にも失敗してしまいました。

昼食中にもロン君は自分の杖に対して文句を言っています。

魔法使いにとって杖は命と等価つてそれ一番言われてるから（辛辣）。

レズちゃんもナナカマドくんとトネリコくんの二刀流ですが、それでも手入れを欠かしたことは一度もありません。忠誠値落ちるの怖いでしょう……（レ）。

現段階ではナナカマドくんを愛用していますが、今期中盤以降トネリコくんの出番も多くなつてきます。みんな見とけよ（カメラ目線）。

カメラ小僧とマルフォイ君がトラブっています、カットしますう——。

「私です」

ロックハート君の授業です。彼は自己紹介で、様々な肩書きを述べてきます。

勲三等マリーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、「週間魔女」五回連続「チャーミング・スマイル賞」受賞——。

はえくすつごい（純真）。

ところで、マリーリン勲章の勲三等は知識・娯楽といった文化面に対する功労者への勲

章です。そのため、彼の自伝が真実であれば、勇気・功績を賞する勲一等、業績・努力を賞する勲二等を貰ってもいいとは思うのですが……。

まあいいや！（ガバ判断）

大人しく授業を受けましょう。まずはテストです。

1 ギルデロイ・ロツクハートの好きな色は？

2 ギルデロイ・ロツクハートのひそかな大望は？

——全3ページ、裏表あり、54問以上ある質問ですが、クッキー☆ 並みの苦行となってしまうため、今回はカットしましょう。

さて、今回のテストについてですが、満点を取る必要はありません。しかし、少なくとも上位一割に入る必要があるでしょう。

ロツクハート君の成績は三年時の判定には影響しないのですが、彼には重要な使い道があります。

サイン好きの彼を用いて、禁書庫のサインをでっち上げるといふ方法ですね。

古来より通常プレイ、変則プレイ、先駆者様問わず用いられてきた方法ですが、本チャートでも一つの手段として確保しておきます。この辺は呪文の習熟度に応じて使うかどうかは変動するのですが、手札は多めに越したことはありません。

ロツクハート君の興味を引く程度には成績を保ちましょう。

「第12章に書かれているように、誕生日の理想的な贈り物は、魔法界と非魔法界のハーモニーですが——おお、ミス・レストレンジはよく把握しているご様子ですね！」  
やったぜ。

得点は36、普通だな！ 周りの、とりわけ男子生徒の点数が低かった為、これでも上位数パーセントに入る事が出来ました。これからも適度に知識を仕入れておだて上げていきましよう。

授業はそのまま実習へと移行します。

ロックハート君は覆いのかぶった籠を見せつけてきました。ガタガタと震えています。

さて、今回調教する魔法生物は「コーンウォール地方のピクシー小妖精」っ！  
単独では弱いですが、数が集まると存外に厄介な魔法生物です。そう考えると二年生で扱う生物としては適当だったり……？

これはロックハート有能説を提唱する必要があるかもしれないですね。誰かお願いします（他力本願）。

ロックハート君が籠の扉を開けると——ヒエツ（戦慄）。

ピクシーたちは縦横無尽に暴れ始めました。

ネビル君を宙に釣り上げ、窓ガラスを割って逃げ、器物を破壊し。

これは魔法界でも最も汚れた生物の中の一種ですね、間違いない。

「インカーセラス 縛れ！」

ロックハート君が捕縛呪文で捕獲を試みますが、多勢に無勢。一匹を捕らえたところで他のピクシーに杖を奪われてしまい、逃げ出してしまいました。

仕方ないのでハーマイオニーちゃんたちと一緒に後片付けをしましょう。今回はハリー君も活躍してくれそうです。ロン君は杖が死んでるので座ってて、どうぞ。

「イモビラス 動くな！」

「ヴェンタス 風よ！」

「インペディメンタ 妨害せよ！」

ともなくして全てのピクシーの捕獲に成功しました。ロックハート君が捕獲していた一匹と合わせてカゴに戻しておきましょう。

……？

何か違和感がありますね。

チャートを確認してみますが……「ロックハートの授業、テストを行う、ピクシーを放流のち捕獲失敗・逃走」。

……ふむ。チャートには何もおかしくはありませんね。ならばひとまずは問題ないでしょう。

チャートを守るのではなくチャートに守られていることを再確認したところで今回はここまで。ご笑読ありがとうございました。

## 確実に魔女を惹きつけた十一の少年

きつと、そのとき、

「おい、見てみろよ、ジニー！　彼が、そう！　何を隠そう、『生き残った男の子』殿下

——！」

ジニーは初めて、

「——」

恋に落ちたのだ。

「ねえ、ママ！　僕もフレッド達と一緒にホグワーツに行きたい！」

「私も！　私もホグワーツに早く行きたい！」

「ロン、ジニー。あなたたちにはまだ早いわ。ロンは来年、ジニーはその次よ」

——その次。

ジネブラ・ウィーズリー——ジニーは物心ついたときからその言葉が嫌いだ。

ウィーズリー家の末妹として生まれた彼女は、いつもいつもその言葉とは無縁ではい

られなかった。

ビル、チャーリー、パーシー、フレッドとジョージ、それからロン。

彼女には実に六人も兄がいる。彼らは彼女よりも、当然ながら年上だった。彼らは常に、彼女よりも先に何かを欲していた。彼らは常に、彼女より先に何かを与えられていた。

本に、おもちゃに、ちやちや子供向けの箒に何と服まで！

彼女が成長の過程で欲しがった殆ど全てのもの——女の子独自のものを除いた全て——はいつもいつも、兄の誰かのお下がりであった。

勿論歳を重ねるごとに、彼女はおぼろげにしる、その理由を悟らざるを得なかった。

とどのつまり、彼女の生家には金がなかったのだ。

基本的に、マグル界のそれと比べて魔法界の物価は安い。

「ガンプの元素変容の法則」に引つかかる食料などを除けば、大概のものは杖一本で生み出せるのだから当然だろう。

だがそれを踏まえてなお、ウィーズリー家の金庫にはとかく金がなかった。

グリーンゴツツの長いトンネルを越えて、ようやく見えた彼らの金庫に収まっているのは、数える程度のガリオンと僅かばかりのシッケル、数合わせのクヌートが少々。

これは、魔法使いの必需品である杖ですら、下の兄妹には満足に買い与えられないほ



どの貧困ぶりである。

兄妹全員に対し嗜好品を惜しみなく与えることが出来ないのは、無理もないことだった。

そんなウィーズリー家の家計事情について、ジニーは彼女の興味が家の中で完結していた頃はまだ何とも思わなかった。

だが、彼女の視野が外へと向けられた時、そういった事情が彼女の心に棘となつて刺さる。

ジニーは6歳の時、「ホリヘッド・ハーピーズ」のように空を飛んでみたいと思つた——  
——箒の一本だつて、ロクに買えやしなかった。

ジニーは8歳の時、「妖女シスターズ」のライブに行つてみたいと思つた——  
——両親の奮闘空しく、ポスター一枚が関の山だった。

彼女は物質的には非常に困窮していたと言えるだろう。

では、彼女はそんな貧しい家を、ひいては家族を憎んでいたのか？

無論違う。

彼女の両親は七人兄妹に分け隔てなく愛を注いだし、彼女の兄たちは末妹のジニーをすこぶる可愛がった。

アーサーは彼の思うファンタスティックな——いささかマッドな——代物をジニー

にプレゼントした。

ウィーズリー家は男所帯である。そんな中、二人っきりの女衆としてジニーはよく母と言葉を交わした。

ジニーにおしゃれが芽生えた時、ビルは持ち前の抜群なセンスを用いて彼女に応えた。

箒が買い与えられなかった時、チャーリーはクイディッチで鳴らした腕を振るって、ジニーを空にエスコートした。

頭でつかちと揶揄されるパーシーだが、それでも彼はいつもジニーのことを気にかけている。

フレッドとジョージ！ ああ！ なんと！ 彼らはその類稀なるジョークの心得でもって、素敵に彼らの食卓を爆発させてのけたのだ！

モリーに怒られる二人を見て、ジニーは幼い頃から笑っていた。

そしてロン、彼女にとって最も年の近い兄。どこに行くでも、彼女のそばには彼女がいた。

ウィーズリー家は思い思いの方法で、彼らの末っ子を可愛がった。

深い、深い、愛。

ジニーの心は彼らの愛で満たされて。

彼女自身もまた家族に対して惜しみなくそれを返した。

どこかの少年は、「生き残った男の子」という名声を与えられている。引き換えに、彼は両親を永遠に喪い、親戚に虐待を受けて育てられた。

どこかの少女は、ウィーズリー家のそれとは比べ物にならないほど豪華な屋敷に住んでいる。しかしその家は、寒々しく、空虚で、がらんどうだ。

ジニーは「血を裏切るもの」の一員であり、ひどく貧しい家族の末っ子である。持ちうるステータスだけ見れば、絶対的に先述した少年少女には劣るだろう。

しかし、精神的に満たされているのは——幸福なのは、紛れもなくジニーの方であった。

だからこそ、ジニーの嫌う「その次」も、物質的なものではなかった。

ジニーに確固たる自我が目覚めた時、「隠れ穴」の食卓を囲む影は八つあった。

九人家族に対して埋まっている椅子は八つ。一つ足りない。

それは彼ら兄妹の中で最も年上の、ビルの席だった。

当時既にホグワーツへと通っていたビルは、彼女たちと接する機会はほとんどなかった。

ウィーズリー家の長兄は、ジニーにとっては年に二回夏とクリスマスにだけ訪れる、言うなればまれびとであった。

だからこそ、彼が姿を見せなかつたとしても、「そういうもの」として初めから認識していた。

むしろ年に二回戻ってくる際にお土産を持って帰ってきてくれることが、ある種の楽しみとなっていた。

そういう点ではジニーが得た感情は「喪失」ではなく「取得」、マイナスではなくプラスが多かつたといえる。

ビルだけがホグワーツに通っているわずかな期間だけは、彼女にとっては貴重な「次」を意識しなくてもいい時間であった。

「やったー！ ママー！ ホグワーツからの手紙が来たよ！」

ジニーが三歳の時、「隠れ穴」にホグワーツからの二通目の手紙が届いた。

手紙を受け取った次男のチャーリーは、飛び上がらんばかりに喜んでた。幼く記憶も曖昧な少女であったが、その時は一緒になってわけもわからず喜んでいたと彼女自身は記憶している。

チャーリーの学用品の買い物についていくジニー。三歳児の彼女が人ごみを歩き回

るのは大変危険だ。彼女のことは母のモリーと、それから面倒見の良いパーシーが世話していた。

家族で訪れたオリバンダーの店で、未だ三歳だというのに杖の品評をされたことが、彼女の記憶の核だろうか。

ホグワーツ入学の日にも、ウィーズリー家御一行は家族皆で9と4分の3番線へ向かった。

ビルの時は小さすぎたので、彼女がキングズ・クロス駅に行くのはその時が初めてであった。

母の腕の隙間から見えたホグワーツ特急の緋色の車体。威風堂々たるその姿から吐き出される白煙に、ジニーは圧倒された。

そうして言葉を失う彼女をよそに、チャーリーは長兄であるビルに連れられて、汽車の中へと吸い込まれていく。

「じゃあ、行ってくるよ、皆」

「ええ、しっかりと勉強してくるのよ。……変な動物を隠れて飼わないように！」

「わかってるってばー！」

列車の中から嬉しそうに手を振るチャーリーに、ジニーもパタパタと小さな手を振り回して返す。

「ああ、モリー。ビルを送り出した時もそうだが、子供をホグワーツに送るといのは、なんともまあ、いいものだな」

「すぐに慣れますよ、アーサー。次はパーシーの番ですね」

——そうして、「隠れ穴」から新たに一人分、息遣いが消えていった。

その日家に帰って、食卓を囲んだ時、いつもは狭く感じていた我が家がちよつぴり広くなったように少女は感じた。

ジニーは、チャーリーはどこかで遊んでいるだけで、夕方になれば戻ってくるものだと、その時まででつきり思い込んでいた。

だが、夕焼けが空に浮かんでも、辺りが暗くなっても、ご飯を食べても、寝る前ですら、チャーリーは帰ってこない。

ジニーがその時感じたのは、まぎれもない恐怖だった。

ベッドの中で、たまらず彼女は母に問いかける。

「ねえ、ママ。チャーリーはどこに行ったの？」

「ホグワーツよ。あなたも二人くらい大きくなったら、そこにいくのよ」

なんと。

今まで、年二回しか姿を見せないビルの方が異質だと考えていたのだが、どうやらそれはチャーリーにも適用されるらしい。

ジニーは「自分がホグワーツに行きたい」と思う前に、「兄がホグワーツに行っちゃ嫌だ」とその時感じた。

ただ、寂しかった。

それからの日々は、ジニーの周りをまるで何事も無かったかのように過ぎ去っていた。

「隠れ穴」では以前と変わらず大家族の声が響き渡る。

しかし、ふとした瞬間。

例えば双子の兄が糞爆弾を爆発させた時や、庭に住む庭小人を退治する時に。

チャーリーがいたら、とジニーは考えてしまう。

「おい、ジニー？ どうしたんだ？」

もともと、その時はまだ彼女の周りも賑やかであったため、すぐに忘れてしまうのだが。

キングズ・クロス駅に行った時に聞いた、「次はパーシー」という母の言葉が、妙に彼女の耳に残っていた。

「それじゃあ、行ってきます」

チャーリーから数えて三年後。ジニー六歳の時。

パーシーもまた、魔法の城へと旅立っていった。

パーシーはホグワーツ入学をたいそう喜んでいた。彼は家にいる時から買ってきたばかりの呪文集を読み漁り、杖を振って練習していた。

そんな姿をよく見ていただけに、さしものジニーも「行かないで」とは言えなかった。ただ、彼らを見送った手のひらが、そのまま特急の行き先へ向けられてしまったのが、何よりも彼女の感情を表していた。

——「隠れ穴」からまた一つ、ページをめくる音が消えていく。

「ねえ、ママ。パーシー達、すぐに帰ってくるよね？」

「ええ、もちろん。ほんの半年ほどよ、ジニー」

大人にとっては「ほんの」でも、子供にとってはそれは「はるか」である。

そんな「はるか」先の話。

クリスマスに兄達が帰ってくるのを、ジニーは楽しみにしていた。

「フクロウ試験は大丈夫だってば。それよりもグリーンゴッツの基準が——」

「本当にハグリッドって凄いや！ まさかアツシユワインダーを小屋の中で育てるなんて——」

「ああ、ちよつとそつちの教科書を取ってきてくれるかい？ 今のうちに来年の分も勉強しておこうと——」



だが、彼らの話はいつもいつも、ホグワーツのことばかり。

フレッドやジョージ、ロンは彼らのファンタスティックな体験に好奇心をくすぐられていたが。

ジニーは「せっかかく久しぶりに会えたのだから、もつと遊んで欲しい」と思っていた。興味よりも寂しさが優っていた。

止める間もなく、「次」は訪れる。

「来いよ！ リー」

「待って、フレッド！」

「残念！ 俺はジョージさ！」

「そして俺がフレッドだな！ じゃあママ、行ってくるよ！」

げに恐ろしきは男の子のいたずら心か。

フレッドとジョージは、早速今生の友を探り当て、コンパートメントへと駆け込んでいく。

彼らはジニーに一言——より正確に言えば二言、「じゃあまたクリスマスな！」と言い残し去っていった。

——「隠れ穴」から今度は二人分、笑い声が失われた。

ホグワーツを卒業した長兄のビルは、呪い破りとしてグリーンゴッツに就職し、エジプトへと旅立っていった。

そのため「隠れ穴」の人の数は、既に当初の半分以下になっていた。

アーサーとモリー、ロンとジニーの四人しかない。

狭いはずの我が家は、ジニーの想像を絶するほどに広々としていた。

「ねえ、ママ！ 僕もフレッド達と一緒にホグワーツに行きたい！」

「私も！ 私もホグワーツに早く行きたい！」

「ロン、ジニー。あなたたちにはまだ早いわ。ロンは来年、ジニーはその次よ」

次の年、フレッド達を見送る際に、駅のホームでこんな会話を交わした。

「ホグワーツに早く行きたい」。

言葉にすれば同じだが、内包される思いはまるで違う。

ロンがホグワーツに行きたがったのは、早く魔法を使ってみたい、友達と一緒に遊びたい、などといった、希望からなる希求だった。

ジニーがホグワーツに行きたがったのは、兄妹と一緒にいたい、寂しさに耐えきれない、などといった、逃避からなる欲求だった。

だからこそ、この時のモリーの「その次」はたいそうこたえた。

少なくとも一年、ロンの「次」を待たなければならぬと自認したからだ。

きたる1991年9月1日。

ロン・ウィーズリーのホグワーツ入学日。

ジニー・ウィーズリーは憂鬱だった。

兄達はこちらから楽しいホグワーツに行くのだろうが、彼女はこれから一年間、「隠れ穴」に独り置き去りにされてしまう。

頼りのチャーリーも、ドラゴンの尻を追いかけてルーマニアまで旅立ってしまった。

無論両親がいることはわかっていたが、それを合わせてもわずか三人。実に家族の三分の二が家を留守にしていることになる。

大家族であつたがゆえに、常日頃から賑やかであつたがゆえに、ジニーは孤独に対して人一倍弱かった。

「ママ！ 私もホグワーツに行く！」

「駄目よ、ジニー。あなたは来年」

せめてもの抵抗も、道理という切断呪文で切つて捨てられる。

これから一年間続く「独房」での生活を考えて、ふてくされるジニー。

そんなジニーに手を差し伸べたのは、フレッド——あるいはジョージ、とにかく双子のどちらか——だった。

先程友達のリー・ジョーダンに蜘蛛が入った箱を渡してきた双子。その片割れは、な  
にやら興奮してジニー達の元へ駆け寄ってきた。

「どうしたの？」とジニーが話す間も無く、口から生まれた双子のどちらかは、息つく  
間もなく話し出す。

大仰に身振り手振りを加えて話す彼に興味を惹かれて、ジニーは兄のさす方へ顔を向  
けて――

きつと、そのとき、

「おい、見てみろよ、ジニー！ 彼が、そう！ 何を隠そう、『生き残った男の子』殿だ

――！」

ジニーは初めて、

――

恋に落ちたのだ。

急転直下。稲妻が落ちるように。

これまで金銭だとか家族だとか孤独だとかを散々語ってきた上で恐縮だが、これから  
先にこういった些細な事象はまるで関係ない。

それほどまでに、ジニーの心は完全に上書きされたのだ。  
なぜ恋に落ちたのか？

少年の顔に惹かれたでもいいだろう。

あるいは才能に、魔法力に、箒のセンスに、財力に、逸話に、「他とは違う」特異性に、心に巢食う分霊の魂に、運命に、予言に惹かれたでも構わない。

それら全てに惚れ込んでいたのかもしれないし、あるいは予想もつかぬ魅力があったのかもしれない。

恋を賢しらに語ることが愚かとも言える。

ただ一つ、確かに言えることは。

その日、ジネブラ・ウィーズリーは、ハリー・ポッターに、淡い恋心を抱いたのだ。  
未だ愛へと至らぬそれは、確かに彼女の心に芽生えたのだ。

彼女の感情は、しかるべき手順を持って体外に発露した。

顔は、燃えるような赤毛同然の色となり、発汗は過剰に促進される。

動揺した彼女は、家族が件の彼に話しかけるのを他所に、火照った体を鎮めようとホームの中を走り回ってしまう。

当然ながら9と4分の3番線は込み合っているので

「痛っ!？」

彼女はすぐに人にぶつかってしまふ。

倒れこむジニーに手を差し伸べたのは、ぶつかった当の相手だった。

「あらあら。大丈夫かしら？ 赤毛のお嬢さん」

「ええ、はい。……すみません！ 急に走り出して」

「構いませんわ。……貴女も今年ホグワーツに入学なさるの？」

「いえ。私は来年、次の年です」

そう、「次」だ。

かつては孤独のカウントダウンであったそれは、今では待望の日めぐりカレンダーである。

ぶつかった黒髪青目の少女に謝罪と礼を済ませ、ジニーはそそくさと家族の元へ戻っていった。

「嬉しそうですね、ジニー」

「ええ！ ママ！ 私ね——」

心持ちが変わったおかげか。一つ上の兄の天運のおかげか。はたまたどこかの屋敷しもべ妖精のおかげなのか。

彼女の待ち望む「次」は、予定されているよりも前倒しで訪れた。「着地成功！」

とある真夏の夜明け。太陽がわずかに顔を出した頃合いに。

「隠れ穴」の庭先から、フォード・アングリアのエンジン音と、少年たちの歓声が響き渡る。

と、数秒後、母モリーの怒りの声が、敷地一帯を駆け巡った。

鶏の鳴き声よりも大きな怒鳴り声。

仮にここにバジリスクがいたなら即死すること請け合いだらう。

これにはベッドの中で微睡んでいたジニーも堪らず起こされた。

原因を突き止めようと、ネグリジエのままジニーは台所へと姿を現して。

「キャツ」

ハリー・ポッターの姿を認識するや否や、悲鳴をあげて走り去ってしまう。

彼女は部屋に戻ると、まずは自分の正気を疑い、次に部屋の姿見を見つめ、最後にぼつと赤面した。

それからの生活は、ジニーにとっては心休まらない日々だった。

ハリーが同じ部屋にいるだけで、緊張で落ち着かない。

彼の顔を見ただけで、朝食のオートミールの深皿をひっくり返してしまったことも

しよっちゆうだった。

「ジニー、君もホグワーツに今年入学するの?」

ハリー本人に問われてようやく、自分がホグワーツに入学することを思い出す始末であった。

目的が先に叶ってしまった以上、手段は頭の端から抜け出てしまっていた。

ところで。

幸福の絶頂にいるジニーであったが、ダイアゴン横丁に買い物に行った際、一つ、あるいは二つ気に入らない点があった。

ハーマイオニー・グレンジャーとズイラ・レストレンジ。

彼女たちはハリー・ポッターの近くにいつもいる、友人にして異性である。

横丁に行く時に、ハリーは事故ではぐれてしまったのだが、彼と合流した時にはいつの間にか、彼女たちが一緒にいたのだ。

「ロックハートってどんな人なの?」

「あの——」

「あら、ハリー。知らないの? ギルデロイ・ロックハート。数々の冒険を乗り越えて、その記録を本にしている方よ?」



「マーリン勲章の三等を持つているのではなかったかしら？　彼の本がノンフィクションなら、一等でもいいと思うのですけれど……」

「買い物をしている今この瞬間も、ハリーは彼女たちに先に話をし、ジニーは「その次」であった。

もちろん、ジニーにだって理由はわかっている。

ジニーが所詮友人の妹でしかないのに対し、彼女たちは文字通り親友だ。

ああ、だが、しかし。

幼い少女の恋心は、「好きな人には自分だけを見て欲しい」と求めて止まなかった。「次」ではなく「最初に」自分を見て欲しかった。

それは、思春期を迎えようとする子供にとっては、魔法族・非魔法族問わず生じる、ありふれた心の揺らぎであった。

——そんな心の揺らぎに呼応するかのように、ジニーの大鍋の中にいつのまにか転がり込んだ、一つの魂が蠢いた。

それは一冊の「日記帳」の形をしていた。

## 9 / ? ~ 「秘密の部屋」開始まで

夜遊びはデスエンカ、なRTA、もう始まつてる！

前回、ロックハート君のテストを受けたところまで進みました。今回は――

「クイディッチの練習だ！ みんな起きろ！」

うるせえ！（反射）

今は授業があつた日の数日後の夜明け前。

守備力先輩の叫び声がグリフィンホール寮内に鳴り響き、レズちゃんが目覚めたところから始まります。

どうやらオリバー兄貴がクイディッチの練習にアンジェリーナ姉貴たちを誘つた声のようです。女子寮に入れないから入り口付近からの大声で起こすとは……。これは頭ブラッジャーです。ね間違いない。

部屋の中を見回せば、ハーマイオニーちゃんたちも起きてきました。クソデカ音量だし、仕方ないね。➔

ハーマイオニーちゃんがハリー君の応援に誘ってきたので、外出の準備をしてイク

ゾー！——カーン！

談話室で寝ぼけ眼を擦っていたロン君を回収して、まず向かいますのは、大広間。適当に朝食をかつぱらって行きましょうか。

おう、しもべ！ うまいパンくれや！ 準備早いね、ありがとナス！

——マーマイト？ 頃すぞ（偏食）。

そんなこんなでマーマレードが塗られたうまあじなトーストを携えて、クイディッチ・ピッチにやって来ましたが。

あれ〜おかしいね誰もいないね？

五分が過ぎ、十分が過ぎ……。

待っていると、グリフィンドールチームがようやく更衣室から出て来ました。遅い、遅い、遅い。

わざわざ更衣室でブリーフィングしなくても、談話室でやればいいと思うんですけど（正論）。

空飛ぶチームの皆さんが物欲しげに見つめて来ますが、さっさとトーストを食べてしましましょう。

うん、美味しい！

「こつちを向いて！ ハリー！」

人気のないピッチに、少年の声が響き渡ります。

はい、そうです。本年度の犠牲者枠である、コリン・クリービー君です。

……どうでもいいわ。

極論すれば、彼がどうなろうと知ったことではありません。むしろチャート通りに石化してもらえるとおお、タスカルタスカル。

特に有効なスキルを持つているわけでもなく、イベントに必須というわけでもない彼は、本チャートにおいては野獣先輩の人間性程度の価値しかありません、そのため、好感度を稼いでも特に意味はないです。

ないのですが、それでも、当たり障りない程度、風聞を下げない程度に話しておきましよう。コリン君はマグル出身者ですが、彼らの対応を誤ると後々非常に面倒なことになりますので。

純血主義者はダンブルドア政権では不遇です。騎士団員の好感度がもれなく下がります。

だから、無能な穢れた血にも優しく接する必要があつたんですね（メガトン構文）。

そうそう、穢れた血と言えば。

「プリント！ 今はグリフィンドールの練習時間だ！ 帰ってもらおうか！」

「残念だが、ウツド。こつちにはスネイプ先生の特別許可があるんだ」

始まりました。スリザリン乱入イベントです。なんだお前!?

ここでのイベントは、親マルフォイが蛇寮に賄賂を送って息子をチームに入れて、それをスネイプ先生がアシスト、結果として獅子寮チームがピッチの占有権を明け渡すというイベントです。

まあこれについてはクイディッチ選手ルートでもない限り関係ないのです。どちらかといえば

「少なくとも、グリフィンボールのチームは皆実力で選ばれたのよ。親のお金で選手の席を買うなんて、無様なことはしてはいないわ」

「ハッ！ 生まれぞこないの『穢れた血』に親についてとやかく言われる筋合いはないね」

このやり取りが本イベントの主題でしょう。

「お前！ マルフォイ、ナメクジでも喰らえ！」

ロン君が「なめくじげっぷの呪い」を逆噴射させたのは、どちらかといえば余録です。

もう、顔中なめくじ塗れや、とばかりに一人スラグ・クラブを開催させているロン君ですが、汚いのでさっさとハグリッド兄貴のところへ連れて行ってあげましょう。

ドラコ、じゃあな！（蝙蝠ムーブ）

……ハリー君とハーマイオニーちゃんが率先してロン君の両脇を支えていますね。これはグリフィンボール。

レズちゃん一人が何もしないのも、好感的に問題ですので、少し彼らの補助でもしましょうか。

フィニート！ 終われ！ エバネスコ！ 消えよ！

……駄目みたいです（熟練度不足）

なんだこのナメクジの呪文強度!? 逆噴射で変質しているのか全然消えてくんないよ（絶望）。

後者の呪文はともかく、チャート上必須である前者については「必要の部屋」で育成しておきましょうか。

「——おや、まさかまだ私の著書を持っていないとは！ サイン入りのものを、今晚お送りいたしますよ。それでは、また後で！」

ハグリッド兄貴の小屋に着きましたが、どうやら先客がいるようです。

ロックハート君とハグリッド兄貴が何やら話をしていましたようです。

ロックハート君がお帰りになったので、ハグリッド兄貴に話を聞いてみましょうか。

「おお、やっときたか、おまえさんたち。今年まだ一度も来んかったから、俺のことを

すーっかり忘れちゃったかと思っと思ったぞ」

すみません、許してください、何でもしますから！

「おお、そうか。それならその暖炉の火をちいとばかり強めてくれんか？」

——ああ、ロン。無理に我慢するより、吐いちゃった方が楽だぞ。そこの洗面器を使え」

ラカーナム・インフラマーレイ！

着火完了です……。

「すまんな。

……それで、ロックハート先生だったか。どうもあの人は俺が水魔の追っ払い方も知らんと思っと思ったらしい。

やつこさんが学校にいた時から、俺はここであいつら生き物の面倒を見てきたつもりだったんだがな」

生き物というかテロモンスターでしょ（名推理）。

「おいおい。俺が好きなのは怖いだけじゃなくて、ファンタスティック・ビースト素晴らしい生き物だぞ。去年のノー

バートを覚えておるだろ？」

——ところで、ロンは誰に呪いをかけるつもりだったんだ？」

ドラコであります！



「ほう、そりやまたなんで？ おまえさんたちとやつこさんは、ちいとばかり仲が悪いとは知つとるが」

……。

ハリー君もハーマイオニーちゃんも詳しく知らず、ロン君もトローチを食べたようにナメクジを吐き出して話せませんか。

しょうがねえなあ！（悟空）

マルフォイ君、「穢れた血」って言ったらしいっすよ？

「そんなこと、本当に言うたのか！」

やめてください……怖い……アイアンマン！（クロスオーバー）

ハグリッド君がブチギレちゃいました。

このように、「グリフィンドール」、「不死鳥の騎士団」、「半純血」、「穢れた血」属性のキャラクターの前で穢れた血を穢れた血と呼ぶと、ほとんどのキャラの好感度が急落、最悪の場合すぐさま敵対状態に陥ります。

とりわけ「純血」、「スリザリン」、「死喰い人」キャラが発言者だった場合——つまりはレズちゃんが発言者だった場合、獅子寮チャートにおいてはリセット待ったなしです。絶対に避けましょう（無敗）。

と、魔法界の常識に疎かったハリーとハーマイオニーが、ここで「穢れた血」という

単語を知りました。これはグラウンドクエスト「秘密の部屋」のイベントキーです。やっ  
たぜ。

……知識蒐集家であるハーマイオニーちゃんが汚い言葉を知らないって可愛い、可愛  
くない？（唐突）

それとも「穢れた血」って出版禁止用語なんでしょうか？

司書のマダム・ピンス攻略をした兄貴たち、至急メールくれや。

「——そういや、ロン。おまえさんの妹がうちの近くに最近よくきちよるぞ。俺が思う  
に、あの子の目的は、ハリー、お前さんじやろう……」

雄鶏でしょ（予言者）。

リドル君が無事に活動を開始したことを確認したので、お城に帰りましょうか。

話は戻りますが、今年度の初め起こった事件を皆様は覚えていらっしやるでしょう  
か。

そう、「ホグワーツ『暴れ柳』傷害事件」です。

これは、ドビーによる9と4分の3番線封鎖のせいで特急に乗り遅れ、ホグワーツに  
登校出来なくなるとパニックを起こしたハリーとロンがフォード・アングリアで直接学  
校に向かったことに端を発する事件です。

ホグワーツ領内に入り、「暴れ柳」上空を飛行していたハリーたちは、疲れからか、不幸にも黒塗りの高級車に追突してしまう。後輩をかばいすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは……。

ん、間違つたかな？（すつとぼけ）

まあこれについては各自確認していただくとして、この事件の後始末は未だ終わっていません。

今晚、ハリーとロンはそれぞれこの件について罰則を行うこととなっています。

——この夜より、ホグワーツ城内における「毒蛇の王・バジリスク」とのランダムエンカウンターが解禁されます（絶望）。

バジリスク君、ひいてはリドル君に襲われる基準は、主に三つです。

一つ目、「穢れた血であること」。

言うまでもありませんね。彼のポリシーです。

二つ目、「目撃者・真相に迫ったもの」。

リドル君はバジリスクの正体に迫ったものに対し、容赦無く攻撃を仕掛けてきます。現段階のレズちゃんでは、バジリスクを蒲焼きにする前に野獣の眼光を受けてしまいます。知らないでいきましよう。

三つ目、「蛇語使い」。

リドル君は玉も竿も小さい男ですので（ヘイト行為）、自分に並び立つものを基本的に許容しません。ハリーのような興味を惹かれる対象でない限り、確実に暗札してきます。

さて、この三つの襲撃要因ですが……はい、レズちゃんには全くと言っていいほど関係ありません。

一つ目と三つ目は完全に該当せず、二つ目についても知らぬ存ぜぬで、直接開心術をかけられでもない限りバレないでしょう。

では、何が問題かと言うと。

「必要の部屋」育成法の危険度が死ぬほど高まると言うことです。

最強無敵校長がいなくなるまで、基本的にリドル君は潜伏行為を行います。そのため、昼間学校をふらふら歩いても、バジリスク君とエンカウントすることはほぼ無いでしょう。

ですが、夜は違います。リドル君は比較的人の目の少ない夜にバジリスクを介して情報収集を行うため、ついうっかりエンカウントしてしまうことがあります。

その上、リドル君は「必要の部屋」のことを何故か知っており、時には彼自身が何故か訪ねてきたりします。不思議です（すつとぼけ）。

そのため通常プレイであれば、二年生時は「必要の部屋」育成法を行わないのが安全

かつ一般的でしょう。

ですがこれはRTA！ 二年間の短縮を約束している以上、一年の無駄遣いはチャート上不可能です。

というわけで今宵も元気に第六次深夜徘徊遠征にイクゾー！ デッデッデデデ、カーン、デデデデ！（幻の大地）

深夜徘徊中にうっかり目を合わせて即死、「必要の部屋」入り口でばったり鉢合わせての即死なんて、真のRTA走者ならするはずありません、安心してください（18敗）。レズちゃんが深夜徘徊を行なっている間に。

バジリスク君とのエンカウントを避ける方法について、お話しします。

グランドクエスト「秘密の部屋」で関わることになる蛇君ですが、彼の正式名称は「毒蛇の王・バジリスク」と言います。

Wikiにいらっしやる方々の検証によりますと、バジリスクの知覚関係のステータスは、主に視覚と聴覚に偏っているそうです。

視覚に関しては、自身の優位性である視札に特化した故、聴覚に関しては、主人であるサラザール・スリザリンと積極的に意思疎通を図るために発達したと考えられています。

ですが、反面、それ以外の索敵能力は極めて劣化しています。

とりわけ、蛇種に多く見られるピット器官——熱感知能力を失っているのは非常に大きいです。

これにより、バジリスク君は見えず聞こえずの敵を発見できないと言うことが明らかになっていきます。お前の索敵ガバガバじゃねえかよ。

つまり、何が言いたいかと言いますと。

「ミセス・ノリス。その階段は消えて危ないから、気をつけて歩くんだよ」

「にやーん」

「ああ、ギルデロイ。君の——」

「——ええ、ええ。わかっていますよ。フリットウィック先生。早く見回りを終えて寝ましようか。お肌にも悪いので！」

透明マント（偽）装備で息を潜めたレズちゃんは、ガバさえなければバジリスクに見つかることはない、と言うことです。

僕のチャートはガバではありません。これだけははつきりと真実を伝えたかった。

……曲がり角の出会い頭に目があったり、「必要の部屋」の外に出た瞬間にばったり出会ったりするのは親譲りの屑運です。許してください。

「必要の部屋」では引き続き双子の呪文と終了呪文の練習です。

無言呪文とまでは言いませんが、自分で増やしたものを即座に消せるくらいには鍛え

ましよう。

というわけで稼ぎタイムは超スピード♂

10月です。

現在、順調にジニーちゃんがりドル君の手によって昏睡させられています。

できるだけ自然に、優しく、決して日記帳に触れない書かない喋らないで接しまし  
う。

と。

クイディッチの練習に行っていたハリー君が戻ってきましたね。なにやら浮かない  
顔です。どしたん？ オビワン？ サーティーワン？

「実は、さつきフィルチに捕まって。その後ニックが助けてくれたんだけど……彼の絶  
命日パーティーに誘われたんだ」

……。

絶命日パーティーというのは、平たく言えば、この世の中にあるありとあらゆる楽しみ  
を楽しま尽くした方向けのパーティーです。つまりはゴースト向けのパーティーです。

そこで出される料理は、彼らがより強く感じられるように、意図的に悪臭を放つよう  
に調整されています。

生きている人間にとっては、■■■チャレンジにも匹敵するでしょう。

これだけのためなら、正直に言えばレズちゃんを行かせる意味はありません。

しかし、他の三人、とりわけハーマイオニーちゃんが行きたがっていること。彼らと共に行動することによる好感度。

何より、グランドクエスト「秘密の部屋」の本開始につながる導入クエストです。行かないわけにはいかないでしょう。

そんなこんなでハロウイン当日。

早速ですが、絶命日パーティにイクゾー！

地下牢につきました。

並んでいる料理は腐った魚、黒炭のケーキ、ウジの湧いたハギス、カビそのもののチーズ、コールタールソース……。

歓迎の音楽は黒板の引つ掻き音に鋸の擦れる音……。

ンンツ……マ。ツ！ ア、ツ！（悲鳴）

さっさと挨拶を済ませて帰りましょう。

ニツク君オツスオツス！ カッコいい羽帽子だね！

ピーブズさんお久しぶりです！ お世話にならず、感謝しております！ 今後ともよ



ろしくお願いしないよう、よろしくお願いします！……ぺつ、ポルターガイストくん  
 如きが！

か。わ。い。い。い。な。あ。マ。ー。ト。ル。ち。や。ん。（社交辞令）。今度部屋借  
 りるんでよろしく。

ヨシ！

主要キャラに語り終えました。場合によつては「灰色のレディ」ことヘレナ・レイブ  
 ンクローちゃんに接触する選択肢もあるでしょうが、本チャートではフヨウラ！

早く帰ってご飯を食べましょう。

しばらく歩くと。

「——待って、何か変な声が聞こえる……」

ハリー君がMUR大先輩のようなことを言い始めました。

「誰を殺すつもりだ!? ……こつちだ！ 付いてきて！」

おつ、そうだな。

レズちゃんには蛇語を聞き取るどころか、なにも聞こえてはいないため、パイプの中  
 の蛇の正確な位置を知ることができません。

ハリー君という高性能ソナーに頼っていきましよう。下手に逸れるとデスエンカも  
 あり得ます。

地下牢から三階まで駆け上がり、隈なく探して、ようやく水浸しの廊下を見つけました。

ハリー君が壁を指差して叫びます。

「見て！」

秘密の部屋は開かれたり。

継承者の敵よ、気をつけよ。

T O M M A R V O L O R I D D L E 殿の70年間終ぞ変わらなかったセンスが

光ったところで、今回はここまで！

ご笑読ありがとうございます。

## 10/? 半純血のプリンス蔵書まで

疑わしきは罰せずじゃよ、セブルスなRTA、いざあ。

前回より、グランドクエスト「秘密の部屋」が本格的に開かれました。今回からクエストを進行させていきます。

さて、「秘密の部屋」の犯行声明が書かれた現場ですが、現在続々と人が集まってきました。ハロウィーンのパーティを終えた生徒たちが、続々と駆けつけてきたようです。

『穢れた血』め、次はお前たちが気をつける番だぞ！

群衆の中からマルフォイ君が声を張り上げました。

……ところで、犯行現場が三階の廊下で、スリザリンの寮は地下にあるはずなんですが、この時の蛇寮生徒の動線ってどうなってるんでしたっけ？（すつとぼけ）

攻略Wikiにも書いていなかった上、走者の蛇寮チャート区間練習時の記憶が抜け落ちているので（頭トロール）、ご存知の方、至急メールくれや。

と、そんなことを考えているうちに、管理人が走りこんできました。アーガス君は飼猫が冷たくなっているのを見て、ひどく動揺しています。

「どけ！ あれは私の猫だ！ ミセス・ノリスだ！ 早く下ろしてやらないとー！」  
しょうがねえなあ（悟空）。

ピーブズ君ほどではありませんが、彼も深夜徘徊における鎖マン枠の一人です。ここはひとつ、好感度でも稼いでおきましょうか（オリチャー）。

「ウインガーディアム・レヴィオーサ 浮遊せよ！」

どう？（好感度） 出そう？

「さては、お前が、お前たちがこの子を殺したんだな!？」

なんだお前!？」

思ったよりも好感度は稼げませんでした。フィルチ君との意思疎通は困難なようです（現地調査）。

……まあ、ええわ。所詮フィルチ君、この程度なら毒にも薬にもなりませんし。

ダンブルドアを筆頭に、他の先生達も駆けつけてきました。そのままロックハート君の部屋で問答が始まります。

ロックハート君の部屋の内装ですが……なんだこれは、たまげたなあ。

壁中机中にロックハート君の写真が立てかけられています。机の上にも、彼の書籍が所狭しと並んでいますね。他にもファンレターに返信用の便箋、羽ペンがどっさり。

オカミーの整髪剤に、家族の写真、呪文集といった普通の品々が逆に浮いていますね

……。

部屋に人が収まるや否や、当の本人は朗々と自説を語り始めました。

「さて、さて、さて。見たところこの猫には、どこにも『死因』となるものはありません。とすれば、そう！ この子を殺したとすれば、きつと悪辣な呪いでしよう！

例えば、ウグドウグで私が解決したような、『異形変身拷問』の呪い。例えば、『許されざる呪文』の一つである例のあの呪文。

いずれにせよ——」

「おお、アーガス。幸いなことに猫は死んでおらぬよ」

「——そう、いずれにせよ！ 『死因』がない以上、死んでいない、と見るのが妥当でしょうね。どうやら私の意見は校長先生と一致していたようで、なによりです」

はえくすつごい弁舌。

魔法以外だいたい足りてる男だけです。詐欺師かな？（直喩）

ロックハート君が黙ると、次は泣き顔のフィルチ君が話し始めました。どうやら彼是我々獅子寮四人組が犯人であると思ひ込んでいるようです。

二年生にこんなことはできないってホグワーツの授業受けたことあればわかると思ふんですけど、あつ、ふーん（察し）。

そんなスクイブ野郎の尻馬に乗って、スネイプ君がハリーいびりを始めます。

「そもそもだ。ポッター。君たちは何故、わざわざ三階の廊下に行ったのかね？ 我輩が思うに、ゴーストのパーティーに行った後、君たちはたいそう空腹だったと思うのだが」  
 多分蛇語だと思っんですけど（名推理）。

……などと口にしてはいけません。

現在のレズちゃんは、「ハリー・ポッターが蛇語を話せる」及び「秘密の部屋の怪物がバジリスクである」という情報を公的には知りえません。

キャラクターが本来知りえない情報を持っている場合、他人からは何がしかの影響を受けていると大抵は判断されます。

特に、今この場にはダンブルドアをはじめとするホグワーツ教師陣が揃っているの  
 で、怪しまれる行動は控えておきましょう。

しばしの間ハリーの処遇——主にクイディッチに関するそれについて、マクゴナガル  
 とスネイプの間で小競り合いが起きました。

「疑わしきは罰せずじゃよ、セブルス」

ダンブルドアの名采配により、ハリーは無事無罪となりました。

終わり！ 閉廷！（閉廷おじさん）

議論は次の問題へ移ります。

「アーガス。わしが保証しよう。君の猫は治りません。スプラウト先生がちょうどマン

ドレイクを育てていらっしやる」

「それならば校長先生！ 私に治療薬作成をお任せください。狼男との山歩きの際、うんざりするほど脱狼薬を作った私なら——」

「——脱狼薬程度なら、我輩でも作れますな。なにせ、厚かましくもこの学校の魔法薬学教授を務めておりますゆえ。」

ロックハート先生、貴方にはもっと重要な仕事があるのでは？」

そうだよ（同意）。

プリンス先生は学生時代からクツソ有能ってそれ一番言われてるから。

なので、教科書貰います（犯行予告）。

……スネイプ君はゲーム内風聞ではDADA好きと言われています。しかし、個別イベ進めると分かるのですが、彼としては今は魔法薬学の方が好きなんですよね。

こちら辺のシナリオは面白いので各自プレイして、どうぞ。

というわけで「秘密の部屋」序章が終わりました。

帰って寝ましょう。

数日が経ちました。

学校中が「秘密の部屋」に浮き足立っています。

ハーマイオニーちゃんは、学校中の本をひっくり返して「秘密の部屋」を搜索しています。

一方でハリー君はというと、つい先日まで仲の良かった、マグル生まれのジャステイン君に無視されたことに戸惑っていますね。

これからもっと酷くなるで（忠告）。

魔法史の授業でも、ハーマイオニーちゃんがピンズ先生に「秘密の部屋」について問いかけていました……が、どうでもいいわ。

無言呪文が解禁されれば魔法史の時間も呪文練習に当てられるのですが、まだ熟練度が足りません。大人しく惰眠を貪りましょう。

授業後、ロン君がサラザール・スリザリンへのヘイトスピーチをぶちまけます。

「つまりさ、サラザール・スリザリンって、頭のおかしい変人ってことだろ？ 純血主義のあれやこれやだって、スリザリンが言い始めたってことだし。

例え何ガリオン積まれたとしても、スリザリンに入ろうだなんて思えないね。あそこに入るくらいなら、そのまま特急に乗って家に帰った方がマシさ」

は？（蛇寮チャート）

ハーマイオニーちゃんもロン君の意見にウンウンと頷いています。ここは、隣で青い顔をしているハリー君のために、助け舟を出してあげますか。



ちよつと待つて!! わたくしは獅子と蛇のハットストールだつたつてそれ一番言われてるから。

「それでも、君はれつきとしたグリフィンドール生じやないか。

——ズイラの場合は、その、ほら、わかるだろ? 僕の家とはある意味逆だからスリザリン寄りになるのも仕方ないさ」

ああ……(ハリーのテンション) 落ちたねえ……。

その言い分だとハリー君の場合、両親はグリフィンドールだつたため、性根が蛇寮ということになってしまいますね。

最終決戦兵器の成長を阻害したくないのですが……。

「やあ! ハリー!」

おっと、遠くからカメラ小僧が話しかけてきました。

「ねえ、ハリー、それから隣の……レストレンジさん?」  
ん?

「僕のクラスの子が言つてたんだけど、ハリー、君が『スリザリンの継承者』で、レストレンジさんがその右腕つて本当?」

ファツ!?

レズちゃんの右腕に悪趣味な刺青は(獅子寮チャートでは)今後とも彫る予定はあり

ません。

しかし、『継承者の右腕』判定されましたか。

「秘密の部屋」イベント開始時、『継承者』認定イベントが発生しますが、プレイヤーキャラクターがハリーたちに同行した場合の判定は、通常ルートとは少々異なります。具体的には、プレイヤーキャラとハリーのどちらが怪しいか、プレイヤーの風聞によつて判定が下るといふものです。

正直この段階ではプレイヤーが『継承者』判定されると想定してチャートを作つていたのですが、少々好感度を稼ぎすぎたようです。

ちよつとしたラツキーですね。「決闘クラブ」イベントまで大人しく過ごす予定でしたが、いつも通り振舞つても良さそうです。

少なくとも、好感度が低すぎて生徒による襲撃フラグが立つよりはよつぽどマシです。

夜のバジリスクだけじゃなく昼間の穢れた血にも注意しなきゃとかやつてらんないよ。

「『秘密の部屋』つて、本当にあると思う？」

「『ホグワーツの歴史』には書いていなかったけれど、ダンブルドア先生ですらミセス・ノ

リスを治療できなかった。先生でもわからないような悼ましい闇の魔術があるなんて、そうそう思えないし——ひよつとすると『部屋』には本当に怪物がいるかもしれないわね」

「秘密の部屋」に関する調査開始です。

現場ひやつぺんとも言いますし、まずは事件現場の三階の廊下へと訪れました。

そこにはまだ「秘密の部屋は開かれたり」というサインは残されています。

特筆すべきは——ヒエツ（戦慄）。

二桁匹の蜘蛛の群れが、一塊となって走り去っていきました。

推理ピース「蜘蛛が逃げ出すのはバジリスクがくる前触れ」です。

これらの推理ピースは集めれば集めるほどハーマイオニーちゃんの閃きが促進されます。もちろんプレイヤーが主導しても構わないのですが、その場合ハーマイオニーちゃんの成長が阻害され、巡り巡ってハリー君の成長にも悪影響を及ぼすのでやめておきましょう。

今年までは、沿えるところは積極的に通常ルートに沿っていきます。

次にマートルちゃんの「秘密のトイレ」に訪れました。今の段階では特にやることはありません。サーペンソーティアによる蛇召喚の呪文でハリーの蛇語を誘発させるという小ネタは、RTAではフヨウラ！

最後に夜パートです。

「さて、それでは考えてみようか。僕たちが知っている中で、一番『継承者』らしい奴は誰だい？」

「ロン、まさかあなた、マルフォイを疑っているの？」

「あいつら家族ほど、マグル生まれを殺したって思っている奴らはいないだろう？」

きつと、何代にもわたって『部屋』の開け方を受け継いできたに違いないよ。それで、とうとう親愛なるドラコ閣下が『部屋』を開いてマグル生まれを襲い始めたってわけさ」

お前の推理ガバガバじゃねえかよ（辛辣）。

マルフォイ君はいざとなったら芋を引くタイプだと思っただけですけれど。

「私もそう思うわ。ただ、一番やりそうな奴もマルフォイなのよね。」

……うん、本人に直接聞いてみましょうか」

「正気かいハーマイオニー！ あいつが僕たちのいうことにヘラヘラ笑って答えるのも？ 『やあ、ウィーズリー。黙っていて悪かったけど、猫を石に変えた犯人は僕なんだ』っていうと思ってるのか？」

「おあいにくですけど。私もそこまで馬鹿じゃないわよ。要はマルフォイが話しやすい相手になればいいの」

——そう、ポリジュース薬を使って。

というわけでロックハート君に禁書庫のサインをねだることになりました。

「必要の部屋」でなら必要な本である『最も強力な薬』も簡単に入手できますが、まだ他人にはあの部屋を晒したくありませんのでキャンセルだ。

……別プレイ時に、ハーマイオニーちゃんが「隠しものをしたい部屋」から髪飾りを着けて出てきた時には流石にマンドレイク生えました。無論、その後頃されましたが。神施設である「必要の部屋」ですが、デストラップが埋め込まれていることは忘れないうようにしましょう。

話を戻して。

ロックハート君の授業ですが。

「ああ、そう、このシーンです。雪男が猛然と襲いかかってきた時、私は箒に飛び乗って、『グリセオ 滑れ!』と唱えました。……雪男にはありませんよ? 雪山の斜面にです。」

そうすると、ああ、ページめくって、はい! 哀れ雪男は雪崩に巻き込まれて生き埋めになり、私は箒で空を飛んで悠然と帰還した、というわけです。

では、ハリーと……ミス・グレンジャー。このシーンを再現してみてください」

……これは、まともじゃな? (疑心暗鬼)

比較的普通の授業に見えます。

ロックハート君が魔法を使うことは初回以外無いので忘却術特化のペテン師なのは間違いないですが……何がしかのイベントが進行している恐れがあります。早めに特定してリセの恐怖をなくしたいものです。

あつ、そうだ（唐突）。このようなランダムイベントですが、私は章末にリセット判定を行なっています。

具体的には、今後の進行が困難、あるいは不可能になるまでは走りを継続する方針です。

そうでもしないと一生完走できないってそれ一番言われてるから。

最善パターンを引ければ短縮になるでしょうが、そういうのはTASさんの仕事です  
ので私はやりません（ゴ布林銀の決意）。

というわけで授業も終わったのでサイン貰いに行きましょう。

ロックハートせんせ、サインちよーだい！

「勿論ですとも！ 君達のような優秀な生徒を応援するのは、教師にとって当然です。  
ハリー、明日のクイディッチですが、私のアドバイスが必要なら——」

ありがとナス！

放課後、マートル部屋。

ポリジューズ薬作成会議が始まりました。

「クサカゲロウに満月草はともかく、これらは駄目ね。生徒用の棚には置いてないわ」  
判明した足りない素材は、「三角獣の角」と「毒ツルヘビの皮」ですね。

後々これらをスネイプ君の研究室から盗むことになりました。

まあそんなことはチャートの的にはどうでもよくて、重要なのはむしろ別の品。

どさくさに紛れて、「半純血のプリンス蔵書」を盗みとる事です。

これに失敗した場合、三年生以降のチャートが完全崩壊してしまいます。リセットは避けられません。……今走に限ったのみ、一応のリカバリー案もありますが、それでもリセット濃厚です。

絶対に盗み取りましょう。

次の日、ハリーのクイディッチ戦です。

はやく、すっごい速い（筹適性無し）。

ブラッジャー君がハリーを熱烈ストーキングしていますが、レズちゃんでは全く判断がつかみませんね……。チャートにはありませんが、万一空戦になった時には注意しておきましょう。

無事？ ハリーがスニッチキャッチとともにブラッジャーに撃ち落とされました。  
痛そう。

ピッチに降りて助けに行きましようか。

「ブラキアム・エンメンドー 骨よ、治れ！」

遅かったようです。

ロックハート君の治療によつて、ハリーの腕はBB先輩のように不自然に軟体化して  
いました。

フリットウィック先生とフーチ先生に怒られているロックハート君は無視して、ハ  
リーを医務室にぶち込みましようか。

骨抜きになった（物理）ハリーに骨抜きになった（比喻）カメラ小僧、コリン君がハ  
リーの写真を撮ろうとカメラを向けてきました。

ハリーは止めるよう懇願しますが、大丈夫だつて安心しろよ。

特にガバがなければコリン君は今夜、バジリスクくん石化されず。

翌日。

予定通り、昨晚ハリーをお見舞いに行ったコリン君は、バジリスクに石化されたよう  
です。

こんな非道、許すわけにはいきませんわね！（すつとぼけ）

というわけで、義憤に駆られたロン君達とマートルの部屋でポリジュース薬を製作し



ていると、治療を終えたハリー君がやってきました。

早い、早くない？

骨を生やすのが一晩で済むなら、仮に魔法生物に怪我を負わされたとしても、一週間もあれば余裕で治りそうですね。なあ、マルフォイ、お前もそう思うよな？（牽制）

ハリー君が昨晚ドビーがやってきて、今までのハリー関連の事件の下手人はドビーであると暴露した、と話してくれました。

そう……。

ドビー君は有能ですが、いなくても困らないポジションですので、必須キャラと比べるとどうしてもモチベーションが落ちますね。屋敷しもべ妖精特有の好感度のおかげで好感度稼ぎを行わなくてもいい、というのもあります。

加速して四日後、木曜日、魔法薬学の時間。

いよいよポリジューズ薬素材窃盗のお時間です（大嘘）。

ハーマイオニーちゃん素材を盗む間に、透明マント（偽）を使って本を盗んでしましましょう。もちろん、三人にも本を盗んだことはバレないように、サポートに徹するという体で進めます。

ハリー君が膨れ薬の大鍋に花火を投げ込んだところで……行くぞオラァ。

研究室に突入してスネイプ君の本棚に……ありました！「魔法薬調合法」と「上級魔

法薬」の本です！

ここで本チャート独自要素をお見せしましょう！

「ジェミニオ、フィニート、レデュシオ！」

はい！

二冊の教科書の複製品を、縮小化して持ち運ぶことに成功しました！

当然ですが、オリジナルの本を盗んだ場合、スネイプ君にバレます。その時の彼の警戒具合は、魔法薬の材料を盗んだ時の比ではありません。記されている内容から考えても、確実にダンブルドア案件となってしまうことでしょう。

また、「双子の呪文」についてですが、これによって複製されるものは、特殊効果を持たない劣化品になるという特徴があります。例えば「賢者の石」を複製しても、ガラクタになるというわけですね。

ですが、「怪物的な怪物の本」、「透明術の透明本」のようなものではない普通の本、つまりは紙に、何か特殊効果があるのででしょうか？ ないです（至言）。

と、有用な「双子の呪文」ですが、デメリットとして触れると問答無用で分裂するという特性があります。

だから、終了魔法・フィニートの熟練度を稼いでおく必要があったんですね（メガトン構文）。

というわけで逃走しましょう！

スネイプ君は、ポッター一味が魔法薬の素材を盗み出したということが隠れ蓑、あるいは透明マントとなつて、彼の書籍の中身が掏り取られたことには気がつきません。

疑わしきは罰せずじゃよ、セブルス、つてダンブルドアも言ってるから（不死鳥の御旗）。

やつたぜ（完全犯罪）、成し遂げたぜ（チャート続行）。

気分がいいので今回はここまで！

ご笑読ありがとうございます。

## スクイブとしての彼の半生

——この十年間、アーガスが魔法を求められたことはほとんど無かった。

彼自身は、スクイブであつたとしても、何ら恥じることはないと思つていた。

アーガス・フィルチがこの世に生を受けたのは1945年の夏、世界の表と裏、マグル界と魔法界における、二つの戦争が終わつた年だつた。

「かわいいアーガス。ねえ、あなた。この子はちゃんと幸せになれるかしら……？」

「大丈夫さ、なんてつたつて、ゲラート・グリンデルバルドはもういないんだ。これからはこの子は、間違いなく幸福な日々を送るに違いない——」

魔法族の両親にとつては、マグル界の戦争はともかく、魔法界の戦争が幕を閉じたことは、紛れもなく幸福なことだつた。

ゲラート・グリンデルバルドという天才がいた。

暗く、昏い雪の城・ダムストラング専門学校で魔法——とりわけ闇の魔術に属する魔法——を学び、同時にダムストラングに早々に見切りをつけたかの男は、魔法族の

根幹を揺るがす思想を持っていた。

魔法族による支配。マグル世界との逆転。

ゲラート・グリンデルバルドという男は魔法族が非魔法族よりも、上等な民族であると考えていた。賢く強力な魔法使いと魔女が、彼らに劣るノー・マジックの人間を支配する、そんな階級社会の構築を目指していた。魔法族が非魔法族になんら遠慮しなくて済む世界を夢見ていた。

それは奇しくも彼の野望の果てで、マグル界の一人の扇動者が語った思想と似通ったものだった。

思想の根幹はより大きな善のために。

シンボルマークは三角形と内接する円、それらを貫く一本の線。

ゲラート・グリンデルバルドはそれらを旗印として、一つの目的に向けて邁進する。

彼の思想の共鳴者、群れの一翼をなす魔法使いは、日に日に数を増していく。

日陰者としての立場にうんざりする者がいた。

質は量を凌駕すると思う者がいた。

大手を振って魔法の力を使いたい者がいた。

ゲラート・グリンデルバルドのカリスマに心底魅了された者がいた。

彼らの数は雪だるま式に膨れ上がり、気がつけば、既に魔法族の政府ですら無視でき

ぬ数と力を兼ね備えていた。

より大きな善のために。より大きな善のために。より大きな善のために！

個人主義が横行する魔法族らしからぬ組織であった。

彼らはグリンデルバルドを脳とする、一つの軍隊・生き物であった。

目的は国際魔法使い機密保持法の撤廃。魔法界を覆い隠すヴェールを引き剥がすこと。

その為であれば、彼らは文字通りなんでもやった。

殺人、拷問、洗脳。「死の呪文」、「磔の呪文」、「服従の呪文」、エトセトラエトセトラ。

グリンデルバルドの軍隊は、ヨーロッパ諸国とアメリカの双方を主戦場として、文字

通り全世界であらゆる犯罪行為を行った。

それは秩序立った虐殺だった。

それは理性ある革命だった。

だが、それは倫理なき蛮行だった。

ノー・マジックを殺し、魔法族を殺し、非魔法族の首脳を服従させ、マクラーザの中枢に成り代る。

グリンデルバルドはいかなる損失をも踏み越えた。彼は理想と野望は高尚なものであったが、目的のための犠牲、その許容範囲をあまりにも高く見積もりすぎた。

当時まだ幼かったフィルチの両親も、そんなグリーンデルバルドの「より大きな善」に踏み躪られた、ヨーロツパ在住の一組の名もなき魔法使いの子供であった。

片田舎で平穩に暮らしていた彼らは、突如としてグリーンデルバルドの巻き起こす戦火に見舞われてしまった。

ヨーロツパはグリーンデルバルドのホームグラウンドである。彼のシンパも大勢潜んでいた。盟主が表向きには姿を消し、裏では新大陸に闇を拡げる中で、グリーンデルバルドの軍隊はより一層革命のための犠牲を積み重ねていた。

彼らは無駄な虐殺こそしなかったものの、ノー・マジックを守ろうとする、つまりは彼らの意に沿わぬ魔法使いを殺すことになんのためらいもなかった。

ふと気がつけば、隣近所の誰かが緑の光線を浴びているような情勢下であった。

多くの心ある魔法使いは、子供を激戦地に置いておこうとは考えなかった。

ゆえに、フィルチ夫妻——繰り返すが彼らは当時まだ子供である——が安全な土地。グリーンデルバルドの魔法に侵されていない国。

アルバス・ダンブルドアの護るイギリスに疎開させられるのも無理もないことだった。

アルバス・ダンブルドアという天才がいた。

彼は、歴史あるホグワーツ魔法魔術学校で変身術を教える教授であった。

同時に彼は、世界で唯一グリンデルバルドが恐れていると噂された魔法使いであった。

世界中で暗躍するグリンデルバルドの軍隊が、唯一イギリスではなんら行動を起こさない。イギリス魔法省の人間は自らの成果であると吹聴していたが、民衆はアルバス・ダンブルドアという英雄の存在を知っていた。

人々は、彼が闇の魔法使いを倒してくれると考えていた。

人々は、彼が闇の魔法使いから護つてくれると考えていた。

家を焼かれ、住む土地を焼かれた多くの魔法使いは、続々と彼のお膝元であるイギリスに疎開していく……。

しかし、アルバス・ダンブルドアは当初の間、座して動かず静観していた。

その理由は誰にもわからない。

口さがないものはダンブルドアがグリンデルバルドに加担しているなどという世迷言を吐いたが、民衆はそれらを悪質なデマであるとして受け入れなかった。

アルバスの真意を理解できた者は、一組の兄弟と一人の魔法使いだけであった。

彼が立ち上がったのは、グリンデルバルドの胎動からずっと後のこと。

杖を挙げたのは、ドーバー海峡を隔てた先、芸術の都で命を落とした一人の教え子の



ため。

ダンブルドアが心底から犠牲を認識したためであった。

ゲラート・グリーンデルバルドという男が、「より大きな善のために」人の命を、アルバスが庇護すべき命を奪っていく。

彼の手によつて命が「死」に誘われていくことは、アルバス・ダンブルドアにはこれ以上許容できなかった。

ダンブルドアがグリーンデルバルドとの戦いを表明した時。

アーガスの両親は、まさしく運命的な出会いを果たしていた。

幼心に染み付いたゲラート・グリーンデルバルドへの恐怖は残っていたが、教師としてのアルバス・ダンブルドアの威光により、それらは徐々に払拭されつつあった。

イギリス魔法界という仮初めの平和の中で、静かに愛を育む二人。

結婚し、子供を授かったのは、1944年の晩秋であった。

「懐かしいな。……私たちはこんなにも老けたのに、ここはあの日と変わらない」

「ああ、だが、あの日つかなくなかった決着は、今日つけようじゃないか。今回は邪魔者も、……心残りもない。二人だけの決闘だ」

ゲラートとアルバスは、その日、示し合わせたように彼らの始まりの地である、ゴド

リックの谷へと足を運んだ。

信奉者にも、同僚にも。部下にも、仲間にも。

余人には一切伝えることなく、彼らは「革命」の行く末を決めようとしていた。全てはより大きな善のために。

「——アルバス。俺はお前を越えて行くぞ！ 魔法族の躍進は、今日、この時、かつての決着をもって、始まるのだ！」

「——いいや、ゲラート。君の革命は、今日ここで終わりだ。君は……私たちは、間違つたのだ。我々が無理にこじ開けるのではなく、魔法界の皆が、穏やかに話し合うべきだったんだ」

赤い閃光が飛び交い、不可視の盾が互いを守る。

壊れた瓦礫は鋭利な刃物へと変化し、四方八方千差万別に宙を舞う。

黒炎のセストラルと流水の不死鳥が互いに喰い合い打ち消し合う。

時代を代表する二人の魔法使いの決闘は、まさしく伝説と呼ぶべき代物だった。

「何故分らない！ アルバス！ 今のマグルを見たか!? 奴らは空を、海を、大地を埋め尽くした！ 俺たちが話し合ったあの日から、二度も世界を焼き尽くそうとしているんだぞ！」

——いつかは魔法族も暴かれてしまう！ だったらその前に我々がうって出るべき

だ！」

「——だとしても！ その為の犠牲を、これ以上の犠牲を私は許容できない！」

「だとしても、だ！」

「エクスペリアームス！ 武器よ、去れ！」

双方が放った武装解除、詠唱により威力を高められたそれは、無言の盾を打ち破って互いの杖を弾き飛ばす。

瞬間、鏡合わせのように二人はくるりと回った。

短距離の「姿くらまし」。

目まぐるしく立ち位置を変え、二人は杖を目掛けて右手を掲げる。

「アクシオ！ 杖よ！」

凡百の魔法使いには決して使えない杖ワンドレス・マジック無し魔法。

しかし彼らにとってはそれこそ見戯にも等しい。

自分のものと、相手のそれを求めて放たれた呼び寄せ呪文は、何の因果か相手の杖だけを的確に呼び寄せた。

アルバスは手にした杖を見つめ、ぽつりと呟く。

「『ニワトコの杖』。……ゲラート、もうやめよう。『死の秘宝』を集めても、私たちには『死』を制することはできない」

「いいや、アルバス！ 俺は『死』を制さなければならぬのだ。——でなければ、俺の部下の、魔法族の、『死』に報いることなどできないではないか！」

「——ゲラート、お前……。」

……わかった。ならば、私が『これ』を引き継ごう」

ゲラート・グリנדバルドとアルバス・ダンブルドア。

この二人は、果たしてどちらが強いのだろうか？

戦場、戦況、呪文選択、状態、装備、天運……。

ある点ではゲラートが勝り、ある点ではアルバスが勝り。その日のコンディションによっても、勝敗は大きく変わるだろう。

だが。

『死の秘宝』、『ニワトコの杖』が武装解除によってダンブルドアの手に移ったことで。杖の忠誠心がダンブルドアに移ったことで。

世界の、魔法界の、二人の天秤は——ダンブルドアに傾いた。

決着は、一瞬だった。

「——お前の勝ちか、アルバス」

「——ああ、君の負けだ、ゲラート」

『より大きな善のために』繰り広げられた伝説の決闘は、アルバス・ダンブルドアが征した。

「……後を、魔法族を頼む」

「……わかった、君はゆっくり休んでくれ」

ゴドリックの谷はあの日と変わらず、今日もそこにあつた。

その時をもってして、世界魔法大戦は、二人の青年の革命は、幕を下ろした。

グリンデルバルドが彼の居城・ヌルメンガードを終の棲家と定めた時、多くの信奉者が彼の供を務めた。

潮が引くように、革命の炎は消えて無くなってしまった。

一人の天才は闇の魔法使いと呼ばれ、一人の天才は英雄と呼ばれた。

伝説の決闘、その決着と時を同じくして。

アーガス・フィルチという一人の男がこの世に生を受けた。

「かわいいアーガス。ねえ、あなた。この子はちゃんと幸せになれるかしら……？」

「大丈夫さ、なんてったって、ゲラート・グリンデルバルドはもういないんだ。これから

はこの子は、間違いなく幸福な日々を送るに違いない——」

魔法族の両親にとつては、マグル界の戦争はともかく、魔法界の戦争が幕を閉じたことは、紛れもなく幸福なことだった。

グリンデルバルド無き今、ダンブルドアの元で、息子も幸福を手にするかと確信した。  
……確信していた。

「——ふざけるな?! うちの息子が、スクイブだと?! そんなわけあるか!」

すすすくと育ったフィルチ少年であったが、彼が魔法を発することは十歳を越えてもついで無かった。

聖マングにつてのあった父親は、何らかの魔法疾患に息子が侵されていると考え——あるいは魔法疾患に侵されているだけだと期待して、癒者に片っ端から息子を診断させて回った。

しかし、結果はいずれもシロ。

アーガス・フィルチは全くの健康体であった。全くの健康体のままで、何ら魔法が使えない体質であった。

言い訳のしようもなく、まごうことなきスクイブであった。

沈痛そうな面持ちの癒者に罵声を浴びせた父親は、脳内のリストを手繰り寄せ、彼の

持つ最高の、魔法の手札を切った。

「——そうだ、ダンブルドアだ。ダンブルドア先生なら、先生ならきつと助けてくれるに違いない！」

聖マングを出たその足で、父親はアルバス・ダンブルドアに手紙を出した。

内容は短く、「スクイブの息子を助けてくれ」と。

「来たか！」

数日後、フィルチ家にホグワーツからの手紙が届いた。アーガスが十一歳の時には届かなかった手紙だった。

父親はフクロウから手紙をひったくり、封筒を乱雑に引き裂いて手紙に目を通し——  
おいおいと泣き崩れた。

手紙の内容を要約すると。

——すまない。わたしにはスクイブの子供を助けられた事がない。

そんな内容だった。

それからというもの、父親は酒に溺れるようになり、母親は頻繁に泣き崩れるようになってしまった。

そんな生活に嫌気がさしたアーガスは、十七歳になった、つまりは成人するとすぐに家を飛び出していった。

ホグワーツという最高学府で教育を受けてないにしろ、彼は機嫌のいい時の両親に手習い程度の知識を教えてもらっていたため、何とかなるだろうと楽観的に考えていた。

ところで、この時代は、グリーンデルバルドの残した爪痕により、「魔法族とマグル」という論題に関心が集まっている時代であった。

そんな中、スクイブ、魔法族ウィザード・ボーン生まれのことも、しばしば話題となっていた。

スクイブは魔法族生まれである。

スクイブは魔法族の知識を持っている。

スクイブは魔法生物の姿を見る事ができる。

……なるほど確かに、スクイブはマグルとは違うのだろう。

だが、どこまでいっても、スクイブには魔法は使えない。

純血主義者を筆頭として、スクイブに対する偏見は多かった。

結論から言ってしまうえば、スクイブに働き口なぞろくに存在しなかった。

家を飛び出していったアーガス少年は早速露頭に迷うことになったが、さりとて家に戻るのも彼の面子が保てない。



そんな彼を拾い上げたのは、魔法界の鼻つまみ者の溜まり場、「夜の闇横丁」であった。「夜の闇横丁」には、様々な人種が存在する。脛に傷持つ者、半人、ヒトならざるもの。スクイブなんてものは、むしろ健全な部類であった。

幸いにして、アーガス少年には後ろ暗い経歴もなく、手先が器用という能力もあったために、一般には修復不可能なもの——例えば動く肖像画のような——を修復するとう、「夜の闇横丁」には似つかわしくないほどに真つ当な仕事に就く事ができた。

魔道具や肖像画の修復は、既にかかっている魔法と干渉しないように、魔法を使わず手作業で仕事をする必要がある。

一般的な魔法使いにとってはたまらなく億劫な仕事であるが、スクイブであるアーガス少年には天職と言っていい仕事であった。

おそらく、後に振り返ったとしても、アーガスの人生で最も幸福だった期間はこの時期であろう。

ただ、一つだけ心残りだったのは。

「なあ、アーガス。そーいやお前ホグワーツでどこの寮だったんだ？　こう見えても俺はレイブンクローだったんだぜ？」

「いや、おれはホグワーツには行かなかつたんです」

「何だって!?　そいつは勿体ねえな！　イギリスの魔法使いなら、一度はあそこに通つ

ておくべきだぜ！

——おいバーテン、この憐れな男にファイア・ウイスキーを一杯奢ってやってくれ！」  
ホグワーツに行けなかった事だろうか。

「おいアーガス！ フクロウがお前に来ているぞ！」

1972年、アーガスが30を目前にした頃。

彼の職場に一匹のフクロウが降り立った。

訝しげに手紙を受け取ったアーガスは、封を切つて中身を読んで——

「すいません、親方！ ちょっと店開けます！」

「あつ、おい！」

——すぐさま外に駆け出した。

手紙は、母の危篤を知らせるものであった。

数時間後、聖マンゴにて。

「——母さん！」

「ああ、アーガスや、久しぶり」

親子は実に、十年ぶりの再会を果たしていた。

癒者に誘導された先でアーガスが目にしたのは、痩せ衰えた母の姿であった。

すぐに何事かを口にしようとしたが、アーガスの口はパクパクと動くばかりで何ら意味のある言葉を吐こうとしない。

沈黙。

破つたのは彼の母であった。

「元氣だったかい？」

「……ああ、元氣でやってるよ。——父さんは？」

母は目を伏せて答えた。

「あの人は、出ていったよ。」

数年前、あたしが目を覚ました時には、リビングのテーブルにグリーンゴッツの鍵と、あの人の知り合いの名前が書かれたリストと——手紙だけ残して姿を消していた。

——たぶん自分で自分を赦せなかつたんだろうさ。酒に溺れたことも、お前のも、何もかも」

アーガスの母は、アーガスには十年とは思えぬほどに、めつきりと年をとって見えた。

「アーガス、お前に父さんからの最期の伝言だ。」

『お前を魔法使いとして育ててやれず、すまなかつた』、だつて」

——この十年間、アーガスが魔法を求められたことはほとんど無かつた。

彼自身は、スクイブであったとしても、何ら恥じることはないと思っていた。  
だが。

「——あたしからはそうだねえ……。」

お前をちやんとした魔法使いとして産んでやれなくて、すまない、かな？」  
彼は生まれて初めて、自分がスクイブであることを殺したいほどに「呪った」。

葬儀は粛々と行われた。

彼は両親の交友関係を把握していなかったため、父親の残したリストを頼りに手紙を各方面に送りつけた。

——父親の晩年が崇めたのか、弔問客の数はリストの数割にしかならなかったが。  
そんな中、彼のもとを訪れたのは、とあるビッグネームであった。

「母君のご冥福をお祈りするよ。ミスター・フィルチ」

正直、アーガスが絶対に来ないだろうと思っていた人物であった。

ホグワーツ魔法魔術学校校長、アルバス・ダンブルドア。

現代の偉人が、何の変哲も無い一人の女の葬儀に駆けつけてきてくれた。

アーガスにとってはまさしく青天の霹靂だった。

話をすると、どうやらダンブルドアは弔問だけでなく、何やらアーガス自身にも話が

あるらしい。

アーガスは自宅、彼の生家に老人を招いた。

「……まずは、話の前にミスター——ああ、アーガスと呼んでも？」

うむ、ありがとう。まずはアーガス、君も少しばかり気をぬくべきじやろう」

そう言われて、ようやく彼は母の死以来、自分の心身が強張っていることに気がついた。

そして、彼が久しぶりに戻った場所が、彼の故郷である——両親の空気が染み付いた場所であることを、やっと認識した。

もうこれは薄れていくばかりであることを、彼は実感してしまった。

「うむ。これを飲みなさい」

五分が十分か。硬直するアーガスの前に、ハーブティーが差し出される。

母親の好きなフレーバーであった。

昔飲んだ味より、どこか塩辛い気がした。

落ち着くするには、充分な時間が過ぎた。アーガスは気恥ずかしげに、誤魔化すように老人に話し始めた。

「そういえば、このハーブティー、どうなされたんですか？」

「ああ、すまぬの。勝手ではあるが、君の家のキッチンとポットをちよちよいと借りさせてもらったよ」

「……構いませんが、魔法は使わなかったのです？」

「魔法が必要かね？」

アーガスに深いブルーの瞳が向けられる。

彼は話をそらした。

「——そういえば、ダンブルドア。あなたほどの方が何故母なんかの葬儀に？」

「おお、アーガス、君の母君じゃ。なんかなんかではないよ。」

……実は、君のご両親は、よくわしに手紙を下さった。内容は、そう——君のことじゃ」

本人が踏破した過去に、両親はずっと囚われていたと、アーガスは自覚する。

「君にはちよつとした問題があることを、わしは知っておる。」

それを踏まえて、君に一つ提案があるのじゃが——」

——ホグワーツの管理人になってはみる気はあるかね？

何故？

アーガスの脳裏を、幾重ものその言葉がよぎった。

何故スクイブの自分なのか、何故そこまでするのか、何故、何故、何故……。何故……。

そんな彼の内心を見透かしたように、老人は語りだす。

「わしは君のご両親から、息子をホグワーツに行かせてはくれないかという手紙を昔から受け取っておったのじゃよ。……ただ、すまなんだ。君のちよつとした事情のせいで、生徒としては招くことはできなかつた。

しかし、管理人としてならば、わしの裁量で城に留め置くことはできる。そこで魔法を学ぶこともできるじゃろう。

ホグワーツでは、助けを求める者には、必ずそれが与えられる。

——わしは、魔法が使える者でも、魔法を学ぶ機会があつてもいいと、そう思つておるのじゃ」

埒外の提案。

押し黙るアーガスをよそに、ダンブルドアは席を立て歩いて立ち去つた。

「すぐには言わぬ。ただ、君に興味があるなら、手紙を送つてほしい」

アルバス・ダンブルドアはそう言葉を残し、フィルチの家を後にした。

彼はついで一度も、「最強の杖」を抜くことはなかつた。

「——ということがあつたんですけど、どう思いますか？ 親方？」

次の日。

アーガスは勤め先で雇い主に、手慰み程度に相談を持ちかけた。なにぶん十年來の關係だ。胸襟なぞどうに開いている。

「夜の闇横丁」という鉄火場で長年店を構える雇い主は、人生の酸いも甘いも噛み分けている。アーガスは普段から雇い主を頼り、雇い主もまたそれに応えてきた。しかし、この時ばかりは話は違った。

「――」

「――親方？」

「いや、アーガス。これは俺には分からん」

「え？」

そんな答えは初めてだった。

思わず作業の手を止め、顔を上げるアーガス。

そんな彼の視線を、自称レイブクロウの男はしかと受け止める。

「悪いが、俺はホグワーツで働いたことはないし、ましてやスクイブだったこともない。だから、お前が管理人としてやっていけるかなんてちつとも分からん」

「それなら――」

「――だから」

計り知れぬ叡智。



「だから、それはお前が決める、アーガス。ホグワーツに行つても、ここで働き続けても、どこかで野垂れ死のうと好きにしろ。俺は何も言わん。

——お前が自分で自分を『組分け』ろ」

『組分け帽子』。

アーガスも聞いたことのある、ホグワーツの宝。

千年もの間、何者でもない子供の内心を暴き、彼らの適性を見抜いてきた創始者の遺産。

アーガスもそれに倣つて自らの心を掘り起こす。

——結論はすぐに出た。

「親方——」

「——いい、行け」

ところで。

千年間生徒を采配してきた『組分け帽子』であるが——帽子は頑なに認めようとしな  
いが——時にはミスをすることもある。

言つてしまえば、アーガスの『組分け』もそんな結果に終わった。

「そのの二人、待て！」

「おいおい、待つわけないだろう？ レビコーパス！ 身体浮上！」

アーガスの前を走っているメガネの少年。

彼が呪文を唱えると、少年自身の身体が浮上し、上層階段の踊り場へと文字通り飛び上がる。

少年は上階で待っていた悪戯仲間とハイタッチした。

「待ったか？ 『パッドフット』」

「ああ、『プロングス』。あいにくと俺はお前ほど非情じゃないんでね。少しくらいは待ってやるさ」

「と、親愛なるフィルチ殿が漸くいらっしやるようだけど？」

「ああ、ああ！ 申し訳ないが我々も捕まるわけにはいかないんでね！」

——グリセオ！ 滑れ！」

パッドフットと呼ばれた少年が、アーガスの登る階段に向かって杖を唱えた途端。

階段が最初から滑り台であったかのように変質した。

腹から滑り床に倒れ込み、ズルズルと階下へ滑り落ちるアーガス。

彼の頭上では、悪戯仕掛け人達のバカ笑いが響く。

ホグワーツ管理人就任が、件の四人組の在籍年とかち合ったことは、まごう事なき悲劇であった。

やることなす事派手で鮮烈なマローダーズ。

多くの生徒は彼らの催し事を楽しんでいた。

彼らの悪戯——ホグワーツの『伝統』となるそれは、年端もいかず、分別のつかない子供達を魅了してやまなかつた。

愉快な四人の『忍び』たちが、マヌケなスクイブを手玉にとる構図。

ホグワーツという娯楽の少ない閉鎖空間に置かれた子供にとつて、それはこれ以上ないくらいにエンターテイメントであった。

ホグワーツは、アーガスの求めてやまない『魔法』を、悪戯遊びに使い潰す者ばかりであった。

アーガスが『魔法』を使えない自分を惨めに思い、『魔法』を使える子供を憎む気持ち。それは、ホグワーツを訪れてから芽生えた感情であった。

ただの『悪ふざけ』によって、アーガスの心は捻じ曲がってしまったのだ。

時間を現代、「秘密の部屋」が開かれた時に戻して。

「どけ！ あれは私の猫だ！ ミセス・ノリスだ！ 早く下ろしてやらないと！」

彼の求めに応じて、黒髪の生徒が呪文を唱える。

「ウインガーディアム・レヴィオーサ 浮遊せよ！」

アーガスの前に、ミセス・ノリスがふわふわと漂ってくる。

吊るされた猫を魔法で降ろしてあげる。

一見すれば、それは善なる行為であろう。

しかし、生徒への偏見に凝り固まったアーガスには、それがただの偽善にしか思えなかった。

——魔法使いでも、大切な者の墓なら呪文を使わず道具を使って掘るだろう？

本当に悼む気持ちがあるなら、魔法なんて使わないはずだ！

論理破綻。思考矛盾。

「だから憎い」という結論に至るための強引なロジック。

それでも、長年生徒による『魔法の悪ふざけ』に侵されてきたアーガスには、正常な判断がもはやできない。

黒髪の少女が、悲しむ自分を嗤っているように感じる。

たまらずアーガスは叫んだ。

「さては、お前が、お前たちがこの子を殺したんだな!？」

## 11 / ? くらダンブルドア追放まで

油断大敵！ なRTA、もう始まつてる！

前回、半純血のプリンス本を入手することに成功しました。今回からは、この本をしゃぶり尽くしていきたいと思います。みんな見とけよ（カメラ目線）。

さて、教科書窃盗から一週間が経過しました。ロックハート君主催の「決闘クラブ」のお時間です。

このイベントでは、イベントキー「蛇語」の取得、並びにハリーのメインスペル・武装解除が習得できます。

「さあ、皆さん集まつて。我々がよく見えますか？」

やってきたのは、三人の教師。

ロックハートとスネイプ、それから本来はいないはずのフリットウィックです。

何だお前！（困惑）

やはりロックハート君関連のイベント管理がおかしくなっている……おかしくなっていない？

学期末が不安になってきましたね……。

「——今回の決闘クラブでは、助手にフリットウィック先生と、スネイプ先生にお手伝いいただきます。

フリットウィック先生は若い頃決闘チャンピオンでいらつしやつたとの事で、今回のクラブの監督を。

スネイプ先生は決闘についてそこそこの知識をお持ちらしく、模範演技にお付き合いました。ただ、ことになりました！

ああ、みなさんご安心を！ 決闘が終わっても我々は変わらずそこにいます。ご心配めされるな！」

……。

配役は変わらないみたいですね。

原因不明のランダムイベとかこんなんじやRTAになんないよ（抗議）。

ロックハート君が仰々しくお辞儀をする一方で、スネイプ君は不満げに軽く腰を折つた程度でした。

お辞儀をするのだ、セブルス（闇の印）。

「はい、みなさん見えますか？ 我々は今から同じ呪文を使います。杖の振り方をよく見ておいてくださいね！ おっと、私の顔を見るのは決闘の後にすることです！」

1 — 2 — 3 —。

「エクスペリ——」

あーつと、ロックハート選手吹き飛んだーッ！ これは痛い！

歓声と悲鳴の中で、武装解除されたロックハート君がよろよろ立ち上がりましたね。

「——さあ、みなさんわかりましたか？」

これが『武装解除術』です。呪文は『エクスペリアームス』。ご覧の通り、杖はスネイプ先生の元へと渡ってしまいました。

ん？ ミス・ブラウン。スネイプ先生は呪文を使わなかったじゃないかって？

いえ、いえ。使わなかったのではなく、唱えなかっただけです。あれは『無言呪文』という高度な魔法ですね。我々程度の魔法使いの決闘では当然に用いられるものです。

しかし、私は呪文を唱えた方が皆さんには教育的には良いと思ひましてね。スネイプ先生と合わせて、有言と無言の違いをお見せしたままですよ」

はえ、すつごい（棒）。

無言呪文の概念を解禁してもらえるのは嬉しいんですが、ステータスがまだ足りないんですよ……。どっちみち四年生で解禁する予定だったので、ここでの幸運はフヨウラ！

「それでは実践と参りましょう！

我々がこれから皆様をペアにします。フリットウィック先生、スネイプ先生、お手伝いをお願いします……」

ここからは蛇語イベントまで一直線です。特にやることはありませんが——おっと、フリットウィック先生がこっちにきました。どしたん？ オビワン？ サーティーワン？

「——ミス・レストレンジ、あなたはミスター・ポッターと組んでください」

ファツ!? クウーン（失神呪文）。

あつ、そつかあ……。

フリットウィック君がいる前ではさしものスネイプ君も強権を振るえないのかあ……。

さて、どうしましょう。

蛇語イベントは最悪レズちゃんが蛇召喚すればどうにかかりますが、「スリザリンの継承者」に関する風聞が酷いことになりますね。

んー、どうすつかなーわたくしもなー。

……まあ、いいや！（ガバ思考）

風聞なんてハーマイオニーちゃんが石になるまで数ヶ月耐えれば回復するんだからどうでもヨシ！（現場ミネルバ）



後に尾を引くガバでなければ続行じやい!

それに、よくよく考えればここでハリーの育成度を確認できるのは都合が良いかもしれません。

ロックハート君周りのイベントを解明できればという但し書きはつきますが、更新案としてチャートにちゃんときき込んでおきましょう (HHEM)。

というわけで突発イベント戦です。

じゃあ、ハリー、よろしくお願いしますって言ってみな!

「それでは皆さん、くれぐれも危険な呪文はなし!

では杖を構えて、 1——2——3——」

「フリペンド 撃て!」

プロテゴ 護れ!

……生きてるううアツハツハツ! (煽り)

これまででひたすら熟練度稼ぎまくった上、ナナカマド君のブーストもあるレズちゃん  
の「盾の呪文」は、現在のハリー君が破れるものではありません。

全ての呪文を完封して、敗北を糧に頑張ってもらいましょう!

「フリペンド 撃て!」

残念、プロテゴ！ 正面からの呪文なら余裕で防げます。

「ヴェンタス 風よ！」

プロテゴ、ついでにエクスペリアームス！

……惜しい！ 当たりそうでしたがギリギリで躲されました。

まあ体勢を崩した以上、もはや詰将棋です。

ハリーくんは苦し紛れに何かするようですが――

「ルーマス・ソレム 太陽の光よ！」

はいはい、プロテ――ンアッ!? (即落)

盾で閃光呪文は防げません！

しゃーなし適当に魔法撃つてリカバリーすればまだ舞える、まだ舞えますぞ――

「エクスペリアームス 武器よ去れ！」

――うわー！ 取られたアー！ ナナカマドの杖取られちゃった！

どうか行かないで…… (悲嘆)。

ウワアアアアア…… (一速)。

マアアアアアア…… (二速)。

……は？

戦闘終了です。お疲れ様でした。

できるだけ戦闘を長引かせてハリーの熟練稼ぎをするつもりでしたが、普通に負けましたね……。

——二刀流封じ、消極的攻撃とかいう舐めプしといて負けるとか恥ずかしくないの？

(自問)

——未熟です…… (自答)。

済んだことは切り替えて、戦闘リザルトに移ります。

ハリーの成長が思ったより早いことがわかったのは収穫です。適性があるとはいえ見たばかりの武装解除を使いこなせるほどに基礎能力が上がっているのはかなりのものでしょう。

レズちゃんがどんなに強くなるうともハリーがヴォルデモートを頃せなければ無意味な以上、ハリーの方が強いのはむしろプラス！ (負け惜しみ)

決闘の感想戦です。ハリー君、勝因は？

「閃光呪文かな。——去年助けられたからね」

あつ、そつかあ…… (頭トロール)。

禁じられた森で閃光呪文を使ったところを見られてましたね……。

意図せず捌め手を教えてしまっていたようです。

「はい、ズイラ」

ナナカマド君が帰ってきました。

「どうやらハリー君に汚された（意味深）ようで。忠誠心が削れてしまいました。じつくり取り戻していきましょう。」

「——ストップ！ 一旦手を止めて！」

これから皆さんの中から何組か、代表の方々にモデルとなつてもらおうと思えます」  
おっと、イベントが進行しましたね。

フリットウィック君が目を光らせていたせいで、本来ほど酷い乱痴気騒ぎにはならなかったようですが、それでもあちこちでパニックが起きました。

気になるハーマイオニーちゃんですが——はい、ミリセントちゃんにアームロックを仕掛けられていますね。ガバさえなければ、このタイミングで猫の毛を回収できたはずです。

レズちゃんが辺りの狂乱を見回している間にも、ロックハート君は話を続けます。

「さてそれでは誰かに——おお、ハリー、どうだい？ ミス・レストレンジも」

リベンジ行くぞオラアア

「いや、ロックハート先生」

ん？

「我輩が思うに、決闘の相手が常に同じというのも、練習にならないと思うのだが」

「なるほど！ それでは——」

「マルフォイ、来たまえ。君がポッターの相手をするのだ」

「いいですね！」

やったぜ（ルート復帰）。

スネイプ先生が決闘に向かうマルフォイ君に囁いています。蛇召喚呪文を指示しているのでしょうか。

どうやら「蛇語」イベントは無事回収できそうです。

さすがスネイプ先生。プリンス本といい名アシスト。

教師の屑にして騎士団員の鑑。

というわけで、ここから先のイベントにめぼしい見所さんはもうありません。

マルフォイ君が蛇を呼び出し。

ハリーが蛇語を自覚し。

ホグワーツ中の風聞がハリー継承者説に染まり。

ジャステイン・フィンチャーフレッチリーと「ほとんど首無しニック」が石化しただけです。

ほんへ通りなので加速だ加速。

と、言いたいところさんですが。

狂いそう……!! (敗北への怒り)

なのでレズちゃん強化イベントを執行いたします。

取り出したるは、半純血のプリンス教科書と、今までナナカマドの杖の陰に隠れていたトネリコの杖!

既プレイ兄貴達には釈迦に説法ですが、プリンス本には魔法薬学のステータスに補正をかける他にも、複数の有用呪文を習得できるといふ効果があります。

代表的なものとして、

塞耳呪文・マフリアート

縛舌呪文・ラングロツク

浮遊呪文・レビコーパス

などが有名でしょうか。

これらは順に、「盗聴防止」、「物理的沈黙」、「呪文対象または自身の一時的浮遊」といふ効果があり、どれも強力なものです。

とりわけレビコーパスに関しては、うまく使えば上方向への緊急回避も可能で、同時

習得可能なリベラコーパスと合わせれば、擬似的な三次元戦闘が行えるようになります。

はえ、すつごい（感嘆）。

そんな夢いっぱいの呪文たちもさることながら、本チャートにおける目玉呪文はやはりこれでしょう。

切裂呪文・セクタムセンブラ！

この呪文は、「回復障害付きの高威力切断呪文」として利用可能ですが、もう一つ隠された効果があります。

それは、「使用キャラの闇の魔術適性を上昇させる」という効果です。

本ゲームにおいて「禁じられた呪文」のような高位の闇の魔術は、要求ステータスが足りていない場合、詠唱者にくつつかのデメリットをもたらしめます。

呪文効果が鼻血程度に減衰される程度ならまだいいのですが、詠唱者が自爆するなど悪質なデメリットを引いては「アーチ」の向こう側行きは避けられません。

だから、闇の魔術カテゴリの中でも比較的安全な切裂呪文を覚えて、次の闇の魔術への足がかりにする必要があったんですね（メガトン構文）。

これからは来たるべき時のために、闇の魔術適性を上げていきますが、闇の魔術嫌いなナナカマド君に臍を曲げられないように、トネリコ君を闇の魔術専用の杖として調教

していきましよう。

「お前を芸術品に仕立てや……仕立てあげてやんだよ。お前をげいじゅつし……品にしたんだよ！ お前を芸術品にしてやるよ（妥協）！」

というわけでいつの間にやらクリスマス。

ポリジューズ薬イベントの日です。

なお、今年はとりわけ予想外のプレゼントはありませんでした。

……ちなみに、冬休みに一時帰宅していないため、現在透明マント（偽）を補充できていません。

これにより残念ながら来年三月からの学期末までの三ヶ月間、「必要の部屋」を用いたキャラ育成が滞ってしまいます。

これは育成時間で安全を買った形になります（走者の屑）。

だってダンブルドア不在ホグワーツでのバジリスクとのデスエンカが怖いからね、仕方ないね♂（安定チャート）

なので、プリンス本収録呪文のような「必要の部屋」でしかできない呪文の練習は今のうちに進めておきます。

話を戻して。



ポリジューズ薬イベントですが——レズちゃんのすることは特に何もありません。

ああん、なんで？ とお思いの方もいらっしやるでしょうが、なんのメリットもないイベントなんてフヨウラ！

このためにスリザリン生を襲うのも手間ですし、万が一動物の体毛なんて引いてしまつたら目も当てられません。

なので、事前に拠点（トイレ）の保守をすと言つてその場に止まりました。理由はこの中で一番ドラコと親しい自分はちよつとした仕草で正体がバレかねないから、などとしておけば問題ありません。

マルフォイ君と仲良くしていたのは無駄ではなかった……？

ポリジューズ薬を飲むためにハリー、ロン、ハーマイオニーの三人がトイレの個室に入つていつて——

「ウワー！」

「ウワーの二乗！」

ウワーの便乗！

ハリーの部屋からはゴイルが、ロンの部屋からはクラブが出てきました。なんだこれは、たまげたなあ……。

「ごめんなさい、私……いけないと思うわ」

ハーマイオニーが入った部屋からは、そのような甲高い声が聞こえてきました。さもありません、ハーマイオニーちゃんは現在ニャーマイオニーちゃんと化しています。

時間もないので、ハリーたちには早く行ってもらいましょう。

……行きましたね。さて。

「アロホモラ 開け！」

かゝわゝいゝいゝなゝあゝニャーマイオニーちゃん（黒猫の眼光）。

ニャーマイオニーちゃんを保健室にぶち込んでやるぜ！（友達の鑑）  
じゃ、流しますね……。

ばいそく完了！（忍びの地図）

既に、ポリジューズ薬イベントから二ヶ月以上経過してしまいました。

現在ハリー周りでは「日記帳イベント」が発生しています。

が、しかし。これにもレズちゃんはなんら関わりません。

（イベント連続放棄とか）うせやろ？ いえ、本当です。

というのも、このイベントはデスリスクノーリターンという糞爆弾の役にも立たない

イベントだからです（絶望）。

渦中のアイテム・分霊箱「トム・リドルの日記帳」ですが、あれは腐つてもお辞儀様の魂のカケラです。

分霊の彼は非常に高威力の開心術を使ってきましたが、様々な要因から、レズちゃんの心をアロホモラ（物理）された場合その時点でリセットが確定してしまいます。

なんだこのクソゲー!?

故にノータツチを貫きます。やむを得ない♂

イースター☆

来年度の教科選択イベントが発生します。

全部「レ」印つけて、終わり、閉廷！

少し時間が流れて。

グリフィンボールとハツフルパフのクイディッチの試合が行われる予定の日です。

ここまでに、ハリーが日記帳を入手し、ハグリッド犯人説という冤罪を吹き込まれ、再び日記帳がジニーの元に渡ったりしましたが、どうでもいいわ♂

結論から言えば、この日はクイディッチの試合は開催されません。ハーマイオニーちゃんと驚寮のペネロピー・クリアウオーターがバジリスクとデスエンカするからですね。

ところで、あくまで例え話ですが。

ここでハーマイオニーちゃんに同行することで、バジリスクを撃退することは不可能ではないでしょう。

熟練度が些か不足しているとはいえ、「セクタムセンプラ」であれば、魔法生物特有の装甲を抜いて眼球にダメージを与えることが理論上可能です。とんでもない豪運とキアラ育成度さえあれば、バジリスク君を蒲焼きにすることができてきます。

チキンのトム君は、バジリスクがやられた段階で一時撤退を行うことが多いため、ハーマイオニーちゃんは石化せずに済むかもしれません。

「不可能ではない」、「理論上」、「豪運」、「かもしれない」……。

——そのような希望的観測は、チャート構築にはフヨウラ！（ゴブリン銀の意思）  
本年度のグランドクエスト「秘密の部屋」の絶対事項！

一つ、死者を出さないこと！

二つ、「トム・リドルの日記帳」を絶対確実に始末すること！

毒塗りグリフィンドールの剣の入手は最悪リカバリー可能ですが、本年度終了時点で「日記帳」破壊に失敗して、あまつさえ逃げられていた場合その時点でリセットします（断定）。

今年度「日記帳」を破壊するため、ひいては「神秘部の戦い」でヴォルデモートを札

害するため。

——涙を飲んでハーマイオニーちゃんには石になつてもらいましょう。

悲しいなあ……。

石化マイオニーちゃんお見舞いの後。

ハリーたちの誘導により、「日記帳」証言における「秘密の部屋」の犯人、ハグリッドの元へ調査に行くことになりました。

ここではハグリッド投獄、ダンブルドア停職というイベントが発生します。

前者はともかく、後者はバジリスクとのエンカ率の上昇という悪影響をもたらします。注意しましょう。

「じゃが——ホグワーツでは助けを求める者には、必ずそれが与えられる。覚えておくことじゃ」

「何かを見つけたいなら、蜘蛛の後を追いかけるこつた。ファング、俺がいない間は、誰かから餌をもらうんだぞ」

そうだよ（便乗）。

これ以上ガバが広がらないように始祖とホグワーツとダンブルドアに助けを求めたところで、今回はここまで。

ご笑読ありがとうございます。



## 12/? ハリー・ポッターと秘密の部屋、了

ハリー・ポッターと秘密の部屋（トイレ直通）。

——やらないか（ネットミームの旧約聖書）。

前回、ダンブルドアとハグリッドの追放を確認したところで終わりました。今回は二頭の獣を相手取り、一つ目の分霊箱を破壊するという盛りだくさんの内容となっております。スタイリッシュに決めろ♂

今は夏。

ダンブルドアがいなくなったことにより、ホグワーツ中に恐怖が伝染してしまいました。

常に団体行動を強要され、自由に行動することもままなりません。レズちゃんの持っていた透明マント（偽）の効果もとうの昔に切れているため、抜け出すことも不可能です。

「ダンブルドアがいなくなっただけでせいせいしたよ。このまま『穢れた血』の連中も居なくなってくれればいいんだけどねえ。そうは思いませんか？ スネイプ先生」

「これこれ、マルフォイ」

今のホグワーツで心の底から楽しそうにしているのはマルフォイ君くらいです。

魔法薬学の授業中にも、彼は大声でそう吹聴します。

マルフォイ君の言葉に薄笑いを浮かべて返すスネイプ君ですが、はたしてその内心やいかに。

騎士団員であることを隠すために『穢れた血』の罵倒に参加するとか誇らしくないの？（賞賛）

次の授業、薬草学にて。

石化したジャスティン君と仲のいい友達であったアーニー・マクミラン君が謝りに来ました。どうでもいいわ。

風聞が改善した以外の意味を持たない謝罪報告です。適当に受け取っておきましょう。

それよりも大切なのは

「——見て、二人とも。蜘蛛だ」

禁じられた森へ向かう蜘蛛を発見したことです。

夜になりました。



ハリーの透明マント（真）で身を潜めながら、ハリー、ロンと三人で禁じられた森へ向かいます。

いよいよ本年度の「ハグリッドのアニマルクエスト」が開始されます。

今回調教する動物は——アクロマンチュラ！

ハンサムな隼と均整のとれた群れの隊列。

まだ魔法省分類X X X X Xのこの蜘蛛から、わたくしは調教されずに逃げられるでしょうか？（攻守逆転）

実際問題、アクロマンチュラの群れに勝つことは、今のレズちゃんたちでは絶望的です。百歩譲って群の主であるアラゴグ単独であれば勝機もありますが、彼の子供達がいじやうじやいる森の中では多勢に無勢。戦うのは無謀に過ぎます。

Are you you care "Hip of you"  
ああいう勇氣は「匹夫の勇」、本当の勇氣とは別のものだ。

道中ハグリッドの小屋で彼の飼い犬であるフアング君を回収して、禁じられた森にイクゾー！ デツデツデデデ。

鬱蒼とした夜の森。中は沈黙の霧に包まれています。

「ルーモス 光よー！」

ロン君の杖は折れているため、レズちゃんとハリーの杖灯りに頼って進む禁じられた森探検隊。我々は疲れからか、不幸にも黒塗りの高級車に追突してしまう。後輩をかば

いすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは……。

というわけで（意味不明）、かつてウィーズリー家の所有であり、現在では野生化してしまつたフォード・アングリア君とエンカウントしました。

彼は貴重な味方兼逃走手段です。可愛がつてあげましょう。

一歩。二歩。

森の中を進んでいると——なんだお前!?

気がつくと、既に周囲はアクロマンチュラの群れに包囲されていました。

三人に勝てるわけないだろ！（魔法使い）

馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！（数の暴力）

哀れ三人組プラス一匹は逆さ吊り虫責めにされながら、森の奥へと運ばれていきま  
す。

奥には、脚の長さだけで4メートルを超えるようなクソデカ蜘蛛君がいました。

彼こそがハグリッドが製造したテロモンスターの一匹、アラゴグ君です。仲良くしてあげましょう。

「——餌か？ 殺せ」

蜘蛛さんやめちくり〜（懇願）。

ハリーがアラゴグと交渉を行っていますが、無駄です。彼らは同族喰らいをするせいか、餌か否かの判断が希薄です。

彼らアクロマンチュラの一部は、アラゴグ君が命令する限りハグリッドだけには手を出さず、アラゴグ君が死んだ後はハグリッドすら餌にしよと生物です。頭トロールかな？

なので、彼らと話すのは基本的に無意味なのですが。

ここで「秘密の部屋の怪物」についての推理。ピースが頂けるため立ち寄った次第です。ピースは「アクロマンチュラは怪物ではない」、「怪物はトイレで少女を札害した」、「アクロマンチュラは怪物を恐れる」の三つです。

二つ目の情報は「嘆きのマートル」、ひいては「秘密の部屋」の場所情報に結びつきため、ここに来る必要があったんですね。

さて、情報もあらかたいただいたので。

「あのう。それじゃあ僕たちはこれで——」  
今宵はここまでにして帰りとうございます。

当然、帰して貰えるわけがない！ とばかりにアラゴグ君たちが襲いかかってきますが、なんの問題ですか？ なんの問題もないね。

蜘蛛の群れを突っ切って飛び出したるは、けたたましいエンジン音と科学の光。

「早く車に乗ってー！」

黒塗りの高級車が助けに来てくれました。

というわけで本章初の本格的♂戦闘。

イベント戦・「禁じられた森のカーチェイス」です。じゃオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

この戦闘では、黒塗りの高級車の車体を蜘蛛の群れから守りきれば勝利となります。彼らは例によつて魔法生物特有の装甲を持っているため、倒しきることは極めて困難です。

反面、速度は圧倒的にこちらの方が超スピード!? なので方針は――

「ヴェンタス 風よー！ レラシオ 離せー！――セクタムセンプラ 切り裂けー！」

――近づかせない、組み付かせない、速やかに切り離す、の三点！

これさえ守っていればこのイベント戦は余裕です。

文明の利器だから安心！（マグル鼻屑）

これといって特筆すべき事もなく、戦闘終了です。お疲れ様でした。

やっぱりイベント戦は楽でいいですね（無敗）。

この後戦うもう一匹は流石にそうはいかないので気を引き締めましょう。

数日後。

マンドラゴラの収穫準備が整ったことが発表されました。

やったぜ（安堵）。

ランダムイベントのなかでもいっとう最悪なものには、「日記帳ジニーがマンドラゴラを焼き払う」と言うものがあるのですが、流石にそうはなりませんでしたね。

あまりにも低確率なのでチャート上考慮に入れてはいませんが、最大限の安定を求めらるならば頭の片隅に入れておきましょう。

時間が流れて。

いよいよ最終日。「秘密の部屋」に特攻する日が訪れました。

泣いても笑ってもグランドクエスト「秘密の部屋」のオーラスです。尻の穴を引き締めていきましよう。

現在のホグワーツでは、団体行動が強制されています。その為、「嘆きのマートル」に会いに行くのは少し難しいです。

なので、通常プレイ通り、ロックハート君の引率から抜け出しましょう。

せんせー、引率はここまででいいと思いまーす！

……ランダムイベで抜け出せないとか無いよね？

「そうですね？ ううむ……。ええ、いいでしょう。私も授業の準備・確認がありますの

で。気をつけて『魔法史』に向かってくださいね？」

ぺっ、甘ちゃんが！（安堵）

早速トイレに向かおうとしますが――

「その三人！ 何をしているのです！」

マクゴナガル先生に捕まってしまいます。既定路線です。

ここで交渉を行うことにより、ハーマイオニーちゃんのお見舞いに行くことができます。

医務室に着きました。

石化マイオニーちゃんの手の中から、本の切れ端（メモ付き）を入手しましょう。

これには「バジリスクの習性」と「バジリスクの移動手段」という特級の推理ピースが記されています。

極まった叡智、誇らしく無いの？（畏敬）

お前の犠牲は無駄にはしない……。

これによりすべての推理ピースが揃いました。

「秘密の部屋の怪物はバジリスク」、「秘密の部屋の入り口は嘆きのマートルのトイレの中」。

後は部屋に乗り込むだけです！

……と言いたいところなんです。

拡声魔法によって、マクゴナガルがイベントの発生を知らせてきました。先生たちの話し合いを聞いて判明することは、そうです。

「ジニー・ウィーズリー誘拐イベント」です。

あゝよかつたゝ（外道）。

何らかの要因により、ここで違う人間が誘拐された場合、突発的な運ゲーが始まります。

ジニーちゃんというチャート通りのルートであったのは安心ですね。

「——大変失礼しました。授業の準備に手間取っております……」

ロックハート君オツスオツス！

ロックハートの姿を見たフリットウィック先生が、キーキー声で彼に話しだしました。

「ああ、ギルデロイ。生徒がついに『秘密の部屋』に攫われてしまいました。君はどうしますか？」

——。

よ、よろしい。では私が行きましょう！ 部屋で準備をしてきます！

「——そうですか。気をつけて！」

……？

この二人の間で、何らかのイベントが発生していたのですかね？

お前、ホモか？（ガバ認定）

夕方になりました。

「秘密の部屋」に突入します。

と、その前に。

ハリーの提案によって、坑道のカナリヤとしてロックハート君を回収して行くことになりません。

——正直ランダムイベントが発生しているロックハート君を使いたくは無いのですが、今回彼は比較的まともな授業を行っていました。

ピクシー事件や骨抜き事件といったミスを犯していますが、まだまだ彼の風聞は「数々の冒険を成し遂げた魔法使い」のままです。

そんな彼を退けるだけの対案を、レズちゃんには出すことができません。断腸の思いでいきましよう。

立ち位置さえ間違えなければロン君の杖と共に犠牲になってくれますし。ロックハート君の部屋につきました。



……本来ならばすでに部屋は片付いている筈なのですが、いまだに荷物が散乱しています。

ランダムイベの要因が掴めないというのは、辛いもう、サム……（レ）。

「秘密の部屋」の場所がわかっていから付いてきてくれ、とのオーダーにロックハートは、しどろもどろになりながら答えます。

「うー、あー、その……。『秘密の部屋』、そう『秘密の部屋』だが……場所がわかっているといつてもなにぶん——」

あくしろよ。

——いいでしょう！ このギルデロイ・ロックハートが、万事解決いたしましょう！  
ファツ!? クウーン（絶望）。

予想もつかないほどにランダムイベントが捻じ曲がっている可能性があります！

「ロックハート君に発生しているイベントがフリットウィック関連のものである」というのが第一感なのですが、それ以外の可能性も捨てきれません。

まかり間違つて「ロックハートの中身が別人、服従済、分霊の支配下」などであった場合、詰みが確定してしまいます！

……なので正直ここで失神させたい！

でもあまりにも不自然すぎる！

この状況でロックハートを無力化して、彼が白だった場合、リセット級のガバとなりかねません！

まだ舞える、まだ舞えますぞ……。

ロックハート君が白ならヨシ！

ロックハート君が黒でも最速で無力化すればヨシ！ ロン君の杖の犠牲まで可！

偉大なる始祖に祈祷するのです！

マートルのトイレにつきました。

彼女との問答の末、「部屋」の入り口を割り出すことに成功します。

手洗い場の銅の蛇口。蛇の刻印がなされたそれが目印です。

「

ハリーのシューシューという音とともに手洗い場が沈み込み、入り口が出現しました。

というわけでこの魔法使い四人パーティでラスダンにイクゾー！ デッデッデッデ

デ、カーン、デデデデ！

中は非常に暗いです。ルーモス 光よ！

杖が死んでるロン君を除いて、レズちゃんとハリー、それからロックハートが杖で照らしても、数歩先は闇となっています。

順番はハリー、ロックハート、ロン、レズちゃんの順です。

ロックハートの背中にいつでも失神を飛ばせるように警戒して進みましょう。

なんということでしょう！

バジリスクの抜け殻を越えて、最深部までたどり着いてしまいました！

……本格的にロックハート君を撃ちたくなっています。ただ、証拠もなしに撃っては逆にこちらが破滅しかねません。

心臓に悪いので冗談はよしてくれ……。

「ジニー……！」

倒れ伏すジニーの元に、ハリーとロンが駆け出していきます。

「残念だが」

ん？

「その子はもう目覚めない」

声の主は——黒髪の少年、リドル君です。

第一の獲物確認！

彼がハリーと仲良く話をしていているうちに、フィールドを把握します。

『日記帳』——ジニー、もといロン君の近くにありません。

ロックハート——怯えている？ 開心して確かめられないのが不安です。

バジリスク——いまだなし！ 蛇特有の音も聞こえない！

トム・リドル——杖を握っている？ これは彼も戦闘に加わる可能性が出てきました。

「だけど、君は当時はまだ学生だ！ ここにはロックハート先生だっている！」

「——くつく、ハリー・ポッター。君は騙されていることにも気がつかなかったらしい！」

——許してくださいお願いします、なんでもしますから！

「ロックハート。彼はとんでもない無能だ。ホグワーツには到底ふさわしくないほどに。」

授業の前、彼が何をしているか知っているかい？

——フリットウィックに教えるよう指示された呪文を、ひたすら練習しているのさ——  
ありがとナス！

ロックハート君がチャート通り無能でよかつたーって。

これでもう、彼に警戒する必要がなくなりました。

やったぜ！（悟空）

ダンブルドアの不死鳥・フオークスが「組分け帽子」を運んできたところで、いよいよ本章ラストバトルの開幕です！

「ハリー！ 理解する時がきた。」

四人の創始者の中で、真に最強の者が誰だったというのかを——君自身の命で！

グランドクエスト「秘密の部屋」。

クエストボス「分霊箱：トム・リドルの日記帳」。

——じゃオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

戦闘開始とともに、彼はバジリスクを召喚してきます。

バジリスクのヘイトはハリー一択なのですが、問題なのは死の邪眼です。

文字通りバジリスクと目があっただけで確定即死！ 間に何かを介していたとしても強制石化！

正確に言えば、バジリスクの邪眼は魔法的な攻撃ですので、互いの視線が通った段階で即発動します。

例えば閃光魔法を使うことにより一瞬邪眼を潰すことができます。しかしそれで稼

げる時間は一秒以下！ 視力が完全回復せずとも、目を開けているということがトリガーとなつて即死攻撃が成立します。

こんなんじや勝負になんないよ。

なので、イベントが進行してフォークスがバジリスクの目を潰すまで、目をつぶって大人しくしておきましょう。

幸い、トム君はハリーにご執心であるため、こちらから手を出さなければ何もしてきません。

辛い数十秒間。

バジリスクが暴れ回る音と、蛇語だけが部屋の中を支配していましたが。

不死鳥の歌が辺りに響き渡りました。

バジリスクの目が潰れた合図です。

行くぞオラア♂

「マフリアート 耳塞ぎ！」

まずは聴覚、蛇語を潰す！

プリンス本掲載呪文・マフリアート！

バジリスクの魔法装甲に弾かれて完全な効果は発揮できませんが、僅かながらでも聴

覚を潰せます。トム君を介した蛇語による索敵を封じれば、頼れるのは貧弱な嗅覚程度。

ハリーの安全は格段に増すことでしよう！

「――黙って見ていればいいものを、小娘」

盲目のバジリスクの暴走、つまりは乱数行動でハリーが死ぬのは嫌じゃ！

「手慰みだ。相手をしよう」

トム・リドル戦ですが……注意すべきは、ただ一つ。開心術です。

トム君は闇の魔法使い特有の舐めプを行ってくるため、開幕死の呪文、とかいうクソゲーはありません。

ですが、根は臆病である彼は、常にこちらに対し開心術を仕掛けてきます。

ここで始末する以上多少読まれても問題ありませんが、深層まで読まれると速札対象に認定されず。

なので、基本は目を合わせないで専守防衛。こちらの攻撃は当たりこそすれ分霊の彼にダメージはありません。

一応、とある魔法を用いれば「日記帳」を破壊できますが、その代償にこの場の全員が焼死してしまいます。

やはりプロテゴこそ戦いの華よ（ナナカマドの杖）。

頼れる仲間……

ロン、いらん！ 杖のない役立たずはジニーを守っとけ！

ロックハート、どうでもいいわ。精神値を守るために死ぬなら見えないところで死んで、どうぞ。

というわけでハリーがバジリスクを倒すまで。

二刀流の手数に任せて時間を稼ぎ尽くします。

こいついつも耐久戦ばかりしてるな（呆れ）。

盾、強化盾、盾、盾。

盾が間に合わない——自己浮上、身体自由。

強化盾、盾。

蛇語カット——耳塞ぎ。

盾。

ハリーの足場確保——修復。

強化盾——

すみませ〜ん。ズイラ・レストレンジですけど〜。まくだ時間かかりそうですかね〜

？

つと。



そろそろ終幕です。

グリフィンドールの剣を高々と掲げたハリーを、バジリスクが上から噛み頃そうとしています。

このまま獅子剣装備のハリーとバジリスクが刺し違えて、ハリーを不死鳥が蘇生して完全勝利という流れです。

これは完璧なチャートだあ……（恍惚）。

「——あっ」

って足場が崩れてハリーの体勢が——

「——」

男の声が、「秘密の部屋」中に反響した。

桜の杖より飛来する閃光。

魔法を受けた毒蛇の王は——極めて不自然に——硬直する。

それは、バジリスクと刺し違いようとし、不運によって体勢を崩し出遅れたハリーを間一髪救うこととなった。

煌めく銀閃。蛇の喉奥を狙って突き出された白銀の剣。

グリフィンボールの遺産は動きを止めたバジリスクの牙を折り、そのまま蛇の口内から頭蓋にかけて貫く。

時が止まったかのように、「秘密の部屋」の音が消えた。

一瞬のち、ハリーは両手いっぱい力を込めて剣を引き抜いた。と、同時。

支えを失い、力を失ったバジリスクは横ざまに倒れ臥す。ピクピクと痙攣するそれからは、こんこんと命が抜け出るばかり。

——死ぬのだ。バジリスクは、「秘密の部屋の怪物」は。

スリザリンの蛇は、一千年前に別たれた己が主人の元へ、これより旅立つのだ。

ハリーは自身が——闇の生物とはいえ——一匹の命を奪ったことを強く自覚した。思わず彼は右手に握られたグリフィンボールの剣を仰ぎ見る。

獅子の剣には、バジリスクの牙から漏れた致死の毒液が——毒蛇の王が残した命の残滓が絡み付いていた。

少年にとってそれは、ひどく重かった。

「お見事、お見事」

ハリーの意思を引き戻したのは、そのような揶揄い声と、パチパチと言う拍手の音だった。

「流石は有名なハリー・ポッター。創始者の遺産を使ったとはいえ、まさかバジリスクを倒してしまふとは！」

声の主、ヴォルデモートトム・リドルは芝居掛かった口調で話す。

彼の手にはイチイの杖——ジニーの持ち物であったそれが握られていた。

「バジリスクが死んでしまったのは、残念だが、これはこれで都合がいい。

さあ、ハリー。決闘だ。『闇の帝王』と『生き残った男の子』。どちらがより特別か、決めようじゃないか」

瞬間。

ハリーは己が保有する手札から、最も信頼できるカードを抜き放つ。

「エクスペリ——」

「遅い」

だが、それは「闇の帝王」の前では欠伸が出るほどにのろまな魔法であった。

武装解除。ハリーが唱えようとしたそれとちょうど同じ魔法によって、ハリーの持つヒイラギの杖は奪われてしまった。

有言呪文と無言呪文。

魔法使いの卵である少年にとって、その差は重くのしかかった。

分霊は、奪った杖をしげしげと眺めてひとりごちる。

「なるほど、なるほど。どうやら君の母親の護りはあくまで君の身体を直接にしか護ってくれないらしい。」

——さあ、決闘を続けよう。ハリー、君の手にはまだ剣がある。『穢れた血』の母親にふさわしい、マグルの武器だ」

ハリーの手にはグリフィンドールの剣が握られている。

それはバジリスクの息の根を止めるほどの名剣であったが、さりとして魔法使いにいかほどの効力を持つのか。

それでも、ハリーは剣をしかと握って構える。

魔法の杖という「特別」を奪い、手中に収めたりドルは、その様子を見てくつくつと笑った。

「冗談のつもりだったんだが……本気かい、ハリー？ 君が僕に斬りかかる前に、僕は十回は君に呪文を撃てるぞ。何も直接君を傷つける魔法だけじゃない、間に何かを挟んでもいい、魔法から独立した現象を用いてもいい。」

衝撃、襲撃、爆発！ 変身、水流、火炎！

僕は君の護りを越える魔法をごまんと知っている。

——それともまさか、君は本気で『闇の帝王』を倒せると思いい込んでいるのか？」  
嘲笑を浮かべるヴォルデモートに、ハリーは静かに答えた。

「いや、僕一人なら、ちがう」

「だろうな！ さあ、ハリー。君も恋しい『穢れた血』の元へ旅立つ時が来たようだ。安心するといい。君のお友達もすぐに後を追わせてあげるよ！」

絶望を見せつけるように。

分霊は敢えて無言ではなく、有言でもって、何がしかの呪文を唱え始める。

一秒先の死。

それでも、ハリーは信じていた。

「だけど——」

「ラングロック 舌縛り！」

「ハリー、これを！ 日記帳を斬って！」

「——僕たちなら、その通りだ」

——彼の友達を。

少女の放った呪文が、亡霊の舌を搦めとり、その詠唱を僅かばかり遅らせる。赤毛の少年が、近くに落ちた日記帳をハリーの近くに放り投げて——

「待て——」

——放たれる剣撃。

グリフィンドールとスリザリン。

反目し、協調しあつた偉大なる創始者達。二人が残した遺産の力は、ひとりの魔法使  
いの妄執・残響を断ち切つた。

悲鳴をあげて消えゆくトム・リドル。ヴォルデモート

彼の姿を見ながら、ハリーは呟いた。

「僕は一人で戦っていたつもりはない。これからもない」

——トム、君とは違つて。

# 私はマジックではなかつた

分霊箱。

ホークラックスと呼ばれるそれを作るには、己が魂を分断する必要がある。

本来、魂は完全な一体であるものだ。

それを分断するためには、尋常の手段では不可能。

最も邪悪な、悪の極みとも言える行為を為し得なければならぬ。

例えば、殺人とか。

ギルデロイ。

ギルデロイ・ロックハート。

魔法使いにして、探検家にして、冒険家にして、小説家。

「マーリン勲章・勲三等受賞」、「闇の力に対する防衛術連盟・名誉会員」、「週刊魔女・チャーミングスマイル賞五回連続受賞」、エトセトラエトセトラ……。

数々の逸話を持つ、現代の英雄にして——自己愛溢れるペテン師。

そんな彼の「マジック」について騙らねばなるまい。

ギルデロイが自らを特別な存在であると誤認したのは、彼がまだ五歳の時であった。年の瀬近づくと1969年の12月。コーンウォールの片田舎。

空からはしんとみぞれが降っていて、屋外はまさに身を切るような寒さ。

そんな何の変哲も無い日が、ギルデロイ・ロックハートのマジックの始点である。

雪水で滑るレンガの上をおっかなびつくり歩くコートを羽織った三人組。

ギルデロイと彼の二人の姉だ。

この日、ギルデロイの二人の姉達は、自然公園にあるとされる桜を観に訪れていた。

——無論、一般的な桜は春に花開くものである。

しかし、ちょうど前日のワイドショーで「美しい冬桜特集」が組まれていたことは、彼の姉妹には幸運であり、同時にギルデロイにとっては不運なことであった。

美しいものに目がないロックハート姉妹。

その夜、姉妹部屋にて。姉達は互いの顔を見つめ合い、然りとうなづき呟いた。

いこう。

いこう。

そういうことになってしまえば、末弟であり、彼女たちのおもちやであったギルデロ



イには最早どうしようもない。

ギルデロイには桜なぞには毛ほども興味がなかったため、本音を言えばどうでもよかった。

だが残念なことに、彼には姉への拒否権など存在しない。年の差はドーバー海峡のように、彼と彼女達の立場を隔てていた。

さて、そういつた経緯で、彼らは桜が美しいことで有名な自然公園に向かったのだが。前述したように今は冬真つ盛り。

あいにく桜はまだ春に向けてエネルギーを蕾に蓄えている最中。姉達の願望は叶わず、ギルデロイはただ意味もなく寒空の下を連れまわされただけであった。

「咲いてないね、桜」

長姉が残念そうに首を振る。

妹はぶるりと震え、言葉すくなげに寒いねとだけ返す。

しょんぼりとうなだれる姉達。

あまりの悲しみように、五歳の弟がどこかに行かないように握りしめていた手が外れてしまう。

自由を得たギルデロイは、何も考えずに桜の元へ走り出した。姉達が止めるのも聞かずに。

果たして彼は桜が見たかったのか、姉たちの願いを叶えたかったのか、はたまた自己の能力を誇示したかったのか。

当時は振り返っても彼は自身が何を考えていたのかわからない。

——ただ、できる、という感覚だけが全身に染み渡っていた。

常識も道理も吹き飛ばして、花が咲く、という確信を抱いていた。

彼の血流を駆け巡るものを振るいたいと感じていた。

根拠のない全能感に押されて、ギルデロイは木の幹へとそつと触れる。

——瞬間。

ギルデロイの小さな掌から、春の陽気が流れ出した。

季節を数ヶ月先取りしたそれは、彼が触れていた桜の木を騙し尽くし、12月というのに花を満開にさせる力を持っていた。

それは、まさに魔法のようだった。

「わあ！　ねえ、ギルデロイ。それって、どうやったの？」

何をしたかはわからない。

だが、誰がしたかはすぐにわかった。

弟だ、自分だ、ギルデロイだ。

凄く凄く抱きつかれる中、奇妙な快感をギルデロイは覚えた。

思う存分季節外れの花見を楽しんだ後、彼らは家路へと歩き出す。

自宅に着くや否や三人は、母親に霜に濡れた身体をタオルで拭き取られた。

ひとしきり温まった後、夕食の時に、姉弟は彼らが体験した魔法的な出来事を両親に報告する。

冬に桜が咲いた。しかも、ギルデロイがなんらかの超常によって咲かせた。

彼らが話す、ともすれば子供の戯言と断じられてもしようのない非常識。

それを彼らの両親は大真面目に受け入れた。

その上で、彼らの母は耳を疑うようなことを口にする。

「ああー、ギルデロイー！ ママは嬉しいわ。あなたが私の力を受け継いで生まれてきてくれて！

——実はね、ママは昔、魔女だったのよ」

なんと、母親は魔女であったというのだ！

その日以来、彼らの生活は一変した。

「さあ、ギルデロイ。たあんとお食べ。魔法使いは身体が資本。ホグワーツでも三食しっかり食べて、立派な魔法使いになるのですよ。」

——ああ、お前達は適当に食べておきなさい」

彼らの母は、あからさまなまでに、ギルデロイを依怙鼻息し始めたのだ。

ギルデロイの母は、いわゆる血を裏切った魔女だ。

彼女は魔法使いの家系に生まれ、魔法使いとしての教育を受けた純粋な魔法使いであり。マグルの夫と衝撃的な愛を紡ぎ、自身の魔法を捨ててまで彼と添い遂げた女でもある。

全てを捨てても愛を選ぶ。

そう語れば美談であるが、実際のところはもつと俗物的な話であった。

彼女が夫に惚れた点はどこだろうか？

性格？ 能力？ 資産？ 直感？

否、一言で言えば、顔である。

当時のロックハート氏があまりにもチャーミングでハンサムであったために、彼女は一目で溺れてしまったのだ。ちょうど愛の妙薬、アモルテンシアを蜂蜜酒に盛られたかのように。

彼女自身がアモルテンシアを夫に対して使わなかったのは、ひとえに彼女が真つ当な感性と倫理を持っていた故の幸運だろう。魔法的なあれこれを全く用いなかったかどうかは、彼女だけが知っている。

とはいえ、きつかけはどうあれ、三人の子供を授かつて幸せに暮らしているならば、十分美談と言えるだろう。

だが、話はここでも終わらない。

マグル・魔法族共に——概ね——平等に訪れるもの。

時の流れとは実に残酷なものである。

かつては百人が百人振り返ったロックハート氏の美貌も、加齢につれ七十人、五十人、三十人……と劣化し始めていた。

もちろん、それで彼の妻から愛が失われたとは言わない。長年の連れ添いは、彼らの間に確かなものを築いていた。

……いたのだが、まさにそれはそれ、これはこれ、である。

魔法使いにとって、魔法とは身体機能の一部である。手であり、足であり、血であり肉だ。

マグル生まれが魔法に目覚めた時、彼らの世界が拡張するように、魔法使いが魔法を失った時、彼らの世界は縮小する。

魔法。

彼女の心のどこかは、失った半身を希求して止まない。

そんな彼女の願望を、

「——ママ。今日ね、不思議なことがあったんだよ！」

彼女の息子、ギルデロイは見事に叶えてくれたのだ。

彼女の偏愛が、息子だけに与えられたのは——末路を考えれば姉弟皆にとつて不幸だった。

姉のみならず、ギルデロイにとつても。

母の過剰なまでの愛を受けて、すくすくと育つギルデロイ。

父親からの遺産の賜物か、彼の相貌はだんだんと美しくハンサム顔になっていく。

母親から遺伝した魔法力は、翳りを見せることなく、より強大に育つていった。

そんな彼に歓喜した母は、より一層ギルデロイに愛を注ぐ。彼女の目には、最早ギルデロイの二人の姉、つまりは自身の娘は映っていない。

夫と自分の象徴を受け継いだ息子ただ一人にのみ、彼女の心は向けられていた。

「ギルデロイ、お前は特別なんだ——」

毎日のように垂らし込まれる甘言。

それを聞かされ続けたギルデロイの自身に向けた虚像は日に日に膨れ上がっていった。

自分には、誰にも負けない美貌と魔法がある。

それさえあれば、他人から認めてもらえる。

他人から認めてもらえることは、酷く快感だ。

だから、他人に認められたい。

ギルデロイ・ロツクハートがギルデロイ・ロツクハートたる自我を得たのは、まさにその時である。

ホグワーツから放たれたフクロウが彼らの家に降り立った時。

ギルデロイと母は狂喜乱舞した。どこか白けた顔をした姉達を放置したままで。

喜びが冷め上がる前に、母子二人は「漏れ鍋」を通じてダイアゴン横丁へと向かう。

母親が結婚して以来久方ぶりに、彼女の杖を抜き放ち、石壁をとんと叩けば――

「わあ――」

そこに広がっていたのは、女にとっては懐かしき、少年にとってははじめての  
魔WIZARDING法の世WORLD。

慣れ親しんだように横丁を案内する母を見て、ギルデロイは自分の母が特別であること、彼女の血と魔法を引いた自身もまた、特別であると感じた。

「なんとも素敵ですね、坊ちゃん」

ローブを買おうと立ち寄った呉服屋にて、マダム・マルキンなる女主人には見目麗し

いと讃えられる。

それはおためごかしだったのか本心だったのか。定かではないが、彼と母親は大いに満足した。

親子は足取り軽く次の店へと歩みを進める。

次に買うのは魔法の象徴。杖だ。

母が勧めたその店は、「オリバンダーの店」と言った。「西暦より昔から存在する高級杖メーカー」を標榜するかの店。

「例のあのお方」の生誕より古くから存在する店というのは、マグルとして育てられたギルデロイにはこの上なく神秘的に映った。

「いらつしやいませ」

店に入ると、偏屈そうな老人がちよこんと椅子に座っていた。

彼——オリバンダーという老人は、母の昔馴染みであったのか挨拶もそこそこに、何やら話を始める。

ギルデロイがキョロキョロと店内を見渡して少し。

「それでは、お子さんの杖を選びましょう——」

ギルデロイの杖選びが始まった。

はじめに握らされたのはトネリコの杖——途端、不快感。自分には合わないとギルデ



ロイは直感する。オリバンダーもそう思ったのか、すぐにギルデロイからひったくつた。

次に渡されたのは黒クルミの杖——うんともすんとも言わない。ギルデロイにとつてはただの棒切れと変わらなかつた。

ああでもない、こうでもない。

次々と杖が飛び交い、ギルデロイが老人の審美眼に疑念を覚え始めた時——

「これですな」

ピタリ、と一本の杖がギルデロイの手にはまつた。

彼のマジックの始まり、桜の木を削つてできた彼だけの杖。

ドラゴンの心臓を素材としたそれは、そこはかとなく彼に英雄性を感じさせる。

「おお、おお、桜の杖とは。ロックハートさん、桜の杖はこの店では希少じゃが、極東では偉大なる魔法使いの杖として尊敬されておりますじゃ。

——己が心を律する限り、その杖はあなたに伝えてくれるでしょう」

魔法の城・ホグワーツ。

キングズ・クロスから旅立つた彼がたどり着いたのは、まさしく魔法使いの総本山。

そこにいたのは、彼が見たこともないほどに大勢の魔法使いたち！

彼よりも歳をとり、腕を磨いた子供も掃いて捨てるほどいる。

それでもギルデロイは自身がまさに天才的な英雄であると思ひ込んでいた。

何故なら、彼が知っていた唯一の魔女がそう吹き込み続けていたから。

叡智の寮・レイブンクローに配属された時にも、ギルデロイは自身の持つ魔法の才が認められたと自己認識した。

ここでも、自分は特別であると疑わなかった。

——結論から言えば、それは誤りであった。

ホグワーツではギルデロイは——やや優秀であるものの——凡才の域を出ず、無名で、少し顔のいい程度の、ただの子供であった。

——過去。例えばトム・マールヴォロ・リドルのように。

——未来。例えばハリー・ジェームズ・ポッターのように。

真の意味で特別な、「選ばれし者」などではなかった。

それはギルデロイにとっては受け入れがたい事実であった。

認められない。

ギルデロイは、将来の彼の彼の逸話を周りの生徒に吹聴して回った。

「僕はホグワーツにいる間に『賢者の石』を作る——」

「卒業したらまずはクイディッチのイングランド・チームにキャプテンとして招かれて、そのままワールドカップに出場するつもりさ——」

「ゆくゆくは魔法大臣になる予定だよ。もちろん最年少で——」

虚飾、虚像、虚栄心。

初めはただの口から出まかせだった。

彼自身、真実ではない嘘だとわかつていた。

ところが、一番身近でギルデロイ・ロックハートの逸話を聞き続けるうちに、

「そうだ、僕——私は特別な魔法使いなんだ——」

いつしか彼自身が、自らの嘘に騙剣されていた。

自分を特集するためだけの、校内会報誌の刊行。

魔法を用いたクイディッチ・ピッチへの巨大サイン。

「闇の印」を彷彿とさせる、自身の肖像を模した印の打ち上げ。

自分宛の八百通ものバレンタイン・カードの配送。

ギルデロイは、誰もやらないような「偉業」に精をだす。

皮肉にも、それはギルデロイの顔と名を校内に知らしめることとなった——勿論、好意的な視線は向けられなかったが。

廊下を通る度に、ヒソヒソと誰かがギルデロイの事を噂する。

ギルデロイの元を、多くのクラスメイトが離れていく。

そんな風聞ではあったが、ギルデロイは概ね成果に満足していた。

前者は「自らの魔法の才を讃えている」、後者は「劣等感に刺激されたものたちが、離れていった」などと誤認して。

ギルデロイを見ていたのは、何も生徒だけではない。

入学当初は「やや優秀」と評価していた教師たちも、いつしか「自惚れがちな厄介な生徒」と評価を改め、ギルデロイに素っ気なく接していた。

たった一人を除いて。

「——ギルデロイ、忘却呪文はこう使うのですよ！」

「——ええ、ええ！ フリットウィック先生！ 勿論できますとも！」

3……2……1……オブリビエイト 忘れよ！」

「流石ですね、ギルデロイ！」

レイブンクロー寮監。フィリウス・フリットウィック。

「すべての生徒が試験に合格できるように教えてくれる」と称される彼は、たとえばギルデロイであつても見捨てなかつた。

彼は、生徒をその気にさせるのが得意だ。

上手くできた生徒にはお菓子を上げる、魔法の苦手な生徒でもわかるように根気強く教える、居眠りしがちな生徒のためにユーモラスに……。

彼の授業は、全ての生徒が魔法を使えるように、をモットーに構築されている。

その能力は、ギルデロイという「問題児」にも遺憾無く捧げられた。

時には挑発し、時には煽て、時には協力を仰いで。

ギルデロイが気持ちよく学べるように、フリットウィックは場を整える。

七年の献身。

長いホグワーツ生活の中で、さしものギルデロイも、フリットウィックの事はすっかり信頼していた。

「——卒業おめでとう、ギルデロイ」

「ありがとうございます、フリットウィック先生！ 楽しみにしておいてください。すぐに吉報をお届けしますよ！」

卒業の際、彼が礼を尽くしたのはフリットウィックだけだった。

卒業の際、彼のことを祝ったのはフリットウィックだけだった。

ホグワーツを出て、ギルデロイが取り組んだ一つ目の「偉業」。

それは「輝かしく輝く髪」を約束する整髪剤の開発である。

ギルデロイの持つ才の一つ、輝く美貌をより際立たせるためのマジック・アイテムの製造であった。

学生の頃より密かに着手していた研究開発。

卒業後、身軽になったギルデロイが手を尽くして作り上げたそれ。実際に使ってみれば、なるほどなるほど。

確かに素晴らしい効能の整髪剤であった。

しかし、これには無視できない問題があった。

整髪剤は材料にオカミーの卵の黄身を用いて作られるのだが、卵の供給に難があった。

オカミーとは、魔法省分類XXXの、蛇に似た魔法生物である。

近づくものに対して非常に狂暴に襲いかかるかの生き物の卵は、外殻が純銀でできていた。

価格と入手難度。

オカミーの卵は整髪剤という量産品に用いるには、あまりにも釣り合わない代物であった。

その上、魔法界には既にフリーモン・ポッターが開発した「スリーク・イージーの直毛薬」のような魅力的な競合商品が存在した。

ギルデロイの商品は、むやみやたらと高いだけで何の価値もなかった。失敗。

ギルデロイのプロジェクトは、無残な結果に終わる。

彼は二の矢を持つておらず、それどころかオカミーの卵を調達した浪費で、資金すらも失っていた。

自暴自棄。

「——いらつしやい」

さんさんばらにうらぶれたギルデロイは、ファイア・ウイスキーでも引つ掛けようと、場末の酒場へと入っていく。

駆けつけ一杯。

ギルデロイがチビチビと火酒を舐めていると、何やら背後から話し声が聞こえてきた。

「——私はねえ、あの泣き妖精『バンシー』と友達なんだよ！」

なんて事はない。老婆の戯言であつた。

誰もが酒に酔つた老人のふかしであるとか決め込んで、ろくに話を聞こうともしない。

だが、たった一人——

「——ああ、お婆さん。相席いいですかね？」

——藁にすがった男がいた。

その老婆の話は、真に迫っていた。

夫に先立たれた際に、バンシーの泣き声が聞こえてきた事。泣き声の元へ向かったら、ちょうどバンシーと鉢合わせた事。なんだかんだ意気投合して、一夏の間仲良く過ごした事。

微に入り細を穿つ語り口。

話のうまさもさることながら、バンシーとの「偉業」もまた、嘘か真かは別にして、筋道だつて信用に足る内容だった。

ギルデロイが酒を奢れば奢るほど、老婆は口を滑らせる。聞き取った話のメモは、いつのまにか数十枚を超えていた。

「——そういうわけで、わたしやあいつと仲良くなったんだ」

気持ちよく話し終えて。老婆は夢の世界へと旅立っていった。

気がつけば、他の客は皆店からいなくなっていて、バーテンもまた店の奥に引つ込んでしまっていた。

あたりには、ギルデロイと眠る老婆しかいない。

ここで、何が起こっても、ギルデロイにはわからない。



話は変わるが、ここで一つの邪法について紹介したい。

分霊箱。

ホークラックスと呼ばれるそれを作るには、己が魂を分断する必要がある。

本来、魂は完全な一体であるものだ。

それを分断するためには、尋常の手段では不可能。

最も邪悪な、悪の極みとも言える行為を為し得なければならぬ。

例えば、殺人とか。

——ところで、「最も邪悪な行為」とは何だろうか。

殺人？

なるほど、そうだろう。分霊箱を作るものは、当然ながら命に執着している。命を奪うことが「最も邪悪な行為」と認識しても不思議ではない。

だが、死を受け入れたものにとって、殺される事はある種の慈悲となる場合もある。彼らにとっては、殺人は「最も邪悪な行為」とは言えないだろう。

「最も邪悪な行為」とは、絶対的・客観的なものではなく、相対的・主観的なものである、という解釈をするならば。

ギルデロイ・ロックハートにとって、「最も邪悪な行為」とは何だろうか？

誰よりも名声を求めた彼にとつて。

誰よりも有名になりたかつた彼にとつて。

誰よりも褒めてもらいたかつた彼にとつて。

——「最も邪悪な行為」は、「誰かに忘れられること」である。

「オブリビエイト　忘れよ！」

——何処かで、魂の碎ける音がした。

引き換えに、どこかの誰かが、一つ目の「偉業」を成し遂げた。

それからというものの、ロックハートは毎年のように「偉業」を成し遂げていくこととなる。

一つ目の「偉業」の際には夜も眠れぬ状態であつたが、二度、三度と繰り返し、多くの人々の賞賛を浴びるにつれ、彼の良心が削れていく。

「偉業」に用いられる彼の魔法は先鋭・純化して、研ぎ澄まされていくこととなつたが、反面他の魔法の才は急速に失われていった。

それは代償のようであつた。

例えば、とある闇の魔法使いが、父親譲りの美貌を失つていったように。

七つの「偉業」。

魔法的に最も強力とされる数の「偉業」をこなした時。

ギルデロイは誰もが認める天才的な英雄となっていた。

「マーリン勲章・勲三等受賞」、「闇の力に対する防衛術連盟・名誉会員」、「週刊魔女・チャーミングスマイル賞五回連続受賞」、エトセトラエトセトラ……。

各界が彼を認めていた。

それでも、ギルデロイの欲望は尽きなかった。

ギルデロイが次に目をつけたのは、彼に比肩するであろう有名人。

ハリー・ポッターであった。

彼を新たな「偉業」とすることは流石に不可能ではあるが、彼を導いた、とすればより自身の名声が高まる。

ロックハートは、彼を教える機会を得るために、hogwartsのDADAの教授職を志願した。

それは、なんの障壁もなく受け入れられた。いつそ、奇妙なまでに。

奇妙。

hogwartsに戻った後も、その思いはますます強まることとなる。

ホグワーツ教授の多くが、筆舌しがたいが、ギルデロイに対して妙に親切であり、甘いのだ。

とはいえ、彼らがギルデロイのファンであるというわけではないだろう。

スプラウト教授。「暴れ柳」損傷の修復を名乗り出た際には、ギルデロイの参加を拒絶した。頭ごなしにはなくやんわりと。

マクゴナガル教授。厳格な教師である彼女であったが、ギルデロイの失敗を過剰に咎めようとはしなかった。それどころか、新任である彼に熱心に指導した。

スネイプ教授。彼は他の教師とは違ってギルデロイに無関心であった。好んでも嫌つてもいない。だが、DADAの職を狙っている意地の悪い教授、という割には、なんとというか手緩かった。

何よりも、フィリウス・フリットウィック。

彼はギルデロイに毎日のように話しかけてきた。

「ああ、ギルデロイ！ 『雪男とのゆっくり一年』、読みましたよ！ あれはいい本でした。滑倒呪文の選択は見事でした」

特に雪男を撃退するシーン！

フリットウィックは会話の際、必ず彼の本から一つのシーンについて話す。

例えば縛鎖呪文で小妖精を捕獲するシーン。

例えば滑倒呪文で雪男を撃退するシーン。

ギルデロイの「偉業」は、実際にノンフィクションの確かな「偉業」だ。

小説のように加工されているとはいえ、学ぶべきところは多くあった。

ギルデロイは、彼の話を聞いた後、自身の「偉業」について振り返り、それを授業に用いた。

これにより、彼はホグワーツ教授として、それなりに認められる存在となった。

生徒の信頼と、同僚の親切。

打算なきそれは、ギルデロイのほつれた魂をゆつくりと繋ぎ合わせていった。

秘密の部屋は開かれたり。

継承者の敵よ、気をつけよ。

「秘密の部屋」事件が起こった時、ギルデロイは内心怯えていた。

正直逃げ出したとも思っていた。

だが、彼は半純血であり、マグル出身者ではない。

社会的にも知られていたし、まぎれもない事実である。

一応、彼の安全は保障されていたのだ。

命の危険とホグワーツを逃げ出した時に失われる名声。その二つを天秤にかけた時、名声が優った。

ギルデロイはホグワーツに残留する。

マグル生まれしか襲われない。

その法則がある限り、自分は安全だ。

生徒が何人石になろうとも、ダンブルドアが追放されようとも。

そう思い込んでいた。

それは、唯一絶対のルールではない。

ジニー・ウィーズリーが「秘密の部屋」に攫われた。

彼女は由緒正しい純血の生まれであり、ギルデロイよりも安全なはずの存在であった。

「——大変失礼しました。授業の準備に手間取っております……」

マクゴナガルの招集に応じてギルデロイが駆けつけた時、ホグワーツ中の教授が集まっていた。

彼がキョロキョロと見渡すと——いた、フリットウィックだ。

遠く小鬼の血を引く教授は、ギルデロイに問いかけた。

「ああ、ギルデロイ。生徒が『秘密の部屋』に攫われてしまいました。君はどうしますか？」

沈黙。

答えられない。

正直に言えば、今すぐにも逃げ出したい。

だが、それではギルデロイ・ロックハートの虚飾が剥がれ落ちてしまう。だから、答えられない。

やつの事でギルデロイが口にしたのは、先延ばしの言葉だった。

「よ、よろしい。では私が行きましょう！ 部屋で準備をします！」

「———そうですか。気をつけて！」

フリットウィックは笑顔で答えた。

あたりからほっと息をつく音が聞こえた。

ギルデロイは背を向けて教授たちから逃げ出した。

———ひどく、惨めであつた。

部屋に戻つても、結論は出ない。

引くべきか、残るべきか——進むべきか。

彼が真に「偉業」を成し遂げたものならば、迷わず進むだろう。

だが、ギルデロイには選べなかつた。

彼がホグワーツで一年間を過ごす前だったならば、迷わず引いただろう。だが、ギルデロイは選ばなかった。

何も選べないギルデロイ。

そんな彼を訪ねたのは、三人の学生であった。

ハリー・ポッター、ロナルド・ウィーズリー、ズイラ・レストレンジ。

才気を感じさせる、三人の若人であった。

ギルデロイが教員として彼らを咎める前に、三人は誰とも言わず口火を切って話し始めた。

「先生。僕たち。知っているんです。

——『秘密の部屋』の場所も、怪物の正体も！」

——背筋が凍った。

嘘だろう？ そういった想いを込めて、ギルデロイが訊ねるが、帰ってくるのは理路整然とした回答。

ギルデロイがかつて老婆から聞いた時のような、「偉業」の匂いがした。

だが、それはまだ達成されてはいなかった。

ギルデロイは真の「偉業」を果たしたことがない。

ゆえに、ギルデロイは選択できない。



「うー、あー、その……。『秘密の部屋』、そう『秘密の部屋』だが……場所がわかっているといつてもなにぶん——」

煮え切らないギルデロイ。

少年少女は、そんな彼を急かすように見つめてくる。

それは、ギルデロイという虚像の英雄を信頼した目だった。

同時。

それは、ギルデロイには見覚えのある目だった。

「偉業」を成し遂げた魔法使いたちが浮かべていた、自信に満ち溢れた目であった。

「——いいでしょう！ このギルデロイ・ロックハートが、万事解決いたしましたよう！」  
何故、そう答えたのだろうか。ギルデロイにもわからない。

しかし、ギルデロイは選んで進んだ、それだけは間違いない。

「秘密の部屋」についての生徒たちの予想は、まるつきり大当たりであった。

場所も、怪物の正体も。

『TOM MARVOLA RIDDLE』

——ただ一つ、予想から外れていたのは、

『I AM LORD VOLDEMORT』

「秘密の部屋」を開いた犯人についてだった。

「例のあの人」。

それは、ギルデロイにとっても恐怖の存在だ。バジリスクなんてものよりも、よっぽど恐ろしい。

具現化した死の象徴であった。

ギルデロイには何もできない。

立ち向かうことも、逃げ出すことも、何もかも。

ちようど蛇に睨まれた蛙のように。

「こつちだ、トム！」

「ロン！ ジニーをよろしくお願いしますわ！」

「杖さえ折れてなきや……！ 二人とも、ごめん！」

対照的に、三人の子供は勇猛果敢に挑んでいく。

ハリーはバジリスクと一騎打ちに臨み。

ズイラはトム・リドルとバジリスクの分断を図り。

ロンは気絶した妹を戦いの余波から守るため、己が身を危険にさらす。

無謀としか思えない行為だった。

それは、グリフィンとレイブクローの資質の差だろうか？

ギルデロイにとつてはそうは思えなかった。

彼らが行なっていることこそが、「偉業」への第一歩なのだ。

彼らの「偉業」と比べれば、ギルデロイの手にした「偉業」は、ひどくちつぽけなものに思えた。

否！

ギルデロイの「偉業」——彼が奪ってしまった「偉業」。

きつとそれは、バジリスク討伐という「偉業」とも、なんら遜色ないものであっただろう。

だが、それは最早失われてしまったのだ。忘れられてしまったのだ。

ギルデロイ・ロツクハートが忘れさせてしまったのだ。

こんなにも凄いことだったなんて。

こんなにも苦しいことだったなんて。

こんなにも恐ろしいことだったなんて。

——話だけではわからない、実感を伴う体験。

ギルデロイは、何も知らなかった。知らずに他者の「偉業」を愚弄し続けていたのだ。老婆の「偉業」を奪ってから十年近く。

初めて、ギルデロイは己が行いに後悔した。

杖を所有してから二十年近く。

初めて、ギルデロイは己が虚飾を心から恥じた。

——己が心を律する限り、その杖はあなたに応えてくれるでしょう。

並外れた自制心と精神力——とまでは口が裂けても言えないが。

桜の杖が、ギルデロイ・ロツクハートを初めて認めた瞬間であった。

時は止まらない。

ギルデロイが悩む間にも、無情にも戦況は悪化していく。

ふと視線を上げれば、ハリー・ポッターが今まさにバジリスクに飲み込まれようとしていた。

恐らくは手に持っている剣で刺し違えるつもりであろうが、それでも重傷——いや、死は避けられないだろう。

叡智の察には似つかわしくないことではあったが。

ハリーの危機を見た途端、考えるよりも先に、ギルデロイは杖を抜き放っていた。

彼が選択したのは、彼の持ちうる中で、ある意味で最も慣れ親しんだ切り札だ。

「——オブリビエイト・マキシマ！ 完全忘却せよ！」

桜の杖から放たれた、ギルデロイが唯一誇れる魔法。

閃光は「秘密の部屋」の闇を切り裂いて進み。

バジリスクの強大な魔法抵抗を貫いて、かの毒蛇の王の思考、行動、所作、本能。

その全てを、文字通り完全忘却させてのける。

——それは、ある意味で一つの「偉業」であった。

「秘密の部屋」事件は解決した。

バジリスクも、「例のあの人」も、ハリーたちの手によって打ち倒された。

「ロックハート先生。ありがとうございます。あの時魔法で助けてくれなかったら、死んでいたかもしれません」

不死鳥に連れられて「秘密の部屋」を脱出する際、彼は少年に感謝された。

ジニー・ウィーズリーを連れ帰った際、彼女の両親に礼を言われた。

同僚たちにも褒め称えられた。

嬉しかった。誇らしかった。

きつと、最初からそれで、それだけでよかったのだ。

「——寂しくなるのう」

校長室。

ギルデロイ・ロックハートは、今世紀最大の魔法使い、アルバス・ダンブルドアと向かい合っていた。

机の上には両断された日記帳と——ギルデロイの辞表が置かれていた。

「どうじゃ、ギルデロイ。もう一年やるつもりはないかね？」

「いえ、校長先生。私にはやるべきことがあります」

「ほう？　新しい本を書くつもりかね？　タイトルは、そう、『バジリスクと——』」

男は手を挙げて、老人を制した。

「——本当は、分かっておられるのでしょう？」

老人は、擲揄うような口調から一転。威厳ある態度へと変わった。

「うむ、知っておる。君が多くの罪もない魔法使いの記憶を『忘却』させたことは。

——そのうち、二人はわしの知り合いじゃ」

やはりそうか。

ギルデロイは、 Hogwーツ教師から感じる違和感について、その理由の一端を知った。だが、腑に落ちない点もある。

何故、ダンブルドアは彼を魔法省に突き出さなかったのか。

何故、ダンブルドアは彼をホグワーツで受け入れたのか。

意を決して、ギルデロイはそれらを校長に問いかけた。

「ホグワーツでは助けを求める者には、必ずそれが与えられる。

——それは、教師にとつても例外ではない」

そう語る老人の顔は、年相応に弱々しく見えた。

「君が教授職を希望してきた時、今度こそは助けてやりたい。そう思ったのじゃ」

「ギルデロイ！」

ひとり、ひっそりとホグワーツを出て行こうとする彼を呼び止めたのは、小鬼の血引

く男だった。

「これはこれは、フリットウィック先生。挨拶もできず、申し訳ございません」

「いや、いいさ……」

沈黙。

両者ともに言葉が見つからなかったのか、まごつくばかり。

永遠とも思えたそれを破ったのは、教師であった。

「——ギルデロイ、君はこれからどうするつもりだね？」

答えは決まっていた。

「——自首しますよ」

フリットウィックが息を飲む。

構わずギルデロイは続けた。

「私は取り返しのつかないことをしてしまいました。アズカバン行きは避けられませんが、避けるべきではないでしょう。」

だから、最後に、生徒の皆さんに私が教えられることは、これだけです。

——何をすべきでないか、どんな人間になるべきでないか、ということを」

最後に、ギルデロイは名残惜しげにホグワーツ城を見る。

魔法の城は、彼が初めて訪れた時と変わらず、不思議のままであった。

「お世話になりました」

その後の顛末を語ろう。

結論から言ってしまうえば、ギルデロイ・ロックハートの自首は退けられてしまった。

一つ、全ての推定被害者の記憶が修復不可能なまでに消去されており、ギルデロイによる犯行の立証が困難であったこと。

一つ、ギルデロイ・ロックハートにマーリン勲章を授けた某大臣が、責任問題を恐れ



て、自身の保身に走ったこと。

一つ、最新の「偉業」であるバジリスク討伐は、疑いようもなく真実であり、ホグワーツ関係者の多くが情状酌量の嘆願を求めていること。

一つ、ハリー・ポッターの命を救ったこと。

これらの積み重ねにより、ギルデロイは己が罪に向き合う機会すら奪われてしまった。

紆余曲折の果て。

現在、ギルデロイは聖マンガ魔法疾患傷害病院のヤヌス・シツキー病棟で働いている。いうまでもなく、彼は癒者ではない。だが、とある魔法について、彼は誰よりも知識を保有していた。

この病棟には、彼の得意分野と関連する患者が多く訪れる。

ギルデロイは、失われた記憶を復元する研究に携わっていた。いずれ、彼が奪ってしまったものを、取り戻すために。

その傍らで、彼は癒者の手伝いもしている。

「ロックハートさん！ この患者さんをお願いします！」

ギルデロイ・ロックハートはマジックではなかった。

「おや、おばあちゃん。どうしました？」

ん？ 痛い？ いえいえ、気のせいでしょう。ほら、私の顔を見てごらんなさい？」  
全ての虚飾が取り払われた今、彼に残ったのは、  
父親譲りの美貌と。

「きつとすぐに、痛みなんて忘れてしまいますよ」

母親譲りの――

「そうれ、3……………2……………1……………」

――オブリビエイト 忘れよ！

――彼だけの「偉業」<sup>マジック</sup>だ。

## ハリー・ポッターと謎の囚人編

## 13 / ? 登校準備まで

皆様、お久しぶりです。緊縛師のズイラ・レストレンジです……。本章は、a s s がバガバンに投獄されている純朴中年、シリウスを調教したいと思えます……。それでは、シリウスが監禁されている部屋へ参りましょう……。

……ちよつと待つて!? シリウス・ブラックが脱獄しとるやん! どうしてくれんのかこれ。

まつすぐ自分の構想は曲げねえ、それが俺のガバチャーだ、なRTA、はくじまくるよ。

前回、グランドクレスト「秘密の部屋」を無事閉幕させました。第一の分霊箱「トム・リドルの日記帳」の破壊にも成功し、残る分霊箱の数は既に存在する五つとまだ生まれていない蛇の合計六つです。この調子でいきますよ〜いくいく。

さて、嬉し恥ずかし、リザルトタイム!

最初に取り上げるべきは、ジニー・ウィーズリーについてでしょうか。救出したジニーですが、五体満足、問題ありませんでした。やったぜ。

その結果、無事にハリーに対して惚れ込みました。些細な違いとしましては、ロン及びレズちゃんへの好感度が目に見えて上がったという点でしょうか。チャート通りに進めば、ジニーは最終決戦における固定メンバーの一人です。必須ではないにせよ、重要な肉壁。適度に鍛えておきましょう。

本来ならばハリーの所属に関する悩みが解決するイベントがあるのですが……。これについてはそもそも発生すらしていません。自分よりも蛇寄りのレズちゃんがいたからです。なので飛ばします。

散々悩ませてくれたロックハート君については、これにてお役御免！

お辞儀様の呪いによって、通年でのDADA教授としての所属が不可能となっており。ます。なので、ロックハートともこれにてお別れです。適当にのたれ死んどいてください。

と、ここまではチャート上重要でない事柄について触れました。

ここからは今後に関わる内容です。

まずは分霊箱「トム・リドルの日記帳」についてです。

これについて、少々問題が発生してしまいました。

というのも、本来であればその残骸はルシウス・マルフォイに回収されることになっていました。

ですが今回のプレイにおいては、どうやらそうはなっていないようです。

ハリーの話によれば、ドビー閣下の解放イベント時に日記帳を囿として用いなかったそうです。不思議ですね〜（すつとぼけ）。

未確認事項ですが、恐らく日記帳はまだダンブルドアが所持していると思われまふ。いったい現在の彼の Greater <sup>よ</sup> <sup>大</sup> <sup>き</sup> <sup>な</sup> Good <sup>の</sup> 値はどうか？ 頭の片隅に留めておきましょう。

次に「グリフィンボールの剣」についてです。

これについては、問題なく「バジリスクの毒」を吸収したようです。

実のところ本チャートではそこまで出番はないのですが、手札は多いに越したことはありません。リカバリー手段の一つとして考えておきましょう。

不穏な要素が散見されますが、RTAは続行します（ゴブリン銀の意思）。

既プレイの方ならお分かりでしょうが、本ゲームは、経過年数並びにプレイ履歴によつてランダムイベントの発生率が変わる仕様となっております。キャラクターが過去・現在に重大な事件を起こせば起こすほど、未来の事象が変動する、というリアル志向な仕様です。

現在レズちゃん生誕より十三年近く、プレイ方針もグランドクエストへの積極介入でネームドキャラとも友好を深めている。こんな形であれば、一切合切全てをチャート通りに進めることそのものが無理筋です。

ここからは、グランドクエスト毎の確定イベント、そこに向けたチャートを指針に、乱発するランダムイベントを乗りこなす作業が待っています。冗談はよしてくれ……  
(絶望)。

恐らくはこれが定型的な100%RTAが流行らなかつた理由ではないでしょうか。自由度の高さとランダム要素が災いして画一的なチャート遵守がほぼ不可能となつて  
いるわけですね。

構築したチャート上の動きとしても、ここからのプレイはほんヘルートをガン無視していくため、既存ルートの崩壊は加速していきます。

その為、「神秘部の戦い」での終了が不可能となる致命的な事柄が起こるまで、リセツトの基準がやや甘くなります。ご了承ください。

嫌です……、な兄貴たちは追走オナシヤス！ センセンシャル！ 俺もやつたんだからさ（同調圧力先輩）。

というわけで特急に乗ってさつきと帰りましょう。

お迎えには今年もガウエイン君が来てくれました。お久しブリーフ……♂ 久しぶりだけど最近どうなん？（レ）

……………。

！  
ここでは特にやることはありません。ハリーたちに手を振って別れます。じゃあな

「お嬢様！ お帰りくださいませ！」

ああん、なんで？（レ）

レストレンジ邸宅に着きました。カーン君の屋敷しもべ妖精特有の謎敬語は華麗にスルーして自室へ向かいました。

今年の夏休みは、RTAの今後を左右する非常に重要な夏休みです。やることも盛り沢山なので頑張ります。

一つ目は例年通りですが、デミガイズ君から文字通り剥ぎ取った透明マント（偽）の補充です。

昨年のクリスマスに補充を行っていないため、現在レズちゃんの効果切れかけなものも含めて、透明マントを一切保有していません。絶対に忘れずに補充しましょう。

「賢者の石」「秘密の部屋」編においては、最悪透明マントがなくても「必要の部屋」で

の育成が遅れるだけで詰んでしまうことはありませんでした。しかし、「アズカバンの囚人」編においては違います。今回、仮に補充に失敗した場合は、即致命傷です。十中八九リセットになります。理由はまた今度。

二つ目にやるべきであったことは、一定等級以上の「闇の魔術」が記された書物を入手する、です。

その手法についてはリカバリ一案も含めていくつかあります。

本来の、今は亡き蛇寮チャートであれば、入手手段はルシウス・マルフォイをあてにしていました。ドラコの好感度を高めることで、夏休みのマルフォイ家のパーティーにお呼ばれる。そこで、同胞への投資も兼ねた施しをルシウス氏から受け取る。そんなチャートです。

ですが、今回はそんなことはフヨウラ!

リセマラに次ぐリセマラによって齎されたゲーム開始時の豪運の賜物。

「深い闇の秘術」をレズちゃんは既に所有しています。

この書籍は分霊箱すら記してある、闇の魔術に関する書物の中でも最上級の代物です。しゃぶり尽くしていきましよう。

三つ目は、入手した本からとある二つの呪文を習得、そのうち片方の熟練度を可能な限り上昇させるということです。



さて、二つの呪文とはなんでしょうか？

考えてみてください。ヒントは、「代用が利かない」です。

……。

……………。

……………。

ああ、いったあ……（レ）。

それでは答えあわせといきましょう。

片方の呪文については正解者も多いのではないのでしょうか。

そうです、「悪霊の火」です。

真つ当な方法で分霊箱を破壊するには、大別して三種の方法が存在します。それぞれについて検討しましょう。

第一の手法「ニワトコの杖」。現在ダンブルドアが所有している杖を用いることです。

……無理もう無理〜！ 「ニワトコの杖」を忠誠心も含めてダンブルドアから秘密裏に入手する、というのは通常プレイでは不可能です。

キャラクターエディット時に「記憶・魂転写の血の呪い発症」を選択することで、強くてニューゲームな状態でゲームを開始できますが、それでもワンチャンを求める戦いになるでしょう。言うまでもなく本RTAでは禁止事項にあたります。

なので、この方法はクビだクビだクビだ!

第二の手法「バジリスクの毒」。公式によるほんへシナリオでも利用された由緒正しき手法ですね。「自身を強化するものの性質を得る」という特性を持つ「グリフィンドールの剣」がほんへでは主に用いられました。

ですが、この方法も無理筋です。「グリフィンドールの剣」を入手するためには、獅子寮適性を極限まで高めて「組分け帽子」から引き抜く必要があります。

当然ながら、レズちゃんにはそこまでの適性が——恐らく——ありません。それ以前に「組分け帽子」を校長室から盗み出す方法すらありません。これは、校長室に存在する「グリフィンドールの剣」本体にもいえませぬ。

バジリスクの死体から毒を抽出するという方法も存在しますが、これについては安全に、なおかつ劣化させずに保存する手段を確立できませんでした。「秘密の部屋」から脱出した際に身体検査を受ければそれだけで破綻する、というリスクもありますので、あえなく没です。

ここまでの二つの手法は概ね最強無敵校長によって妨げられてしまいました。というわけで、満を持して「悪霊の火」の登場です。

この魔法には、他の魔法にはない珍しい特徴があります。

それは「キャラクターが呪文を認識した段階で、自動的に習得される」という特徴で

す。

初見プレイにおいて、はえくすつごい、と思った方も多いのではないのでしょうか。

ですが、これはアイスティーよりも甘く、中野くんステーキよりも苦い罨です。

「悪霊の火」は、誰でも簡単に使えるというメリットの代わりに、魔法熟練度、又は闇の魔術適性が一定以下であった場合に使用者を燃やし尽くすという強烈なデメリットを抱えています。

これにより、推定114514人もプレイヤーが自札したことでしょう。悲しいなあ……。

勿論、熟練度と適性さえ上げてしまえば問題なく使えます。

ですが、事前調査の結果安全に使用するためには、なんらかの加速要素がない限り頑張っても四年生後期までは使用不可とケツ論づけられました。

……遅い遅い遅い！

仮に、安全確保が五年生にまでずれ込んでしまった場合、一年未満で全ての分霊箱を破壊しなくてはなりません。ハリー育成と並行して行うにはとてもではありませんが、時間が足りません。

蛇姉貴以外の分霊箱破壊は、可能であればヴォルデモート復活までに終えておくのが望ましいでしょう。

どうすつかなく俺もな〜。

これから紹介するのは、1919回（当社調べ）にも及ぶ検討の末、気分転換にマホウトコロ兄貴のプレイを見ていた際にふと思いついた手法です。

先述したように、「悪霊の火」には、使用者を焼き尽くすという致命的なデメリットがあります。ですが、逆に言えばそれだけです。

仮に熟練度がゼロであつたとしても、使用者一人の命と引き換えに魔法を放つことができる、と言い換えることができます。

ここまで言えば、お分かりですね？

そうです。「服従の呪文」を用いた、人間爆弾マスク法（意味不明）です！

使い方は極めて簡単。

まず、「夜の闇横丁」にいるいつもの浮浪者のおっさん（60）に「服従の呪文」をかけます。

次に、分霊箱のある場所へと向かいます。

最後に、レズちゃんが十分に離れた後で浮浪者のおっさんに「悪霊の火」を唱えさせます。

たったこれだけで分霊箱をリスク・準備無しに破壊できるといわけですね！

より大きな善のためには小さな犠牲は仕方ないってそれ一番言われてるから。

……あつおい待てい（江戸っ子）。「服従の呪文」中の浮浪者のおっさんが闇の魔術を使えるかわからないゾ。

とお思いの方もいらつしやるかもしれませんが。

ご安心ください。「服従の呪文」中でも「悪霊の火」のみに限って誰でも使用することが可能です。

例えば、ほんヘルト四年生、第三の試練を思い出して下さい。そこでは、「服従の呪文」支配下であつたビクトール・クラム兄貴が「磔の呪い」を使用していました。

これはクラム兄貴に「磔の呪い」を使用できるだけの素養があつたことを意味しています。というのも、「服従の呪文」中に魔法を使う際には、支配者と被支配者の双方が魔法を使える必要があるからです。

と、これはあくまで、通常の魔法に関する処理です。

これに対して「悪霊の火」は、自傷デメリットに目を瞑れば誰でも使用可能です。

それこそ、クラブやゴイルといった頭MUR並みであっても使用するだけなら可能です。

レズちゃんと浮浪者のおっさんも、使用するだけならすぐに可能になることでしよう。

つまり、「悪霊の火」に限っては「服従の呪文」の制約を無視できるということなのです。

それどころか、「悪霊の火」のデメリットさえもふみ倒せます。

なんだこれは、たまげたなあ……。

これによって生まれた卑劣なチャートこそ、「そこら辺のモブを人間爆弾にして分霊箱を破壊する」という手法です。

先駆者兄貴に敬意を評して、「深い闇の卑術」とでも命名しましょうか。

この夏休み前半は、ひたすらに「服従の呪文」の熟練度上げが待っています。浮浪者のおっさんとは言え魔法使いです。しっかり鍛えましょう。

というわけで、説明終わり！

これら三つについては、夏休みが始まり次第超スピード!? で行う必要があります。

具体的には夏休み開始から五週間後、アーサー・ウィズリーのガリオンくじ当選発表までには終わらせなければなりません。

何故なら、掲載されたウィズリー家の家族写真に裏切り鼠を発見したシリウス兄貴が脱獄を敢行するからです。

レズちゃんレズちゃんと呼称しているためお忘れの方もいらつしやるかもしれません。プレイヤーキャラの名前は、ズイラ・レストレンジ。レストレンジ家の一員にし

て、ベラトリックスの娘です。

つまりは、シリウス兄貴の従姪です。

死喰い人の娘にして脱獄者の血縁。当然ながら、闇祓いの監視が厳重化されます。仕方ないね♫

このような状況下で許されざる呪文の一つである「服従の呪文」を練習していることがばれたら *ass* ガバガバン行きは不可避です。気をつけましょう。

そのほかにやるべきことも列挙しておきます。

まずは好感度維持のためのハリーへのご機嫌伺い。誕生日プレゼントはクイディッチ関連の道具であればなんでもいいです。グローブとかでいいでしょう。今回は透明マント（偽）補充時の表向きの理由として利用しました。

次に、今年度の履修教科確認。

ここで規定数以上の教科が確保できていなかった場合、敢え無くりセットです。勿論ハーマイオニー姉貴から例のアレを借り受けてもいいのですが、無理ゲーでしょう。今回は問題ありませんでした。やったぜ。

因みにですが、沢山の教科を履修したのには、例のアレの入手以外にももう一つの理由があります。それは、沢山教科を取れば必要な教科書が沢山持てるということです。

……は？ とお思いの方のためにより正確に言いますと、沢山の教科書を持つため

に、大きなバッグ、それこそ検知不可能拡大呪文がかかったバッグを買う正当な理由ができる、ということですよ。

最後に、リセマラで粘って入手した一組のアイテム。その片割れを学校に持っていくことを忘れないようにしましょう。アイテム名はまた後ほど。

レデュシオ 縮め！

来たるべき時が来るまで、検知不可能拡大呪文のかかった容量クソデカバッグくに納めておきましょう。もつとも、バッグはまだ買ってはいないのですが。

こんな感じでインターバル期間は終わりでしょうか。

……ああん？　なんか解説ばかりで全然進んでねえな？

ただ、尺もいっぱいいっぱい裕次郎なので、今回はここまでにしとさせていただきます。ご笑読ありがとうございました。



## 14 / ?      S D A D A 教師邂逅まで

壊れちゃった……わたくしの蛇獅子スライドチャート……なRTA、もう始まつてる！

前回は「アズカバンの囚人」編に向けての準備回でした。今回から本格的に三年生編にハッテン♂していきます。

さて、現在は夏休み最後の日です。この日に買い物に向かうことでいつもの三人組とエンカウントすることができます。せっかくなので学用品の購入がてら向かいましょうか。

買い物にはいつもの闇祇いの兄ちゃん、ガウエイン君に連れ立ってもらいます。凶悪犯罪者のシリウス・ブラックが徘徊しているからね、しようがないね。

今回の買い物は、魔法省にハリー・ポッターとの仲の良さをアピールする意味もあります。というのにも必要以上に警戒されていた場合、今年度のあれこれに悪影響が及ぶからですね。

昨年度のバジリスク討伐参戦により、闇祓い陣営からの好感度は上がっていると考えられます。しかし、上位権限を持つているファツジ君の懐柔が済んでいません。

彼は一言でいえば俗物なのですが、自分の権力を守る場合にのみ類まれなる才覚を発揮します。マルフォイ家などの名家と違い、レストレンジ家は当主夫婦が投獄された最悪の家系です。何もしなければ、シリウス・ブラックの縁者である以上、嬉々としてレストレンジ家に見張りを立てることでしょう。

仮にレズちゃんが留守にしている間のレストレンジ家への監視が、鼠一匹逃がさないレベルの厳戒態勢なんてことになっていた場合、難易度がリセット級まで上昇します。最悪でもカーン君が自由に動ける程度のガバガバ監視になるように努めて振舞いましょう。

実際にはそこまで難しくはありません。直接・間接問わずファツジ君にハリーとの関係をはのめかすだけでいいのです。それだけで彼は勝手に金卵を産む鶏の友人と思ってくれます。ペつ、頭甘ちゃんが！

というわけでガウエイン君買い物に連れてって？ ……ありがとナス！

レストレンジの娘が外出するという届出をガウエイン君に出してもらいました。投獄された死喰い人の遺児だと、三年生時と公的なお辞儀様復活後は行動に一部制限がかかります。面倒なデメリットではありませんが、リターンが非常にうま味テイストであるためレス

トレンジスタートはやめられないねんな……。

ガウエイン君の腕につかまって、「付き添い姿くらまし」でダイアゴン横丁に移動します。ついでにここで「姿くらまし」を同伴付きとはいえ経験したことで、「姿くらまし」魔法に対して微量の熟練度が稼げます。まさしく一石二鳥！これは完璧なチャートだあ（恍惚）。

……もつとも、「姿くらまし」を本格的に修得する予定はないのですが、備えあれば憂いなし。稼げる経験値は稼いどけてそれ一番言われてるから。

ダイアゴン横丁へ着きました。

まずはフロリーリツシュ・アンド・ブロッツ書店へ向かいましょう。

「ズイラー・ズイラー！」

そうすれば、高確率で赤毛同盟と遭遇することができます。

今回は無事ロン君とハーマイオニーちゃんに会うことができます。ここで逃してもいざれ出会うことになるでしょうが、予期せぬガバが発生していいことが確認できて一安心です。

特にロン君。ときおり猟犬の恐怖に耐えかねて、鼠のスキヤパーズが逃げ出す場合があります。鼠が浮浪者のおっさんになってしまった場合、最悪来年度にお辞儀様が復活しないなんてことにもつながりかねません。頃すために生き返らせる、生き返らせるた

めに介護するなんてあ ほ く さ。やってらんねえぜ（本音）。

分霊箱、霊体、予言、壊れステータス、エトセトラエトセトラ……。お辞儀様を護る障壁多すぎイ！ こんなんじゃわたくしのタイム壊れちまうよ……。 （ゆうさく）

話をもどして。

久しぶりに会った二人は、昨年度学期末と比べてずいぶん日焼けしていました。ロン君はエジプトに、ハーマイオニーちゃんはフランスに旅行に向かっていたみたいですね。さぞかし充実した夏休みだったようです。よかったね（純真）。

レズちゃんも「服従の呪文」習得のために充実した夏休みを送っていました。ひたすらに虫けらを服従させて熟練度を稼いだため、ある程度であれば人間にも通用するレベルにはなったと考えられます。とはいえ、人間爆弾にするにはさすがに足りません。今後も練習を積み重ねましょう。具体的には本年度のハロウィーン、あるいは獅子寮と驚寮のクイディッチの試合までには積み重ねておきたいです。

今年は一日が三十時間あるからヘーキヘーキ、ヘーキだから（ガバ予測）。  
というわけで三人で買い物です。

ガウエイン君とアーサー氏が大人のお話をしている間に本屋の中に入りましょう。

「まさか三人も！ あの嘴みつき本を!？」

すぐさま駆け寄ってきた店員の兄ちゃんが絶望的な顔を向けてきますが、大丈夫だつ

て安心しろよ。

レズちゃんは6月の誕生祝いに、親愛なるハグリッド氏より先だつて「怪物的な怪物の本」を頂いております。

包装紙を開けた途端嘔みついてくるなんて、おう活きがいいなく。

……持ち運びに大変不便なので何らかの手段を施す必要がありました。つつかえ！  
やめたら飼育学教授！

紐でぐるぐる巻きにするという手法、表紙を撫でつけるといふハグリッド法の二種類が一般的ですが、前者は根本的な解決にはならず、後者は怪我をするというリスクが存在します。

なので、今回は攻略勢のO氏考案の手法を用いさせていただきます。

方法は極めて簡単！

まずは、「怪物的な怪物の本」に「双子の呪文」を唱えます。

……終わり！ 閉廷！ 以上みんな解散！ 「怪物的な怪物の本」、君もう帰つていいよ！

この方法はまさしく目からオカミーエッグの殻でした。

本チャートを構築時、情報収集のために攻略Wikiを流し見していたところ、『双子の呪文』による魔法効果喪失の悪用』という小ネタを発見いたしました。

もともとプリンス本入手のために二年生で「双子の呪文」を覚えることは既定路線であつたため、無理なくチャートを拡張することができたわけですね。コピーガードが施されていないなんてなんだよ魔法界の本ガバガバじゃねえかよ（風評被害）。

こんな素敵な小技を考え付くなんてO氏ありがと〜！ フラーツシュ！

そんなこんなで現在レズちゃん「怪物的でない怪物の本」を所有しています。残りの本を全教科分買い揃えましょうか。

「中級変身術」、「三年生用の基本呪文集」、「未来の霧を晴らす」、「数秘学と文法学」エトセトラエトセトラ……。さすがに多いですね。小物店で「検知不可能拡大呪文」付きのバッグをかうまで、おつきのガウエイン君に持たせましょう。オナシヤス！ センゼンシヤル！

本屋での買い物が終わりました。

次は重い荷物を処分するために内容量クソデカバッグを買いにいきます。

少々お高めですがガウエイン君なら払えるよなあ？（他力本願）護衛兼監視兼荷物持ち兼財布役としてしゃぶりつくしてやるぜ（女性特権）。

せっかくなのでハーマイオニーちゃんも誘ってお揃いにしましょう。お互い全教科履修組です。買い物かごに啜えて差し上げる。

……闇祓いの前で学友とお揃いのバッグを買いました。客観的にも必要性が認めら

れるため、至極妥当な買い物です。これにより、今後レズちゃんがこのバッグを持ち歩いて何ら不自然ではありません。より大きな善のために括約させましょう。

その後は薬問屋で魔法薬学の材料を補充して、「マダム・マルキンの洋装店」で制服のローブを仕立て直してもらいました。睡眠不足が祟ったのか、体格は平均より小さめです。的が小さくて何よりです。魔法の当たる表面積は小さいほうが対人戦は有利です。

最後にロン君の杖を買いにオリバンダーの杖屋に行つて午前中の買い物は終わりです。

オリバンダー老の鑑定の末、ロン君の杖は柳の木、ユニコーンの毛を用いた三十三センチの杖に決まりました。伸びしろのある魔法使いに向いている杖、正確な判断ですね。

「おや、レストレンジさん——」  
ん？

「——杖の調子はいかがですか？」

まあ人並みでしょうね（適当）。

ふむ。ひよつとすると、「闇の魔術」による杖の悶絶調教を見透かされているかもしれない。忠誠心はともかく、現在の杖適性が変わっている可能性があります。

……まあいいや！（ガバ判断）補充するのもリスクが伴いますし、杖が折れたらまた買い替えに来ましょう。

というわけでじゃあな！（ゆうさく）

買い物もあらかた終わりました。一休みがてらフロリアン・フォーテスキュー・アイスクリーム・パーラーに向かうと――

「やつと会えた!」

――はい。ハリー君との合流です。予定通りマージおばさんを風船の刑に処してきたようです。彼は現在ファツジ君の好意で「漏れ鍋」に泊まっているようです。後で店主のトム君に顔を見せておきます。これによりファツジ君に印象付けることが可能です。

アイスを食べながら夏休みの思い出（大嘘）を語り合った後、ハーマイオニーちゃん  
の要望により魔法動物ペットシヨップに向かうこととなります。

ここで、本年度の重要人物？ であるスキヤバース君とクルックシャンクス君が初邂逅を果たします。

「コラッ！ クルックシャンクスやめなさい!」

発見と同時、猫兄貴が鼠君に爪牙を振るいました。クルックシャンクス君は猫とニーズルのミックスであり、普通の猫と比べて著しく知能が発達しています。また、人並び



に動物もどきを信頼に値する存在かどうか見抜く能力を持っています。だから欺瞞だらけのワームテールは襲われたわけですね。

とはいえ、ピーター君にはお辞儀様を復活させるという大事な仕事が残っています。こんなところで猫のおやつになってしまつてはやつてらんねえぜ。

これから先、クルックシャンクスがスキヤパーズをもぐもぐしないように、それとなく両者を見張る必要があります。注意しましょう。わかつたな、毛玉君！

——痛つてえ、おい！ 噛みやがったな！

赤毛猫に噛まれて気分が悪いので、「漏れ鍋」にさつきと向かいましょう。ハーマイオニーちゃんが謝ってきますが、何でもするわけではなさそうなので傷口が治るまで許しません。

「エピスキー 癒えよ！」

まま、ええわ。今回は許したる（即墮）。

「漏れ鍋」でパーシー君に噛み傷を治してもらいました。彼はつい先日成人したため、大手を振って魔法を使うことができます。本RTAではレズちゃんが成人の日を迎えることはないため、非常にうらやましいですね。

一緒に夕食をとった後ガウエイン君とともにレストレンジ邸に帰還しました。ガ

ウエイン君お疲れ、また明日！

……彼が帰った後、ホグワーツに行く準備をします。ここで行う特別なことは、収縮呪文で小さくしたとあるアイテムを忘れずに内容量クソデカバッグの中に入れることです（再掲）。円滑な分霊箱爆破のためには必須級なので忘れないようにしましょう（無敗）。

翌日。登校日です。ガウエイン君に連れられて「付き添い姿くらし」しましょう。

じゃあ、カーン君またな！

「行つてらっしゃいませ、ズイラお嬢様！」

着きました。ただ少し早く着きすぎましたね。まだ三十分も前です。

ハリーご一行もまだ来ていません。しかたないので席でも取っておきましょうか。

ガウエイン君同行ありがとナス！ 本業も頑張つてね！（大嘘）

あつそうだ（唐突）。ホグズミード行きの許可証へのサインオナシヤス！ センセンシャル！

保護者が二人ともassガバガバの囚人であるため、レズちゃんの現在の保護者は暫定的にガウエイン君となっております。別に行きたくもありませんが不自然な行動をとると疑念を生んでしまうため、ここはもらっておきましょう。

サインをもらった後、改めて別れて車内に乗り込みます。

座席は最後尾の席に座ります。ルーピン先生と円滑に出会うためですね。

さすがにまだ誰もいないので、ハリーたちのためにコンパートメントを一つ独り占めしておきましょう。

……。

……………。

……………。

「ズイラ、おはよう」

……？ ハリーたちが先に来てしまいました。レズちゃんがすでに陣取っていたため、人狼先生が遠慮したのでしょうか。仕方ないね。

そうこうしているうちにホグワーツ特急が発進しました。今回の登校時にはいくつかのイベントが起こります。

一つ目はホグズミード談義……どうでもいいわ。加速だ加速！

二つ目はマルフォイ君のご訪問。これもどうでもいいですね。放っておけば勝手に帰ります。とはいえまだ使い所さんがあるかもしれないので、好感度は適度に維持しておきましょう。ロン君の好感度がわずかに下がりますがすぐに取り戻せます。問題ありません。

三つ目は――

「誰だろう?」

——ん?

ノック音です。誰かが訪ねてきました。本当に誰でしょうか。

「すまない。四人とも」

ハリーが扉を開けると、そこにいたのはパーシー・ウィーズリーでした。扉口でハリーが応対を始めます。

「やあ、パーシー。さつきぶり。どうしたの?」

「ああ、新任の先生がハリーに用があるらしいんだ。他にもネビルも探しているんだけれど……」

なるほど。どうやら、新任の先生——つまりはルーピン先生がハリーを探していたようです。ほんへでは眠っていたから話をしなかっただけで、起きていたら話をするのは妥当でしょう。ネビルも騎士団つながりかな? 少なくともレストレンジの娘に用はないでしょうね。

快くハリーを送り出しましょう。無論、先ほどの内部事情は一切口にせず。

「そう? じゃあ少し行ってくるよ」

「いったい何があつたのかしら？」

ハリーが席を立ててしばらくして。ホグワーツ特急が急停車しました。

列車内の灯りが消え、寒気がしてきます。いよいよメインイベント・吸魂鬼君の顔見せです。

このイベントでは、ホグワーツ勤務を命じられた吸魂鬼の一部が列車を襲撃してきます。数は乱数によって変動します。

とはいえ今回は本当に顔見せ、すぐにルーピン先生が追い払ってくれます。どんなにいても追い払ってくれるルーピン先生ホントニアコガレテル。

真つ暗だと精神値の削れる速度が早まる為、光源を確保して待ちますか。

ルーモス 光よ！

灯りを確保してしばらく待ってれば……。

すぐにルーピン先生が駆けつけて……。

オオカミの守護霊でせん滅を……。

すいませくん。ズイラ・レストレンジですけど、まくだ時間かかりそうですかね？

……。

……ちよつと待って!? ムーニー先生来ないやん! どうしてくれんのこれ!

吸魂鬼君が今にもコンパートメントに入つてこようとしています。クツソ汚いマン

トに覆われた体はそれこそ野獣先輩と比べてもなお優るほど穢らわしく、悼ましいです。彼と一緒にいると、幸福な思いが喰い尽くされ、不幸なことばかりが思い浮かんでしまいます。見る抗うつ剤こと野獣先輩以下の汚物ですね。

嫌よくガバって氏んだ過去を見せつけるのは嫌よく。

「ねえ、怖いわ——」

——しようがねえなあ！（悟空）

おめえの出番だ、ナナカマド君！

「エクスペクト・パトロナーナム 守護霊よ来たれ！」

ロバ君お久しブリーフ♂ その野獣先輩以下のゴミをパパパッと片付けて終わらせて！

「あれは何だったの？」

ナオキです（大嘘）。

ハーマイオニーちゃん泣きそうになっていますが、適当になだめすかして他の車両に向かいます。ルーピン先生周りで何らかのトラブルが発生した可能性があります。ハリーもかなり心配です。

一両目……ヨシ！

二両目……ヨシ！

三両目……ヒエツ（戦慄）。

吸魂鬼が生徒たちに纏わりついて今にも触れようとしています！ 誰かが守護霊を呼んだようですが、熟練度が足りないのか無体のままで時間稼ぎにしかかっていません。

ロバ君、やっておしまい！

掃除完了です……（速札）。

おや、どうやらパーシー君が無体守護霊の召喚者だったようです。

ルーピン先生どしたん？ オビワン？ サーテイワン？

「誰かが開けていた窓から吸魂鬼が入ってきて……新任の先生は先頭車両の生徒たちを守るので手一杯だ！ それに外にはまだ吸魂鬼が沢山いる！」

うっそだろお前！ 笑っっちゃうぜ！（虚勢）

暗くて見えないですが、外を照らしてみます。

「ルーマス・ソレム 太陽の光よ！」

ファツ!!? クウーン（失神）。なんだこのクソ乱数！

ふざけんじゃねえよオイ！ 誰がホグワーツ派遣分の吸魂鬼を丸ごと車両に随伴さ

せろつつつた、オイコリア！

数十匹の吸魂鬼なんて本章ラストクラスじゃないですかやだー！

……守護霊をまともに使えるホグワーツ生なんてセドリツク兄貴を始めとして数人しかいません！ 内部に侵入されたらディープリキスの被害者がダース単位で生まれるでしょう。

一人でも氏者がでたら今後のチャートが完全崩壊します。なので――

「レビコーパス 身体浮上！」

「――なつ、ズイラー！」

――開いた窓からホグワーツ特急の屋根の上に行くぞオラア♂

車上には、ああ……溢れてるねえ……。わらわらポロローブが溢れています。

トネリコ君とナナカマド君の二刀流♂ 解禁しましょう。

「エクスペクト・パトローナム！」

二頭同時召喚！

ロバいちい！ 超スピード!? でホグワーツに伝令に行くのです！

ロバにい！ 死ぬ気でレズちゃんを護れやオラアン！

というわけで耐久戦・吸魂鬼の群れです。

じゃあオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

……こいついつも耐久戦ばかりやってるな（困惑）。



解説に移ります。

吸魂鬼の特性で注意すべきところは、「討伐不可能」、「守護霊以外で撃退不可能」、「周囲の全生物の精神値にスリップダメージを与える」の三つです。

一つ目の特性により、完全破壊はできません。

傾せなくとも退けることは可能ですが、それも守護霊のみに限られます。

そして、三つ目の特性、幸福を喰らい不幸を伝播する性質により、長期戦は困難です。なので本戦闘の主軸は、時間稼ぎを本線としつつもとにかく数を散らす事に定めま  
す。車両内に入り込もうとする奴は優先撃退を忘れずに！ シリウス・ブラックの関係者であることをアピールして気を引け……：ればいいな！（祈祷）

浮遊する彼らとの適切な位置どりを保つのは至難ですが、レビコーパス・リベラコーパスによる疑似的三次元機動でなんとかします（ゴブリン銀の意思）。

というわけで戦闘開始――

「何かありませんか？ かぼちゃジュースは？ 百味ビーンズは？ 蛙チョコレートは？」

ふむ。突然お菓子を山ほど積んだカートが車上に出現しましたね。

「誰も私の事を気にしない。蛙チョコレートのカードの名前を覚えても、私の名前を覚える生徒は誰もいない」

「ホグワーツ特急ができたとき、私はオツタライン・ギャンボル校長にこの仕事を託された……」

ふむふむ。あれは恐らく車両販売のおばちゃんでしょう。新章アップデートで追加されたキャラクターです。

「百五十年以上、私は蛙チョココレートを振る舞い続けた。でも、カードの他にあるものを、生徒たちは誰も知らない……」

「ホグワーツに着くまで、この車両からは誰も離れられない。蛇の小僧、鷲の娘、獅子の四人組。この車両から離れようとしたものたちは、誰も彼もが失敗した。——何故なら、ホグワーツ特急は生徒が途中で降りるのをひどく嫌うからだ……」

ふむふむふむ。婆について、投稿者の検証が済んでいないのでなんとも言えませんが——  
「さあ、獅子の娘。席に戻って座っているのだ」

もう車両中吸魂鬼まみれやけどお前どう？

「——吸魂鬼は生徒ではない。教師が退けるまで座って待つのだ。この車両から生徒が飛び去ることを、私は許容しない……」

——なんだお前!?

婆の指がいつのまにか釘の様に鋭く尖鋭化しています。

彼女はそのまま大鍋ケーキをこちらに向けて投げつけてきて――

「プロテゴ 護れ！」

こつちにも衝撃が来たあ!?(爆風)

爆弾よろしく大鍋ケーキが破裂しました。盾が無かったら意識は間違いなく飛んだでしょう。そのまま昏睡デイクス間違いないです。

チャートの重要でない上、アプデ追加分であったため、プレイ時の投稿者は車両販売の婆について詳細なデータを持っていませんでした。

その当時の限られた知識を基に解説します。

通称・車両販売の魔女。

ホグワーツ特急から降りようとする・降りようとするそぶりを見せる生徒を強制的に着席させる魔法装置。

特性は「特定の行動をとるように規定された思考回路」、「ホグワーツ特急とリンクした莫大なHP」、「ホグワーツ特急内における瞬間移動能力」、「車両販売のお菓子を攻撃アイテムに変換する能力」の四つです。

百味ビーンズの銃弾、かぼちやパイの手榴弾、蛙チョコレートの自立起動機雷、大鍋ケーキの爆弾……。

おそらくですが、レズちゃんのレビコーパスが出現条件に引っかけたのではと考え

られます。

馬鹿じゃねえ!? (校長批判)

流石に婆の物理攻撃と吸魂鬼の精神攻撃を同時処理するのは無理もう無理。

どちらも討伐は不可能です (絶望)。

前者は耐久力が鬼すぎる! ホグワーツ特急を破壊するほどのダメージを与えるのは不可能ですし、削りきつたら削りきつたで特急が止まってしまいます。

後者は数が多すぎます! 一人で蹴散らせる量の吸魂鬼ではありません。守護霊しか通らない以上、卑劣魔法もまるで無意味! ちよつと特殊防御硬すぎんよ。

どうすつかなくわたくしもなく。

婆のお菓子爆弾と吸魂鬼の接近。どちらか片方なら耐え忍ぶだけならなんとか可能です。両方を相手にするには杖が二本あっても足りません。

時間を稼ぐにしても、このままでは車両内に撤退せざるを得ないでしょう。車両内の乱戦では氏が生まれるのを避けられません。

引けば確定リセ、ならクソ乱数が相手でも戦うしかないでしょう。スタイリッシュに決めろ。

守護霊を走らせつつ、百味ビーンズの散弾を弾く。

吸魂鬼の突撃をレビコーパスで回避して、跳ね回る蛙チョコレートボムを盾で防ぎ—

—あつ、そうだ（唐突）。

—おう、ばあちゃん！ 蛙チヨコレート売ってくれや！ ついでに口に放り込んで？

「——はいはい、蛙チヨコレートですね。お代は6クヌートですよ」

今手が離せないんでポケットから財布抜いといってください、なんでもしますから！

「はい毎度あり。口の中に入れるわよ」

ありがとナス！

婆は敵ではなくあくまで学校側の第三勢力なので、生徒に一定以上の危害を加えることはありません。既存A Iの「車内販売」を呼び起こして無力化！ ついでにチヨコレートで精神値回復！

まだまだやれますぞ！

「エクスペクト・パトロナーナム 守護霊よ来たれ！」

つと、ようやくルーピン先生も車内の吸魂鬼を処理し終えたようですね。

中から人影と守護霊が……つとちよつと、ちよつと待ってください！

オオカミではなくセイウチの守護霊!?

「ほっほう！ 『僕の友達の一人はとても防衛術が得意です！』察するところ、君がハリーの言っていた『友達』だね？」

リーマス・ルーピンじゃなくてホラス・スラグホーンじゃん！  
あーもうめちやくちやだよ。蛇獅子チャート壊れちゃう！

## 権力を求めた監督生

母方の叔父を殺害されたパーシーは元来死喰い人に否定的であつたが、そんな彼であつても連日のように魔法について教えを請うてくるズイラのことは「別枠」として扱っていた。いつの間にか。

「ねえ、パース。あなたって、本当に『レイブンクロー』的よね。私なんかよりもずっと！」

パーシー・イグネイシャス・ウィーズリーがそのような指摘を受けることは、ホグワーツ生活においては珍しいことではなかつた。少なくとも、彼のごくわずかな交友関係において、彼はほとんどの人から最低一度はそう言われた記憶がある。

入学して少しして、同級生にしてルームメイトのオリバー・ウッドに成績の良さを取り上げて冗談交じりに指摘されたのを皮切りに。

彼の家である「隠れ穴」、それが位置するデボン州オッターリー・セント・キャッチポールにウィーズリー家とともに居を構えていたデイゴリー家の一人息子。セドリック・

「デイゴリーには「逆転時計」に関する相談の際に、彼の聡明さを称賛する枕詞として告げられ。

グリフィンドールとは敵対的であるスリザリンの生徒も例に漏れない。蛇寮の少女、ジェマ・ファアレーイからも、監督生の会合でパーシーが指揮を執った際、皮肉交じりにささやかれた。

数回会話する生徒だけでもそうなのだ。

当然ながら、ホグワーツで最も親しい友人であるペネロピー・クリアウオーターから言われたことは、両の手では収まらない。

「あなたも私と同じレイブンクロー生だったらよかったのに」

一度や二度では利かない数、彼女のそんなお願いを彼は聞いていた。

もちろん彼自身は、自らの所属する寮がグリフィンドールであることに、何ら疑いを抱いてはいなかった。『端的に言えば、グリフィンドールこそホグワーツで最高の寮である』とパーシーは確信しているし、そんな寮に所属できることを誇りに思っている。ただ、パーシーがグリフィンドールの中で、少々異端であることも、また事実であった。

グリフィンドール生はもっぱら勇敢で、度胸があり、大胆不敵で決断力のある生徒が多く集まる。言い換えれば、無謀で、無鉄砲で、向こう見ずで考えが足りないともいえ



る。

そんななかで、パーシー・ウィーズリーは数少ない「レイブンクロー的な」生徒であった。

勤勉で、知性にあふれ、規則を遵守する——グリフィンボール生に言わせればガリ勉・石頭で、ユーモアに欠ける、そんな特徴をパーシーは多分に満たしていた。

グリフィンボールの中で一人そんな性質であつたのだから、「个性的である」という氣質も兼ね備えていると言えるだろう。

「パース、もう少し気楽に過ごしてもいいんじゃないか？ 皆お前と遊びたがっているぞ？」

パーシーが入学したての頃、当時七年生としてまだホグワーツに在籍していたウィリアム・ウィーズリーが彼に何度かそう忠告したことがある。それは監督生としての立場というよりは、家族としての愛情が多分に含まれた金言であつた。

「いえ、ビル兄さん。僕は規則違反はしません」

そんなビルの気遣いに、パーシーは読んでいた「基本呪文集」から顔を上げてポツリと返しただけだつた。

ビルが卒業し、次男のチャーリーも卒業し。

弟であるフレッド・ジョージコンビが入学して。

時間が経つにつれ、パーシーの厳格さはより強固になっていく。

グリフィンドールの学友が爆発スナップをしている間にも、パーシーはひたすら勉強に励んでいた。弟の規則破りを寮生が讃える中で、彼は12のフクロウを相手取つていた。

パーシーが五年生となった頃には、概ね彼の評価は現在同様に確定していた。融通の利かない堅物。学校の誰に聞こうと、パーシーのことを知っているものなら皆そう答えるだろう。

五年生。彼が監督生に任命された年。

パーシーの後を継ぐ、「真面目路線」なグリフィンドール生が入学してきたことは、彼にとつて幸運だった。

ハーマイオニー・グレンジャー。

彼女はマグル出身者であるがゆえ、魔法界における「常識」を持っていない。その一方で、非魔法界の「常識」は備えていた。

はじめまして、と言葉を交わした彼女の発音は、見事なクイーンズイングリッシュで。両親が歯科医だとも話していた。マグル学の知識と照らし合わせれば、おそらく彼女は非魔法界における上・中位階級だったのだろう。

育ちのいい彼女は、勉学の重要性和法規則を守ることの重要性を知り得ていた。

「ねえ、パーシー。呼び寄せ呪文ってどの本に書かれているか知ってる？」

「ああ、それなら四年生版の『基本呪文集』に詳しいよ。どうして君は——」

「それは——」

「秘密の部屋」事件のあつた年。パーシーとハーマイオニーが図書館で勉強しているのを見て、彼女のペネロピーがやきもちを焼いたのは内緒だ。

ズイラ・レストレンジ。

初めはあのレストレンジ家の娘ということで警戒していたが、その疑念はすぐに薄れた。

因縁の相手であるネビル・ロングボトムの「救出劇」を幕開けに、様々な人と関わり警戒心を解きほぐしていった彼女。写真越しにも伝わってきた彼女の母、ベラトリックスとは似ても似つかない振る舞い。グリフィンドール寮のみならず、他の寮の生徒に話しかける姿も頻繁に見かける。

流石に魔法戦争の爪痕残る上級生には受けが悪かったが、彼女の同学年あたりには社交性と愛嬌も相まって概ね受け入れられていた。

パーシーも例に漏れない。

母方の叔父を殺害されたパーシーは元来死喰い人に否定的であったが、そんな彼であつても連日のように魔法について教えを請うてくるズイラのことは「別枠」として扱つていた。いつの間にか。

彼女はフレッドたちをはじめとする規則破りの常連連中ともよくつるんでいる。

これは、そんなズイラをたしなめた際の会話だ。

「ズイラ。忠告するが君は彼らのような振る舞いをすべきではない。彼らと付き合つても君に益があるとは思えないし、君も問題児の枠に含まれてしまうぞ。」

ただでさえ、君とハーマイオニーは甲乙つけがたいほどに優秀なんだ。自分から監督生の切符を捨てるのはもつたいたいない」

「そうでしょうか？ ジョージ達の『悪戯』は、参考になることも多く含まれていると思えますよ？」

——それに、わたくしは監督生になるよりもっと目指していることがありますの」  
でも、心配してくださつてありがとうございます。

ペコリと腰を折つてそそくさと立ち去る少女に、パーシーはあつけにとられた記憶がある。

事実、彼女と仲間達を取り巻く「噂話」の中で、教科書的でない方法でズイラが魔法を使い活躍したと聞いた時には、杓子定規と言われるさしもの彼であつても一定の理解

を示さずにはいられなかった。

彼女たち二人に、かのハリー・ポッターを加えた三人と友人となった弟のロンのことを、パーシーは密かに誇らしく思っていた。そして願わくば、ロンも「フレッド・ジョージ」路線では無く、自分と同じ正道を歩んで欲しいと願っていた。

……もつとも、やや規則を無視しがちであるという「グリフィンドールの傾向」が彼らにも見られたのだが。しかしてその大元には「賢者の石」・「秘密の部屋」とパーシーから見ても正当性のある理由があったため、概ね彼は後輩たちに満足していた。

1993年・夏。

パーシーは幸福の絶頂であった。

父親のガリオンくじ当選に始まり、エジプトという呪いの本場に旅行に行き、見識を広められたこと。

そして、何より――

「ああなんてこと！ パーシー！ おめでどう！」

――パーシーが本年度の首席に選ばれたのだ！

パーシーの将来の進路は魔法省である。些か権力志向の気質があるパーシーにとつ

ては、首席というブランドを携えて入省できることはまさに理想的だった。

自分の七年間の努力が報われたような気がした。

母・モリーの胸の中で、窒息しかけのパーシーはそう思った。

楽しい時間はあつという間に流れて。

ホグワーツ登校、新学期前日。

ウィーズリー一家は「漏れ鍋」に宿泊していた。表向きはガリオンくじの当たりを吐き出しているだけだが、パーシーは薄っすらと察していた。これはハリーの為であり、逃亡犯シリウス・ブラックに対する牽制であると。

妥当な手段である。父親が魔法省と度々連絡を取っていたり、昼間鉢合わせた闇祓いと警備の打ち合わせをしているのを聞いて、魔法省の働きぶりにいつそうパーシーは好感を持った。

「おおい、パース！ 落とし物だぞ！」

「君のためにバッジをピカピカに磨いていてやったぜ！」

その夜。

与えられた「漏れ鍋」の一室で眠りにつこうとしていたパーシーの下に、弟であるフレッドとジョージの二人組が訪ねてきた。彼の——おそらくはジョージ。二人を正確

に見分けることは家族でも困難で、パーシーもその例に漏れない——手には、パーシーが日中探していたバッジが握られていた。

弟たちが親切にふるまうとは珍しいこともあったものだ。パーシーは椅子から腰を上げて、弟たちのほうへ足を運ぶ。その途中、彼は弟の使い古したパジャマに身に覚えのないピンブローチがつけてあるのを目にした。

おしやれなのだろうか。だがあととはもう寝るばかりのこんな夜更けに？ ファアツシオンセンスの評定「O」である兄のビルならいざ知らず、その方面では「P」どころか「T」すら目指せるパーシーにはトンと判断がつかなかった。まあ気にすることもあ  
るまい。彼はそう結論づける。

「すまない、二人とも」

「いえいえ、パーシー・ウィーズリー殿」

「我々といたしましても、偉大なる兄上のお役に立てて光栄にございます」

パーシーの礼に、格式ばった返答で返す二人。彼らの顔にはニヤニヤとした笑みが浮かんでいる。いぶかしんだパーシーであったが、その疑問はすぐさま氷解した。

Humungous Bighead。本来Head Boyと彫り込まれていた  
バッジには、代わりにそのような文言が刻まれていた。

なるほど、なるほど。つまりはパーシーが無くしていたと考えていた首席バッジも、

実は双子たちがいたずらに持ち出したわけで。もし仮にパーシーが気が付かなければ、明日恋人のペニーに対して彼は自身が「石頭」であることを誇示していたわけだ。

思わずパーシーは杖を抜いた。彼らしからぬ直情径行さであった。

「インカーセラス 縛れ！」

怒り心頭のパーシーであったが、それでも弟を傷つけようとまでは考えていない。ただ、ほんの少しだけ逃げられなくして説教をしようとしたわけだ。なに、ほんの数時間くらい。

そんな彼の青写真は、実現することはなかった。

回避された？ いや、違う。そのような、パーシーが予期できる範囲のことではない。

——弟のつけていたブローチが煌めくや否や、パーシーの放った捕縛呪文が二人を逸れてあらぬ方向に飛んで行ったのだ。

予期せぬ現象に彼は暫し茫然とし——結論に至ると同時に、視界が白く染まった。

「——よしよし、十分な成果だな」

「これなら将来の『商品リスト』にも加えられるかもな」

満足げに効果を確認しあう双子。彼らに対し、パーシーは怒鳴りつける。彼の罵声には、先ほどバッジを改造されたよりも、ずっとずっと大きな怒りが内包されていた。

「——二人とも。これは問題だぞ！ 法律違反だ！」



パーシーの知る限り、先ほどの現象は「盾の呪文」に酷似していたものだった。「おいおい、落ち着けよパース。一体全体、何が問題なんだ？」

「決まっているだろう！ 『未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令』だ！」

例えばこれがホグワーツであつたならば、パーシーは二人のことを褒めたたえていただろう。盾の呪文というそれなりに高度な呪文を、今年五年生になつたばかりなのに無言呪文で使つたのだから。

ただ、ここでは話が違う。自分はいい。つい先日成人したため、魔法の使用制限は解かれている。

だが、双子は成人まであと二年はある。魔法を使うのは法律によつて禁じられているのだ。ザル法と擲揄されようとも、ちんけな校則などとはわけが違う。

身内といえど、身内だからこそ、パーシーには不正が許せなかつた。

しかし、そんな怒りもどこ吹く風とばかりに、双子は肩をすくめる。

「俺たちをよく見ろよ、どこに杖があるっていうんだ？」

「俺たちは魔法なんて今の一度も使つちやいないぜ？」

……確かに。双子の言う通り、見た目彼らは杖を持っていない。まさかワンドレス・マジックなどという超高等技術で以つて、盾の魔法を用いたわけでもあるまい。

ではどうやった？ パーシーの怒りは萎んでしまい、代わりに疑念が噴き出す。

そんな彼の疑問に答えるかのように、双子は彼に営業を始めた。

弟はブローチを指差して話し始める。

「これだよこれ！ 名付けて『盾のブローチ』！」

「簡単な魔法なら逸らすことのできる、俺たちの『真面目路線』ジョークグッズさ！」

思わずパーシーはまじまじと見つめてしまった。こんな小さなブローチに盾の魔法同様の効果が込められているなんて！

「どうやったんだ？」

意に反し、口について疑問が吐き出される。

「そいつは」

「もちろん」

「企業秘密さ！ この先はピンブローチをお求めあれ！」

双子は小馬鹿にしたように交互に話す。

苦悶、煩悶。ごく僅か。パーシーは好奇心に屈し、双子になけなしの金貨を投げ渡した。本来はペネロピーへのプレゼント代だったのだが。無いローブは振れないが、宵越しにガリオンを持ち越す必要もあるまい。彼は内心でそう言い訳した。

「毎度あり！」

弟は代金と引き換えにブローチを手渡す。続けて製法の一部を開示した。

「実の所、俺たちもこういった『真面目路線』は考えてなかったんだけど」

「盾の魔法が得意な後輩が、企画書持参で提案してきたから仕方なくな」

「『悪戯道具と悪戯を防ぐ道具をセットで売りさばいてみてはいかがでしょうか?』なんて考え、流石は『継承者の右腕』様々だな!」

翌日。ホグワーツ特急発車後。

例年のようにパーシーが監督生として車内の見回りをしていると、一人の老人が声をかけてきた。

ホラス・スラグホーンという、銀色のセイウチ髭を生やした小太りの男だった。

「君、少しいいかね?」

「はい、どうしました?」

十中八九、新任の教師だろう。パーシーは特に不審がることもなく対応する。その様子に満足したであろう老人は、彼に対して頼みを持ちかけてきた。

「なに、少しばかり生徒を呼んできて欲しいのだが。君は——グリフィンドールか。それなら——」

と言つて、スラグホーンは三人のグリフィンドール生の名前を告げた。

コーマック・マクラーゲン、ネビル・ロングボトム、それからハリー・ポッター。パー

シーにはいまいち繋がりが読めない面子だった。せめてネビルとハリーだけなら推察のしようもあつたのだが。

用件を済ませるために会釈して立ち去ろうとするパーシー。そんな彼をそうそう、とスラグホーンは呼び止める。

「そういえば、君の名前はなんとなのかね？」

「パーシーです。パーシー・ウィーズリー」

ウィーズリー、ウィーズリー。

老人はパーシーの名字を口内で転がしたのち、何かを思い立ったかのように彼に問いかけた。

「ほっほう！ もしかすれば、君の母親の旧姓はプルウエットだったりしないかね？」

「ギデオンとフェービ안의姉妹だったりは？」

息をつく間も無く言葉を吐き出すスラグホーン。気圧けおされたパーシーは、のけぞりながら事実を認める。

「ええ、そうですか——」

「——さーてきて。みんな集まってくれたようだね。ブレイズ、母君は元気かな？ ああ、スーザン！ 君の叔母上は魔法大臣になるまであと何年だい？」

それから——ハリー・ポッター！　リリーとジエームズの息子！　会えて嬉しいよ！

……なんとなく、パーシーには集められた人間の共通点が見えてきた。

トリカブト薬の開発者の甥、魔法省高官の親類、闇祓いの息子、既に英雄である少年。ホラス・スラッグホーンは人材蒐集家なのだ。

パーシーに関する話の中では、母方の親族やグリンゴッツに勤める長兄・ビルの話は根掘り葉掘り聞き出すそうとするのに対し、父親・アーサーの話は部署を聞いただけで露骨に話を打ち切られるほどだった。パーシーに対する関心は、すぐに立ち消えてしまったようだ。

「僕の友達の一人はマグル生まれですが誰にも負けないほど優秀ですし、とても防衛術が得意な子だっています！」

「——うむ、うむ。落ち着きなさい、ハリー。もしかして君は私が偏見を持っていると思っているのかね？」

ならば、否と答えよう。例えばダーク・クレスウエルは小鬼連絡室の室長に上り詰めたような傑物ですし、君の母は魔法薬学に関して類稀なる才能を持っていた。

リリーは言うに及ばず、ダークもまたマグル生まれであり、私の大事な教え子ですぞ！

コンパートメントでハリーとスラグホーンが言葉を交わす。どうやら老人の言葉が、彼の友人を貶めているようにハリーには聞こえたらしい。

パーシーは助け舟を出すことにしたが――

「そうですね。スラグホーン教授。グレンジャーは一年生の時学年で最も優秀な成績を修めましたし、レストレンジはあの年で盾の魔法を得意とする――」  
がこん。

車輪の擦れる音と、車内が揺れる不協和音が奏でられた。気がつけば、列車の外は土砂降りの雨が降っていて、暗い闇に閉ざされている。

寒い、寒い。理性ではなく本能で、嫌な感覚が走った。

「――いかん」

スラグホーンが立ち上がり、杖を構える。その目は、コンパートメントの入り口を見据えていた。

次の瞬間。

「――」

自分か他人かはたまた両方か。声にならない悲鳴が発せられる。

扉の外から中に押し入ってきたのは、ぼろ布を纏った黒い塊だった。地面すれすれを飛翔するそれは、腐敗臭を撒き散らしながら佇んでいる。

それを視界に収めた途端、パーシーの脳裏を悍ましい過去がよぎった。叔父達の訃報。昨年度ホグワーツを襲った狂乱。ジニーの行方不明。

過ぎ去った、という事実を無視して不幸だった思い出のみが掬い上げられる。否、不幸のみを残して、幸福が吸い上げられる。

吸魂鬼だ。

コンパートメントに集まった生徒皆が正常ではいられなかった。中でもハリーは酷い。今にもひきつけを起こして倒れんばかりだ。

パーシーは最上級生・監督生としての意地でもって、対処しようと脳内の教科書を検索して――

「エクスペクト・パトローナム」

――召喚された銀のセイウチが吸魂鬼を吹き飛ばした頃に、漸く策を掘り当てた。

守護霊の呪文。

防衛術のフクロウで「O」評定であったパーシーにすら使いこなせない、高位の防衛術。

それを当然のように放ったのはスラグホーンだった。

「皆、大事――ああ、ハリー！　誰か、チョコレートを持っていないかね？」

吸魂鬼を追い払ったスラグホーンは、倒れ込んだハリーを見た途端血相を変えて彼の

元へ駆け寄った。脈拍と呼吸を確認して無事を確信したスラグホーン。彼は再び立ち上がると、おぞおぞとチョコレートを差し出したネビルに話しかける。

「ネビル。ハリーが目覚めたらチョコレートを食べさせてあげなさい。君たちも持っているならすぐに食べるといい。吸魂鬼の被害から回復するには、心身ともに安心するのが一番だ」

そう言つて、スラグホーンは先頭車両に続く扉を開いた。

先ほどまで、雨音を貫くほどの生徒の悲鳴が聞こえていたが、今は聞こえなくなつていた。

被害が無くなつた、と考えるのは些か楽観的にすぎるだろう。

「それでは、私は特急内の吸魂鬼を掃除してくるよ。どうやら前の方が酷いみたいだ

——こんなことになるなんて！ アルバスの奴に文句を言つてやらねば！」

スラグホーンは忌々しげに吐き捨てる。

パーシーも思わず杖を挙げた。

「僕も行きます！」

「守護霊は？」

「無体ですが一応……」

「——よろしい。ニーブルの手も借りたところだ。後部車両を任せたま、パーシー・プ



ルウエツト君！」

最後まで彼の収集リストの中にはウイーズリーは収められなかったようだ。

スラグホーンの間違いに苦笑したパーシーは、その勢いで後方に続く扉を開く。少し緊張が抜けて楽になっていた。

「セドリック！ 大丈夫か!？」

「……は大丈夫です、パーシー！ 先に進んで！」

スラグホーンの開けた前方車両の扉からは、吸魂鬼が山ほど目についたが、後部車両はそれほどではなかった。

だが、ゼロではない。それなりな数の吸魂鬼が窓を叩き、車両内に侵入してきている。対するホグワーツ側の戦力は一握り——否、それ以下、だ。もとより生徒の誰も吸魂鬼と相対するなんて考えてもいない。

闇祓い志望、アズカバン看守志望、魔法省高官志望——そう言ったごくごく一部の上級生だけが守護霊を喚び出すことができた。その中で、有体の守護霊を呼び出せるなんて生徒は二桁いれればいい方だろう。

そんな稀有な一人、セドリック・デイゴリーが数両に亘って鳥の守護霊を飛ばしていたが、それでも多勢に無勢だった。とてもではないが最後方までには手が足りない。

それでも、セドリツクはいつものようにハンサムな笑みを浮かべてパーシーをより後方へ送り出した。

優秀な後輩に感謝して、パーシーは先に進む。

後方の車両に突入するとすぐにペネロピーの姿が見えた。彼女たちに襲いかからんとする、四匹の吸魂鬼も。パーシーは激情のままに守護霊を召喚する。

「——ッ！ エクスペクト・パトロナム 守護霊よ来たれ！」

彼の杖からは、シユーという音を立てて銀色の靄が噴き出る。それは人間と吸魂鬼の間をカーテンのように広がって遮った。吸魂鬼は守護の膜に遮られ、極上の餌に辿り着けない。——だが、時間の問題だ。

怯える彼女を背に庇い、パーシーは防壁を維持する。

「頑張つて！ パースー！」

……ヒロイックなシチュエーション。今の彼には、幸福という弾丸が常に装填されている。平常の頃であれば、あるいは有体守護霊に手が届いたかもしれない。しかし度重なる吸魂鬼の襲来によって疲弊した精神では、それは望めなかった。供給される幸せは、吸魂鬼に貪られ目減りしていた。

これが、吸魂鬼の恐ろしさである。吸魂鬼は存在そのものが幸福を喰らう生物。幸福

を原料に精製される守護霊が天敵ではあるが、幸福の供給源である魔法使いに対しては天敵であるのだ。

五分か十分か、あるいはもつと長く、短く？ 長時間の防戦で、時間感覚が保てない。一匹の吸魂鬼が更に後方に向かっていったが、パーシーには手一杯であった。吸魂鬼相手に皮肉であるが、幸運を祈るしかない。

脂汗が流れる。杖腕が震える。雨音がやけに遠くに聞こえる。過去が押し寄せてくる。

不安げに彼の袖を掴むペネロピーだけが彼を奮い立たせていた。

だが、それももう長くは持たない――

「――エクスペクト・パトロナム 守護霊よ来たれ！」

彼らを救ったのは、銀の驢馬だった。愚かでのろまというイメージを覆す獅子奮迅。駿馬は三匹の吸魂鬼を蹴散らし車両を駆ける。

「大丈夫ですか!?! 状況は!?!」

ズイラ・レストレンジだ。

防衛術を得意としていることは知っていたが、まさか有体守護霊すら使えるとは!

彼女の能力について聞いたただしかったが、今は状況が状況。端的に言葉を交わす。

「誰かが開けていた窓から吸魂鬼が入ってきて……新任の先生は先頭車両の生徒たちを

守るので手一杯だ！ それに外にはまだ吸魂鬼が沢山いる！」

パーシーは息も絶え絶えにそう告げる。

その言葉を聞いたズイラは、窓の外を確認し、暫し絶句し――

「――わかりました。それではわたくしが吸魂鬼をできるだけ引きつけます。パーシーは列車の中をお願いします。」

レビコーパス 身体浮遊！」

「――なつ、ズイラ！」

――列車の外へ身を乗り出した。

思わずパーシーも窓から首を出す。

すると、彼女は足先を何かに引っ張られるように、上空へと翻りながら飛翔していった。

そんな彼女のもとに、餌にたかる蠅のように吸魂鬼達が迫り来る。いや、蠅の方がまだ幾分か慎重深いだろう。

パーシーは愕然とした。

本来、生徒を守るべき魔法省が生徒を襲い、魔法省から警戒されているであろう死喰い人の娘が生徒を守ろうと命を張る逆転現象。

パーシーの魔法省に対する妄執が、吸い取られていくような光景であった。

パーシーは僅かな時間茫然としたのち、頭を振って先頭車両に駆け出す。ホラス・スラグホーンに助けを求めに。

彼の後輩を助けるために。

ペネロピー・クリアウオーターはパーシーの後ろ姿に投げかけた。

「——今日のあなたって、『グリフィンドール』的ね」

## 15/? 幸運の液体入手まで

RTAってのはなあTASとは違い。タイムが遅かったヤツが敗者になるんじゃないやねえ。最後まで「走りきれなかった」ヤツが負けるんだよ（自戒）。

なRTAイクゾー!

デツデツデデデデ（カーン）デデデデ!

さて、なぜだかホグワーツ特急に一年以上も揺られた気がしますが気のせいでしょう（メタ発言）。簡単に状況を振り返ります。詳しい状況は読み返して、どうぞ（懇願）。前回、ホグワーツ特急に尋常じゃない量の吸魂鬼が押しかけ、それを辛くも撃退したところでした。

まあそんなことは些事も些事！ 野獣先輩の存在程度にはどうでもいいことです。

問題は――

「ああ、まったく残念だ！ 残念だ。こんなことさえなければ、多くの子供たちと楽しく話げできたものを！」

――目の前のセイウチのような老人。我らが偉大なるナメクジ党党首！ ホラス・ス

ラグホーン氏です。

彼は、本来ならば6章「謎のプリンス」編で登場するキャラクターです。断じて「a s sガバガバンの囚人」編で登場するキャラクターではありません。

ああん？　なんで？（レ）

ほんヘルトならば、犬みたいにワンワン鳴きそうな男ことリーマス・ルーピン氏が今年度のD A D Aの教師として就任します。そして、本R T Aにおいてもここで教師枠を変更する予定はありませんでした。

狼男くんが就任しないことによるデメリットはぎっくり見て二つあります。

一つ目は、ハリーの成長が遅れるということです。3年生、4年生というD A D A名教師二連打により1、2、5年生の頭M U Rなクソゴミ授業によるビハインドを取り戻せませす。

それだけでなく、有能魔法・守護霊の呪文を習得できないのも非常にまず味あじです。また、単純に3年生グランドクエストにおけるラストバトルが突破できない恐れがあります。

二つ目の問題点として、親世代の因縁の回収ができなくなることが挙げられます。尻ウスの冤罪発覚、ピーターの偽装と裏切り、スネイプの苦悩と献身……。

そういう諸々の問題は3年生、ルーピンとの出会いにより加速します。正直旧囚人

現浮浪者のおっさんや、ガキの恋愛を拗らせた教師なんざどうでもいいのですが、RTA的に見逃せない要素が一つだけあります。

それは、ピーターくんの偽装を破ったのち、速やかに脱出いただいてお辞儀様を復活していただくことです。

ゴーストより下等な存在となっている現在のお辞儀様は淫夢3章並みに空気なので、逆説的に傾すことすらできません。とどめを刺すためには、一度生き返っていただく必要があります。

だから、ピーターくんを逃す必要があつたんですね。

はてさて、長らくリーマスくんが就任しないデメリットを語ってきました。

これを聞いた聡明なる視聴者兄貴姉貴たちは、

「チャート壊れちゃーう」「なんだよ、お前のプレイガバガバじゃねえかよ」「さあそれでは！ここでこのRTAをリセットしたいと思うんですよ！」

とお思いかと思います。

まっことその通りです。賢明な判断です。

——なので、このRTAを続行します（ゴブリン銀の意志）。

「——いや、しかし、不幸中の幸いだ！」



まさか学生のうちからこんなにも見事な『守護霊の呪文』を使える子がいたとは！  
それに動きも素晴らしい！ 現役闇祓いと比べても遜色ない杖捌き！ さぞや名の  
ある魔法使いから薫陶を受けたのだろう。

よろしければお名前をお教え願えますかな、お嬢さん？」  
場面を戻して。

人材蒐集癖のあるスラグホーン氏にとつて、守護霊呪文で大多数の吸魂鬼を相手取れるレズちゃんは喉からもケツからも手が出るほど欲しい逸材のようです。

そこまで言われちゃあ仕方あるまい。家名を名乗つて差し上げましょう！  
レストレンジ家現当主、ズイラ・レストレンジとはわたくしのことです！

「———そうか！———そうか！———君があなの！」

———予想とずれた反応ですネクオレハ……。

スラグホーン氏の特徴として、リスクリターンの管理に長けている点があります。本人の性質はさておいて、基本的に社会善を好み、闇の魔法使いを嫌うことが多いです（ただし慮外の才能を除く）。

人間の屑の家系であるレストレンジ家と知られば、蛇蝎の如く嫌ってくるのが通常時の彼の性格です。

もちろん、今のレズちゃんがトム・リドルくん並みの才覚を持っているはずもありません。

せん。

少し探りを入れてみましょう。

レストレンジという名前に思うところは何もないんですか、と。

「まさかまさか。君が生まれる前から教師をしていたわたしが、家柄がどうこうで生徒を判断したりしませんよ」

うわあ、これは建前ですね……。間違いない。

「それに、知っているよ。去年は大活躍だったそうじゃないか。あのハリー・ポッターと共に秘密の部屋の怪物、バジリスク退治だつて？」

あつ、ふーん（察し）。

人脈トド野郎の目的がわかったところで、一度彼と別れ、ハリーたちの様子を見にコンパートメントに戻りましょう。

ノックしてもしもし、と。

「——ああつ！ズイラ！無事だったの！ハリーも、ハリーもさつきネビルが連れてきてくれて、わ、私心配で……」

瞬間、中からハーマイオニーちゃんが飛び出してきて、抱きついてきました。

あ、たまらねえぜ！

身体が冷え切っていますね。このままくんずほぐれつ……する時間はないので、適当に宥めすかして中に入りましょう。

ハリーの様子が気になります。

ハリーは——無事、気絶していますね。

ここで、「根源の記憶——両親の死」を回収することにより、ヴォルデモート並びに両親の死に携わった人物に対する敵対心が増幅されます。

技術だけでなく、精神の成長も積み上げることが、お辞儀様討伐最終兵器の育成には重要です。

彼が起き次第チョコレートを与えて、残りはレズちゃん自身の体力気力の回復に努めましょう。流星に吸魂鬼ラツシユは肝と玉を冷やしました。

……と思っただけもう持っていますね。ならばヨシ！

嫌がらせと今後の布石に天下無双ダンブルドア爺に状況終了の伝達だけ入れときましょう。

エクスペクト・パトローナム 伝達ロバよ、来たれ。

その後は、何事もなくホグワーツ城に到着し、雨の降る中、城内へと歩を進めました。

……あまりにも吸魂鬼くんの数が多すぎてさしものマルフォイクくんも気絶したハ

リーを擲擧する余裕はないようですね。後半のクイディツチ戦、吸魂鬼のコスプレをしたマルフォイ乱入事件に影響があるかもしれません。覚えておきましょう。

ホグワーツ城内に着くやいなや、ハリー、ハーマイオニーを含めて猫姉貴に呼び出しを受けました。ロンくんは一人寂しく大広間に向かつてな！

マクゴナガル教諭に連れられて彼女の事務室に向かうと、そこには既に先客——マダム・ポンフリー姉貴がいらつしやいました。

彼女たちはハリーが気絶したと言うことを聞いて、心配して彼を呼び出したようです。

素敵なことやないですかあ（感涙）。

「——他人事のように聞いていますが、あなたもあなたです、レストレンジ——」  
フアツ!?

「スラグホーン先生が私にお伝えくださいました。3年生のあなたが列車の外に出て、山ほどの吸魂鬼と闘った!?

——何か一つ噛み合わなければ、あなたは今ごろ死んでいたのかもしれませんがよ!」  
クウーン（子犬先輩）。

「——他人のために勇気を振り絞ることは素晴らしいことです。しかし、まずは自分が死なないことを第一に考えなさい!」

おかのした（大嘘）。

タイムは命より重いってそれ一番言われてるから。

その後、ハリーが先に解放され、事務室にはマクゴナガル姉貴とハーマイオニー、それからレズちゃんの三人が残されました。

そうだ、三角形になって、三人でしゃぶりあわねえか？（提案）

などとくだらないことを考えていると、マクゴナガル先生が話し始めました。傾聴します。

「グレンジャー、レストレンジ。あなた方は3年生からの選択科目において、その全てを選択しています。勉強への意欲があることは、非常に喜ばしいことです。

——しかし、これらの授業の中には、同時に開講されるものも数多くあります。当然ながら、すべての授業を受講することは、時間的制約により通常不可能です」

そうだよ（同意）。

「ホグワーツでは助けを求めるものには常に助けが与えられる」

マクゴナガル先生がそう言って、机の中から金の鎖に繋がれた砂時計を取り出しました。

ようやく2年間の優等生ムーブに一区切りつきそうですね。

「タイムターナー逆転時計。時間を巻き戻す、極めて希少な魔法道具です。魔法省が認めた優秀な生徒

——つまりはあなた方のような生徒にのみ貸与されるものとなります。

言うまでもありませんが、授業以外の目的で使用することは厳禁です——」  
本RTAにおける3種の神器、その二つ目「逆転時計」タイムターナーを入手しました！

「——レストレンジ、あなたに言っているのですよ！」

使用方法は後日説明します。

猫姉貴の一言で解放され、大広間に向かっていると

声にならない怒声が廊下まで漏れ出ていました。

中に入ると、満面の笑みのスリザリン生と絶望を浮かべた獅子寮生が見えました。

どうやら、今期のDADA教師をセブルス・スネイプ、魔法薬学教師をホラス・スラグホーンとする人事が発表されたようです。

あくよかつた二人の人事が6章どおりで。

これで、なんとかRTAを続行できそうです（ホモ特有のフレキシブルチャート）。逆だったかもしれないエ……、となっていた場合詰みでした。

DADAスネイプ、魔法薬学スラグホーン体制は、ある意味ではDADAルーピン、魔法薬学スネイプのデフォルト体制を越えるメリットが存在することが、「謎のプリンス」

における検証により判明しています。

RTA範囲外のことも勉強していてよかったらって思うわけ（ヒゲクマ調教師）。メリットについては後ほど。

スラグホーン召喚が無理筋のためチャートに組み込んでいませんでしたが、召喚条件が判明し、安定するならば検討の余地はあるかと思えます。

追放者兄貴センセンシャル！

目玉人事の後は、シリウス・ブラック及び吸魂鬼に対する注意喚起が行われ、今宵のパーティーはお開きになりました。

クソみたいな量の吸魂鬼を相手にして、流星に疲れしました。今宵はこれまでにしようございませぬ。

明日からは逆転時計くんをしゃぶり尽くして差し上げましょう。

「さて、さて、さてと」

次の日。

3年生初の授業は、スニベルス閣下の跡を継いだ、スラグホーン氏による魔法薬学のようです。

スラグホーン氏の授業は、スネイプ先生とはある意味で対極的です。

初授業においても、その特色は掴めるでしょう。

「みんなに見せようと、いくつか魔法薬を煎じておいた。今すぐには難しくとも、ホグワーツを卒業するまで魔法薬学を学び続ければきつと君たちでもこういったものを煎じることができるはずだ」

スネイプ先生は開幕で演説をぶち込むことで、生徒に注意を促し、魔法薬学に適性のないネビルくんのような生徒を遠ざけることを第一としていました。

彼の趣味が多分に混ざっているとは言え、他の科目と比べても事故の可能性が高い以上、NEWTRレベル、高等教育を見据えた方針とすれば間違つてはいません。

一方で、スラグホーン氏は生徒の興味を惹くように授業を組み立てる癖があります。取りこぼしを減らすことで、より優秀な芽が育つように仕向ける方針です。

内向的と外向的。

ただ一人に心血を注ぐ男と、広い人脈を血肉とする男。

彼ら自身の性格から漏れ出たような授業方針となっています。

「——そうだな。3年生ではまだ難しいだろうが、この薬について何かわかるものはおるかね? ああ、名前だけでも構わない」

スラグホーン氏がそう言って指差した大鍋には、無色の液体が入っています。

この薬は——



「ベリタセラム 眞実薬です。ひと匙で飲んだものに眞実を語らせます」

——ハーマイオニーちゃんベリタセラムの言うとおり、眞実薬です。

無味無臭、薬効明快、対策不能。尋問インタビューにおいて眞実薬を用いることは、闇祓いの基礎とも言われています。

一説によると、バットマン vs 野獣先輩において

「彼女とかいる? 今」

「今はいないです」

「今はいない? いつまでいたの?」

「……うん、去年ですね」

と言うやりとりがなされたのは、今年と見栄を張ろうとした野獣先輩に対し眞実薬がベリタセラム発動したからとされています。

おっと、スラグホーン氏が次の大鍋を指し示していますね。

……実のところ、スラグホーン氏の初授業において提示される薬は通常全8種類と少なく、全ての名称と特徴はwiki含め多くのサイトに提示されています。そのため、全問正解も容易でしょう。しかし、ここですでに気に入られているレズちゃんよりも、ハーマイオニーの評価を上げた方が得策でしょう。回答権はスルーするー(激うまギャグ)。

「——ポリジューズ薬です」

大鍋で煮えている泥のような液体はみなさんご存知ポリジューズ薬です。

こちらについても、野獣先輩が日常的に服用することで、世間から目を眩ませていることは有名です。

しかし、「秘密の部屋」時点でもお話ししたように、動物の体毛等を変身素材に用いた場合、ポリジューズ薬は正常に作用しません。

クツソ汚い淫獣の化身である野獣先輩が人間様の体毛を使用した場合でも、それと同様に正しく別人に化けることができません。

これが、野獣先輩〇〇説が発生する原因と言えるでしょう。全ての説は、実は野獣先輩が対象に化け損ねた姿と言えます。Q・E・D。

「——アモルテンシア、魅惑万能薬——」

などと野獣先輩新説シリーズを執筆している間に、次の魔法薬へと進んでいました。

アモルテンシア。一言で言ってしまうえば媚薬ですが、そんじよそこらのホモビで使われるそれとは、一線を画した特徴があります。

それは、キャラクターが好んでいる人物、あるいはそれに由来する環境の香りを対象に感じさせると言う特徴です。

今のところレズちゃんには……無臭に感じますね。愛を感じるほどの対象が、マスク

データレベルでも存在しないと断言するでしょう。

悪くない兆候ですね。仮にここで4種、5種と異なる匂いを嗅ぎ分けていた場合、将来の修羅場待たなすです。

「神秘部の戦い」で決着をつける以上、恋愛フラグを構築するのは無意味です。

RTA走者に愛などフヨウラ！

八方美人に交友関係を広げていましたが、少なくともセルフ五等分の花嫁化しなかったのは僥倖僥倖。

……他人の好感度？ 知らなーい。

いよいよ大鍋は残り一つ。

金の飛沫が飛び跳ねる一つの器。

「これこそは、数多くある魔法薬の中でももつとも煎じるのが難しく、もつとも興味深いものの一つ。

——フェリックス・フェリシスと言う」

幸運の液体、フェリックス・フェリシス。

言うまでもなく、神アイテム、チートアイテムであり、本RTAにおける三種の神器、最後の一つ（繰り上げ当選）です。

チャート上では「プリンスの教科書」が神器でしたが、彼は幸運の液体の付属品とな

りました。悲しいなあ。

これ一本で、ルーピン先生が無職になるのを補ってあまりあるほどの価値があります。

この薬は、服用後効果時間の間、あらゆる乱数を服用者有利に固定する効果があります。

文字通りあらゆる乱数に干渉するため、詳細の説明はできませんが、概要としては「達成可能性のある事象を強制的に成立させ、達成不可能事象に対し干渉しない」となります。

ほんヘルトにおいて、服用者は死の呪文が不自然なまでに当たらなかつたものの、その構造を知らないペルー産「インスタント煙幕」を突破できませんでした。

わかりやすく言えば、「いずれも盗める確率は0パーセントと表示されるが、このゲームでは小数点以下を切り捨てているため、実際は小数点以下の確率で盗める。気が遠くなるほど低い確率だがゼロではない」ならば一度目の試行で確実に盗めますが、「実は嘘です。確率0パーセントでした」と言う場合には、絶対に盗めない、と言うことです。

なので本RTAにおいても、分霊箱を無視してお辞儀様を札害、などはできません。しかし、それを差し引いたとしてもあまりにも強力すぎる一品です。

「この希少な薬を君たちの誰かに小瓶一瓶——12時間分プレゼントしよう。」

——もちろん、条件はあるとも。これは魔法薬学の授業だ。わかるだろうか？」  
調合ルートでの入手では、希少植物を含む多量の材料、寸分狂わぬ魔法薬の調合技術、何より、半年という膨大な時間がかかります。

しかし、スラグホーンの授業においては、彼が幸運の液体を与えるに足る、と判断するほどの価値がある生徒がいた場合のみ、授業中にプレゼントキャンペーンが開催されることがあります。

ハリー・ポッターと授業を受ける場合、ある意味で確定イベントとも言えるでしょう。いずれにせよ、通常プレイ、RTAその他すべてのプレイにおいて有用なのは疑いようもありません。絶対に入手しましょう。

「今年君たちに作り方を教えるいくつかの薬。その中から一つ先取りしようか。」

そうだな……よし決めた。縮み薬。これにしよう。

3年生になったばかりの君たちには難しいだろうが、君たちの才覚を見せてくれたたまえ！」

幸いにして、魔法薬作成に関してレズちゃんが絶大なるアドバンテージを保持しています。

取り出したるはプリンス蔵書・「魔法薬調合法」の複製品。

複数の有用魔法取得、闇の魔術適性の底上げだけでなく、魔法薬学の調合にプラス判

定をもたらす神アイテムです。

スネイプ先生大好き、本当に憧れてる（YMN）。

「——ほっほう！ すばらしい！ 杖捌きだけでなく魔法薬学まで一流とは！ ブラック——名家の血統を証明するにふさわしい才覚だ！」

過程省略。

と言うわけで、スネイプ先生から受け継いだ（大嘘）アンチヨコを使うことで無事幸運の液体、フェリックス・フェリシスを手に入れることができました。

スラグホーンの説明にあつた通り、小瓶程度しかないので、効果時間は半日ほどしかありません。

しかし、逆に言えば1時間刻みで実に12回TASさん並みの豪運を發揮できます。やっただぜ。成し遂げたぜ。あく、たまらねえぜ！ 三人で杖を舐め合いながらロープだけになり、フェリックスの小瓶を3本ずつ入れあおうや（一人4時間分）。

ここから先は、「a s sガバガバンの囚人」のグランドクエストを、「謎のプリンス」イベントを交えながら攻略することとなるでしょう。

さしずめ、「謎の囚人」編といったところでしょうか。

なあと、6章のイベントは分霊箱と恋愛、マルフォイご乱心のみ！

分霊箱は既知であり、恋愛を進めるには未だ幼く、マルフォイ暴走の原因のお辞儀様はまだ霞！

幸運の液体入手のように、うま味テイストなイベントだけしやぶり尽くせばへーきへーき、へーきだから！

今回はここまで！ ご笑読ありがとうございました。

## 16/? ～忍びの地図入手まで

……きをつけな だんなの うごきは ダンブルドアに よまれてるぜ。  
なRTA、もう始まつてる！

さて、前回「assガバガバンの囚人」編と「謎のプリンス」編が混線しているというガバガバのガバが発覚いたしました。

しかし、本来ならば入手出来なかつた幸運の液体を入手できたことは、まさしく怪我の功名、リガバリーの極致と言えるでしょう。

これにより、レズちゃんは「逆転時計」、「フェリックス・フェリシス」という本RTAにおける三種の神器——「RTAの秘宝」の二つを一挙に入手できました。やっただぜ。

この調子で行きますよー行く行く。

というわけで、魔法薬学が終了したので次の授業に進みとうございます。次の授業はなんじやらほい。

なにに、10時半からマグル学、10時半から数占い、10時半から占い学とな



……。

ええ……（呆れ）。

逆転時計入手のために受講するとはいえ、スケジュールで見るとこれもうわけわかんねえな？

というわけでそれぞれの授業に行くぞオラア（レ）。

一つ目、マグル学。

クソだよクソ！ 「マグルがなぜ電気を用いるのか」というテーマで講義が行われませんが、マグルの存在自体がMUR大先輩の脳味噌並みに価値がないってそれブラック家で一番言われているから（純血思想）。最初だけ受講して後々切ります（断定）。

二つ目、数占い学。

これは……：数学じゃな？（確信）

これもRTAにはフヨウラ！ ……とも言いきれません。

授業で魔法を用いることのない数占い学ですが、この授業を受け続けることで「知能」の基礎ステータスが上昇するというメリットがあります。

そして、知能ステは高ければ高いほど、呪文習熟時の熟練度の上昇率に補正がかかるというメリットがあります。魔法素養の少ない穢れた血のハーマイオニー姉貴が魔法を使いこなせる理由ですね。

本RTAにおいては必要呪文を規定段階までに習得する必要があるため、チャートの安定化には必須となります（チャート崩壊済み）。

だから、数占い学を受講する必要があったんですね。

ベクトル先生！ ベクトル先生見てるかー！ 先生ありがとう！ フラッシュ（ルーマス・ソレム）。

三つ目、占い学。

クソだよクソ！（同時間ぶり二度目）

シビル姉貴は基本的には野獣先輩並みの無能ですが、神であるGOとの交信中、予言を行うときのみメジャーリーガー並みの有能になります。

（運命）決めてるんだろ……（予言）くれよ……。

とトムくんが神秘部に乗り込むのもわかりますね。

あっそうだ。本RTAは5年生「神秘部の決戦」でヴォルデモート卿を再札します（再掲）。

話を戻して。

というわけで、占い学にも続ける価値はありません。ありませんが、授業を切りすぎると通常のタイムスケジュールで科目履修が可能になりますので、逆転時計が没収され

ます。

バーベツジ教授よりもシビル姉貴の方が目を盗みやすいので、占い学で惰眠を貪りましょう。今夜は夜ふかし！

おっと、ハリーくんがインチキ占い師に精神攻撃を受けていますね。フォローしましょう。

死神ゲリム犬なんて大丈夫だって安心しろよ。

……思ったより落ち込んでいませんね。精神ステが伸びているようです。育成の賜物ですね。

本日はここまで三つの授業を1コマ1時間半で受講するために、逆転時計を3時間使いました。

逆転時計使用時には時間リソースの管理が重要となってきました。

詳しくは夜パートにて説明いたします（犯行予告）。

お昼。思いつきりかつこみましょう。スタミナと健康は重要。はつきりわかんだね。

お昼を終えて、次は魔法生物飼育学の授業です。

——みなさん、ご無沙汰しております。悶絶動物専属調教師のハグリッドと申します。前回のアニマルクエスト・アクロマンチュラのアラゴグはいかがでしたでしょうか。

(中略)

今回調教する動物は「ヒツポグリフ」！ ハンサムな鷲のマスクと均整の取れた馬の身体。まだ初授業の私は、この猛獣で授業をすることができるのでしようか。

それでは、ご覧ください――。

「――僕、死んじゃう。見てよ！ あいつ僕を殺した！」

「死にやせん！」

はい。

というわけで、3年生の「ハグリッドのアニマルクエスト」、「バックビークの生存を勝ち取れ！」です。

今更説明の必要もありませんが、バックビークくんを含むヒツポグリフの習性として、「舐められたら頃す」の精神を持っています。お前鎌倉武士かよお!?

こいつもハグリッドの好みに漏れず、魔法省分類XXX、有能な魔法使いのみ対処すべしとされている非常に危険な害獣です。

規格外の魔法使い・魔女でない方は、バカにしたりメンチを切ったりせず足に足を舐める勢いで頭を下げましょう。マルフォイのようになります。

今回のクエストにおいても、十割マルフォイくんの責任ですが、親マルフォイくんの

権力によりバックビークくんは斬首となります。

なので正当に生存させるには裁判に勝つための資料を用意する必要がありますが、まあ、無理ですね。

野良犬叔父貴の逃走ルートのためにもノータッチでいきましょうか。

「我輩が話をする。十分傾聴するのだ」

お次はスネイプ先生の「闇の魔術に対する防衛術」の授業です。

本RTAをご覧の皆さんは、「謎の囚人」ルート発生時に、こう思われたことでしょうか。ルーピン先生がいなければ、ハリーの成長が遅れてしまう！ どうしてくれんのこれ!?

ところでDADAの授業には、一つの大きな特徴があります。

それは、「担当教師によって授業テーマが大きく変わる」ということです。

例えば、本来行われるはずだったルーピン先生の授業は、主として闇に属しているとされる危険な魔法生物の対処に重点を置かれていました。

これは、彼が身をもって闇の魔法生物の危険性を理解しているからと言われているます。なんでそんなに詳しいんでしょうかね（すつとぼけ）。

これは自らの小説を用いるロックハート、闇祓いの資質を生かしたマッド・アイ（偽）、

座学を重んじるガマガエルと他の教師にも当てはまりません。

……ターバンマンは精神薄弱状態のため例外とします。

それでは、スネイプくんはどうなのでしょうか。

『闇の魔術』は、多種多様、千差万別、絶えず変化し永遠のものだ——」

流星は闇の魔術を嫌っている幼馴染の気を引くために闇の魔術を探求した男です（皮肉）。

彼の授業のテーマは「実践的な闇の魔術との闘い」です。マッド・アイ（偽）と同じ方針です。

お前、もしかしてムーデイと同じ陣営なのか？（名推理）

さて、今年のスネイプ先生はどんな授業をしてくれるんですかね……？

「——この恐ろしくも賢き多頭の怪物に立ち向かうに当たって、諸君らがまず学ぶべき呪文は何か」

おっ（期待）。

これってもしかすると、もしかするかもしれませんがよ？

ハーマイオニー姉貴だけが手を挙げているのを確認したのち、嫌そうにスネイプくんが彼女を指名しました。

「ミス・グレンジャー。答えたまえ」

「はい。『盾の呪文』だと考えます。『闇の力——護身術中級』には「結構。我輩は君の暗唱を聞きたいわけではない。」

——正解だ。左様。強大なる闇の魔術でなくとも、我々魔法使いの肉体は呪文の威力と比べ脆弱にできている。闇の魔術に対抗する際には、まず自らを護らなければならぬ。

しかし、こうした力を若年の魔法使いは疎かにしがちだ。

——とりわけ、蛮勇を誇る寮の生徒などは」

最後の脚注いらない、いらなくない？

スネイプくん特有のグリフィンボール煽りはさておいて、まあ一理あるでしょう。

攻略wiki初心者FAQのページにも書かれている金言です。レズちゃんも当然習得済みなくらいには必須呪文ですね。プロテゴなしに完走は不可能でしょう。

「これから諸君は、二人一組となる。一人が相手に呪いをかけ、もう一人が盾の呪文で防ぐ。」

今回は呪いはなんでもいい。衝撃魔法でも使いたまえ。——その程度は使えるだろう？ ロングボトム。次回以降は我輩が指定する魔法を使ってもらおう。

……何をしている。始めたまえ」

魔法生物対策よりも、対人戦を練習した方が死喰い人戦で優位を取れるのは、当たり

前だよなあ（軍神ミユラー）。

これこそがDADA教授セブルス・スネイプの有用性です。

DADAにおいて、彼はその学年の中でもやや高い水準の効果的な魔法を教えてください。例えばほんヘルトにおける六年生での無言呪文もそうですね。

やっぱ、半純血の、プリンスを、最高やな！（称賛）

こと死喰い人戦に特化したビルドと考えれば、スネイプくんはルーピンくんより明確に上位にあります。これからも、彼の授業をしゃぶり尽くしていきましょう。

「まったく、悲劇的だな、ウィーズリー。」

どれ、我輩が手本を見せてやろう。

——ステューピファイ！ 麻痺せよ！」

っと、プロテゴ！ 守れ！

申し訳ないがハリーに対する失神呪文は授業強制中断で彼の成長が遅れるのでキャンセルだ。

「——レストレンジ。得意げに盾の呪文をひけらかし、授業を妨害したその傲慢さにグリフィンボール5点減点」

は？（威圧）



というわけで、気を取り直して夜です。

新年度初の「必要の部屋」にイクゾー！ デッデッデデデ。

部屋の中に入る前に、一つだけ注意点。

これまでは、「防衛術練習に向いていて、自分以外は入れない部屋」を指定していましたが、今年からは少し頼み方を変える必要があります。

「防衛術練習に向いていて、ズイラ・レストレンジ以外は入れず、部屋の出入り口は二箇所あり、それらは壁で区切られた同一部屋内の別々の空間に繋がっており、空間内からももう片方の空間の情報を一切知覚できず、同一空間内に二名以上存在できない部屋」オナシヤス！ センセンシヤル！

長スギイ、とお思いでしょうが、必須条件となっています。これだけ指定しないと、最悪リセです（絶望）。

これにより、中央を壁で区切られた部屋の片側、便宜上A空間に侵入できました。

部屋の中では、切断呪文・セクタムセンプラと服従の呪文・インペリオの熟練度を上げていきましょう。闇の魔術適性も上がっていいチャートだあ（自画自賛）。壁撃ちではインペリオの熟練度上昇率が低くなるのでセクタムセンプラ気持ち多めです。

後々には失神呪文も習得しますが、後ろ暗い魔法は一人で練習です。

おっとそろそろいい時間ですね。大人しく部屋に戻りましょう……と昨年までは言っていました。今日からは違います！

逆転時計による、嬉し恥ずかし、延長タイム！

一度部屋から出て、時計を2回だけひっくり返して、2時間時間を巻き戻します。そしてもう一度お願いしましょう。

「防衛術練習に向けていて、ズイラ・レストレンジ以外は入れず、部屋の出入り口は二箇所あり、それらは壁で区切られた同一部屋内の別々の空間に繋がっており、空間内からももう片方の空間の情報を一切知覚できず、同一空間内に二名以上存在できない部屋」頼むよー（卑劣な尺稼ぎ）。

……やったぜ。部屋の中には誰もいない、先程と瓜二つの部屋が出現しました！

「必要の部屋」くんは神秘的にいい部屋なので、可能な限り入室者のお願いを叶えようと思います。おー、ええやん！

一方で、「必要の部屋」くんは結局のところ一箇所しかないので、複数の部屋を同時にお願いしたり、条件が噛み合わない部屋をお願いした場合には最初の部屋しか出してく

れません。はあーつかえ！（手のひらホグワーツ）

また、逆転時計の使用に関しては、神秘部で無言者をやっている時間口マン爺こと、ソール・クローカー教授が次の様な忠告を残しています。

「時間遡行」について、お話しします。

みんな、逆転時計って、知ってるかな？ 逆転時計というのはね、例えば、一回ひっくり返すと、一時間巻き戻るとか、あるいは、三回ひっくり返すと、シリウス・ブラックが脱走する、といった道具を逆転時計というんだ。

時間遡行の理論は、複雑怪奇に、あるんだよ。そして、「時間」と、「人間の知性」はどちらが、上かな？（未知への挑戦）もちろん、「時間」のほうが、ちっぽけな人間よりも、上だよね？（結論）

逆転時計の、先の部分に、魔法の粒が6回以上集中するとね。その人は、下の世界（婉曲表現）に、生まれ変わるんだって。イヤだねえ。

今、「時間遡行」を五時間以上行なっていない子は、これから先「時間遡行」を、しないようにしようね（賢者の忠言）。今、時間遡行を1402年まで行なっている、エロイズ・ミンタンブルは、（救出を）やめようね！

そして、お父さんお母さんを含めた、25人を超えるみんなを大事にして、みんなのために、生きようね！（叶わぬ願い）

関係するところだけ翻訳すると、「現在の技術水準における逆転時計による遡行で安全を保障されているのは、最長で5時間前後であり、それ以降の遡行は使用者及び時間軸に致命傷を与える場合がある」となります。

今回の使用では2時間ですが、1日の合計利用時間が5時間ほどとなります。連続使用ではないものの、24時間中における利用時間が5時間を超えるとやはりなんらかの影響が出るとwikiで報告されているため、避けた方が無難でしょう。

また、時間遡行中に自分自身と出会った場合についても、過去の自分が自分に出会った記憶がない場合、やはり致命的ガバとなります。

だから、部屋内部の二空間で一切の干渉ができない状態を作り出す必要があつたんですね。

というわけで、A空間から区切られた別の空間、B空間に入ります。心を込めてもう一回闇の魔術の練習をしましょう。

こんな感じでしたら早く進めていきます。

次のイベントはハロウィーン、尻ウスクんの「太った婦人」襲撃イベントです。そこまでは超スピード!?に進めます。

おいの木村、加速します。

「よう、お嬢様！　今夜も夜更かしかい？」

停止して。

ハロウィーン二週間前です。突発イベントが発生しました。

「一年生から欠かさずご苦労様！　もしかしてズイラお嬢様は吸血鬼にあらせられたのですか？」

いつものように「必要の部屋」に遠征に行こうとしたところ、談話室でフレッド・ジョージの双子に呼び止められてしまいました。

今夜は逆転時計のストックが5時間まるまるあつたのですが……。

「夜遊びは楽しいだろうが、いつかフィルチ卿のご厄介になる羽目になるぞ」

「――処罰だぞ――」

「――腸を抉るぞ――」

――逆さ吊り、鞭責め悶絶調教だぞ――。

「さしもの我々も、うら若き少女が悪漢の手にかかってしまうのは忍びない」

「そこで、だ」

赤毛の片方は、レズちゃんに薄汚れた羊皮紙の紙切れを差し出してきました。

ん? (期待)

「よからぬことをたくらむ君に、よからぬ品をプレゼントしよう」

汚れ好き(糞爆弾)の赤毛のいちちゃんが、わしの手には「忍びの地図」をドリャッ

アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ  
!! (クサイヤ人)

ついに、惜しくも「RTAの秘宝」の座こそ逃したものの、それに勝るとも劣らぬ神アイテム「忍びの地図」を入手しました!

これまで双子の好感度を念入りあげた甲斐がありました。度重なる「必要の部屋」遠征により問題児判定は攻略できるのですが、ハリーより先に入手できるほど好感度が溜まっているか正直不安でした。あー、良かったーって思うわけ。

今は亡き蛇察チャートだと襲撃して強奪するか諦めるかの二択となったため、円滑に取得できて何よりです。

大正義グリフィンドール寮の利点を存分に発揮できました。

「今年で我々もフクロウの年」

「そろそろ『マローダーズ』の手を離れ、自分たちの『いたずら試験』をやる時期が来た

のさ」

いたずら完了！

始まりから終わりまで、使い方を懇切丁寧に教えていただきました。ありがとうございました。ありがとナス！

「——次の『仕掛け人』はお嬢様方にお任せしよう」

「良ければ我らが愚弟も加えてくれたまえ！」

あ、いいっすよ（快諾）。

勝ち申した（勝利宣言）。

これまでもデミガイズの透明マントを使用しているとはいえ、不意の事故は十分に考えられました。今年に関しては、鼻のいい犬ところが近くに潜伏しているため、尚更です。

ですが、これから先、ホグワーツ城内において、情報アドバンテージを常にレズちやんが取り続けることが可能となりました。

夜更かし前に、早速使ってみましょう。

グリフィンドール寮——ピーター・ペティグリュウ、必ず君を逃してあげるからな！

禁じられた森——シリウス・ブラック、もう潜伏してますね。注意して進みましょう。

厨房——ポルターガイストくんが襲撃をかましていますね……。

校長室――

アルバス・ダンブルドア

親愛なるズイラ。

今夜、個人授業を行いたいと思う。これから、わしの部屋にお越し願いたい。  
わしらが最初にあつた時、君にあげたお菓子を覚えているかな？ あれの新作が出た  
んじや。一緒に食べよう。

敬具

追伸 夜更かしはほどほどにの。



## 最も邪悪なる魔術

「レモン・キャンデー」

夜。ホグワーツ城。三階。

誰もいない廊下、ガーゴイル像の前で、一つの音が響いた。

ガーゴイル像はびよん、と後ろに跳ねると同時、彼の後ろの壁が二つに裂け、螺旋階段が姿を現す。

衣擦れの音。ひとりでに階段が動き出し、ガーゴイルは素知らぬ顔で彼の居場所へと戻った。

螺旋階段の動きが止まり、再び衣擦れ、その先にある櫺の扉が開かれる。

扉の傍では、毛が半分ほど抜けた七面鳥のような鳥がすやすやと眠っていた。

彼の毛が人の指のような形に沿ってわずかにへこむ。不死鳥は数度身じろぎし、再び深い眠りにつく。

ごめんなさいね。眩きがぼつりと漏れる。

そうして姿のない何者かは、ぐるりと室内を見渡す。

歴代校長の肖像画——その多くは眠っているようだ——、実用的ながら気品感じるデ

ザインの事務机、「組分け帽子」をはじめとする魔法道具が収められた棚。

それから、部屋の中央には一台のガラステーブルが設置され、ふかふかのクッションのついた椅子が三脚置かれていた。うち一つはラージサイズの椅子である。

今、この部屋には、姿あるものは誰もいなかった。

「——ここは校長室だ。その見窄らしいマントを取るべきだとは考えなかったかね？」

誰もいないはずの部屋で男性の声が発せられる。

女の声はそれに応えた。

「一理、ありますね。わたくしもいつまでも姿を隠したいわけではありませんし」  
ばさり。

デミガイズのマントを翻し、黒髪の少女が虚空より出現する。

少女はいそいそとそれを、背負った黒のリユックサックに詰め込んだ。

やや小柄な彼女の身長もあってか、それは無意味に大きく、率直に言って似合っていない。なかつた。

「よろしい。ブラックの末裔たるものが、招かれた茶会で『透明マント』を着て縮こまっているなぞ、いい笑いものだ」

「ご教授ありがとうございます。しかし、僭越ながら申し上げると、現在のレストレンジ

家がパーティーに招かれることはあり得ないかと」

少女はかぶりを振って続けた。

「叔母様方も、ナルシツサ叔母様——マルフォイ家の方はともかく、『血を裏切るもの』が呼ばれるパーティーなどとても、とても。程度が知れますわ。

本家は……言うまでもありませんね」

嘆かわしいな。

ええ、まったく。

肖像画と少女はわざとらしく揃って肩をすくめた。

「ところで、私はまだ君の名前を聞いていないが、最近のホグワーツでは目上のものから名乗るように教えているのか？」

その言葉に、少女は囁りでもって返す。

「あら、これがパーティーならば、紳士が淑女に声をかけるのがマナーでは？ それに、気の遠くなるような昔ならともかく、今時のホグワーツではマナー講座なんて行いませんわよ？」

普段の少女を知るものであれば、ポリジューズ薬を疑う程度には、棘のある言い方だった。

睨み合い。先に折れたのは、意外にも肖像画だった。

彼はもったいぶって、名乗りを上げた。ちくりと嫌味を添えて。

「よかろう、よかろう。物事を知らぬ子供に規範を示すのも私の職命か。

私がフィニアス・ナイジエラス・ブラック。ホグワーツの元校長にして、君の血縁、ブラック家の者だ」

「ご丁寧にありがとうございます。もちろん存じ上げておりましたとも。あいにくお墓参りには行つたことありませんが。

わたくしはズイラ・レストレンジ。貴方の来孫らいそんに当たります。

——お爺さまとお呼びしても？」

「ここはホグワーツで、私は元校長、君は一生徒——それも悪童、とびっきりのだ。もつと相應しい呼び名があると思わなかね？」

それもそうですわね。

肖像画の言を聞き、少女は前言を撤回した。

「——わかりました、おじいちゃん。

ところで、話は戻りますが、ダンブルドア校長先生はどちらへ？」

当て付け。

肖像画はふんと鼻を鳴らし答えた。

「入れ違いだ。ダンブルドアは少し前にここを出て行つたとも。

——それとも何か？ まさかまさか、たかだか規則違反の小娘一人のために、栄光あるホグワーツ魔法魔術学校校長が予定を合わせてくれるとでも？

とんでもない傲慢だ」

愚弄。嘲り。

肖像画の笑みは、どこか少女によく似ていた。

あら、まあ。少女はわざとらしく驚いた表情を浮かべる。

「てつきり、もつと実のあるお話ができると思つていたのですが……。

——それとも何ですか？ まさかまさか、何も知らされてない？ 校長の助言役たる

貴方が？ そのために肖像画に身をやつたのでは？

とんでもない怠慢ですわね」

愚弄。嘲り。

少女の笑みは、どこか肖像画によく似ていた。

「小娘、年長のものを敬おうという気持ちはないのか？」

「ええ、正直言つて、全く。フィニアス・ナイジェラス・ブラック。ご高名はかねがねうかがっておりますわ。

——なんでも、ホグワーツ開校以来最も人望のなかつた校長だとか？」

肖像画は、物事を知らぬ愚物を見るような目で少女を高所から見下した。みおろ

「人望……人望とききたか。

人望が能力を保証してくれるのか？ 人望だけあればそれで十分と？

お友達教師なんぞになんの価値がある？ たかだか三年生の小娘がホグワーツ魔法

魔術学校の校長に教育を語る？

——お笑い草だ」

その物言いに、待っていたかのように反証をあげようとして。

「……少なくとも、人望と能力を兼ね備えた校長が一人いますわ。アル——」

ぷつり。

まるでブレーカーが落ちたかのように、少女は頭を押さえて口籠もる。

ヒートアップした肖像画はそれに気づかず、勝ち誇るようにつくつと嗤い、言い放った。

「ふん、なんだ、言ってみろ。そら、早く。

……言えないのか？ ブラック家の末裔たるものが、議論において言葉を詰まらせ、

前言を翻——」

「——仮に！」

少女は肖像画の演説に割り込んで、話題を逸らした。

先程の発言はどこへやら。

「仮に、生前のブラック校長が偉大な人物だったとして！

……結局のところ、貴方ただの肖像画でしょう？」

少女は、高次の者が低次の物に相對するのように、自然と肖像画を見下みくだした。その青い目は、どこか蛇の眼のようだった。

少女の口が動く。

「どんな偉大な人物でも、死ねばおしまい。生きているものには敵いません。

焚き付けにしまえば、それでお仕舞いです。

——実践、なさいます？」

脅迫。

なるほど、なるほどと、肖像画は少女に吐き捨てた。

「小娘、貴様は真実、親に似たようだな。ベラトリックスの奴めもレストレンジ邸にあった私の肖像画を焼きおったわ。

——ただか混血風情に命じられおって」

「それでも、『闇の帝王』はスリザリンの血を引いておられるのでしょうか？ それほどの高貴な血筋ならば、半分だとしても無駄にぶくぶくと膨れ上がり、『血を裏切るもの』も数多くいるブラック家などよりよっぽど上等なものでは？」

これまでの罵り合いの中で、最も熱のある返答。

「——救えんな」

「——救えないですわね」

お互いがお互いを嘲り嗤う。

それはどこか血筋を感じさせた。

それはどこか血筋を感じさせなかつた。

「——ダンブルドアから話を聞いておる。

機知に富む才智、断固たる決意、あるのだろうよ。

目的のためにあえて規則を無視する傾向、これも聞いた。

純血、言うまでもない。

なるほど、なるほど。スリザリンらしい性質を持つているようだな。

だが、スリザリンの先達としては——」

「——フィニアス。残念ながら、彼女はそれでもグリフィンドール。わしの寮の生徒じゃ」

少女の後ろから、老人の声が飛んでくる。

少女を穢らわしそうに見つめ、肖像画は吐き捨てた。

「いらん、こんな小娘。話してわかつた。性根が腐りきつておる。

規則破りも合わせて、私が現役の頃なら、数日鎖で地下室に吊るしておるわ」



あら。

少女が口を挟んだ。

「おじいちゃん。それって、その……かなり倒錯した趣味でしてよ？」  
返事は返ってこなかった。

「——こんばんは、ズイラ」

「——こんばんは、校長先生。勝手に入室してしまい、申し訳ございません」

「構わぬよ、わしが席を外したのがまずかった。急に呼び出して申し訳なんだ」  
薄い微笑みをたたえて、なごやかに二人は話す。

掛けなさい、老人はそう椅子を指し示した。

ありがとうございませす。少女は礼を言い、椅子に腰掛ける。

「この度はご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

少女の声は、なにかがおかしかった。

「何か飲み物はどうかね？」

「いただきますわ」

少女は了承する。

老人が立ち上がり、背後の棚に向かった。そこには飲み物がいくつか並んでいた。

「バタービールでよかったかの？　ホグズミードで堪能する前の、先行体験というやつじゃ」

ええ！

少女は返事をし、それから彼女のリュックサックをゴソゴソと漁り始めた。

お目当てのものが見つかったのか、にっこり嗤って提案した。

「そうそう！　最近ちよつと面白いカップをフレッド達から仕入れましたの。よければ楽しんでみませんか？」

「構わぬよ。どのような『悪戯』かのう」

老人は少女の提案を了承する。

少女が彼女のリュックサックからそれを取り出そうとして――。

振り向き一閃。

老人が手を翳し、金のカップに衝撃呪文を撃ち放つ。

寸分違わず命中したそれは、少女の手から弾け飛び、櫛の扉へと吹き飛んだ。

衝撃音。目覚めた不死鳥が恨み節を上げる。

ぱちくり。

少女はたつた今日が覚めたかのように数度目を瞬かせ、老人を認識し、慌てて挨拶し

た。

先程の一連のやりとりで、手首の痛みひとつ彼女が感じなかったのは、まさしく幸運だったのだろう。

「――？」

ああ！　こんばんは、校長先生！　この度はご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

「――うむ、こんばんは、ズイラ。構わぬよ。今日は何も君の夜更かしに物申すわけではない。

せっかくだから一緒に夜更かししよう、というお誘いじゃ」  
こうして夜会は開かれた。

しばらくして。

老人セレクションのお菓子を食べながら、これは美味しい、これは面白いと語り合つて。

少女は本題を切り出した。

「そうでした！　実は、その……校長先生に預かってもらいたいものが二つほどありますの」

そう言つて少女はリュックサックをゴソゴソと漁る。

漁る。

漁る……。

「検知不可能拡大呪文」の掛かったリュックサックをひっくり返すような勢いで、漁り始めた。

「……あれ？ あれ?! 確かに入れたはずですよ!」

誰が見ても明らかなのに、いつそ憐れなほどに狼狽していた。

見かねた老人は彼女に助け舟を出した。

「あれ、かのう」

老人が指さす先には、床を転がるカップがあつた。少女はそれに飛びつき、校長に差し出した。

壁に衝突したのが嘘だったかのように、傷一つない美しい金のカップだった。

なのにごこか穢れた印象を持ってしまふ、不思議なカップであつた。

「——ごほん。」

まずはこちら、わたくしの金庫にずっと収められていた、さるお方が大切にしていたカップだそうです」

気恥ずかしいのか、彼女の頬はうつすらと赤く染まっていた。

それともう一つ……。少女は再びリュックサックから手を突っ込む。「あ、ありましたわ。こちらです」

取り出されたるは銀色の髪飾り。思わず着けてみたいと思つてしまうような、見事な出来の髪飾りだった。

「こちらは……。その……。夜更かしの旅の果てで見つけた、髪飾りです」

少女は髪飾りをテーブルの上にとりと置いた。

老人はそれを杖で浮かせ、全体を軽く検分し、やがて了承した。

「——それで、何故、おぬしはわしにこれらを預けようとするのかのう」

本題。

虚飾を許さぬその問いに、少女は滑らかに答える。

「いくつか理由がありまして……」

まずは、その二つの魔法道具は、本来ここにあるべきものですよね……?」

老人は首肯した。彼の背後の棚には、一本のゴブリン銀が納められている。

「うむ。ある意味で、これのあるべき場所はここじやろう。類似品もすでに一つある。

——それだけかの?」

半月メガネの奥底で、老人の青い瞳がきらりと輝く。

そのように感じたのか、少女は目を伏せ、ぽつぽつと語り始めた。

「多分、お母様の教育の賜物だと思えます。以前お話ししたように、わたくしはずっと、『闇の帝王』がお戻りになられると考えておりました。

そして、昨年度末、それは確信に変わりました」

少女は、老人の背後、道具棚を指し示した。

帽子、剣。

その横に置かれた、一冊の両断された日記帳。

それが答えだ、とばかりに少女は続ける。

「わたくしの家はほんのちよつと変わったところがありまして、ホグワーツの図書館にも置いていないような、珍しい本を持っていることがあります」

そう言つて、少女は再びリユックサックに手を突っ込む。

数秒後取り出したのは、本能的に悍ましさを感じさせる——先程の二品ほどではない

——黒い装丁の本だった。

そのタイトルを『深い闇の秘術』という。

老人の気配が僅かに変わった。

少女は更に続ける。

「この本には……まあ、面白くないことがいくつも書かれていまして、その中の一つを『帝王』が用いているのかな、と。

お母様もそう考えたかと思ひます」

「ふむ」

ここで初めて、老人が口を挟んだ。

「一つ疑問がある。あやつにとつて、不死のからくりは最も重要なものだと考えておる。当然ながら、その知識は一人で独占したいはずじゃ。」

……腹心とはいえ、たかだか信奉者に不死の秘密を気取られるかの？」

至極真つ当な問い。

うふふ、と少女は笑つた。

「ねえ、校長先生？ 確かに、『闇の帝王』の不死の方法は『秘密』ですわ。秘密ということはつまり、みんなが知っているということですよ」

少女は机の上に目を向けて話す。

目線の先には、銀の髪飾りがあつた。

『計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり！』

少女はその文言をじつと見つめていた。一度たりとも、老人の目を見ようとはしなかつた。

「——そういうことも、あるかもしれんろう。続きを話しておくれ」

内心はどうあれ、老人は受け入れたのだろう。

それに気を良くしたのか、少女はバタービールの入ったグラスを一口傾け、騙り続ける。

「この前の『秘密の部屋』事件の際に、『帝王の日記帳』に触れる機会がありました、その際にわたくしはふと思つたのです。

——ああ、似たようなものを知っているな、と」

少女は砂糖羽ペンで金のカップを指し示して説明した。

「先程お話したように、こちらのカップは、わたくしの金庫の中にとずっと保管されていました。

お母様は決して触るな、とおっしゃっていましたが、やつぱり気になりますよね？  
入学する少し前にカップに触る機会がありました、その時に感じた気持ち悪さと『日記帳』が材質も違うのに同じだったのです」

老人は一つ頷き続きを促す。

老人がキャラメルの包装紙を開くのを見つめながら、少女は話した。

「髪飾りを見つけたのは、一年生の頃です。

いつものようにわたくしがお城の探検をしていた時、8階の廊下で——」

少女が言い淀む。

老人は、その答えに先回りして告げた。



「ズイラ。『あつたりなかつたり部屋』のことじゃつたら、わしはとうの昔に知っておる」  
「——そうでしたか。残念です。あれはわたくしだけの『秘密の部屋』だと思つていましたのに」

少しだけむくれる少女。

老人は、ほつほと笑つて大鍋ケーキを切り分けた。

「残念じゃつたの。『あつたりなかつたり部屋』と呼ばれておるように、あの部屋は一度だけならば、存外多くのものにとって『秘密じゃない部屋』なのじゃよ。

——はい、お食べ」

「やっぱりほんとうに『秘密』なことなんて、そうそうありませんわね。校長先生はどのように見つけられたのですか？

——夜にこんなに食べて、太らないかしら……」

「おお、聞いてくれるかの」

老人は手を叩いて話しだす。それは、彼のホグワーツ生に対する一つの鉄板ネタだった。

「それはあくる日のことじゃつた。わしはとある重大な緊急事態に襲われておつての。あの近辺の廊下をうろうろしておつたのじゃ。

そうしたら突然扉が出てきての。藁にもすがる形で扉を開くと壁一面に古今東西の

素晴らしいおまるのコレクションが——」

老人は、少女の顔を見て、すぐさま口をつぐんだ。

少女に何を感じたのか。

それは、『秘密』。

「話を戻します。よろしいですわね？」

それで、『必要の部屋』を何回も開け閉めしているうちに、倉庫のような部屋があらま  
して。

好奇心がちよこちよここと動きまわして、気がついたらこれを見つけていた次第ですわ」  
逡巡の後、少女はケーキを小さく切り分け、意を決して頬張った。

老人も口に入れたケーキを嚙下し、続きを求め。

「それで、そんな二つの宝物。しかも一つは母君が大切にしていただろうものを、何故こ  
のわしに渡す？」

少女はバタービールで喉を湿らせ、理由を答えた。

「ええ。お母様が大切にしていたものです。きつと、『闇の帝王』が大切にしていたもの  
でもあるのでしょうか。」

「——ですから、これらをダブルドア校長先生にお預けいたします」

「——あいわかった」

人の本心は、開かなければわからない。

宴もたけなわ。

「……そうでしたわ。わたくし、校長先生に一つだけお伝えしなければならぬことがありましたわ」

「ふむ。なにかのう?」

帰り支度をしながら話します少女。老人は鷹揚に促した。

「わたくしは、今日、校長先生のお誘いを受けるまで普段どおり過ごしました。校長先生のお誘いを受けた後は、真つ直ぐにここに向かいましたわ」

「——そういうことで、いいんじゃない?」

「——そういうことで、お願いいたします」

少女の首にかかった金のネックレス。胸元の砂時計は黙して語らず。

そういうえば、と少女は疑問を口にした。

「そもそも、何故、わたくしは今日お呼ばれたんですの? まさか本当に、お菓子品評会です?」

冗談だろう?

少女のそんな表情に、老人はくすりと笑い、返した。

「そうじゃのう……。実のところ、もう用は済んでおる。否、済ませてくれた、というのが正しかろう。」

初めて会った日の話について、そろそろ詳しく話そうとしただけじゃ」  
「そうですか。」

少女は少しうなだれて、老人に一礼した。

「それでは、お休みなさい。校長先生」

「うむ、お休み。今後は、夜更かしはほどほどに」

「ええ、もちろんですわ！」

老人は「開く」までもなく、嘘、と直感した。

直感した上で、やはりそれを見逃した。

あ、そうそう。

少女はくるりと振り返り声を上げた。

「校長先生。校長先生はイギリスで最も偉大な魔法使いで、イギリスで最も尊敬される魔法使いですわ！」

——それから、聞こえていらして！ ブラック元校長先生！ 今度のお休みに、お墓参りに行かせていただきますわね！」

「——ダンブルドア。あの娘、気が触れているのか？」

会談を黙って聞いていたフィニアスは、ダンブルドアに問いかける。

ダンブルドアは苦笑し代わりに弁明する。

「フィニアス、そんなことはないよ。ただ、今夜はちよつとばかり、『秘密』な事情があつたんじゃない」

「……『あの日』か？ それならそうと言えばよからう」

1993年のイギリス魔法界から見てもあり得ない、100年前の骨董品のジエンダー観だった。

ダンブルドアはぎよつとして呻いた。

「——フィニアス。倒錯しておるのか？」

夜は終わらない。

ズイラが退室し、フィニアスが沈黙してしばらく。

ダンブルドアは大きめの椅子に語りかけた。

「……もうよかろう」

返事がない。

ダンブルドアは杖で椅子を突つついた。

「痛い！」

「そう思うなら、早く元に戻ればよかろうに」

呆れ顔のダンブルドアに対し、椅子——ホラス・スラグホーンは、ズイラが座つていた椅子に座り込み弁明した。

「話が長すぎだ！」

誰もが君のように変身術を究めているわけではないんだぞ！　ダンブルドア！　私は私自身のことを『校長室の椅子』だと思いかけていたじゃないか！」

ゼイゼイと肩を怒らせるスラグホーンに対し、ダンブルドアはすまぬすまぬと平謝り。

そして、本題へと移った。

ダンブルドアは金の盃、銀の髪飾りを杖で指して問いかける。

「——これについて、どう思う？　ホラス」

「これって、あれじゃないのか？」

アナグマの刻まれた宝石がついたカップ。ワシを象った髪飾り。  
伝承に聞く——」

「—— 違うじゃろう？」

スラグホーンが口早に語る言葉を断ち切つて、ダンブルドアは彼を罪科へと向き直らせた。

「そちらも歴史的には重要じゃろうが、わしが聞きたいのは、そっちではない。

創始者の遺品が、このように悪しく変質した理由について、理由を考えたいのじゃ。

—— おぬしの『秘密』を語るべき時が来た」

夜はまだまだ更けていく——。

# 17/? ~——を制する者誕生まで

ボクは完走を諦めたりしない。投稿に飽きたりしない。タイムを捨てたりしない。ガバに絶望なんかしない！

チャートは前に進むんだ！（未知のエリア♂）

超ホグワーツ級の幸運（薬物）で駆け抜けるRTA、はい、よーいスタート。

アルバス・ダンブルドア

親愛なるズイラ。

今夜、個人授業を行いたいと思う。これから、わしの部屋にお越し願いたい。

わしらが最初にあつた時、君にあげたお菓子を覚えているかな？ あれの新作が出た

んじや。一緒に食べよう。

敬具

追伸 夜更かしはほどほどにの。

うわあああなんだなんだなんだなんだ（錯乱の呪文）。



待て！ 待つてくれ、ダンブルドアくん！ ガリオンならやる！ 女か!? グリンデルバルドか!? 次のファンタステック・ピーストで主役級にしてやる！（期待）スキャマンダーか!? 待つてくれ、待つてくれ！ 待つてくれ、ダンブルドアくん！

……などと命乞いをしてみましたが、実のところ、この呼び出しはスラグホーン先生が就任した時点で予測のうちにあります。チャートにはありません（絶望）。

アルバス・ダンブルドアによる呼び出しは、六年生時グランドクエスト『謎のプリンス』を構成するクエスト群の一つ、「追憶——トム・マールヴォロ／変遷——ヴォルデモート卿」の導入部となります。

本作をプレイしたことのない兄貴姉貴たちのために、簡単に内容を説明いたします。でも可及的速やかにほんへをやれ（服従の呪文）。

ダンブルドアから呼び出しを受けたハリー及びプレイヤーは、ヴォルデモート卿の不死の秘密を探るため、彼の記憶を辿る旅に出る。分霊箱により不死が保証されている事を知ったハリー（プレイヤー）は、分霊箱の総数を明らかにするために、今年度教師として就任したホラス・スラグホーンの記憶を手に入れる必要があったが、疲れからか、不幸にも黒塗りの高級車に追突してしまう。後輩をかばいすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは……。

というのが、当該クエストの概略となります。

クエスト発生条件は、六年生開始時……と思われるがちですが、先駆者兄貴姉貴たちのプレイ履歴開示の結果、「ダンブルドアがヴォルデモートの分霊箱に気が付いている」、「ヴォルデモート卿が復活した又は復活が避けられない」とダンブルドアが認識する」、「ダンブルドアの爺値、正式名称『Greater Good<sup>善</sup>値』が一定値以上になる」、等々の条件を満たすことが真の条件であると現在では解されています。

あつ、おい待てい（マホウトコロっこ）。爺値が高くなるとダンブルドアは外道行為をするはずだから、スラグホーンに開心術を使うはずだゾ。だからその解釈は誤りだゾ。とお思いの方もいらつしやると思います。ですが、ケツ論から言えば、それは爺値が高くなりすぎたため起こった現象と思われまます。

爺値はダンブルドアの「より大きな善のため」の行動に影響を与えます。

低すぎると、ハリーを対お辞儀最終決戦兵器に用いようとすらしません。詰みです。

逆に高すぎると、当然の権利のように「許されざる呪文」を用いて、プレイヤーにも開心術を使つてきます。これはこれで強力なのですが、ヴォルデモートくんの警戒が跳ね上がり、ダンブルドアが氏ぬまで悪辣な遅延行為を働いてきます。

お辞儀様を倒すために非道行為を行う、でも「ホグワーツ校長アルバス・ダンブルドア」らしさを取り繕っている。

そんな程度の爺値が一番ヴォルデモート再札に利する条件です。あーめんどくせ、ま

じで（本音）。

話を戻して。現在のクエスト発生条件について考えます。

分霊箱の発見——当然ながら、『日記帳』が発見されている以上言うまでもないです。  
爺<sup>G</sup>値——スラグホーンが呼ばれている時点である程度高いと伺えます。何かしら彼  
の中で心境の変化があつたと思いますがマスキュータなので知らな—い。

お辞儀様復活の確信——

——お母様が仰っていました。闇の帝王は永劫不滅。一度御隠れになられても、いず  
れまたお戻りになられると——

——この辺にい、お辞儀様復活を断定する死喰い人の娘、いるらしいですよ。

はい。三条件揃っています。クエスト開始のお誘いですね。

などと色々言ってきましたが、本クエストはRTA的には実は一つを除いてデメリッ  
トはありません。

タイミングの都合上蛇のナギニちゃんは自分で処理する必要がありますが、それ以外  
のほとんど全ての分霊箱を最強無敵爺に破壊してもらうことができるようになります。  
やっただぜ。

グランドクエスト『謎のプリンス』発生時には、クエストの結末として、『スリザリ

ンのロケット』の偽物に騙されたことを遠因としてダンブルドアが頃される」というイベントがありますが、これも関連クエストが始まっていないため全く問題ありません。そもそもダンブルドアの腕の状態から現在は『ゴントの指輪』が未達成と思われるのでそちらを優先させる手もあります。

じゃあ何が問題なのかというと、現在のレズちゃん育成方針、その大目標、「服従の呪文で浮浪者のおっさんを操り、『悪霊の火』を強制的に唱えさせて分霊箱もろとも爆発。分霊箱破壊もできる、証拠隠滅もできる。ビキビキビキニ、123(レ)」戦術を行う意味が、全くなくなったからです(絶望)。

ちよつとこんなんじや見所さんになんないよ。

なので、唐突ですがみなさまのために。

当初やる予定だった、分霊箱破壊方法について、お話しします。

あつ、そうだ(唐突)。「服従の呪文で123(レ)」まで毎回繰り返すのはお互いに非常に苦痛だと思います。先駆者兄貴に倣って「深い闇の卑術」を標榜していましたが、イメージしにくいとのご指摘もありましたので、これから先はこれらの戦法を「二代目レストレンジの卑劣な術」と呼称します。

コメント兄貴ありがとー！ フラーツシユ！

さて、説明に戻りまして。順に説明いたします。

一つ目、『トム・リドルの日記帳』。破壊済みです。お疲れー。

次、『ハツフルパフのカップ』、『レイブンクローの髪飾り』。少し早めに今年まどめて破壊するつもりでした。『カップ』はどんなに遅くともカツチャマが脱獄する五年生までに壊す必要があるからね、仕方ないね。

予定では、逆転時計で完璧なアリバイを作つて、ホグワーツ外で破壊するつもりでした。ホグワーツから脱獄する方法については後で実践します。

次、『スリザリンのロケット』。グリモールド・プレイス12番地が解放され次第、「二代目レストレンジの卑劣な術」を叩き込みます。クリーチャーくんは『ロケット』破壊時には協力的になつてくれるため、浮浪者のおっさん確保も楽になります。おまけに五年生時には死喰い人のおかげで行方不明も多くなるため隠蔽も楽だな！

次、蛇姉貴。こいつだけは確定エンカが一度しかないため、潜伏爆札します。近くにはウィーズリーの家持ちのおっさんしかいないため、「卑劣な術」も使えません。逆説的に、ここまでに「悪霊の火」の熟練度を上げておく必要があります。

次、ハリーくん。全部話したら見所さん壊れちゃーう！

『ゴントの指輪』！こいつが本チャートでの目玉でした。

『指輪』が配置されているゴントの小屋には、リドルくんの罠のほかにも、元々住んでいたゴントくんたちが仕掛けた罠がしこたま設置されています。

魔法使いのおっさんだけではタマがたりないので、仕掛けられた罠を突破するために、「服従の呪文」で洗脳したリトルハングルトン在住のノーマジをドバーッと突入させ、一度きりのトラップを起動。後に魔法使いのおっさんを三人ずつつうずるっこんで「悪霊の火」を使わせる予定でした。

最終的に綺麗さっぱり灰になり、「におい」が検知されたとしても、証拠も何も残らない。仮に残ったとしても、とち狂った死喰い人予備軍がマグルを虐殺のち事故死で済む。寂れた村で老人が失踪してもマグル警官が捜索するまでに時間がかかるといふ素晴らしいチャートでした。ですが、もうやりません。

なので、「二代目レストレンジの卑劣な術」は浮浪者のおっさんではなく、汚れ(仕事)好きの死喰い人のにいちちゃんに行います(犯行予告)。

もちろん、カツチャマやドロホフさん、ルックウツドさんのようなa s sガバガバンのゆかいな仲間たちには服従判定で勝てません(先達への畏敬)。仮に服従させることができても、彼らの「悪霊の火」の熟練度が十分のため戦術効果が半減します。

だから、お辞儀様復活後に仲間になった、DAメンバーに負けるようなクソ雑魚死喰い人を服従させる必要があるんですね。

「許されざる呪文」である「服従の呪文」ですが、バーテミウス・クラウチ・シニアくんが制定した通称「クラウチ法」のおかげで死喰い人に「服従の呪文」を使ってもa s

sガバガバンにはなりません。たまらねえぜ（無罪確信）。

……レズちゃんは何故いじやないから対象外だつて？（一抹の不安）

まあ、お辞儀様再札してタイマーストップすれば、レズちゃんが氏んでようが a s s  
ガバガバンになろうがどうでもいいのですが。

というわけで、説明終わり、閉廷！ 以上みんな解散！

行動を開始しましょう。

呼び出しを受けているので早速校長室に——行きません。当たり前だよなあ。

せっかくなので、「追憶——トム・マールヴォロ・リドル／変遷——ヴォルデモート卿」  
クエストと合わせて分霊箱も破壊しましょう。万が一爺GGが高すぎた時のために、助命嘆  
願のお土産を持っていきます。

部屋に戻って取り出したるは毎度お馴染み逆転時計。本日はストックまるまる五時  
間残っています。こいつを全部使い切りましょう。五回ぐるぐるー。

はい。問題なく五時間戻りました。やはり逆転時計は最高や。幸いにして、現在はま  
だ授業時間中、誰も寮には帰ってきません。好き勝手やります。

それでは、ここで第一回投稿から引つ張った例のアレをお披露目しとうございます。

「検知不可能拡大呪文」の掛かっているリュックサックをごそごそーつと漁って、ミニ

チュアサイズのキャビネット棚が出てきましたね。お人形遊びかな？（すつとぼけ）

これに今まで鍛え上げてきた拡大呪文を使いましょう。

エンゴージオ 肥大せよ！

——さあどうですお客さん、この「姿をくらますキャビネット棚」を、お客さんのゲームプレイで、1年生から7年生までみっちり使っても！ お客さん、死ぬまで楽しんでみませんか！（片側破損中）

そんな声も聞こえてきそうな威風堂々感。

これこそが、本RTAで入手した最初の「RTAの秘宝」、「姿をくらますキャビネット棚」です！

こいつのいいところは、「姿くらし術」を使わずとも移動可能な点、屋敷しもべ妖精の杖無し呪文とは違って魔法省に検知されない点、自分以外も複数利用できる点など多々ありますが、1番の利点は、「ホグワーツ城内と外部を容易に行き来できる」と言う点でしょう。

逆転時計と合わせることで、理論上五時間で済ませることができる用事ならなんでもできるようにしました！

タイムに直接干渉する「逆転時計」！

屑運をGO運へ変える「フェリックス・フェリシス」！



そしてあらゆる距離を短縮する「姿をくramsキャビネット棚」！

五時間以内であれば、どこへだっていけます！

運要素さえあれば、なんだってできます！

これこそが、本RTAにおける「RTAの秘宝」！

レズちゃんはこれより、「RTAを制する者」を名乗らせていただけましょう！

それでは、ホグワーツを脱出してレストレンジ家にイクゾー！ デッデッデデデ。

ハーモニア・ネクテレ・パサス！ 姿をくramsせ！

「——お嬢様！ お嬢様！ お帰りくださいませ！」

——カーン！（屋敷しもべ妖精）

屋敷しもべ妖精に詳しい説明などフヨウラ！

ダイアゴン横丁のグリーンゴッツ銀行へイクゾー！ カーン！

カーンくんの屋敷しもべ妖精版付き添い姿くramsしで、無事グリーンゴッツへ辿りつき  
ました。

そのままトロッコに乗ってレストレンジ家の金庫へと向かいます。ああん？ 学生  
なのになんでここにいてるかって？ 急用だよ急用！（真実）

……レズちゃんはレストレンジ家の当主なのでフリーパスです。

もし盗人がレストレンジ家の金庫に押し入ろうとする場合は注意しましょう。例えばカッチャマであるベラトリックスさんに変身したとしても、「盗人落としての滝」により無効化されてしまいます。

「盗人落としての滝」はポリジューズ薬やフェリッククス・フェリシス等の魔法薬、デミガイズ製マントのような透明化を含む、「発動中の魔法効果」を全て無効化します。逆転時計はすでに発動済の魔法効果なので無効化されません。具体的な分類は *wiki* を見て、どうぞ。

と言うわけで、無事レストレンジ家の金庫へと辿り着けました。早速中に入って「ハツフルパフのカップ」を回収しましょう。

「ハツフルパフのカップ」ですが、これにはお辞儀様により「双子の呪い」と「燃焼の呪い」が掛けられており、触るとアツウイ！ アツウイ！ いったいいっぱい裕次郎となります。

ですが……なにこれ？ 呪文効果切れかかってんじゃん（困惑）。

……本作において、「永遠に持続する魔法」なんてものは「死の秘宝」の透明マント等ごくごく一部を除いて存在しません。悲しいなあ（落涙）。

むしろ10年以上、呪いの効果を保ち続けた『闇の帝王』を褒め称えるべき案件でしょう。

『カップ』の呪いは7年生になると、ヴォルデモートくんによってかけ直されます。なので、その前に持ち出してしましましょう。

フィニート・インカンターテム！ 呪文よ終われ！

さくつと持ち出して現在レストレンジ家。

これより再びホグワーツに戻りますが、その前に一手間。

「忍びの地図」くんで寮周辺の状況を確認します。「キャビネット棚」から出た瞬間を見られると面倒だからね、仕方ないね♫

……よし、誰もいません。帰りましょう。

ホグワーツ城に戻ってきました。このまま『必要の部屋』に向かいます。

まだ夕食終わってすぐくらいの時間ですので、生徒諸君がいっぱいいますね。

注意すべきは一点。過去時間軸のズイラ・レストレンジ及びその周辺人物にエンカウントしないようにする、ということだけです。

対して面識のない人物と出会っても、何の問題ですか？ 何の問題もないね♫（ラミレスビーチの誓い）

同時複数授業の履修が認められているように、逆転時計は厳しいようできてそこそこバガババです。

「必要の部屋」前まで着きました。「レイブンクローの髪飾り」を回収します。

「みんなが物を隠したがる部屋」オナシヤス！ センセンシャル！

もし今がファミコンの時代だったら、「分霊箱・レイブンクローの髪飾り」はぶつちぎりでゲーム中最難関のいかれたクエストだった——。

「髪飾り」の入手について、多くのプレイヤーはこのように評しています。

正規の方法で「髪飾り」を入手するためには、膨大な数のクエストを攻略する必要があります。それらは大きく分けて三つに大別されます。

「失われたダイアデムの搜索」、「必要の部屋の搜索」、「ヴォルデモート卿の分霊箱の搜索」、これらが密接に絡み合い、「分霊箱・レイブンクローの髪飾り」の情報を得ることができません。

「失われたダイアデム」に繋がる糸口を掴めなければ、ノーヒントで分霊箱を探し回ることになり。

「必要の部屋」を見つけられなければ、ホグワーツ城内を彷徨い歩くことになり。

「ヴォルデモート卿の分霊箱」であることを知らなければ、悪辣な罠に掛かってしまします。

「カップ」と「ロケット」はトムくんの過去を辿る中で、ヘプジバ・スミスが保有して

いたことがわかります。分霊箱であることも間接的に判明してお得ですね。

「剣」はバジリスク戦のイベントで入手できる他、並外れたグリフィンドール適性の持ち主であれば組分け時に帽子からなんか飛び出てくる事例も報告されています。

ですが、「髪飾り」は全くのノーヒント！ その上学生時代に入手できなければ、 Hogwarts に自由に入れず回収が更に面倒に！ 安定した入手枠であるレイブンクロー入寮からの「灰色のレディ」攻略ルートでは分霊箱情報が足りず、お辞儀様の支配下に！ 何だこれは、たまげたなあ……（絶望）。

しかし、現代、攻略 Wiki 全盛の時代においては、「髪飾り」はもつとも入手しやすい分霊箱にしてもつとも入手しやすい創始者の遺品として有名です。

というのも、先述した膨大なクエスト群は「髪飾り」入手フラグに何ら関係せず、プレイヤーが場所さえ知ってさえいければ、簡単に入手できるからです。

お前ファミコンかよお!!? (困惑)

「計り知れぬ英知こそ、われらが最大の宝なり！」とは攻略 Wiki による集合知のこゝとを表していた……? (新説シリーズ)

乱雑に積まれたシェリー酒を叩き割りながら探すこと数十分。ついに「レイブンクローの髪飾り」を発見しました！ ぐ立派ア！

では「髪飾り」を失礼して手掴みで……。

などと振る舞う前に、幸運の液体を一時間分飲みましょう。

分霊箱は所持しているキャラクターに精神汚染を図ってやることは有名ですが、この時の精神値減少計算式は固定値＋乱数となっております。

有体守護霊、闇の魔術適性、乱数最小固定。

これだけあれば、分霊箱二個持ちにもギリギリ耐えられると思います（不安）。最悪耐えられずとも、ダンブルドア校長がなんとかしてくれるでしょう（他力本願爺）。

ついでに、ダンブルドアが開心術を使うかどうか迷っている場合には、こちら有利に環境条件をフェリックスは整えてくれます。仮に開心術をくらっても、分霊箱による精神汚染防壁で多少なりとも障害できるでしょう。

ダンブルドアを分霊箱のセーフティとし、分霊箱がダンブルドアから心を護ってくれる。

なんて完璧なりガバリーなんだ（自画自賛）。

というわけで校長室。

「レモン・キャンデー」

お爺さんお願い許してお爺さんお願い許してRTA壊れちゃーう！

——少女会談中——

ぺっ、甘ちゃんか！

## 18/? 道場稼ぎタイムまで

屑運とガバガバプレイングからの大胆なチャート変更は一門の特権ってそれ一番言われてるから、なRTA、行くぞオラア♫

さて、前はダンブルドア校長に助命嘆願をして、無事に赦されたところで終了しました。ペつ、あまちゃんか！ 続けていきたいと思えます。

早速ですが……嬉し恥ずかし、育成方針変更タイム！

これまでは大目標・「二代目レストレンジの卑劣な術」による分霊箱の破壊を達成するために、服従の呪文の熟練度稼ぎに注力してきました。しかし、前回の大胆なチャート変更（ガバ）により、分霊箱破壊問題が概ね解決したため、「悪霊の火」、「服従の呪文」といった呪文の早期習得はフヨウラ！ となってしまうました。悲しいなあ……。

蛇姉貴とア－サーおじさんがくんずほぐれつするのは五年生。潜伏暗札を実行するには、それまでに「悪霊の火」を修得する必要があります。

猶予時間は約二年半。当初より四、五年生時に悪霊の火の熟練度稼ぎを計画していた



ことを鑑みれば、三年生時に絶対習得すべき呪文がもうなくなってしまうました。やつたぜ？

とはいっても、現在盾と失神という対人戦闘二大人権呪文も習得済みなことを考えると、呪文ラインナップ的にはすでにある程度充実しているといえます。

なのでこれから先は、来たる決戦に備えて、高位スキル群の習得に努めたいと思います。

具体的には、「無言呪文」、「閉心術」、時間的余裕があれば、「ワンドレス・マジック」を習得します。

そして、無言呪文に関しては最終戦突入メンバーに積極的に布教していきたいと思います。……通常なら六年生程度の難易度？　ヘーキヘーキ、ヘーキだから（楽観）。という無言呪文程度使えないと本当に肉盾しかできないと思うんですけど（正論）。

閉心術はダンブルドア及びお辞儀様対策です。

閉心術の熟練度を一人であげるとか計画ガツバガバやんけ頃すぞ（豪速球）、とお思いの兄貴姉貴もいらつしやると思いますが、それについては対策があります。みんな見とけよ（予告）。

……今更ですが、ダンブルドアに閉心術をかけられないようにしている理由について、別チャートの実例を交えてお話しします。

「アルバス・ダンブルドアに知りうる全ての情報をぶちまけ、分霊箱も全部ぶつ壊してもらい、お辞儀様もぶつ頃してもらおう」

このプレイングは通称予言者チャートと呼ばれています。このルートにおいては、プレイヤーキャラはほとんど何もせずともゲームクリアへと向かつていきます。というより、情報が正確な（自称）予言者ということで、シビル姉貴のように厳重に保護されてしまうため、自由な行動がほぼほぼ取れなくなります。

もちろん分霊箱の個数、物品、隠し場所、罠。これらを全てリークするだけで、自動分霊箱破壊爺が起動するため、プレイヤーがちよっかい出さずとも何ら問題ないのです。

はえー、すっごい（称賛）。

ですが、この方法には一つだけ問題点があります。それは、安定択ではあるものの時間がかかるという点です。

予言者チャートを選択する都合上、ダンブルドアが精力的に動くことは避けられませんが。そうなるとう基本的なチキンなお辞儀様は、ダンブルドアに必勝できるまで戦いを仕掛けようとはせず戦力を蓄えようとしています。

しかし、ヴォルデモートが戦力を求めて時間が経つと、彼はやがて「最強の杖」の入手を目論みます。そうなるとう今度はニワトコダンブルドアには勝てないと考え、分霊

箱による寿命勝ちを目論んでいきます。これは人間の屑にして長命の鑑。

これに対し、ダンブルドアは寿命の残っている間に決着を求めるといえば……別にそんなことはありません。もう終わりだあ！（レ）

ダンブルドアとしても、予言指針によりハリーによるヴォルデモート討伐を考えていることから、ハリーの成長時間を稼げる冷戦状態はプラスに働きます。

こういった理由で、予言者チャートにおいては不死鳥陣営、死喰い人陣営の消極的な同意により、決着が先へ先へと引き延ばされていきます。

当然の権利のように悪辣な遅延行為を働くのはやめろ繰り返す当然の権利のように悪辣な遅延行為を働くのはやめろ（憤怒）。

はい、RTA向きではありませんね。

開心術で情報全部抜き取られた場合においても、概ね予言者チャートと同様に推移してしまいます。

だから、ダンブルドアに与える情報を制限し、ヴォルデモート復活の手助けをして戦力バランス調整を行い、神秘部での突発的決戦を行う必要があったんですね。

ワンドレス・マジックについてはおまけです。間に合えば役に立つかな？ くらいであり、間に合わなくとも問題ないです。熟練度の稼ぎ方は後ほど。

と、説明はここまでにして、明日から無言呪文の練習を始めます。

じゃ流しますね……。

時間も流れて10月末。ハロウィーンです。

ぷはー、今日もいい天気☆(晴天)

今日はホグズミード解禁日です。遊びにいきましょう。ハリーくんは一人で留守番でもしてな！

「僕のことには気にしないで、楽しんできて」

ありがとナス！

というわけで、ホグズミードに着きました。……というわけで、ホグズミードから帰りました。やることもないんで中身はカットだカット！ 後ろで適当に128倍速で流しとくので気になる方は無編集版どうぞ。

ホグズミード観光は固定イベントではないですが、許可証を貰って置いて初回から行かないのも不自然です。適当にゾンコの店でイタズラグッズを覗きました。

ペルー製インスタント煙幕、囃弾、携帯沼地、騙し杖。ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ製品のように実用性のあるものはありませんが、多少はね？ ダンブルドア相手のジョークにしゃっくり飴でも買つときます。

好感度稼ぎに、ハニーデュークスやら三本の箒でハリーへのお土産を買いましょう。

検知不可能拡大リユックサックはこのために……（大嘘）。

ホグワーツに着きました。

獅子寮に戻って、ハリーくんにお土産をあげます。

「ホグズミードってどんなどこだった？」

んまあ、そこそこですね（無礼）。

ハーマイオニーちゃんが糞爆弾を没収しながら、ハリーに質問しました。

「あなたは何をしていたの？ 宿題やった？」

「ううん。スラグホーンが部屋で紅茶を淹れてくれたんだ——」

……ん？

気になるのでガン掘りします。

何話したん？

「いや、特に何でもないよ。魔法薬学で困っているところはないか、とか。一人で歩いていただけと友達と喧嘩でもしたのか、とか。そんな話。

スラグホーンは僕が許可証にサインをもらい損ねたの知らなかったみたい。

そしたら、ホグズミードに行けなかったのは残念だが、欲しいものがあればある程度は仕入れてあげようって」

イベントが分岐？ 収束？ しましたね。

ほんへルートにおける三年生時においては、同様のタイピングでルーピン先生に絡まれて、紆余曲折あって彼の人狼暴露フラグと守護霊習得フラグが立つところ。今回はルーピンくん無職ルートのため起こり得ないイベントと思っていたのですが……。

——ホグズミードに行けず一人残されたハリーがホグワーツを歩き回る、ハリーに元から興味を持っていたスラグホーンが彼を誘う。

こうしてみれば、発生条件と動機的には特に違和感のない流れにも思えます。起こったものはいやいや、放置してもまま、えやろ（楽観）。

ルーピン先生の代わりに、今回は魔法薬学の追加フラグとホグズミードへの欲求低減フラグが立った……のかな？ うーん。判断材料に乏しいので保留！

嘘みたいだろ……？ これってRTA（インゲームタイム）なんだぜ？  
気になりますけど何もできないので続行！

この後は特にイベントはありません。

大広間でたらふく食って、獅子寮を守護している「太った婦人」の肖像画がシリウスくんにズタズタにされ逃亡、緊急避難的に全生徒大広間で眠っただけです。

ハーマイオニーちゃん寒いからこっち来て（誘惑）。

……断られました。残念。

数日後。ぷはー、今日もいい天気☆（土砂降り）

グリフィンドール対ハッフルパフのクイディッチ戦です。この戦いにおいて、ハリーは吸魂鬼くんに撃墜され、ニンバス2000兄貴は暴れ柳にバラバラにされます。

これを止めるのは容易です。吸魂鬼くんの侵入経路にあらかじめ守護霊を派遣するだけなので。

ですが、やりません。当たり前だよなあ（MUR）。

吸魂鬼経由での「ヴォルデモートの記憶」回収！ ニンバス代替品の炎の雷入手！  
守護霊フラグ建設！

うま味 テイスト イベント前では道徳心や友情などフヨウラ！

特に炎の雷が万一にでも入手できなければ、来年度第一の試練・ドラゴン戦でハリーくんが中野くんステーキになってしまいます。結果的にハリーの命のためだから多少はね？（自己弁護）

試合は進み、獅子寮チームのタイムアウトも終わりました、いよいよ試合も佳境です。眼を野獣のようにして辺りを警戒しましょう。

……つと、雨とは違う不快な寒気が襲ってきました。

来た！ 来た！ 来てんだろ！（模倣）

吸魂鬼確認！ ハリー撃墜確認！ ニンバスくん暴走確認！ 条件達成！

「——エクスペクト・パトロナーナム！ 守護霊よ、きたれ！」

守護霊のロバを走らせて吸魂鬼を蹴散らすのじゃー。実戦の経験点うまうま。

あつ、試合結果はハツフルパフの勝利です。スニッチを掴んだセドリックくんがハリーの元に飛び寄って行きます。流石に見えませんが、多分すぐく後悔したような顔をしていることでしょう。

そのままの優しい君でいて、闇堕ちしないで、オナシヤス！ センセンシヤル！（一年後）

戦後処理も終わり、数時間後、医務室。

フリットウィック先生から受け取ったニンバス兄貴の殉職氏体を目覚めたハリーに渡しました。

試合敗北と相棒♂の無惨な姿というダブルパンチでさしものハリーくんも絶望しきった顔をしています。大丈夫だつて安心しろよく。犬叔父貴にもつといいものももらえるし、最終的に勝てば良からうなのよ。

敗北イベントの見所さんももうありませんので、超スピード!? で進めます。

「おや、ポッター。医務室で眠っていないかでもよろしいのですかな？ 我輩が思うに、君は少しばかり虚弱ではないかと疑われるが。」



——まさかまさか、あのハリー・ポッター、我らが新しいスターともあろうお方が吸魂鬼を気絶するほど怖がったわけでもあるまい？」

スネイプくんが執拗にハリーを煽ったDADAの授業があった夜。ハリーくんに関談を持ちかけられました。

「——あのさ、ズイラ。ハツフルパフとの試合があつたあの日、君が吸魂鬼を追い払つたつて聞いたんだけど……」

ああ……（ルーピン君の役割）落ちたねえ……。

本来ならDADA教師に教えを乞うことが多いのですが、今回はDADA教師がまさかのスネイプくんですので、撃退実績のあるレズちゃんに話が回ってきたようです。

目撃者も多いので答えます。そうだよ（同意）。

「どんな防衛術を使ったの？ 教えてくれない？」

あ、いいつすよ（快諾）。準備ができたら伝えるんで待つててね。

というわけで、その日の深夜。

今夜もいつものように「必要の部屋」に……行きません。

今夜は楽しい楽しい踊るホグワーツ大捜査線です。「忍びの地図」片手にホグワーツ中を練り歩きます。

搜索先は、洋筆筒、流しの下の食器棚、小物入れなどなど。「必要の部屋」のあるホグワーツ8階を中心に搜索します。

警察だ！ ……空振り。何もいません。続行です。次の部屋にいきましょう。

——警察だ！ ……空振り。何もいません。続行。

——警察だ！ ……空振り。次。

ミセス・ノリスだ！ デミガイズマントで隠れ潜みましょう。

時間切れ、逆転時計でワンモアチャンス！

マクゴナガルだ！ まだ距離があるので逃走！

——警察だ！ ……からぶりー。

はい。およそ八時間の搜索の結果、なんの成果も得られませんでした。ありがとうございます。ございました。今宵はこれまでにしとうございます。

明日も続行します。次こそ見つかってくれよな！頼むよー。…見つからなかったら三年生にやること本当に無くなっちゃーう！

翌日、夜。

搜索にイクゾー！ デッデッデデデ、カーンデデデデ！

——警察だ！ ……ガタッ。

六階の空き部屋。レズちゃんが近づいた時に、小<sup>チエ</sup>筆筒が一瞬<sup>スト</sup>がたりと音を立てて揺れ

ました。これはもしかすると、もしかするかもしれませんが？

離れて、近づいて、離れて、近づいて。

——ガタツ——ガタツ。

当確です。ありがとうございます。

というわけで、中にいるこいつをチェストごと「必要の部屋」まで運びます。拉致だよこれは！

流石に忍びの地図を見つつチェストを浮遊させながらマントを被るのは難しいです。巡回タイミングを待ちましょう。

……今です！ ウインガー・ダイヤモンド・レビオーサ！ 浮遊せよ！

八階まで急いで駆け上がるのじゃー。

何事もなく、バカのバーナバス君の肖像画の前までつきました。

これより「必要の部屋」に侵入しますが……また条件を変えます。

今回の条件は、こちら！

「防衛術練習に向いていて、ズイラ・レストレンジ、ハリー・ポッター以外の動物も動きを含む人間は入れず、ズイラ・レストレンジが招いた場合のみハリー・ポッターは入室でき、部屋の出入り口は二箇所あり、それらは壁で区切られた同一部屋内の別々の空

間に繋がっており、空間内からもう片方の空間の情報を一切知覚できず、同一空間内に同一人物が二名以上存在できない部屋」

はい。追加箇所は、「ハリーの侵入制限の一部解放」、「人間以外の生物の侵入条件緩和」、「動物もどきの追放」です。

それぞれハリーの特訓、生物の持ち込み緩和、シリウス、ピーターの侵入禁止ですね。チエストを中に運び入れて、設置して……。今日は逆転時計込みであと六時間ほどありますね。

さて、視聴者兄貴姉貴たち、いよいよ準備が整いました！

これよりみんな大好き、「ボガート先生の閉心術道場」を開催します！

まね妖精・ボガート。リディクラスとかいう熟練度0でも使える呪文で倒せるクソザコ妖精ですが、一方でモリー・ウィーズリー姉貴のような強キャラにも勝ち目のあるジャイアント・キリング・クリーチアーです。

彼らは不生不死の非存在であり、姿すら不明ですが、近くにいる人間の心を読んで、その対象が最も恐怖している存在に変身することができます。

はい、お分かりですね。ボガートくんの変身過程には、人間とは全く異なるものの、閉心術に近いプロセスが含まれています。閉心術を受けるということは、つまりは閉心術の練習にもなる、ということですよ。

その上、ボガートくんの開心術（仮称）は人間の開心術トップクラスであるヴォルデモート卿やスネイプ先生ですら足元にも及ばないほどに強力です。これにより、ボガートの開心を耐えられれば、人間基準で言えば無敵のレベルにまで開心術を鍛えることができます。たまらねえぜ。

……逆に言えば、ボガートくんのトラウマ攻撃により心が折れた場合、「必要の部屋」の入室条件の都合上 `dead end` からのリセット待たなしですが、ここは勝負どころ！

時は金なり、金は命より重い、つまり時は命より重い！　ギリギリを攻めましょう。  
チェスト、オープン！　中から出てきたのは……。

小箆筒から四肢があらぬ方向へ折れ曲がり、胴体がひしやげた何かが転がり落ちてくる。それは満足に動かない肉体を必死に動かし、蟲のようになうち回りながらもじりじりとこちらに近寄ってくる。

血でべつとりと顔に張り付いた髪の毛の隙間から見える青い光は、あなたが毎日のように目を合わせて——ぐしゃり。

振り下ろされた棍棒により、彼女はもはやなんだったかもわからない肉塊に変わってしまった。

突如、あなたの視界を影が覆う。

思わず上を見上げてみれば。

そこにいたのは過ぎ去った恐怖、攻略した試練――。

――はい。マウンテン・トロール・ガードマン戦です。……じゃオラオラ来いよオラア！（おじさんインストール）

リデイクラス！ ばかばかしい！

突如駆けつけたアルバス・ダンブルドアがトロール君を一撃で消しとばし、これまた何処かから現れたハリー・ポッターが賢者の石を用いてレズちゃんを完全復活させました。

次行きます。

チエスト・オープン！ 中から出てきたのは……。

――時は止まらない。

ギルデロイが悩む間にも、無情にも戦況は悪化していく。

ふと視線を上げれば、ハリー・ポッターが今まさにバジリスクに飲み込まれようとしていた。

恐らくは手に持っている剣で刺し違えるつもりであろうが、それでも重傷——いや、死は避けられないだろう。

叡智の寮には似つかわしくないことではあったが。

ハリリーの危機を見た途端、考えるよりも先に、ギルデロイは杖を抜き放っていた。彼が選択したのは、彼の持ちうる中で、ある意味で最も慣れ親しんだ切り札だ。

「——オブリビエイト・マキシマー！ 完全忘却せよ！」

桜の杖から放たれた、ギルデロイが唯一誇れる魔法。

閃光は「秘密の部屋」の闇を切り裂いて進み。

——『護りの魔法』を貫いてハリリー・ポッターの全てを忘却させ。彼を物考えぬ木偶へと変える。

カラン、と音を立ててグリフィンドールの剣は地に落ち。バジリスクはそのままペロリと「生き残った男の子」を平らげてしまいましたとき。ちゃんちゃん。

リデイクラス！ ばかばかしい！

突然のたうち回るバジリスク。蛇の身体が内部から切断されていく！

「セクタムセンブラー！ セクタムセンブラー！」

なんと、ハリー・ポッターは知らぬ間に切断呪文を完全習得していたのだ！ 彼はそのまま蛇の王も日記帳も切り裂き尽くしてしまいました。めでたし、めでたし。

次行きます。

チエスト・オープン！ 中から出てきたのは……。

冷たい廊下。あなたはデミガイズのマントを被って息を潜めている。

今夜だ。今夜、蛇がここに現れることになっている。

あなたはこの日のために準備に準備を重ねてきた。魔法省への秘密裏の移動手段、分霊箱の破壊方法。合法非合法を問わず積み上げてきた。

此処で蛇を潰す。

此処さえ超えてしまえば、後は決戦のみ。

ずる……ずる……。何かをひきずるような音が聞こえた。

来た。蛇だ。

熱い心、冷たい思考、絶対の意思。

勝負は一瞬。此処を通る瞬間に仕留める。

ずる……ずる……ずる……。

音が消えた？ 止まったのか？ まさか、引き返した？ それはまずい、此処で決着



を――

ぐちゃ。

あなたの肩に、何かが噛み付く。

「!!!」

絶叫。声にならない。

生存を手放したくなるほどの、筆舌に尽くし難い毒が瞬時に全身に回る。これは、生物の持ちうる毒ではない。呪い痛めつけ殺すために造られた毒。そう考えてしまうほどの異常な痛み。

のたうち回りながらあなたは背後を見つめる。

巨大な蛇がこちらを見下していた。

何故？ 何故？ 何故!? 透明になっていた！ 見つけられないはずだ！

あなたのもとへ、蛇が音もなくすると近寄ってくる。

ブラフ。あなたは騙されたことを悟った。初めから気づかれていたのだ。だがどうして？

お構いなしに、蛇はあなたに二度、三度と牙を突き立てた。

捕食する気だ。それも丸呑みなんて救いある方法ではなく、痛みと苦しみの中で。

あなたは悟った。

ぐちやり、ぐちやり、ぐちゆ。

冷たくなっていく身体、熱くなっていく身体。

あなたはふと、栗色の髪の少女から聞いた話を思い出した。

——ピット器官

リデイクラス！ バカバカしい！

黒焰が走った。

それは、何もない空間から放たれ、あつという間に蛇を焼き尽くした。

シューシュー、蛇特有の言語から、徐々に甲高い女性のような声へと変わり、それも燃え尽きる。

蛇がこの世に存在した痕跡。それが何一つとしてなくなつた後。誰かが呟いた。

「体温を調整する魔法薬なんて、いくらでもありますわ」

足音は蛇に食い荒らされたあなたの元へ近づく。

あなたの姿は、初老の金髪男性と年若い黒髪の少女が混ざつたような奇妙な姿をしていた。

あなたはふと、栗色の少女たちと共に作つた薬を思い出し、呟いた。

「——ごめんなさい」

……ボガート道場は続きますが今回はここまで！  
ご笑読ありがとうございました。

## 純血一族端書

1993年、10月中旬。

「死喰い人」抵抗組織「第二次・不死鳥の騎士団」。

その旗揚げは二人の罪人が蜂蜜酒のグラスを叩きつけることでなされた。

純血一族一覧。

カントンケラス・ノットによって著されたとされる、イギリス魔法界の血統証明書である。

この本に記された家系は少なくとも1930年代までは、「間違いなく純血」とされており、彼らは「聖28一族」として純血コミュニティの中で地位を高めていった。

一言に聖28一族といっても、彼らのコミュニティの築き方は多岐にわたる。

マルフォイ家——征服王・ウイリアム1世腹心の部下であったアーマンド・マルフォイを源流とする彼らは、政治と金を使いこなすことで魔法界・マグル界で盤石たる地位を築いた。

国際魔法使い機密保持法が制定されるまではマグルの土地、通貨、その他資産を用い

てマグル社会でも地位を高める。最終的に達成こそしなかったものの、英国女王の王配として名が上がったことは彼らの政治的センスを伺わせる。

機密保持法制定以後はマグル社会との関係を断ち切り、逆に彼らを排斥する立場に回った。魔法界の「流行」に乗り遅れなかったことで、彼らははじめから純血主義であったと標榜される。

「純血は常に勝利する」

マルフォイ家の家訓であるが、これは逆説的に「勝利すれば常に穢れなき<sup>純</sup>こと<sup>血</sup>」を主張できる、とも言える。

杖に指紋がついていたとしても、マルフォイは決して犯罪の現場には現れない。

資産を裏付けとした政治的立ち回りこそ、マルフォイ家のコミュニティ形成法と言えるだろう。

ウィーズリー家——彼らは聖28一族と認められながらも、偉大なるマグルの祖先を持つことを誇りにしていた。

その立ち回りから「血を裏切るもの」として他の聖28一族から呼ばれる彼らだったが、にもかかわらずウィーズリーとの血縁のない家系は後述するゴント家程度しかない。何故か？

ウィーズリー家は代々多産であり、またその多くが様々な方面で才を發揮したから

だ。

アルバス・ダンブルドア、ミネルバ・マクゴナガル、トム・リドル。

セブルス・スネイプ、ニンファドーラ・トンクス、シビル・トレローニー。

それからハリー・ポッター。

極まった純血よりもむしろ半純血の魔法使いの方が特異な能力を持っていて優秀である、というのはいささか語りすぎだが、ある種の理解は示せるだろう。

古来より血を裏切ってきたからこそ、優秀な因子を蓄えつつもウィーズリー家は純血であり続けた。

血脈と才覚。これこそがウィーズリー家が「血を裏切るもの」と罵られながらも排斥されない理由である。

ゴント家——彼らはその聖性の象徴たる純血をより極め究め窮めることに注力し続けた。

それはある意味で、半分だけ達成されたと言えなくもない。

彼らにコミュニティなど必要ない。

サラザール・スリザリンを祖とする閉じた蛇の円環。それだけで十分だ。

アボット、ブラック、レストレンジ。

その他の聖28一族にも、コミュニティを形成する手法、指針が存在する。

今話はそのうちの一つ。

スラグホーン家。

ホラス・スラグホーンについて語ろう。

1882年の春。雪解けを感じるある日のこと。

ホラスはスラグホーン家の第二子として産声を上げた。

純血の名家に生まれたことで、ホラスは何不自由なく育てられた。家督こそ長男のものであったが、生来道楽者であったホラスである。幼少の頃よりそんなものは必要なく、自由気ままに過ごしていた。

もともと、長男に何かあつた時のスペアとして、それなりの教育を受けることは避けられなかつたが。

スラグホーン家の家訓はこうである。

「才あるものを統べよ」

必ずしも自分が優れていなくとも良い。優れた者を集め、味方につけ、使う。これを連綿と続けることで、世代を越えてスラグホーンを頂点としたピラミッドを形成する。

それがスラグホーン家の処世術であつた。

彼の父親は、ホラス達兄弟に事あるごとに言つて聞かせた。

「——いいか、二人とも。どんな時代、どんな場所にも、必ず一人は目を見張るほど輝いている奴がいる。なんとしてもそいつとコネクションを結ぶんだ。」

お前たちの祖父さんの代にはオッターリン・ギャンボル——魔法大臣を務めた後ホグワーツで校長をして特急を引いた魔女だ。彼女と祖父さんは竹馬の友だった。

少し前に家であつた魔女を覚えているか？　ホグワーツ時代、私はヴェヌシアをずっと可愛がつっていた。今も彼女は私のことを先輩と呼び、定期的に挨拶をしにわざわざ家までやってくる。

優秀な闇祓いで気持ちの良い魔女だ。まだ若いが、彼女は間違いなく魔法大臣になるだろう。

お前達もこれだ！　と思つたやつは絶対にものにするんだ。

……ホラス、お前もだ。お前はスギの杖に選ばれた。スラグホーン家でスギの杖は吉兆の証。見極めるのに優れたものだけが選ばれる杖だからな。わかつたか？　」

わかりました。

そう返事はしたものの、ホラスにはいまいち実感がわかなかつた。

審美眼を身につけるため、と言われて父に各界の著名人と会わされたが、いまいちピンとこない。歴代最長の就任期間を持つ当代一の政治家、と称されるファリス・スパークヴィン魔法大臣を見たこともあつたが、彼の目には「いつか失敗しそうな死にかけたつ



まらない爺さん」にしか見えなかった。

ほどほどに有能そうな人物は見て取れる。父が気に入っていたヴェヌシア・クリツカリーもそうだ。

才能ある人物を集める、その楽しさもわかった。

だが、魂を惹かれるような鮮烈な才能にはついぞお目にかからなかった。

本当にそんな人物がいるのか？

ホラスにはいささか疑問だった。

「——ダンブルドア　・　アルバス」

後に今世紀最高の魔法使いと称されるその男。

アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアを目にするまでは。

組み分けてダンブルドアを目にして以来、ホラスは彼の才能の虜だった。

グリフィン・ドールに組み分けられたダンブルドアに対しスリザリンに組み分けられたことはいささか面倒だったが、それでもホラスは彼と友誼を結ぼうと必死に取り入った。

幸いにも、隔絶しすぎた能力を持つ彼には友人はいなかった——エルファイアス・

ドージ？ あれはただの取り巻きだろう？——ため、他寮の生徒であるホラスであつても容易に接触できた。入学当初、父親の犯した罪によりダンブルドアの周りには行き過ぎた純血主義者しかいなかったのも優位に働いた。ホラスの目から見ればダンブルドアがマグルを排斥しようなどとは考えておらず、むしろ逆の思想を抱いていたことは明らかだったため、自分はマグル生まれに対し何ら思うところはないと伝えるだけでよかつた。

……これは嘘ではない。ホラスは才能主義者であり、マグル生まれに対し何ら特別な関心を抱いていない。もつとも、半純血ならいざ知らず、完全なマグル生まれから才能ある魔法使いが出てくることはきわめて稀だった。

また、件のダンブルドアにとつても、1897年に開催された第71回魔法学校魔法薬選手権で自身に次ぐ2位、それも僅差と言つていい差で迫られたことから、ホラス・スラグホーンは一目置くべき存在となつていた。

アルバス・ダンブルドアの話についていけるのは（同年代かつ魔法薬学に限つた話にせよ）ホラス・スラグホーンだけ。

——こうなつてしまえばあとは容易い。このままこの世界最高クラスの魔法使いを手札に加えることで、より自身の地位を高めることができるだろう。

スラグホーン家で生まれ育つた因習。ホラスは大真面目にそう考えていた。

甘い考えだった。

魔法薬選手権の2年後、ホラスとダンブルドアは揃ってホグワーツを卒業した。

ダンブルドアは在学中に優れた論文を多く書き、著名人と交友し、ウイゼンガモットの英国青年代表にもなった。

ホグワーツ史上最高の天才——そう呼ばれてしまえば父や兄といった人材収集マニアの耳にも流石に届くがもう遅い。

ダンブルドアとのツーショット写真を見せてあげればそれだけで彼らは心底から悔しがる。

ダンブルドアという最高位の役の前では、父、兄の持つ手札の全てがブタだ。

やーいやーい。なにおう！

子供のように揶揄い、反撃され、笑い合う。

スラグホーン材蒐家はその日賑やかだった。

卒業後しばらくして夏。

ダンブルドアはドージと共にホグワーツ卒業恒例の世界一周旅行に行くという。

まあ好きにすれば良いだろう。たかだか数ヶ月で何かが変わるわけでもなし。

その後、風の噂で旅行を取りやめたダンブルドアが実家で介護生活を送っていると聞

いた時も、「ははあ大変そうだなあ、今度会ったときに聖マンゴの良い癒師でも紹介してやろうかなあ」などと純粹（善意8割、打算2割）に心配したほどだった。

だから、数ヶ月後アリアナ・ダンブルドアの葬儀が行われるという知らせを受けたときには、文字通り死ぬほど驚いた。

そして会場であったダンブルドアが、以前とは何もかも違っていることに心底驚いた。

自信に満ち溢れた表情は何処にもなく、あるのは深い苦惱で満たされた顔。

ダンブルドア、その才能に一切の翳りはなく、しかして彼自身で自らを縛り上げるような振る舞い。

弟に殴られそうになった時も、ダンブルドアならば盾の呪文をワンドレスで放つことで防げるというのに、身じろぎすらせず受け入れていた。

そのあまりの憔悴ぶりに、さしものホラスといえども周囲の著名人とのコネクションよりダンブルドアのケアを優先するほどだった。

……これは葬儀会場ではついぞ気づかず、ホラスが後年になって整理した考えだが。

彼は彼特有の審美眼から、もはやダンブルドアが自分の手札には永久にならない、アルバス・ダンブルドアの心は誰かへと永遠に移ってしまった、と直感していた。

次にホラスとダンブルドアの道が交わるのはおよそ10年後のことであった。兄の補佐をしながら自身の人脈を繋いだホラス。

魔法薬学の分野ですでにひとかどの人物であった彼は、各界の実力者たちが集まるパーティーで、一人の男に声をかけられる。

「やあ、ミスター」

時の Hogworts 校長、フィニアス・ナイジェラス・ブラックだった。

純血の貴族同士、堅苦しい挨拶を交わした後——ブラック家のはしばしぱそれを好む——彼は本題を切り出した。

「ふむ、ところで、だ。スラグホーン君。君に一つ頼みたいことがあるのだが……君、来年から Hogworts で教鞭を取るつもりはないかね？」

「——それは誠に光栄なことでありませう。ブラック校長。しかしながら、私のような若輩者にそのような要職、いささか分不相応では？」

「そんなことはあるまい。この前の『Potions Journal』、読ませていただいたとも。『幸運の液体の効能とその常用性』。あいにくと門外漢のため学術的な価値はさっぱりわからんが、基礎研究としてはなかなかのものじゃないかね？ 少なくとも、フェリックスを毎日飲んでいたことを忘れて箒から飛び降りる愚か者や、過剰摂取で幸運中毒になる不運な奴はこれから先生まれなくなつたわけだ。」

若さという点も、君と同年代のダンブルドアが10年前より教えている点から問題ない。

それに——」

フィニアスは手に持った酒を一口舐め、続ける。

「それに、何故だか今は Hogworts への募集が少ない」  
だろうな。

ホラスは心の底で思った。フィニアスの人望の無さは Hogworts の外でも評判だった。

その上で、彼は教職を受けることを決めた。

Hogworts 教授は人材蒐集という点では絶好のポジションであったのが理由の一つ。  
もう一つは

「わかりました。お受けいたします。ブラック校長。

——ところで話は変わりますが……」

貸し、一つ。

「久しぶり、ホラス」

この男はアルバス・ダンブルドアなのか？

ホラスが旧友に再会した時にまず思ったのはそれだった。

闇の魔術に対する防衛術の教授をやっていたダンブルドアだが、ホラスの眼にはどこか切羽詰まっているように感じた。そのブレた心の上から「ダンブルドア教授」の皮を被っているような印象を受けた。

それこそ彼の肉親かはたまたドージの奴にしかわからないだろう。ホラスに分かったのは彼が昔のダンブルドアを知っていて、なおかつ磨かれた審美眼を持っていたからだ。

「ああ、アルバス……その、元気か？」

「？ 何故そんなことを聞くんだ？」

踏み込めない。ホラスはそう感じた。

さて、ダンブルドアとのちよつとした距離感を除けば、ホラスの Hogwutz 生活は理想的……

「スラグホーン先生！ 禁じられた森でファイア・クラブが群生していました！」

「だからなんで私の元に報告しにくるんだスキヤマンダー！ 魔法生物飼育学の教授に伝えれば良いだろう！」

「でも先生こういったお金になる生物好きでしょう？ その手の知り合いも大勢いらつ

「しゃいますし」

「……………禁じられた森に立ち入った罰にハツフルパフ30点減点」

「そんな!」

理想的……………

「先生! リタがまたグリフィンドール生から虐められています」

「分かったよ。今行こう」

「——あら、先生。ご苦勞様です」

「…………レストレンジ。スリザリン出身としては先に手を出された以上、やり返すことは文句を挟まないが、これはやりすぎじゃないかね?」

ほら、こっちの彼なんか『全身金縛り』を受けた後に『なめくじの呪い』を受けたせいでなめくじで窒息しそうじゃないか」

「だって私のこと『望まれない子供だった』とか酷いこと言うんですよ? これくらいなら問題ないですよね?」

「ああ、うん。それでいい。加点も減点もしない」

理想的……………

「スラグホーン先生、リタがプレnderダグスト教授の椅子に糞爆弾を仕掛けました!

それからニュートが学校中にパフスケインを放って……………」



「またあの二人か！」

理想的だった！

ニユート・スキヤマンダーとリタ・レストレンジ。

はみ出しものを自称していた彼らだったが、ホラスの目から見れば、ニユートの魔法生物に関する溢れんばかりの才は明らかであつたし、リタに関してもホラス自身に似通つた何か——使う側、奪う側の才能を持っていることが見てとれた。

だからこそ、ニユートがジャービーを使った事故を起こして退学処分になつたのは至極残念に思つたし、処分に対するダンブルドアの抗議に賛同し、退学ではあるが杖を折りはしないという中途半端な決着に持つていった。

そんな問題児二名を最初に教えたことで、皮肉にもホラスの教授としての経験値は十分以上に溜まつてしまった。

教授として働くことは、思いのほかずっと良かった。

魔法薬学に自由に打ち込め、未来の実力者を自由に青田買いでき、時には彼らを通して有力者たちにもアプローチを仕掛けることすらできた。

スラグ・クラブなんて名前のサロンを作ってみれば、純血の名家の子供が社交に來たり、マグル生まれの子が驚くべき才能を示したり、寮を越えた繋がりが形成されたり

……目論見通りに進んでいった。

ニユートがかのゲラート・グリンデルバルドを捕まえた、なんてものを聞いた日には、真偽不明のまままで生徒たちに「グリンデルバルドを捕まえたニユートは学生時代何かあるたびにしよっちゅう私の元に助けを求めに来てね……」などと語ってしまった。自慢半分喜び半分、そんな気持ちだったと思う。ジョークの類と考える生徒もいたが、残念ながら嘘ではなかった。

ちようどこの頃ダンブルドアも「変身現代」の定期コラムニストに選ばれており、そのことについて何度か話した。久しぶりにダンブルドアが浮かれ喜ぶ様子を見て、ホラスは自分が思っていたよりずっと安心した。

学生として過ごし、同僚として過ごし。

ダンブルドアとの間には、もはや人脈云々が関係なくなっていたことにホラスはようやく気がついた。

「——ダンブルドア。君が黒い魔法使い、ゲラート・グリンデルバルドを討つてくれ！」  
「——断る！」

だからこそ、グリンデルバルド討伐を断ったダンブルドアに対し闇の魔術に対する防衛術を教えることを生涯禁じ、彼をモニタリングするタグをつけると言う愚行を犯した魔法法執行部、ひいてはトラバースに対して、ホラスは初めて全力で人脈を使って抗議

文を送りつけてやった。ホグワーツの自治権に対する侵害だとかなんとか、そういった趣旨の文をウイゼンガモット議長の名前入りで。

ダンブルドアに対する処分はすぐに撤回された——もつとも、彼は今度は変身術を教えはじめたのだが。

風の噂ではその後トラバースは部長職を追われたらしい。

この件によりホラスの使える手札は随分と目減りしたが、友人のためならば切れないカードではない。ホラスは何処か充足した感覚を抱いた。

そんなこんなでそれなりに楽しく教師を始めて十年が過ぎ、二十年が過ぎ、もう少いで三十年となる1938年。

ホラスの幸福をねじ曲げ潰す、元凶がやってきた。

その、ダンブルドアが連れてきた、マグルの孤児院出身の子供を見たとき、

「——リドル・トム！」

二人目だ。ダンブルドアと同じだ。

ホラスはそう直感した。

トム・マールヴオロ・リドルはアルバス・ダンブルドアと同格、あるいはそれ以上の才能の塊だ、ホラスはそう感じ取った。

もはやダンブルドアはあまりにも有名すぎるし、手札として使うにはあまりにも関係

を深めすぎた。

だから次はこの生徒と親交を深めよう。

スラグホーンの思想としては、至極当然の考えだった。

トム・リドルはとても優秀で、かつ魅力的な生徒だった。寮監の自分でさえ惹かれてしまうような、まさしく次世代のダンブルドアと呼ぶべき生徒だった。

その上、彼はホラスをしきりに頼ってくる。それはホラスの自尊心を大きく満たし、彼の手札が充足するのを感じさせた。

だから、目をつけられた。

だから、引きずり込まれた。

だから、使われた。

「先生、ご存知でしょうか……ホークラックスのことですが？」

ホークラックス、分霊箱。

闇の中、深奥、深淵、秘中の秘。

最も忌むべき魔法の一つだった。

当然教えられない。……が、自尊心をくすぐる様なリドルの語り口と、彼へのこれまでの信頼前目が口を滑らせた。

分霊箱。その定義も、作り方も、理想個数も、何もかも。

これこそが、ホラス・スラグホーン、その生涯における最大の罪である。

それから先、数十年間。

不気味なほどになにもなかった。

だから、ホラス自身も口を滑らせたことを、すっかりと忘れてしまっていた。

1970年。「闇の帝王・ヴォルデモート卿」を名乗ったトム・リドルがイギリス魔法界に戦争を仕掛けるまでは。

この年、ホラスの精神は不安定だった。

ダンブルドアに抵抗勢力への加入を求められても、思わず断ってしまうほどには。ヴォルデモート卿に最大の切り札を与えた人間が、どの面下げて加われると言うのだから。

忸怩たる思い。

それが打ち祓われたのは一年後。とあるマグル生まれの少女が入学したことによってだった。

「ねえ、先生？」

グリフィンボールの彼女は、マグル生まれとは思えないほどに優秀だった。彼女と並ぶ生徒は、同じく彼女の友人であろうスリザリンの少年くらい。天賦の才と呼ぶべき代

物だった。

その上、彼女はひたすらに善人だった。ホラスは彼の仕事と趣味の都合上、様々な人間の綺麗などところも汚いところも見続けてきたが、そんな彼からしても、綺麗と形容するにふさわしい精神だった。

——もちろん、これは恋愛感情などではない。綺麗なものに触れることで、自分も綺麗になったかのような気がする、と言うだけだ。

それでも、彼女のアーモンドのように大きな緑の瞳で見つめられるだけで、実際はなにも変わらないにせよ、どこか救われたような感覚を抱いた。

やがて彼女が卒業し、グリフィンドールの悪ガキの一人と結婚し、子供も生まれたと聞き。

少しはいいことがあったな、とホラスが感じたところで。

1981年10月31日。

ヴォルデモート卿が姿を消した。

ジェームズ・ポッター、リリー・ポッターが死亡した。

ホラスはその日、辞表を遺してひっそりと姿をくらました。

衝動的に首を括らなかつただけで十分だろう。

そして舞台は現代へ移る。

「そちらも歴史的には重要じゃろうが、わしが聞きたいのは、そつちではない。

創始者の遺品が、このように悪しく変質した理由について、理由を考えたいのじゃ。

——おぬしの『秘密』を語るべき時が来た」

校長室で、ダンブルドアに詰問される。

机の上には規則破りの少女が持つてきた分霊箱が二つ置かれている。

このためか。ダンブルドアが自身を教職に招いた理由がこれでよく分かった。

ある程度推測は立っていたのだろう。明白な証拠も叩きつけられている。

もはや逃げ場などどこにもない。だが、ホラスには正直に語ることなんてできなかつた。

だつてそうだろう!?

「闇の帝王との戦争」で何人死んだ? 何人行方不明になった? 何人心を壊した?

10人? 100人? いいやマグルも含めればもつとだろう! 間接的被害者も

含めればもつともつとだろう!

統計上の数値となった人の命と尊厳。

それを失わせた責任の一端——この期に及んで一端だと?——はホラス自身にある

!

……とてもではないが彼には背負い切れない重みだった。

10年を経ても消せない痛みだった。

脳裏には彼女の笑顔が浮かんでくる。

「ねえ、先生？」

アーモンドのような大きな緑の瞳が彼を縛る。

この善なるものを自分が失わせたなんて。

とてもではないが認められなかった。認めたくなかった。

煩悶するホラス。彼は助けを求めて、先程まで囁っていたフィニアスの肖像画を見つ

めた。しかし肖像画は黙して語らない。

沈黙の中、ダンブルドアは静かに指を振った。

後ろの棚からふわふわとふたつのグラスと一本の蜂蜜酒の瓶が飛んでくる。

高級品じやよ、毒も真実薬も入っておらん。

酒が並々と注がれたグラスを二つとも差し出しながら、ダンブルドアはそう嘯いた。

ホラスはその片方を選んで受け取り、ダンブルドアは残った方に口をつける。

そしてなんでもないように言った。

「おぬしの『秘密』を語るべき時が来た、などと言ったが、実は、わしにも語るべき秘密



がある。わしはそれを先に話すべきじゃろう。

わしは昔、ゲラートと親友だった。

——『黒い魔法使いとの戦争』の引き金は、わしが引いたんじや」

「——な、……は？」

「間違いない。わしとゲラートは一夏を過ごし……結果としてアリアナを死なせてしまった」

「待て、待て、待ってくれ、意味がわからない！」

「わしがゲラートと戦わなかったのは勝つために力を蓄えていたからでも、戦略でもない。

——わしらの誰がアリアナを死なせてしまったのか、知りたくなかったからじや」

「ちよつと、待て！ アルバス！」

とんでもない暴露話。

混乱するホラスを他所に、ダンブルドアは蜂蜜酒を一口飲んで続けた。

「ホラス、君だけではない。君だけではないのじやよ。むしろわしの方が罪深い。」

君は少し知識を教えただけじやが、わしは半分共犯者じや」

「——どうしてだ。アルバス、どうして君は認められる。目を逸らしたくはならないのか」

半分認めたような問いかけ。

ダンブルドアはそれに、可能な限り真摯に答えた。

「ホグワーツで教える間、様々な生徒と触れ合った。その中には先程の娘のように、校則違反を犯す子もたくさんおった。

人は誰でも誤りを犯す。自分で言うのもなんじやが、並外れて賢ければ賢いほど、誤りも大きくなってしまおうじやろう。

——だから、誤りを認めて罰則を受ける。ホグワーツではそうして罪を精算するんじゃない。

まずは罪に向き合い、認めねばならぬ。それが、ホグワーツで教鞭を取ったわしらの責務じや」

「……そうか。そうだな……」

これだけ言われて、なお、ホラスは自白できない。

これがグリフィンドールとスリザリンの差なのか？ 勇気の寮と狡猾の寮の差なのか？

——いいや、違う。これこそが資質の差だろう。ホラス自身が知っていた才覚の差。これが如実に現れた形だろう。

なおも黙り込むホラスに、ダンブルドアはこう提案した。

「のう、ホラス。わしは全て解決して死ぬ時にゲラートとの話を公にするつもりじゃが……お主のそれもわしのこととして話そうか？」

なに、死ぬなら一つも二つも一緒じゃ」

自身に向けられる慈愛の瞳。

それが、逆にホラスの心に火をつけた。

アルバスと自分は同期のはずだろうか？ 友達のはずだろうか？ 対等のはずだろうか？

——何故私は憐れまれるようなことをしているんだ!？」

ホラス・スラグホーンは蜂蜜酒をぐいと飲み干し、グラスを机に叩きつける。

そうして彼はアルバス・ダンブルドア、今世紀最高の魔法使いに啖呵を切った。

「いや、いい。私だ。全て私が教えた。アルバス、お前じゃない。

——そうだ。私がトムに、ヴォルデモート卿に分霊箱の秘密を教えた！ 複数作れる

ことも、最適な個数も、全て私が教えた!」

「幾つじゃ!」

「六つだツ!」

「あいわかったツ!」

1993年、10月中旬。

「死喰い人」抵抗組織「第二次・不死鳥の騎士団」。

その旗揚げは二人の罪人が蜂蜜酒のグラスを叩きつけることになされた。

## 19 / ? 、「三本の筭」 会談まで

「アバダ・ケダブラー！」

リディクラス！ 笑えるなお前！ ほん、バカじゃね？ 信じらんねえ！

新宿調教センター「必要の部屋」支部からお届けするRTA、もう始まってる！

さて、前回から現在まで、真似妖精道場を用いて閉心術の熟練度を上げているところでした。現在4回目ですが……あれーおかしいね精神値の減りが大きいね（すつとぼけ）。

通常プレイにおいてはルーピン先生の授業程度しかエンカウントする機会がないため、ボガートくんの仕様について詳しくない方もいらつしやると思うので、ボガートくんの生態について、お話しします。

件のルーピン先生の授業でも解説がありますが、ボガートくんの精神値削り効果は効果範囲内に存在する人間の数で等分される仕様となっております。10人いた場合一人当たりの効果は10分の1、100人いた場合100分の1といった感じですね。

なので1人しかいない今はボガートくんの効果を100%の力で受ける……と言いたい所さんですが、そうは問屋が卸しません。

ボガートくんの特殊能力、あるいは本来の能力として、「敵対存在と一対一になった時に精神攻撃を激化させる」という仕様があります。本来であれば「恐怖の対象」にしか変化できませんが、この条件を満たした場合のみ「恐怖の状況」を完全再現します。内部数値的には開心術のスキルレベルに補正がかかっていますね。

wikiにK氏のまとめた報告書が掲載されていますので、詳しいデータについてはそちらを参照してください（丸投げ）。

現在の「必要の部屋」にはレズちゃん1人しかおらず、この条件を満たしています。真・ボガートと呼ぶべきこの形態は、かのモリー・ウィーズリー姉貴をも打倒した最強モードとなっております。

だからレズちゃんの精神値が恐るべき速度で削られていったわけですね。

当初はリデイクラスで「笑いのある」解決策を提示できていたのが、徐々に「あんまり笑えない」結末にしか変更できなくなっているのもその都合です。

まだ4回ですが続行は危険なため一度休憩！

……効率悪い、悪くない？ とお思いでしょうか問題ありません。

開心術の熟練度は掛けられた開心術の熟練度に依存して上昇します。

真・ボガートくんの開心術なら確定失敗なのを含めてもプリンス兄貴の開心術並みの熟練値効率のため、レズちゃんの精神の摩耗を除けば非常にうま味みな稼とぎと言えます。

たまらねえぜ。

休憩中はチョコレートを貪りつつ、無言呪文の練習を並行して行います。

閉心術は呪文も杖も用いない仕様上、無言呪文とワンドレス・マジックに微量ながら熟練値が入るため良いブーストとなります。

精神の保つ間は閉心術の熟練値稼ぎ！

精神値回復中は各種戦闘技能向上！

無言呪文という共通スキルにより、相乗的な作用が見込めるなんて、完璧なチャートだあ……（感涙）。

閉心術を急ぎたい場合は「元気爆発薬」等で無理矢理ステータスを補いましょう。

というわけでこれから先しばらく、ハリーに対して先生面できるまで熟練度稼ぎに努めます。タイムリミットはどんなに遅くとも一月、レイブンクロー戦一ヶ月前には切り上げます。

というわけで超スピードでいざあ♂。

時間は流れて学期末です。

11月初頭から道場を始めて約二ヶ月。

現段階で無言呪文はやや形となります。ネームド死喰い人戦に耐えうるレ

ベルでは到底ありませんが、ハツタリ程度には使えるようになりました。

ワンドレス・マジックは無言呪文スキルコンプリート後に正式解禁なのでまだまだです。内部的には熟練値が振り込まれているのでヘーキヘーキ、ヘーキだから。

閉心術？ 知らない。

閉心確定失敗のボガートくん相手に判断できるわけないだろ！ いい加減にしろ！

開心術者との空間、視線等の干渉性、自身の精神状態に大きく依存するスキルなので、内部数値だけでは正直なんとも言えません。先述したように無言・ワンドレス道場としても損がないので、時間のある間は上げ続けましょう。

今週は今年最後のホグズミード解禁日ですが……

「よう！ お嬢様！」

談話室にて朝早くからフレッドたちがレズちゃんを出待ちしていました。なんでしようね。

「我がシーカーはまだ落ち込んでいるのか？」

「チョウがセドリックをペしやんこにしたからまだグリフィンドールにも勝ちの目は残っているのにな」

「ほどほどに元気ですね（適当）。

「あらら、それは残念」



「ウツドがチョウに捧げた『感謝の歌』でも聞いておけば、少しは笑えただろうに」  
「ところで、お嬢様。我々がお渡しした『かわいい子ちゃん』を堪能していただけてるかな？」

当たり前だよなあ（MUR）。

「そりゃあよかった。マローダーズ諸兄も草葉の陰で喜んでいるだろうよ」

「——俺たちは、今日、ハリーに一足早くクリスマスプレゼントを渡そうと考えているんだが、君も一枚噛まないか？」

あ、いいっすよ（快諾）。

「そう言ってくれてよかったよ」

「四階の廊下、隻眼の魔女像がハニーデュークスに直結してる。脱獄ならここを使ってくれ」

ウィーズリースに言われるまでもなく、今日はハリーをホグズミードに連れて行く予定でした。今日はコーネリウス・ファッツ!?魔法大臣が緊急来村することになっていま

す。  
ここで語られる「シリウス・ブラックについての魔法省見解」を回収しておくことで、ハリーの中に身近な憎しみの対象が生まれます。

成長パートにおいては、明確な目標があった方が成長効率が良いことは言うまでもあ

りません。

守護霊習得には必要ありませんが、戦闘用呪文の習得も並行して進める予定なので、回収しておきましょう。

話を戻して。

あつ、そうだ（唐突）。

「ん？ どうした？」

？  
そういうえば、あなた方今年五年生だけどフクロウ試験の勉強をしなくてもよろしくて

「おいおい、僕たちにそれを聞くのかよ？」

「フクロウなんて、ママは喜ぶだろうが、僕らにはガリオン一枚の価値もないね？」

多分モリー姉貴に傾されると思うんですけど（名推理）。

……将来何をされるおつもりで？

「——ママには内緒だぞ」

「実は僕ら、悪戯グッズの専門店を作ろうと思っっているんだ」

はえ〜すつごい。

……なら、一つ未来の商品として提案させてもらいたいものがあるんですが？

「どんなもの？」

えーっとそうですね……伸縮性のあるお菓子型の一つは「トントン膨らむドルブルの風船ガム」に近い感じ……? 「トン・タン・トフィー」や「カナリア・クリーム」もいいんですけど、もっとこうふたいたいの——。

もちろん開発資金は出しますんで、オナシヤス! センセンシヤル!

突発ですが、ここでウィーズリーの双子とのサブイベント「商品開発!」を開始します。

グリフィンドール寮でプレイされる方も多いため今更の説明となりますが、初見兄貴姉貴たちのために軽く説明を挟みます。

ウィーズリーの双子との好感度が一定値以上ある場合、オーダーを出すことで彼らはプレイヤーの提示した「悪戯道具」を一種作成してくれます。

もちろんこれらには技術的、金銭的、何よりも「面白いかどうか」という制約があるため自由開発には向きませんが、それでもプレイヤーが手をかけなくても良いというのは利点です。

携帯沼地、おとり爆弾、盾の呪文装備シリーズと実用性も保証されているため、ことさらRTA向けのイベントと言えるでしょう。

五年生あたりで使いたいアイテムが一つあるため、ここらでオーダーをかけておきます。金払いは大丈夫だって安心しろよく。先払いでさえぞ! ええぞ! (レ)

仕様書を書き上げて発注！

契約は……どう？ 出そう？

「——OK！ 僕らでも十分にできそうだ！ それに悪戯グッズとしては及第！」

やったぜ。

無事委託契約を結べました。完成を楽しみにしましょう。

双子と別れて少しして、ハリーたちが談話室に降りてきました。

ロンとハーマイオニーはマントやスカーフを纏った重装備ですね。このあとすぐにホグズミードへと向かうと言ったところででしょうか。

軽装のレズちゃんを見て、ロンが話しかけてきました。

「なあズイラ、ホグズミードに行くにはその格好、寒くないのか？ 外を見ろよ！ 雪

だつて降ってるぜ？」

あら、雪降ってるじゃない！ 寒いと思つたわ。

ちよつと所用を済ませてからホグズミードへ向かうんで先に行つて、どうぞ。

「そう？ じゃあ先に行くよ。ハリー、お土産期待しててね」

「うん、ありがとう。楽しんできてね」

「じゃあ、ズイラ。僕もこれで……」

ロンとハーマイオニーが行ってしばらく。ホグズミードに行けないことを観念したハリーが再び部屋に引つ込もうとします。呼び止めましょう。

ねえハリー？　ホグズミード行きたくありません？

「……行きたいよ。だけど知ってるでしょ？　僕は許可証をもらえなかつたんだ」

大丈夫だつて安心しろよ。ちよつと待つててくださいね。

部屋に「忍びの地図」を取りに戻ります。はい。脱校計画には当然の権利のように「地図」とデミガイズマントを 사용합니다。

あつそうだ（唐突）。デミガイズマントは超スピード♂の描写外で「姿をくらますキャビネット棚」を用いて補充しに行きました。今はすでに冬休みシーズンだから人目についてなんの問題ですか？　なんの問題もないね♂（ラミレスビーチの誓い）

話を戻して。

今回の行動でハリー相手に「地図」の秘密性を捨てることになりましたが、遅かれ早かれ「必要の部屋」に行く際に使う姿を見られるので問題ありません。むしろ、規則にするさいハーマイオニー姉貴になし崩し的に「地図」の存在を自然に認めさせられると考えれば、ハリーの境遇と運命という情に訴える策は有効でしょう。

というわけでリュックサックの中に失礼して手掴みで……。

痛ってえ！ おい！ 嘔みやがったな！

バックの中に何かいます！ おそらくは動物系、暴れられて幸運薬の瓶が破られると大損です。まずはバックの外へと釣り上げます！

レビコーパス！ 身体浮遊！

中から出てきたのは……濃いオレンジ色の毛玉……？

ああ、(テンション)落ちたねえ……。猫のクルックシャンクスくんですね。ハーマイオニー姉貴はこんなところに潜り込まないように躡けて、どうぞ。

逆さ吊りになっている彼を手で受け止めて、下に降ろしてあげましょう。なお、着地したクルックシャンクスくんはレズちゃんにふしやーと唸り声をあげてどこかへと去って行きました。ああん？ なんで？ (レ)

気を取り直して地図とマント、ついでに防寒外套を取り出して、リュックサックを背負いハリーのところへ戻ります。

おまたせ！ フィルチくんには絶対にバレない脱校手段しかなかったけどいいかな？



えれば、これまでずっとロン兄貴やハーマイオニー姉貴のどちらかが仲立ちしてました。

レズちゃんとハリーは友達の友達程度の間柄だった？ ハリー側の好感度が参照できないのが辛いもう、ヤス（レ）。

「——あのさ、ズイラ」

無言を見かねたのか、ハリー兄貴が先に話を切り出してくれました。

いじめられっ子とはいえ家族と育った子供と屋敷しもべ妖精すらほったらかしで呪文練習ばかりしていた子供の人間力の差が窺えますね。

「その『地図』？ だけど。危ないものじゃないの？」

（安全性に問題）ないです。ちゃんと由来もわかっているものだから大丈夫ってそれ一番言われてるから。

「でも、ウィーズリーおじさんが『脳みそがどこにあるか見えないのに、一人で勝手に考えることができるものは信用してはいけない』って言ってたよ？

……去年の『日記帳』みたいに危険なものってことはない？ ズイラにそれをくれた人もそれを知らなかったとか」

（それも問題）ないです。『日記帳』とは違って、これはホグワーツを参照するだけの道具で自立意思は全くないってそれ一番言われてるから。



「——そうなの？ ……うん。それならいいんだけど」

「そうだよ（MUR）。」

「ああ、そういえば。」

「どうしたの？」

「この前話した吸魂鬼対策なんですけど、そろそろ準備ができましたので、近いうちに練習始めましょう？ わたくしだけでなく、先生方や闍祓いも認める、吸魂鬼対策の最善手だと思いますわ。」

「——ありがとう。助かったよ！ 今度の試合で吸魂鬼がでたらと思うだけで……」  
「恐ろしかった？」

「凄く。試合に負けた絶望でウッドが吸魂鬼の仲間にならないか心配で恐ろしかった」

「ありがとうございます！ ありがとうございます。」

「じゃあロンたちにも都合のいい日を聞いて教えるよ」

「えっ。」

「えっ。どうせなら皆使える方が良くない？」

「そうだよ（MUR）。」

と、そんなこんなで話しながら歩いているうちに、『地図』の領域からハリーとレズちゃんの名前が消えましたね。もうホグズミードエリアへと着いたようです。そろそろ地図を切りましょうか。

いたずら完了！

「それで、大臣、どうしてこんな片田舎にお出ましになりましたの？」

ホグズミード諸々のイベントをすつ飛ばして。

現在「三本の箒」店内です。

ファッジ、マクゴナガル、フリットウィック、ハグリッド、それから店員のマダム・ロズメルタの話盗み聞きしているところですね。

「他にもないシリウス——」

「——の最悪の仕業は——」

「あの人の一番の親友は——」

「まるで漫才だったわ、シリウス・ブラックとジェームズ・ポッター！」

マフリアート！ 耳塞ぎ！

驚きのあまりハリーがジョッキを落としたのでリガバリーします。

この程度で動揺するなんてそんなんじや甘いよ（煽り）。

「一心同体！」

「ブラツクの状態が——」

「ダンブルドアはブラツクを——」

「——ヤツに出会ったんだ！」

「ペティグリューは英雄として死んだ」

おっそうだな（すつとぼけ）。

「大臣、ブラツクは——」

「なにしろ、あそこの囚人は大方みんな暗い中に座り込んで、正気じゃない。ところがブラツクの奴だけはあまりに正常だった——」

「——『例のあの人』とまた組む——」

すげえ事になってんぜ？（ハリーの顔）

そろそろ会談も終わりですね。ハリーを介護する時間です。

「ああ、これは与太話だが、正気といえばもう一人、いや、一組か？」

——レストレンジの奴らも妙に正気だった」

ガシャン！

「……ハリーもジェームズたちのように四人組だと聞く。まさかそのようなことは——」

「お言葉ですが。それは私の目が吸魂鬼にも劣ると?」

「いいや! 違う。違うともミネルバ! ただ私にはハリー、『生き残った男の子』の安全を守る義務がある!」

子供とはいえ『死喰い人』の——」

「コーネリウス。校長と食事なさるおつもりならもう城に戻ったほうがいいでしょう。まだお話を続けますか?」

「——いや、そろそろ時間だ。ここらでお暇させてもらうよ。だが私には魔法大臣として職責を果たす義務がある。それだけは確かなんだ」

「……ねえ、ズイラ。君は知ってたの?」

ホグズミードからの帰り道。ハニーデュークスの抜け道でハリーが話しかけてきました。

知wらwなwいwよw! というかなんでそんなこと聞くんですか(逆ギレ)。

「いや、ファッジ大臣の話で、君が『死喰い人』? とかいう人たち? と関係があるって……」

ふむ。こんなところでその単語を拾えるとは思ってもみませんでした。そろそろ説明しておきますか。

「簡単に言えば、死喰い人は『闇の帝王』の部下です。純血至上主義を掲げて自分たちに従わない魔法使い、マグルを見境無しに襲った危険な集団ですわ」

「……………。それで、ズイラはその人たちとどういう関係が？」

「その崇高な目的のせいとか、死喰い人の構成メンバーには純血のメンバーが多く含まれています。例えば先ほどの話に出てきたシリウス・ブラック。ああ、大丈夫です？」

「……続けますね。シリウス・ブラックはブラック家という純血の名門生まれです。そのような人物も『闇の帝王』は多く抱えていました。」

ドロホフ、トラバース、クラウチ、それからレストレンジ。

「…………もうわかりました？ わたくしの両親はどちらとも『闇の帝王』の配下。それも腹心、最も近い部下でした。ついでに言えば、わたくしの母はシリウス・ブラックの従姉妹ですわ。」

ファッジ大臣は、『生き残った男の子』の近くに『死喰い人の娘』がいることが不安なのでしょね」

ズイラはそう言って、綿飴羽ペンを舐めながら続けた。

「例えば、ガウエイン・ロバーズ。彼のことを覚えていらつしやいます？」

ハリー。以前、あなたは今年ホグワーツに来る時に魔法省が車を出してくれたと言い

ましたね？

それとほとんど同じですわ。

少しだけ違うのは、あなたは『何かあっても守るべき存在』なのに対し、わたくしは『何かあつたら排除すべき存在』なことくらいですかね。

あら、もうホグワーツに着きましたね」

よからぬことをたくらむ者なり！

なんてことないそんな言葉すら今のハリーの猜疑心を駆り立てる。

そんな様子に気づかず、ズイラはハリーに提案する。いつもと同じように。

「まだ時間もありますし、吸魂鬼対策の練習でもします？」

——今日はいい？ わかりましたわ。ではまた後で」

そう言つて、彼女はいつぱいのお菓子をリュックサックの中に袋ごと放り込み、どこかに消えていった。

楽しかったはずのホグズミード観光がどうしてこんな事に。

無心のままに夕食を食べ、部屋に戻り。

ハリー・ポッターは泥のように眠った。



20/?  
〜夜襲まで

これマジ？ 文字数に比べて進行度が貧弱すぎるだろ……なRTA、もう始まつてる！

さて、前回はハリーにレズちゃんの持つ「秘密」を暴露したところで終わりました。その続きからとなります。

次の日の朝。ハーマイオニーちゃんと一緒に朝食に向かいましたが……ハリーは寝室から出てきませんね。ロンくんに聞いてみましょう。

おはようナス！ ハリーどしたん？

「おはよう、ズイラ。ハリーはまだ寝てる。うなされてるみたい。」

……君、ハリーに昨日何か言った？ ブラックのくそつたれの他に、君の名前も寝言で呟いてただけだ」

うちのトツチャマとカツチャマのことについて話しました……（小声）。

「……ああ、うん、そりゃあタイミングが悪いよ、ズイラ」

そう……。でも後々実害が出てから話した方が傷が深いと思うんですけど（反論）。



そう強弁しながらレズちゃんがベーコンを食っていると、ハーマイオニー姉貴が口を挟んできました。

「ズイラ？ ハリーにとつて、『実害が出た』のはまさに今よ」

そうだよ（MUR）。一対二だと分が悪いので話を切り替えます。ハーマイオニー姉貴はどうしてうちの両親のこと知ってるんですかね……。

「……一年生の時、ニコラス・フラメルのことを調べる機会があつたじゃない？ 近現代の有名人を調べる際に、バチルダ・バグシヨットの『近代魔法史』を読んでいたら名前を見つけたの。

——ごめんなさい。私、別にそんなつもりじゃなかったの、本当よ」

（別に問題）ないです。どうせうちのカツチャマたちは一生 a s s ガバガバンの刑に  
なり続けるから多少はね？（大嘘）

どうしても、というならハーマイオニーちゃんが今食べようとしたエッグベネディクトで勘弁したる（譲歩）。

……ベネディクトくんありがとナス！ でもそんなに食べすぎると太るって？

なんだア？ てめエ……。

というわけでお昼まで談話室で少しの間時間を潰して……ハリーくんが起きてきま

したね。オッハー！ オッハー！！！！（激寒）

「おはよう、ズイラ」

挨拶を返してくれて何よりです。

出自「死喰い人の遺児」スタートにおいてしばしばある好感度チェックですが、これもその一つですね。ここでのチェックに失敗すると、ハリーがグランドクエスト「アズカバンの囚人」終了時までプレイヤーキャラと口を利かなくなります。育成に遅れが出るのでキャンセルだ。

そのまま、尻ウスの話になり、マルフォイがそのことについて知っていた話に移りま  
すね。

「マルフォイの父親が話したに違いない。あいつの親はヴォルデモートの腹心の一人——」

おつ、思わず目が合いましたね。ハリーの口がダンマリになりました。

腹心の娘から言わせていただければ、ヴォルデモートは名前にトラップを仕掛けてい  
る説があるので大人しく『闇の帝王』って呼んで、どうぞ。まあ、現代に「ヴォルデモ  
トなんていない」んで、問題ないと言えば問題ないですが。

そんな与太話にロンくんも怒って話に加わりました。

「二人とも、『例のあの人』って言えよ。頼むから」

そのまま流れて、ハグリッドの小屋にて。

「連中はおもしろい生きもんを目の敵にしてきた！」

自分は無罪になったものの、バックビークくんが処刑されると聞いたハグリッド兄貴の第一声です。

なお、その「おもしろい生きもん」は今まさにニワトリくんに残虐ファイトを仕掛けています。彼は血だらけの嘴で生きた……失礼、生きていたニワトリをバラバラにしています。ハグリッドの魔法生物の中ではセストラルくんと並んで安全かつ有能な生物だから……（擁護）。

彼はそのまま a s s ガバガバンのことについても説明してくれました。

「俺は二度とアズカバンに戻りたくねえ」

シーン省略！ 次へいざあ。♫

数日後、クリスマスです。あら？ 雪降ってるじゃない！ 寒いと思っただわ。

今年のクリスマスですが、レズちゃんはハリーに『実践的防衛術と闇の魔術に対するその使用法』と『オーグリーが鳴いた時、私はなぜ死ななかつたか』の二冊の本、それからメッセージカードを贈らせていただきました。それぞれ魔法戦闘の教科書と飛行

中に箒から落ちた魔法使いの事件記録となります。

前者は言わずもがなですが、後者にも事故原因とその対策、さらには飛翔中の安全確保、さらには空中戦闘の方法が詰め込まれており、なかなかの有用性を誇ります。なお、敵対した吸魂鬼相手にはさっぱり意味ありません。あれは範囲精神攻撃だからね、仕方ないね♫

メッセージカードには、そろそろ吸魂鬼対策を始めないか、という旨の文言を記載しておきました。

一方レズちゃんに対してのプレゼントですが、ロンくんからはハニーデュークスお菓子詰め合わせ、ハーマイオニーちゃんからは書籍『防衛術の理論』が、それから……おつと、ハリーからは杖のホルスターが贈られてきました。

本は『必要の部屋』で調達できますし、お菓子もストック万全なので正直微妙ですが、杖のホルスターは闇祓い等特殊業務者向けの二本仕様ですね。まあまあうま味テイストなセンスです。今後は使い倒して差し上げろ。

起きてきたハーマイオニー姉貴と一緒にハリーたちの寝室へと向かいます。彼女に對してはクルックシャンクスくんのリボンを贈らせていただきました。なんか彼から妙に敵対判定を喰らっているので賄賂を送ります。お慈悲々お慈悲々。

あつ、そうだ(唐突)。ホグワーツにおける男女部屋間移動については、女性が男性部

屋に入るのはフリーパスですが、男性が女性部屋に入ろうとした場合ホグワーツ防衛機構が発動します。この防衛機構は大変優秀で、分霊箱のような極めて異常な例外を除き、ゴースト、アニメーガス、「死」の透明マントをも看破し侵入者を排除します。猫のようなペットは例外です。

いきなり男女差別かよ？ 創始者野郎らしいな（ヘイトスピーチにより一部検閲）。

本作は『四竜古城ホグワーツ』がやりこみボスの一つと言われるように、この防衛機構一つを取っても実力で突破するのはほぼ不可能です。女子部屋に侵入したい兄貴は最低でもイギリス魔法界を滅ぼせる程度のスペックを持つてきて、どうぞ。

とコラムを挟んだところで話を戻して。

ハリーたちの部屋に着きました。

「まあ、ハリー！ いったい誰がこれを！」

「さっぱりわからない。カードもついてないんだ」

さて、彼の寝室には『炎の雷』、ファイアボルト先生が鎮座なされていました。尻ウス兄貴のクリスマスプレゼントですね。

学生の試合に国際試合級の籌を送りつけるのもどうかと思いますが、まあ彼の13年分のクリスマスプレゼントと考えれば気持ちわかります。

このプレゼントの到着により、来年度『第一の試練』の攻略が確定しました。対戦あ

りがとうございました（慢心）。呼び寄せ呪文さえ覚えておけば最低限の条件が整うなんてお楽ちんちん。

「ハリー、まだ絶対にそれに乗っちゃだめよ！」

明らかにおかしなプレゼントにハーマイオニーが忠告しますがハリーとロンは聞いていませんね……。

「ポッター、この箒を預からせていただきます」

「な——なんですって?! 正気ですか!？」

その日の夜。マクゴナガル先生によりファイアボールは没収されました。シリウス・ブラックとかいう凶悪犯が贈ったものなんだから、当たり前だよなあ（MUR）。

「いったい何の恨みで、マクゴナガルに言いつけたんだ?」

「その箒はシリウス・ブラックからハリーに贈られたものだわ!」

ロンちゃんとハーマイオニー姉貴が痴話喧嘩を繰り広げる一方で、ハリーが信じられないような顔をしてレズちゃんを問い詰めてきます。

「まさか、ズイラ。きみもハーマイオニーに賛成なの?」

多少はね?

凶悪犯がわざわざ最高級品を買って、呪いコーティングしたものをプレゼントとして

送りつけて謀札するなんて、そんな迂遠なことマルフォイクンレベルの金満チキン野郎くらいしかやらないと思いますが、僅かでもリスクがある以上仕方ないね♂

「そんな……」

ま、ま、そう焦らないで。それより吸魂鬼対策始めませんか？ 始めましょうよ！

はつきり言いますが、前回の敗戦については箒くんに瑕疵かしはーミリもありませんでした。ハリー自身が対策を練らなければニンバスだろうがファイアポルトだろうがシューティング・スターだろうが撃墜されるってそれ一番言われてるから。

「それはわかってるよー。でも、ファイアポルトが壊れちゃ……」

それについても問題ありません。

クイディッチの歴史は箒の歴史！ クイディッチ研究家のウイスプ教授によれば、箒に対してトラップを仕掛けるのは非常に基礎的な反則なため、箒の魔法防御は過剰なほどに万全となっています。ハイエンド品のファイアポルトなら尚更です。

インセンディオによる発火、ストリーラーの腐食毒といった物理的破壊からコンファンドによる錯乱のような機能的破壊にも耐性を持つているファイアポルトに対してクソ雑魚死喰い人が何かできるとは思えません。

箒をバラされることが心配なのでしょうが、これについても、何の問題ですか？ 何の問題もないね♂（ラミレスビーチの誓い）

シルバー・アローのようなオーダーメイド品はともかく、主要メーカー品であればオーバーホールは簡単に、呪い対策は万全になっています。クイディッチ狂のマクゴナガル、フーチコンビであれば傷一つなく返してくれると思いますよ。

詳しくは『ブラッジャーをぶっ飛ばせ——クイディッチの防衛戦略研究』を読んで、どうぞ。

……今更ですが3年生ハリーへのご機嫌伺いプレゼントはこちらでもいいですね。ここから先クイディッチの試合が無いため今回は航空戦主体の本をプレゼントしましたが、状況にアジャストしているのは『防衛戦略』の方と言えます。次回再走時の検討案のために、チャートにちゃんと言と書いておきましょう（激ウマギャグ）。

と、レズちゃんが長文解説をしたところでようやくハリーは矛を収めてくれました。「うん、わかった、信じるよ。僕は僕のことを頑張らつてことだね。……吸魂鬼対策も教えてもらつていいかな？」

それから、遅くなってごめん。プレゼント、ありがとう！」

こちらもホルスターありがとナス！

というわけで明日から『必要の部屋』にイクゾー！

「——凄い」



翌日。ハリーを連れて『必要の部屋』を訪れました。ハリーはロンとハーマイオニーを連れてきたかったようですが、二人の仲が某『名前を言っただけはいけないあの御方』の手作りチョコ並に壊れてしまっているので断念したようです。

というわけで、軽く説明しましょう。

今回紹介するのは『守護霊の呪文』！ 吸魂鬼対策から遠隔地への伝令までできる有用呪文です。これを使えば吸魂鬼の屯する a s s ガバガンでも問題なく仕事ができます。

エクスペクト・パトローナム！ 守護霊よ来たれ！

はい。杖の先から噴き出たロバーとロバ2がハリーの周りをぐるぐるしています。小さいサイズですが、これだけで吸魂鬼の問題なくおやつにできます。最強、これ！

使うためには技術はいらず、幸せな思い出があれば誰でも——厳密に言えば一部例外はありますが、ハリーなら問題なくできます。

それでは、試して、どうぞ。

「エクスペクト・パトローナム！」

——何か出てきた！」

ハリーの杖から銀色の気体が噴射されました。ええぞ！ ええぞ！

……とはいっても、幸福な思い出を奪う吸魂鬼くんの前で守護霊を出すのは容易で

はありません。

そこで本日用意させていただいたのは、このチェストの中に仕舞われているボガートくんです。

こいつは人間の『恐怖の対象』に変身する魔法生物ですね。今のハリーの場合、吸魂鬼に変身するだろうということでホグワーツ中を引つ掻き回して捕獲しました。

もし、他のもの、例えばトム・リドルや『闇の帝王』になつた場合には仕方ありません。二人で囲つて生まれたことを後悔するくらいにボコボコにして差し上げましょう。

……冗談ですわよ？ そんな異常者を見るような顔しないで。

リデイクラス！ ばかばかしい！

これだけの呪文で撃退できます。

じゃあ試しにやってみよう！ チェスト、オープン！ 中から出てきたのは……安心しました。吸魂鬼くんでした。

ハリーが守護霊呪文を懸命に唱えています……ああ、落ちたねえ（意識）。

リデイクラス！ ばかばかしい！

ボガートくんにお帰りいただいたのでハリーの顔をペシペシはたいて起こします。

……はい、おはようございます。蛙チョコレートどうぞ。

「——父さんの声を聞いたんだ。父さんの声は初めて聞いた。僕たちを守るために一人

でヴォルデモートと闘ったんだ」

「はえー、すつごい。まあある意味では良かったんじゃないですかね（適当）。

「えっ……」

吸魂鬼くんは最悪の記憶を引き出す存在です。プレイヤーキャラや予言者のような例外事象適応キャラを除いて、吸魂鬼で思い出した出来事は実際に全てあったことと言えます。

息子のために命を賭して闘って、結果としてその子供が『闇の帝王』を滅ぼした——  
生き延びた、だなんてそれだけで父親的には満足なんじゃないんですかね？

というわけで、次いけます？ OK？

……よし、いけそうですね。ではチェスト・オープン！

「エクスペクト・パトローナム！」

おっ。

無体ですが、三回目にしていきなり守護霊が出てきました。

ボガート道場がすごいのか、ハリーの防衛術適性が凄まじいのか……。

いずれにせよ、守護霊習得に七年（他呪文込み）もかけたレズちゃんとは格が違いますね。

とはいえまだ撃退は困難な様子です。割り込みましょう。

レズちゃんが間に割り込むと、吸魂鬼——ボガートくんはレズちゃんの氏体に変わりました。はいはい、リデイクラス、リデイクラス。

ボガートくんがチェストの中に戻ったのでハリーを褒め称えましょう。自己肯定感を上げてあげることも守護霊修得において重要な行為です。

なかなかやるじゃない！ 綿飴ペンどうぞ。クタクタのハリーの口に綿飴を突っ込んであげます。

食し終えたハリーにバタービールの瓶を渡してやれば、彼はそれをぐいと一飲み。一服して話し始めました。

「……ふう。ありがとう。ちよつとだけど守護霊が使えたよー！」

あくいいつすね。二回目で吸魂鬼と拮抗できるとか凄い、凄くない？

本物とはまだやり合っていないですが、この調子で毎日続ければ十分レイブンクロー戦には間に合うと思いますよ。無体でも時間は十分に稼げます。

今日はここまでにします？

「……いや、まだやるよ。時間もないし、ファイアボルトも無いんじや暇だしね。

それに、ズイラ。そんなこと言っても、きみはもう守護霊を使いこなしてるんでしょ？ だったら僕も守護霊くらい使えなくちゃ」

ふむふむ。その心は？

ハリーはニヤリと笑って続けました。

「だって、僕、『生き残った男の子』だもん」

あくたまらねえぜ。チエスト・オープン！

「エクスペクト・パトローナム！ 守護霊よ来たれ！」

ハリーの杖から銀色の影が飛び出し吸魂鬼くんの前に立ち塞がりました。前提知識込みですが、どことなく獣のようにも見えます。飲み込み早すぎイ！

10秒が経ち、20秒が経ち……中断！

割り込んだところハリーの氏体が転がりました。リデイクラス ばかばかしい！

精魂尽き果てたようなハリーの口にハニーデュークスの板チョコをつうづるっこんでやりましょう。それから彼にバタービールの残りを飲ませて介護します。

一息ついたハリーは何か気になったのか、レズちゃんに尋ねてきました。

「ズイラ、さつきからいっぱいお菓子出してるけど、そのリュックの中にくっつお菓子が入ってるの？」

（総数は）110弱でしょうねえ、最近数えてないからわからないですけど。

（スタミナと精神値の補給、ついでにダンブルドア対策に機会があるたびに買っていたので総数は把握して）無いです。

百味ビーンズ、レモンキャンデー、爆発ボンボン、マーズバー、かぼちゃ瓶ジュース、

克蘭ペット……。

購入時にいちいち確認なんてしてないので正直覚えのないものまでありますね。今度耐久値消費期限だけ確認しておきますか。

などとレズちゃんがりユックからお菓子を引っ張り出しているのを見て、ハリーがクスクスと笑い始めました。

おつ、余裕なのかな？ チェスト・オープン！（私怨）

「うわっ!？」

——エクスペクト・パトロナム！ 守護霊よ来たれ！」

よーしよし、中斷！ リデイクラス！

ダンブルドアの氏体？ 知らない（すつとぼけ）。

不意打ちにはまだ対応できないようですね。実践的には吸魂鬼にはほとんど確定で先手を取られるため弱点を潰していきましようね。

「——ねえ、ズイラ？」

ん？

「あのさ、きつきから、きみのボガートは、何で誰かの『死体』に変身するの？ きみ自身にダンブルドア先生。

……それから僕の死体」

……えーつと答えないとはいけません？

正直恥ずかしいんですけど。

「——いや、いいよ。ごめん。変なこと聞いたね」

ありがとナス！

まさかハリーやダンブルドアといった必須キャラが最終戦前に氏んだら即リセだからだなんて言えませんからね！ ガバガバチャートを晒すのは恥ずかしいし……。

「謎の囚人」ルート突入についてはGO運と釣り合っているためなんら恥ずかしくありません（威風堂々）。

さて、ハリーの顔を見てみれば、気丈そうですがやや青ざめています。そろそろハリーの精神値も限界そうですね。本日の守護霊の練習は終了しましょう。

わたくしはこの後一人で防衛術の練習をしますが、ハリーはどうします？

「付き合おうよ」

相手がいいた方が熟練度の伸びが大きいためおおおタスカルタスカル。

そんなこんなでこのあとめちやくちや魔法練習しました。

この後も特訓パートのため超スピード!? でいざあ♂

季節は一月が過ぎ、すでに二月です。

あいも変わらずロンくとハーマイオニーちゃんは喧嘩中ですね。この件についてはハーマイオニーよりの中立で立ち振る舞っています。

また、この期間にレズちゃんの出自を問題としたハリーとのギクシヤクした冷戦状態が終戦しました。身近にもっと険悪な奴らがいるとかえって冷静になる現象です。

本ゲームの好感度管理はプレゼントや時間経過といったいわゆる分かりやすい変化だけでなく周囲の状況や風聞によっても上下します。なのでこのゲームをこれからプレイされる方は、最低限のキーキャラクターの好感度を保持することを第一目標としてプレイしましょう。全キャラ好感度最大実績狙いなら服従＋アモルテンシアコンボで強制魅了して、どうぞ。アモルテンシアは真に『愛』と呼べるものは作り出せずとも、好感度操作程度なら容易にやつてのけます。やはり服従の呪文は最高やで（頭死喰い人）。本RTAにおいてはハリーとダンプルドア、闇祓い関係者のみに気をつければ問題ありません。

と、現在はいいつも通りハリーと『必要の部屋』で特訓、そのインターバル中です。

大鍋ケーキを食べ終わり、ハリーは「日刊予言者新聞」を読んでいたが、何事か気になったのかレズちゃんに問いかけてきました。

「ねえ、ズイラ。『魂が吸い取られる』ってどういうこと？ ほら、ここ——」

魔法省、吸魂鬼の接吻を許可——。



そんな見出しが一面を飾っていますね。説明しましょう。

簡単に言えば、死刑より酷い行為ですね。『トム・リドルの日記帳』を覚えています？  
そうですね、昨年のもやつです。あれを見ればわかるように、マグルと違って魔法族は肉体の限界を迎え「記憶」や「魂」だけになっても存在し続けることができます。  
ゴースト？ あれも似たようなものです。

『吸魂鬼の接吻』は魂を吸い取り捕食する、と言われていました。一説には犠牲者はそのまま吸魂鬼となるため繁殖行為の一種ではないか、と言われていますが、わたくしにはわかりません。アズカバンや神祕部あたりならわかるんじゃないですか？

神祕部って何……ですか？ 簡単に言えば魔法省お抱えの研究機関ですね。……気分が悪くなってきたのでもうやめませんか？ よかった。じゃあ続きを始めましょう。行きますわよ？

「この箒は返しますが、ポッター——頑張つて、勝つんですよ、絶対、必ず、確実に。わかりましたね？」

……レストレンジ、あなたも可能な限りポッターに協力するのです。万が一競技場で吸魂鬼を見つけたら、すぐさま守護霊を撃ち込んでやりなさい。我々の許可は一切必要ありません」

『必要の部屋』からの帰り道、マクゴナガル姉貴からファイアボルトを返却していただきました。やったぜ。

「スキヤバースが！ 見ろ！ 血だ！ スキヤバースがいなくなつた！ それにこれを見ろ！ オレンジの毛だ！」

談話室にて、ロン兄貴が怒鳴り込んできて、スキヤバース惨殺？ 事件が発生しました。一応部屋で『忍びの地図』を確認しておきます。

……無事一階廊下に「ピーター・ペティグリュウ」の名前がありました。哀れなクルックシャンクスくんの開腹手術をしなくて良さそうです。やったぜ。

「——流石だぜ、ハリー！ 流石だぜ、ファイアボルト！ あのレイブンクローの女傑、チョウ・チャンを歯牙にも掛けない飛翔！ グリフィンドールチームは優勝戦線に復帰しました！」

——それから」

「非常に卑しい悪戯です！ 神聖なるクイディッチの試合を汚すようなその行い、みんな処罰します！ フリント！ マルフォイ！ あなた方に選手としてのプライドは無いのですか！ 試合で勝とうという気構えは無いのですか！」

多少のラフプレーもクイディッチですが、このような下劣な行為など——

「おっと、マイクが偶然切れてしまいました。マクゴナガル先生が全ておっしゃってくださったと思います。グリフィンボール生もこれで溜飲が下がったことでしょう。」

正直俺もそこまで言うつもりはなかったんだけどなあ……」

グリフィンボール対レイブンクロー。

グリフィンボールの勝利で幕を閉じました。守護霊も無事使えたようです。まだ無体ですが、ジエームズ・ポッターのことを知る人物なら鹿を連想してもおかしくない出来栄でした。

また、これはハリーがチョウ・チャンを認識する大切なイベントでもあります。心の発育は魔法力の上昇と大いに関係があります。恋愛感情もその一つなので、発生してくれると嬉しいです。

なお、本格的に恋愛感情が足を引っ張る六年生に本RTAでは突入しません（無慈悲）。

「ブ、ブラックです！ シリウス・ブラックがナイフを持って僕の部屋に！」

「冗談はおよしなさい、ウィーズリー！ 寮の中に入れるわけないでしょう！」

「ならあの人——カドガン卿に聞いてください！」

「——通しましたぞ！　ご婦人！　合言葉も一週間分持っております。紙切れを読み上げておりましたぞ！」

尻ウスのブラックがロン兄貴を深夜に襲った（意味深）ところで今回はここまでにとろございます。

ご笑読ありがとうございます！

## 21 / ? ハリー・ポッターと謎の囚人、了

ハリー・ポッターと a s s ガバガバンのプリンス、F u c k o f f ! (暴言)  
 やだ、怖い、やめてください……アイアンマン！（クロスオーバー）

さて、前回シリウスくんがロンくんの寝込みを襲ったところで終わりました。超スピード!? で流しまして、その二日後から開始します。

現在は朝食の時間中、毎朝恒例のふくろう爆撃便がいつものように降り注いでいます。

「なんたる恥晒し！ 一族の恥！」

シリウスくんには合言葉一覧を進呈したネビルくんが届いたバツチャマの吠えメールをBGMに優雅に食事を楽しみましょう。イギリスでうま味テイストなものを食べたければ朝食を三度食えてそれ一番言われてるから（S M S E T ・ M — M）

と、ヘドウィグ姉貴がハリーに手紙を届けにきました。ハリーが封筒を破き、中を読みます。

どうやらハグリッドくんからのお誘いようです。今日6時とのことなので時間を

空けておきましょう。

「ハーマイオニーのことだ」

6時、小屋にて。ハグリッド兄貴にハーマイオニー姉貴のことについて話をされました。

ロンさんとハリーくんにはペットや箒なんかより友達を大切にしろ、レズちゃんにはもうちよいりに気を配れと嗜められました。

ハーマイオニーの好感度を稼ぐよりハリーの育成を優先する方が重要だから多少はね？ RTA上承服しかねますがまま、ええわ。今回は納得したる。

スキヤバーズくんをむしやむしやされたロンくんも納得していないようですが、その場はなんとなくそのままお開きとなりました。

獅子寮談話室に戻ると、掲示板に貼り紙があります。今週末はホグズミード解禁日のようですね。早速ロン兄貴はハリーを誘っていますが、それを見咎めたハーマイオニーちゃんが嘔み付きました。

「ハリー！ 駄目よ、ホグズミードに行っちゃ！」

「おつ、ハリー？ 誰かが何か言ってるのが聞こえるかい？」

「ロン！ あなたがシリウス・ブラックに襲われたばかりだというのにどういう神経を

しているの？

——ズイラ！ まさかあなたもハリーを連れて行くなんて言わないでしょうね!？」

おっと、飛び火してきましたね。

連れて行かないから大丈夫だって安心しろよ。ヘーキヘーキ、ヘーキだから。

「——信じてるわよー!」

「それで、ズイラ、どうするんだい?」

嫌です……。

ハーマイオニーちゃんとの約束があるため……というのは建前で、ホグズミードイベントが基本的にはまず味イベントだから、というのが本音です。

前回はハリーの因縁を回収するために行ったようになんらかの目的がある場合は別ですが、通常時のホグズミードイベントは基本的にメリットがありません。

現在『忍びの地図』の所持者はレズちゃんである、という優位を活かして意見を強行します。

ハーマイオニーちゃんの心配を無視するなんてどうなんだよ人として!

熱心にそう強弁し続けたところ、彼らは渋々納得してくれました。ありがとナス!

夜になりました。今日も今日とて『必要の部屋』遠征にイクゾー！ デッデッデデデ。

現在の期間ですが、昼間はハリーと一緒にボガート道場で閉心術の熟練度稼ぎを行うため、夜間は戦闘用魔法の特訓を行なっています。

無言呪文もそこそこ形になってきたため、そろそろ「悪霊の火」の安全な使用のための「闇の魔術」適性の熟練度を稼ごうと思います。用いる闇の魔術はインペリオとセクタムセンプラの二種です。

ナギニ以外の分霊箱破壊をダンブルドアに丸投げした分、呪文習得ペースがチャートより早まっています。これはもしかすると、もしかするかもしれないよ？ 最終戦までにワンドレス・マジックまで習得できるかもしれないですね。死喰い人の露払いを迅速に行えばその分ヴォルデモート戦が楽になるため、レズちゃんの強化は嬉しいですね。

それではいつものようにデミガイズマントと『忍びの地図』の徘徊セットを取り出して……

……？

多分見間違いだと思います。もう一度確認します。バッグの中などの直接所持していない道具はアイテムインベントリで確認できないですからね。「検知不可能拡大呪文」のかかった入れ物の場合、よく整理していないと目的のアイテムが見つからないこ



とは稀によくあります。ここら辺アプデで改善してほしいですね。

気を取り直して『忍びの地図』を……………? ?

……………?

変な位置に挟まったかもしれません。ただの羊皮紙だからね、仕方ないね♂ よくあることです。リュックサックをひっくり返して調べます。

デミガイズ製マント、幸運の液体瓶、「姿をくらますキャビネット棚」の片割れ、逆転時計、「深い闇の秘術」ほか書籍いろいろ、元氣爆発薬ほかドーピングアイテムいろいろ、お菓子類いろいろ、その他雑貨……………。

……………? ?

あれー!? あれ、あれ、あれ、待てよ、あれ、あれ、おかしいですねえ? (1239

D)

(『忍びの地図』が) ないです。あつ無い……………。

アクシオ! 『忍びの地図』よ、来い!

——羊皮紙一枚来ることなかったですう。残念ながら。はい。

……………? ?

レズちゃんの動きが固まっていますが、ご安心ください、お使いの端末は正常です。

時間をすっ飛ばして。

あつという間に1994年6月6日。グランドクエスト『アズカバンの囚人』決戦日です。

今日までに色々ありました。

バックビークくんが敗訴した反動でハーマイオニーとロンが仲直りしたり。

ハーマイオニーの精神値が限界に達して占いの授業をボイコットしたり。

クイディッチ最終戦でグリフィンボールチームが優勝を決めたことにより、ハリーが守護霊の核となる幸福な記憶を得たり。

度重なるポガート道場の果てにレズちゃんの閉心術が妥協ラインを越えたり。

おおむね順調に推移したと言えるでしょう。

なお、『忍びの地図』は見つかっていません（絶望）。

ここまでの調査報告について、お話しします。

『忍びの地図』を最後に使用したのはピーターくん惨殺（大嘘）事件発生時、紛失を認識したのは野獣と化したシリウスくん襲撃の二日後。存在不明期間はこの間の五日間です。

紛失時にアクシオが無効化された以上、『忍びの地図』の行方について考えられる可能性は『該当アイテムが存在しない』、『呪文効果範囲外』、『所有権が他者に移動した』の

三つとなります。

一つ目についてはもはや考えてもしようがないので、二つ目以降の可能性について探索していました。

呼び寄せ呪文について、現在のレズちゃんの熟練度はホグワーツ一帯を覆うほどとなつています。それが反応しなかった以上、ホグワーツの通常のエリアには存在しないといえます。

その上で、『必要の部屋』、『レストレンジ邸』、『ホグズミード村』については呼び寄せ呪文が反応しなかったことを確認しました。

『校長室』、『秘密の部屋』など未探索区域も存在しますが、レズちゃんの行動範囲において搜索可能な箇所は潰した以上多分落としたということはないでしょう。

となるとやはり盗まれた、あるいは落としたり『地図』を誰かが拾って持ち去った可能性が高いですが……。腑に落ちない点があります。

その有用性からついつい忘れがちですが、『忍びの地図』は用途を知らなければただの古ぼけた羊皮紙の切れ端です。そんなゴミをわざわざ盗む、後生大事に抱え込もうと考えるキャラクターはごくごく少数に限られます。

存在と用途を確定で知っているのはマローダーズの四人とリリー・エバンズ。

正確な用途は不明だが存在を知っているのがスネイプとフィルチ。

『地図』に干渉することで存在を知り得たであろうダンブルドア。

レズちゃんに『忍びの地図』を継承させたウィーズリーの双子。

レズちゃんが存在を知らせてしまった相手として獅子寮3人組。

同室ということでパーバティ、ラベンダーも知っている可能性が否定できません。

容疑者はこんなところでしようか。

故人であるポッター夫妻、ホグワーツにいないルーピンは除外して、12人。

わざわざレズちゃんにくれた以上、ウィーズリーの双子も除外していいでしょう。残

り10人。

ここまでの期間観察を続けていましたが、いつもの3人と同室の2人は使う素振りを見せませんでした。確定ではありませんが動機もないことですし、彼らを白寄りに見て残り5人。

シリウス、ピーター、ダンブルドア、スネイプ、フィルチが最有力量容疑者です。

流石に『忍びの地図』を落とすというメガトン級のガバをしたとは思えないので盗まれたと仮定をしますが、そうした場合一つ問題が浮上します。

彼らが全員男だということです。

いつぞやの説明のように、ホグワーツの女子寮にアニメーガスを含む男性は通常侵入できません。教職員ならば可能ですが、寮監であれば、という但し書きがつくためスリ

ザリン寮監及び用務員も不可能です。ただしホグワーツ校長であれば緊急時に特例として侵入権を得ることができます。他の教員の場合は一度校長の許可を得る必要があります。

……犯人はダンブルドアしかいないんですが（絶望）。

以上、調査報告終了！

なにこれ、ガバガバじゃん！

……多分犯人はダンブルドアですので、お慈悲々お慈悲々と靴でもなんでも舐めて返してもらいます。最悪分霊箱を質に入れてでも返してもらいたいです。とてもじゃありませんが地図無しでは安定しません。ここ最近の深夜徘徊で再認識しました。

リセット級のガバですが、その他の面で十二分にアドバンテージを得ている他、この先全てノームスって可能性もあるため続行します（補完理論）。

気を取り直して。

本日のスケジュールをご紹介します。

その1！ 学期末試験残り！ どうでもいいわ♂ ……と言いたいところさんがすがひとつだけ回収したいイベントがあります。後ほど説明。

その2！ バックビークくんの動物裁判だ……（大嘘）！

その3！ 裁判に関連して魔法省職員並びに魔法生物死刑執行人の来訪！ 英国魔

法界の裁判はどうなっちゃうんだよこれ!?　こんなんで?　いいのかよこれ!? (ウイゼンガモット)

その4!　ピーターさんの逃走!

その5!　シリウスさんの逃走!

過密ですが一つ一つこなししていきます。

試験については真面目にやりました。成績悪いと『逆転時計』取り上げられるからね、仕方ないね♂　詳細についてはカットします。

あつという間に最後の試験、「占い学」!　適当に答えて差し上げろ(暴論)。トレローニーとかいうホグワーツ教授の屑は悲劇的な要素を含んでいればそれで点数をくれるガバガバ教師です。おお楽ちんちゃん。ハリーとロンより先の順番なため、さっさと終わらせて寮に帰ります。

談話室で待っていると、ロンちゃんとハーマイオニーちゃんが戻ってきました。沈痛そうな顔をしていますね。あつ……(察し)。

「ハグリッドが負けた」

ロンくんが一言溢してソファアにもたれ掛かり、ハーマイオニーちゃんが泣き崩れました。悲しいなあ……。

そのあとハリーも戻ってきたので伝えたとこ、今夜こつそりハグリッドを見舞いに

行くこととなりました。

「トレローニー先生？」

夕食時、ハリーに占いの学の試験について確認します。『予言』の確認、これをやりたかったんだよ！

既ブレイ兄貴姉貴には言うまでもありませんが、シビル・トレローニー大先生普段はガバガバ似非占いの師の振りをした大予言者であらせられます。

本作において『予言』とはイベント確定行為であり、『予言』が下された段階でその後何をもってしてもそのイベントは発生します。これを防ぐためには『予言』発生前にそれが起こり得ない状況を作るしかありません。なお、逆転時計で『予言』を覆そうとしても、『予言』発生以後の時間軸から遡ったキャラクターは『予言』事象に対し干渉不能になります。悲しいなあ……。

本RTAにおいては、ゲーム開始時に『傷跡の子供とヴォルデモートが頃し合い、片方が勝つ』と定められているためハリーの育成を行う必要があります。

ですが、逆説的に言えば『予言』で確定したイベントは以降放置しても勝手に実施されるということでもありません。

というわけで今夜ピーターくんが脱走に成功するかお伺いを立てましょう。トレローニー御大はなんて言ってたん？

「なんだっけ……『帝王』がどうか、召使いが主人の元に帰るとか、『帝王』が偉大に立ち上がる、とか。いつもと違う様子だったよ」

やったぜ。

人狼先生がいな以上今夜のピーターくんの逃走が不安でしたが、無事に逃げてくれるようです。その上、お辞儀様の復活まで確定しました。まだまだRTAを続行できそうですね。

というわけで夕食も食べ終わりましたしそのままハグリッドの小屋に――

「――待て、ちよつと待ってくれミス・レストレンジ」

なんだお前（驚愕）。

振り返るとそこには銀色のセイウチ髭を携えた老人――スラグホーンくんがいました。た。

ハグリッドの小屋に行こうとした矢先に止められたせいでハリーたちが動揺しています。まあハグリッドの小屋とは言え夜間外出だからね、仕方ないね♂

仕方ないので対応しましょう。足止めするからハリーたちは先に行つて、どうぞ。

で、どうしたんですか？（疑問）

「ミス・レストレンジ。今夜時間はあるかい？ すまないがついてきて欲しいところがある。」



——『髪飾り』と『カップ』の件についてアルバスが話があるそうだ」

「ほっほ、ズイラヤ。6月とはいえ今夜はまだ冷える。コートはいるかね?」

懐中電灯の灯りを頼りに小道を進んでいる途中、ダンブルドアがそう語りかけてきました。見れば彼もスラグホーンも外套を纏っています。ありがたくいただきましょう。

老人二人と少女一人という奇妙なパーティーですが、誰にも話しかけられることはありません。というより、周囲には誰もいません。

ここは「寂れた」を通り越して「終わった」ともはや呼ぶべき村です。

現在、レズちゃん、ダンブルドア、スラグホーンはホグワーツを離れ、とある一つの村を訪ねています。

先ほど見た薄汚れた看板には「リトル・ハングルトン」と書かれていました。

そのまま進むことしばらく、目的地へと辿り着きました。

廃墟ですらなくゴミと化した小屋こそ最終目的地。「ゴーンの屋敷」です。

はい。そうです。

現在レズちゃんパーティーは分霊箱・『ゴーンの指輪』を破壊しにきています。

何故今日なんですか? バックブークくんの処刑はどうなったんですか? シリウ

スくとピーターくんはどうなったんですか?

知りません。ダンブルドアは何も答えてくれませんでした。プレイの主導権を握られるとチャート壊れちゃう！ ダンブルドア丸投げチャートが望ましくない理由の一つです。

「さて、ズイラ。これより先わしらはあの小屋へと向かうが、二つだけ頼みがある」  
スラグホーンくんは……すでに知っているようですね。ズイラちゃんの後ろで神妙にしています。

大人しく聞きましょう。

「二つはわしが与える命令には、疑問を挟まずすぐに従うことじゃ。無論、お主が何かしら犠牲を払うことには拒否する権利はあるが」  
もちろんです。

『『隠れよ』、『逃げよ』と言われれば従うか？』

あ、いいつすよ（快諾）。

「わしやホラスを切り捨てよ、わしらの命を身代わりに生き延びよと言われれば従うか？」

嫌です……（断固拒否）。

ヴォルデモート再札RTAにおいてダンブルドアは用意可能な最高戦力です。こんな前座で使い潰すなどんでもない！

「ヴォルデモートを倒すためにわしらを見捨てよと言っててもか？」

嫌です……（断固拒否）。

ヴォルデモートを倒したいんじゃないやありません。ヴォルデモートを「神秘部の戦い」で倒したいんです。ダンブルドアというクソデカ戦力を欠いては勝てるものも勝てません。

「この命令に従わない場合、わしとお主が今後協力することはない、と言っててもか？」  
嫌です……（断固拒否）。

どうせ分霊箱ぶん投げればぶっ壊してくれるから多少はね？ 最終目的が同じ以上連携せずとも問題ありません。チャートにもちやーんと書いてあります（激ウマギャグ）。

「ズイラ、聞き分けておくれ」

「——もういいだろう、アルバス」

押し問答の結果、スラグホーン先生が仲裁してくれまして。

「よからう。ズイラ。お主はわしらを見捨てて逃げずとも良い。しかし、これだけは約束して欲しい——」

何やらダンブルドアが話していますが、要約すれば、なんとかレズちゃんは「ダンブルドアとスラグホーンの命を切り捨てる」命令に対する拒否権を得たまま突入する権利

を得ましたということに他なりません。やったぜ。なお、スラグホーンくんだけなら別に切り捨てても問題ありません。ダンブルドア級のように隔絶しきっていないから、多少はね？

……ところでもう一つの条件は？

「ほっほ。それは後で話そう。それでは行こうか。ホラス、援護を頼む。ズイラ、わしとホラスの間から外れぬように」

「——このくらいでよかろう」

ダンブルドア強すぎイ！

レズちゃんやんがマグルのドカタのにいちちゃんの自爆特攻と魔法使いの浮浪者のおっさんの「悪霊の火」という卑劣な術で突破しようとしていたダンジョン・「ゴーンの屋敷」。

ダンブルドア校長はこれを正面から攻略してのけました。雑多な魔法効果を異常な規模のフィニートで終わらせ、ヴォルデモートが選りすぐったであろう呪いの数々を反対呪文で全て打ち消し、ついでに屋敷の中をスコージファイで綺麗にして、壁時計をレパロで修復する余裕までありました。

スラグホーンくんがレズちゃんを守ってくれていましたが、正直必要ある？ という

レベルです。

やっぱりこんなクソデカ戦力を捨てるなんてとんでもない！

「あつたあつた。これじゃな？」

屋敷を蹂躪してのけたダンブルドアくんが小箱を持って凱旋してきます。小箱にはゴーント家……というよりスリザリンの紋章が刻まれていますね。

小箱の中には宝石——三角と丸と直線の紋章が刻まれた『石』のついた指輪が入っていました。

その紋章を見たスラグホーンくんは絶句していますね。

「アルバス、この紋章。まさかこれは本当に——」

「左様。あの『石』じゃよ。もともと、ゴーントもトムもそれに気づかなかつたようじゃがの」

そう言うってダンブルドアは何事もなかつたかのように杖腕に指輪を嵌め——

「ヴェンタス・マキシマ！ 暴風よ！」

一陣の風が吹き荒れ。

今まさにアルバス・ダンブルドアの指に嵌められようとしていた『ゴーントの指輪』が

吹き飛ばされる。

そこで、ホラスはズイラ・レストレンジが杖を構えているのをようやく認識した。

「——わしは、今、何を……?」

ホラスの横ではアルバスが同じように呆然としていた。

ここに来る前、ホラスとアルバスの間ではいくつか情報が共有されていた。

「ヴォルデモートの分霊箱はゴイント、遡ってペペレル家に伝わる指輪であり、『死の秘宝』の一つ、『蘇りの石』が嵌め込まれている」

「伝承のとおり『蘇りの石』に人を蘇らせる力はない。『石』に飲まれたものの末路は決まっている」

「おそらくは『みぞの鏡』のように、『蘇りの石』にも人を惹き寄せる力があるだろう」  
「ここまでは。ここまでは知っていてなお、ホラスとアルバスはその指輪を嵌めようとした。それになんの疑問も挟まなかった。」

ホラスの頭にはかつての大戦で失われた大勢の誰か、『彼女』の顔だけが浮かんでいた。

ゾツとした。寒気がした。凍えるようだった。

コート一枚や二枚ではまるで足りない。地獄の釜が凍らんばかりの寒さだった。

「——なにやらお二人の様子が変でしたので、とりあえず吹き飛ばしましたが、大丈夫で

すか?」

「——ああ、すまぬ、ズイラ。ありがとう。助かった。まさしく君に脱帽ものじゃ」

吹き飛び、転がった『石』をズイラが持つてくる。アルバスはそれを讃えんと彼女の背中を叩き、本当に脱帽した。直後、彼の頭に蜘蛛が降つてくる。老人は慌ててそれを払い除け、少女はそれを見てくすくすと笑つた。

だがホラスは見逃さなかつた。今世紀最強の魔法使い、アルバス・ダンブルドアの顔はその時確かに引き攣つたような笑みを浮かべていた。

無理もない。ホラスは思う。

ズイラ・レストレンジの持つている指輪——『石』。あれはまさしく劇薬だつた。

彼らはその効果と危険性を認識していたのにも拘わらず、自ら積極的に、無意識に『死』に誘われようとしていたのだ。

長く生きた老人二人、彼らの「過去」が追い縋つてきていた。

今でこそ『蘇りの石』の危険性が認識できる。ただしそれを見た瞬間はそうではなかつた。

長年『死』を呼び寄せなかつた『石』の腹が空いていたのか、ヴォルデモート卿の仕掛けた罠が作用したのか、あるいは老人たちの意思が脆弱だったのか。

ホラスには仔細はわからない。

ただ、「過去」にズイラ・レストレンジは囚われなかった、そしてもう『石』の危険性は吹き飛んでしまった、ということだけが分かった。

アルバスがズイラから『石』を受け取ってポケットにしまう。大丈夫か？ そんな少女の視線を感じたのか、老人はひらひらと杖腕を振って答えた。

「大丈夫じゃ、ズイラ。心配要らぬ。この『石』、分霊箱はわしが然るべき処置をしよう。約束じゃ」

ふとホラスが壁にかかった時計を見ると、短針は既に11と12の間を指していた。アルバスが何やら杖を振り、ズイラへと話しかける。

ホラスは、それが姿くらましを禁じる魔法であることを知っていた。

「さて、ズイラ。今まさに命を救われたばかりのわしがこんな話するのは滑稽を通り越していつそ醜悪であるが、聞いて欲しい。

この屋敷に入る前に話した君への頼み、その二つ目じゃ」

「なんです？ わたくしに出来ることならなんでもしますが、なんでもする。

そんなものはただの口約束だ。

だがホラスは、否、魔法族なら子供であろうと知っている。



その『誓い』を前に、なんでもするとは決して言つてはならない。

「ズイラや、わしと『破れぬ誓い』を結んで欲しい」

レストレンジは口をあんぐりと開け、驚愕の眼差してダンブルドアを見ていた。彼女の視線がこちらに向けられる。

スラグホーンはダンブルドアの言葉を肯定した。

「――正気ですか？」

やっとの思いで口から引き摺り出すように、少女はそう口にした。

老人はこの上なく不快そうに答えた。彼はきつと自らを許さないのだろう、と友人は感じ取った。

「うむ、正気、いや、正気でないかもしれぬ。正気でなければいいと思つておる。

しかし必要なことじゃ」

何故、「今日」分霊箱を壊しに行く必要があつたのか。

今日の昼、ダンブルドアに急な呼び出しを受けた時、ホラス自身もそう思つた。

ヒツポグリフの処刑というイベントがあり、魔法大臣さえもホグワーツを訪れている。彼女はハグリッドの友人であり、自身は人脈作りを行う絶好の機会であつた。

ダンブルドアでさえ、本当ならば直近の夏休み、クイディッチ・ワールドカップの途

中にでも分霊箱を壊しに行く予定だったらしい。

しかし、予定は変わった。今夜でなければならなかった。

何故、「ここで」話をする必要があったのか。

ホラスにはその理由が臆げながらわかる。

アルバスは Hogwartz 魔法魔術学校の教授としての職を重んじていた。彼は Hogwartz を愛していた。

だからこそ、Hogwartz では、Hogwartz 校長としては話なんてできなかったのだから。

「ゴイントの屋敷」なんて Hogwartz から遠く離れた場所、『彼』のルーツでなければ話なんてできなかったのだから。

Hogwartz 校長が生徒に対してではなく。

不死鳥の騎士団団長、アルバス・ダンブルドアが、死喰い人の娘、ズイラ・レストレンジと6月7日を迎える前に話をする必要があった。

『——今夜、真夜中になる前、その召使いは自由の身となり、ご主人様のもとに馳せ参ずるであろう。闇の帝王は召使いの手を借り、再び立ち上がるであろう。以前よりさらに偉大に、より恐ろしく——』

「それ……は……」

「わしは普段、ホグワーツ内で起こることを全て知っているとわい。むしろ、ほとんど無知と言つてもいい。

——じゃが、とある先生に関することだけは、わしは聞き漏らさぬようにしておるのじゃよ」

沈黙。沈黙。沈黙。

永劫のそれを破つたのは少女だった。

「……なるほど、わかりました。理解しました」

少女は近くにあつた椅子を修復呪文で修復、ゆつたりと腰掛け話した。

「トレローニー先生がハリーにした『予言』ですか？」

「左様。『予言』について知つておつたのか？」

「『闇の帝王の召使い』の『予言』という意味なら、今日の夕食の時にハリーに聞きましたわ。」

『予言』という必ず当たる未来予測の技能については——」

少女はふつと笑つて呟いた。

「——トレローニー先生の授業を一度でも受けた生徒なら、『何故彼女がホグワーツの教授なんだろう』と考えると思いませんか？」

くつくつ。

アルバスもホラスも思わず笑ってしまった。確かにあれは『授業』ではない。

「カツサンドラ・トレローニー氏の逸話を聞けば、『予言』が『そういうもの』だとはわかりません。」

……それで、何故わたくしが『闇の帝王の召使い』だと思われたのですか?」

アルバスは可能な限り真摯に答えた。ホラスにはそう見えた。

「——まず、誤解の無いように言うが、わしらは君が心底から『闇の帝王の召使い』だとは思っておらぬ。仮にそうだとしたら、わしらが『指輪』を嵌めようとした時に止めぬじやろう」

「……? ならば何故?」

「わしらは君が『闇の帝王の召使い』としての自覚なく、『闇の帝王の召使い』として振る舞うかもしれぬ、と考えておる」

自覚なく。そう少女は言葉を漏らした。

「ズイラ、お主がヴォルデモートが復活すると確信したのはいつじや?」

「小さな頃、お母様がそう仰っているのを聞いてそう考えました。その程度で確信した、それがおかしいと言われればそれまでですが」

「いや、そうではない。わしが疑問に思ったことは、一歳や二歳の頃の記憶をそんなにも

鮮明に覚えておけるのか？　ということじゃ」

無論、そういう例がないわけではない。ハリーも両親のことを覚えておったからの。

ダンブルドアは続けた。

「ズイラ、『髪飾り』と『カップ』の件じゃが、何故わしにそれらを託したんじや？」

「それならこの前お話ししましたわよね？　わたくしには分霊箱を壊すべがありません。校長先生にお任せするのが適切かと思いました」

「うむ、確かにわしは分霊箱を破壊できる。その上で疑問なのは、『髪飾り』はともかく『カップ』は何故あのタイミングだったんじや？　わざわざ学校を抜け出してまであの時、カップを持つてくる必要があったのか？　ということじゃ」

勿論、わしから呼び出しを受けたからついでに、ということもありうるじやろうが。

ダンブルドアはさらに続けた。

「こんなもの、くだらぬ言いがかりに過ぎぬ。過ぎぬが……わしには無視できなかった。ズイラ、わしが危惧しておるのは、お主が『服従の呪文』、あるいはその亜種魔法を受けた可能性が排除できない、ということじゃ」

『服従の呪文』。

『許されざる呪文』はどれも最低最悪の魔法だが、先の魔法戦争の経験者であれば、一

番卑劣な魔法は『服従の呪文』だと口を揃えて言う。

死を与えるでもなく、痛みを与えるでもなく、人から尊厳を奪う魔法。

さらに厄介なことに、『許されざる呪文』についてもつとも精通しているのはヴォルデモートであり死喰い人であり。ダンブルドアと不死鳥の騎士団は常に対応する側であつた、というのが問題だつた。『服従の呪文』を『改良』されている可能性が否定できなかった。

真実薬を飲ませても意味がない。心を開いても意味がない。『服従』が潜伏し、ある日ウイルスのように発症する可能性があつた。

ダンブルドアとスラグホーンの推察の結果としては、ズイラ・レストレンジがこの呪文の影響下にある確率は、高くても1%あるかないか、と言うものだつた。

それは、イギリス魔法界、ひいては世界の命運を賭けるには高すぎる数値だつた。

未来に続く害悪の極みたる呪文は、小数点以下の確率であつても少女が裏切る可能性を否定せず、小数点以下の確率であつても老人にはその魔法に対策しないわけにはいかなかった。

たとえ少女の自由を侵害したとしても、『服従の呪文』と何の違いもないと老人の善性が叫んだとしても。

彼は秩序を守る騎士団長としてやらざるを得なかつた。

For the Greater Good.  
より大きな善のため。

「……なるほど。確かにそうです。わたくしが『服従の呪文』を受けていないことは、わたくしには証明できません。わたくし自身にそのような意図がなくとも、『服従』してしまふ可能性はあります。

——正しい判断だと思います。それで、わたくしは何を誓えばよろしいですか？

『闇の帝王』の味方に絶対にならない、などが単純でよろしいかと思いますが。それとも細かく行動を規定しますか？」

少女の提案に老人は首を振り否定した。

その顔は反吐を吐くように沈痛な面持ちだった。

「いや、たった一つ。一つだけでよい。

——ハリーを、ハリー・ポッターを裏切らないで欲しい。それだけじゃ」

そう言つてアルバスは頭を下げた。

何がそれだけだ。彼は無言で自分自身を罵倒していた。

カチリ、カチリ。

あたりを時計の針の音だけが走り。

長い沈黙ののち、観念したかのように少女は応じた。

「わかりました。結びます。

ただし、二つだけ、お願いがあります。

まずは、ハリーを裏切らないのは『闇の帝王』に関することだけにしてくれませんか？  
一生涯においてそれを誓うのは重すぎますわ」

「大丈夫、初めからそのつもりじゃ。このようなことをしでかしたわしのことなど信じられぬかもしれぬが、君の人生に制約を設けるつもりはない」

「信じますわ、ダンブルドア校長先生。

そしてもう一つですが——」

ズイラは校長の目をしっかりと見つめて話す。

彼と彼女の青い目は、朝焼けに照らされた海面のようにキラキラと輝いていた。

「わたくし、ホグワーツでの食事が大好きですの。とりわけ、クリスマスや学期末のパーティーは。」

だから、校長先生」

少女ははにかんだ。

『闇の帝王』——『ヴォルデモート卿』を打倒した暁には、ホグワーツで記念パーティーを開きましょう？ 先生とわたくしの二人が主催、ハリーが主賓ですわ」

「——あいわかった。すまぬ、ズイラ。恩に着る」

「イギリス中のみんなが訪れるような、素敵で盛大なパーティーにしましょうね？」



カチリ。

灼熱の赤い不死鳥と大鴉が、鎖となって絡み合うち。  
時計が0時を告げた。

## ムーニー、ワームテール、パッドフット、プリンス

結局、『彼女』が合流する前に、バックビークの処刑は実行されてしまった。ハリーたち自身も彼の死に目を見ることすら叶わなかった。

せめてハグリッドの側にいたいと話したが、彼自身が固辞した。ハリーたちを面倒に巻き込むわけにはいかないと、彼は一人でバックビークを看取りに行った。その心遣いもハリーたちには辛いものだった。

「あの人たち——どうしてこんな——こんなことって——」

ハーマイオニーが嗚咽を漏らしながら悪態をつき、そんな彼女をロンが慰める。ハリーは黙って透明マントを支え続けた。

良かったことはロンのペットのスキヤバースが見つかったことくらいだ。そのほかは全て最悪だった。

そうしてハグリッドの小屋からホグワーツ城へ向かう途中、「暴れ柳」の近くで、ハリーは猫の鳴き声を聞いた。

ふとそちらに目を向けると、オレンジの毛並みの猫が、じつとこちらを見ていた。クルツクシヤクスだった。

「ダメよ、クルックシャンクス、良い子だからあっちに行つてなさい」  
ハーマイオニーが祈るように囁く。

しかし、猫は透明マント越しにハリーたちが見えているのか、スキヤバーズのキィキィ声が聞こえるのか、彼らに徐々に近づいてきた。

「スキヤバーズ！ 行くな！」

捕食者のプレッシャーに耐えかねたのか、鼠はロンの指を器用にすり抜け走り出す。ロンは彼を追つて透明マントから駆け出る。彼があまりに遮二無二走るので、ハリーたちは全力でロンを追いかけるために、マントを脱がざるを得なかった。マントを放棄しなかったのは、それを決して捨てるな、と『彼女』に口酸つぱく言われたことによる刷り込みだった。

「捕まえたぞ！ ハーマイオニー、そいつをこっちに近づけるなよ！」

「!!」

獣の唸り声。

ロンに追いついたハリーたちが見たのは、人間大の黒犬が彼に襲いかかる姿。呆然とするハリーたちを尻目に、黒犬はロンの腕を噛み、人ひとりを引きずつて「暴れ柳」の根元の虚に消えていった。

このままではロンが喰われてしまう——そんな焦燥を解決したのは、これまたオレン

ジの猫だった。

「ロン、大丈夫？ 犬はどこに？」

クルックシャンクスの先導に従い「暴れ柳」の下の隠し通路を越えた先、ハーマイオニー曰く「叫びの屋敷」の薄暗い一室に、ロンが遺棄されていた。ひどい向きに脚が折れている。ハリーとハーマイオニーが駆け寄り声をかけると、ロンは呻いてハリーに警告した。

「違うんだ、ハリー、犬じゃない。毘だ。あいつが犬だったんだ。『動物もどき』だ……」  
直感。誰かが部屋に入ってくる気配を感じた。思考をすつ飛ばして、ハリーは咄嗟に杖を振る。

「プロテゴ 護れ！」

「エクスペリアームス 武器よ去れ！」

急拵えの防壁は赤い閃光からハリーだけは護ることに成功したが、展開が間に合わなかったハーマイオニーは杖を攫われる。

彼女の杖をキャッチした死体のようにやつれた男は、黄色い歯を剥き出しにして笑った。

「やるな、ハリー。よく学んでいるようだ。教師が優秀なのか？ 天性の資質か？ 将

来は闇祓いを目指すといい。プロングスの奴も喜ぶだろう」

——だが、今はまだ、経験が足りなかったな。

ドンつと背中にも衝撃を感じ、ハリーの手から杖が弾き飛ばされる。

振り返れば、最初からこの部屋に潜んでいたのか、浮浪者のように見窄らしい男が少年たちに杖を向けていた。

ハリーの杖はすでにその男の手にあった。

死体のような男が、擲擄うようにハリーに言葉を投げかける。

「ハリー、敵がぐだぐだ話しはじめた時は大抵時間稼ぎだ。何もさせずにぶちのめして黙らせてやれ。『油断大敵』ってやつだ」

「パッドフット、格好つけているところ悪いけど。いくらプロングスの息子でも、大の大人が三年生に奇襲を防がれるなんてどういうことだい？ 私がこの屋敷を知り尽くしていないければ、君、今手詰まりだったろう？ アスカバンはそこまで衰えるほどひどいところだったのか？」

「——ああ、最悪だった。我が自慢の肉球もカチカチに凍ってしまいうくらい最低だったぞ、ムーニー」

「ならば、イギリス魔法界の淑女にとつては幸運なことだろう。君の肉球に騙されるいたいけな娘はいなくなったわけだ」

くつくつと笑い合う死体と浮浪者。ハリリーの目に、それは極悪人と呼ぶには些か滑稽に映った。

そんなハリリーの目に気が付いたのか、浮浪者のような男は手近な椅子に座り、気さくに少年に話しかけた。

「やあ、はじめまして、ハリリーとそのご友人たち。会えて嬉しいよ。

私の名前はリーマス・ルーピン。そして彼はアズカバンの脱獄に成功したスーパースター、シリウス・ブラック殿だ。

——さあ、一杯やりながら話をしようか」

テーブルに置かれたバタービール。

ブラックたちはそれを飲んだが、ハリリーたちは一切口をつけなかった。当たり前だ。何が入っているのかわからないものを飲むわけがない。

ルーピンは「薬よりよっぽど美味い」と言っているが、ハリリーたちに与えられたものは薬かも知れない。

ロンが立ち上がりとうするが、脚が折れているためふらつく。それでもハリリーの肩を借りて立ち上がり啖呵を切った。

「話なんてするもんか！　もしハリリーを殺そうとするなら、まずは僕を殺す必要がある

ぞ！」

「いやいや、私たちに君たちを殺したりするつもりはないよ。それより、折れたままで無理に立つたら脚を悪くするよ、座つたらどうだい？」

——パッドフット！ この子を痛めつける必要があつたのか!？」

「ムーニー、無茶を言うな。あいつを逃さないためには少々乱暴にする必要があつた。ウィーズリーくん……モリーさんの息子で合つてるか？ すまない。名誉の負傷とでも思つてくれ」

温度差。

命をかける覚悟のロンに対し、ブラックたちの様子はどうにも軽い。

本当に自分たちを殺す気は無いのか、それとも油断させるためのブラフであるのか、ハリーにはわからなかつた。

そうして、10秒ほど考え、ハリーは決断した。

「まずは、ロンの脚を治せ。話はそれからだ」

「ハリー！ 駄目だ！」

どつちみち、ハリーたちは今丸腰だ。抵抗できてもたかが知れている。

ならば、ロンの身の方が大切だ。仮に彼らが殺意を持っていても、自分の身だけで済むだろう。

ハリーの言葉に、ルーピンはうんうんと頷いて微笑んだ。

「優しい子だ。これはプロングスじゃないな。あいつはもつと破天荒だ。リリーの優しさだ。君は二人のいいところを受け継いだらしい。」

——ヴァルネラ・サネントウール 傷よ、癒えよ」

聞き覚えのない魔法。ロンの怪我は治っているようだが、その効果がわからない。

ハリーはその場において最も信頼できる魔女に尋ねた。

「ハーマイオニー、この呪文は？」

「……私には使えないけれど、確かすつごく高位の治療魔法だったと思うわ。闇の魔術による怪我也も治せる、道具なしでできる最高級の治療法よ」

打てば響くように淀みない答え。

そんな様子にルーピンは感心したようにほうと息を漏らした。

「素晴らしい、お嬢さん。三年生にしてN. E. W. Tレベルの魔法を知っているなんて。皆して有望じゃないか。これからもハリーの力になってほしい」

褒められたことにハーマイオニーは思わず頬を緩める。

ハリーは彼女を小突いた。

「パッドフット。この子はどつちの子だ？」

「おそらくグレンジャー嬢だ。俺の従姪殿は今ホグワーツを離れている」



「だろ、うね。彼女はどこから見てもベラトリックスには見えない」

「ああ、安心したぜ。ベラトリックスの顔を見たら、ついうっかり魔法を撃つてしまっても知れないからな」

——待て、おかしい。

ハリーは『彼女』がホグワーツにいないことを知らなかった。なのに、彼らはそのことをハリーたちより早く知り得ていた。

いや、そもそも、ハリーたちは誰一人として名前を名乗っていない。ファーストネームならいざ知れず、ファミリーネームまで知られているのはおかしい。

そんなハリーの表情から勘づいたのか、ブラックは答え合わせを始めた。

「そうだな。俺たちが殺すべき相手のことを、君たちは知ってもいいだろう。特にウィーズリーくん、君はだ。」

——おいで、クルックシャンクス」  
にやーん。

オレンジの毛玉が跳ね、ブラックの手に収まった。彼はクルックシャンクスを撫でながら話を続ける。

「俺はあいつが生き延びていることを知りアズカバン、あのくそつたれな監獄を脱獄したが、あいつがどこにいるかを正確に知らなかった。何よりホグワーツは広すぎたし、

あいつも抜け道には詳しかった。あいつが俺たちより特別小さかったことを考えれば、あるいは一番詳しいのはあいつだったのかもな」

何かを懐かしむように表情を歪めるブラック。

彼の頬をクルックシャンクスがひと舐めた。

「俺には協力者が必要だった。そこで出会ったのがこの子、クルックシャンクスだ。この子は俺が本物の犬でないことをすぐに見破ったし、あいつが本物の鼠でないことを見破っていた。彼の協力があつて、俺はホグワーツ城のいくつかを見通すことができた」

そうして、彼から情報を流してもらう中で、俺は一つ面白い話を聞いたんだ。

そう話すブラックの腕の中で、クルックシャンクスが自慢げな表情を浮かべている。ハリーにはあまり可愛いとは思えなかった。

「彼の言うところの『ご主人様にベタベタまとわりつくアバズレ女』は毎夜のように寮を抜け出しているが、いつ頃からか羊皮紙のような何かを手を持って部屋を出ているとのことだった。

俺が一番必要としていたものの情報だった」

羊皮紙のようなもの——ハリーには心当たりがあつた。

ハーマイオニーは飼ひ猫をぎよつとしたような目で見ていた。

猫は何も言つてませんといった顔をしていた。

「ウィーズリーくんの元にいるあいつを殺しに行つた夜。残念ながらあいつはすでに姿をくらましていたが、クルックシャンクスから『地図』を受け取ることができた。ハリー、我が従姪殿には盗難に気をつけるよう言っておいてくれ。

……ともかく、俺はあいつを追いかける手段を確保したわけだが、そこで俺は思つたわけだ。

果たして俺一人で決着をつけてもいいものか、つてな」

そこから先は私が話そう。

ルーピンが声を上げた。

「パッドフット——シリウスが私の元を訪ねてきたわけだが、実のところ、出会つた当初、私は彼を殺そうと思つた。当然のことだ、私自身裏切り者は彼だと思つていたのでから。

だが、彼は信用のおける無実の証拠を持つてきた。その時私——いや、我々は皆ペテンにかけられていたことを悟つた」

証拠はこれだ。

そう言つてルーピンはポケットから古ぼけた羊皮紙を取り出し、呪文を唱える。

我ここに誓う、我よからぬことをたくらむ者なり！

羊皮紙は展開し、ホグワーツ城の精巧な地図となつた。

それは、友人が持っていたはずの魔法道具。『忍びの地図』だった。

「今これを見ればわかるように、この『地図』は Hogwartz 外でも利用できる。この『地図』に名前が書かれていた以上、あいつはのうのうと生きて Hogwartz に潜伏していたことは明らかだった」

「——どうしてこの『地図』を信用したんですか？ ブラックの持つ魔法道具を無批判に信頼した理由がわかりません」

ハーマイオニーが口を挟む。

ハリーを含む彼らは『地図』をある程度信用していたが、それは彼らの友人が実際に使っていて、効果を実証していたからだ。そんな彼らも『地図』が Hogwartz 外で使えることを知らなかった。

殺そうと思っていた相手が怪しげな魔法道具を取り出したところで、判断を即座に撤回する理由には普通はならないだろう。

ハーマイオニーのそんな疑問に、ルーピンはすらすらと答えた。

「ああ、それは簡単なことだ。我々はこの『地図』のことを知り尽くしていて、この地図が信頼できることを確信していたからだ。

「ここを見てくれ」

『ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングス

われら「魔法いたずら仕掛け人」のご用達商人がお届けする自慢の品」

「そう、私がムーニーであり、シリウスがパッドフット。ついでに言えば、ハリー、君のお父さんであるジェームズがプロングスであり、あいつがワームテールだった。

我々がかつては親友であり、盟友であり——今は旅立った友、騙された罪人、何も知らない鈍間、そして裏切り者からなる『マローダーズ』だったんだ」

「——話はもういいだろう、ムーニー」

「ああ、そうだな、パッドフット。それでは本題に入ろう。

——ウィーズリーくん。君の飼っている鼠を我々によこしてほしい。大丈夫、それがただの鼠であれば、傷ひとつなく返すことを約束しよう」

ルーピンの言葉に、反射的にロンは拒否した。

その先の「真実」を悟ったかのようにだった。

「嫌だ！ 信じないぞ！」

「気持ちわかる、信じたくないだろう。同情するよ。だが、事実だ、事実なんだ。

そいつは飼いはじめて今何年だ？ 12年？ なんとまあ、横着をしたものだ。普通の鼠はそんなに長生きしない。私がそいつだったら、飼い主は数年おきに変えただろうね」

「俺がそいつが生きていることを確信したそもそもその理由を話そう。ウィーズリーくん、そいつの前足は無事か？　なるほど、指が一本ない。

ところで、俺がアズカバンにぶち込まれた直接の罪は、ピーター・ペティグリューを含むマグルを殺した罪らしい。ピーターの残骸は指一本しか残らなかつたらしいが、奇妙な偶然だな？

俺がそいつだったら、わざわざ新聞に載る写真に映り込んだりはしないね」

男たちが客観的な事実を重ねる。

ロンも半ば意固地になって、彼らの要求を拒否し続ける。

最初に痺れを切らしたのは、ブラックだった。

「率直に尋ねよう。ウィーズリーくん。君は鼠と友達、どっちが大切だ？」

「パッドフット！」

「言うまでもないことだが、俺たちは君たち三人よりも強力な魔法使いで、その上君たちは今誰も杖を持っていない。その気になれば、荒っぽいことをしてでも鼠を奪い取ることはできる。そんなことはやりたくはないが。」

——しかし、やりたくないだけでできないことではない。

君達に傷一つ残すつもりはないが、少しばかり嫌な思いはするかも知れない。俺たちが交渉をしていることそのものが、君たちに対する譲歩だったことは認識してほしい。

脅迫するような形になってすまないが、あいにくこちらにも時間がないんだ。早めに渡してもらえると助かる。

——そら、ウィーズリーくん、グレンジャー嬢、杖だ。返すよ」

ブラックは彼が握っていた二本の杖を元々の持ち主の足元へと放り投げる。先ほど話した優位を自ら捨てるような行為に、ロンは動揺した。

「……やっぱり脅迫は性に合わないな。普通に交渉しようか。さて、これで俺は丸腰、先払いだ。鼠と引き換えにハリーの杖も返そう。ムーニー、いいか？」

「ああ、構わないとも、パッドフット。さあ、ウィーズリーくん。決断の時だ。鼠を渡してくれ」

「……………わかったよ」

ロンはのろのろとポケットから鼠を取り出す。鼠はかつてないほどに激しく暴れていたが、ルーピンが杖を振ると、鼠は空中に磔になった。

「ありがとう、ウィーズリーくん。君の判断が正解だったと証明しよう」

「……その前にハリーの杖を返せよ」

「もちろんだとも。我々は誠実であり、裏切りは行わない」

ルーピンはハリーに杖を渡す。ハリーは杖が少し拗ねているように感じた。

「さて、ウィーズリーくん。何の呪文を使われるかわからないままでは不安だろう。こ

れより私たちが使うのは、スペシァリス・レベリオという呪文だ。

——ミス・グレンジャー。この呪文の特性は？」

「はい、スペシァリス・レベリオは暴露呪文の一種で、対象の化けの皮を剥がすことに特化した呪文です。隠された呪い、変身術で姿を変えたものを見破り、変化したものを元に戻しますが、それ以外の対象を傷つける効果はありません」

「よろしい。もし私が教師だったら、グリフィンドールに得点を与えたことだろうね」  
それはまるで授業のようなやりとりだった。

「さて、ウィーズリーくん。少しは安心したかな？」

「それではパッドフット、準備はいいか？」

「問題ない。一緒にするか？」

「そうしよう。三つ数えたらだ。いち、に、さん——」

スペシァリス・レベリオ 化けの皮剥がれよ！

「ひ、久しぶりだね……ムーニー、パッドフット……」

「やあ、ピーター。しばらくぶりだね、元気だったかい？」

「ああ、会えて嬉しいよピーター。すぐにさよならすることになるだろうがね」

鼠が急成長し、小柄な男となった。

ブラックたちの言うとおり、スキヤバーズはピーター・ペティグリューだった。



足が治ったというのに、ロンがふらりと倒れそうになる。ハリーは彼の肩を支えた。ピーターはキーキーと声を上げて弁明する。

「違うんだよ、ムーニー。僕は何も裏切っちゃいない」

「ああ、そうかもしれないね。ピーター。しかしね、無実の人間はわざわざ鼠として12年も飼われようとは思わないんだよ」

「それは……怖かったんだ！ パッドフットが僕を殺しに来ることが怖くて……」

「なるほど。ところで君はついさっきまでどこにいたんだい？ ホグワーツだろう？」

ダンブルドアに話さなかった理由を持っているかな？ 彼なら君のことを例えヴォルデモートからでも護り抜いたと思うんだけど」

「——ムーニー。そろそろいい時間だ。ダンブルドアが帰ってくる前に手っ取り早くすませよう」

それもそうか。ルーピンが同意し。

ピーターがヒイと悲鳴を上げ。

かたり。

物音がした。

反応できたのはブラックだけだった。

「セクタムセンブラ 切り裂け！」

飛来する白い閃光。

ブラックが全力で体を捻ると、それは先ほどまで彼の首があつた位置を通過して、背後にあつた衣装棚を上下に切断した。

滑り落ちる棚の上半分。堆積した埃が宙を舞う。

「——学校の脅威に対し、アルバス・ダンブルドアが何の対策も打たなかつたと本気で考えていたならば、そいつは最早ホグワーツ史上最も愚かな生徒だつたと言わざるを得ません」

視界が良好になった時。

スネイプが這いつくばるブラックに杖を向けていた。

混乱は加速する。

「今夜、貴様がホグワーツに侵入することを校長は掴んでいた。彼の要請を受け、我々教員は最大限の警戒網を敷いていた——貴様らはホグワーツ中の隠し通路を知っていたから苦勞しましたぞ。

よりにもよつて、我輩が唯一知っていた隠し通路を選んでくれるとは、全く有難いことですな」

——ハグリッドが足止めしなければもつと早く来れたものを。

スネイプはぼそりと悪態をつく。よくよく見れば、スネイプのローブはところどころ濡れていた。

「——それにしても、ムーニー！　ワームテール！　パッドフット！　『マローダーズ』諸君がお揃いで同窓会とは！　いや、失敬。プロングス殿はご欠席のようで。旅行中ですか？」

「スニベルス、お前こそ『死喰い人』の仲間を迎えにきたのか？　ヴォルデモートの配下が友達思いだなんて初めて知ったぜ」

「軽口を叩くのもこれで最後だ。十分に楽しむといい、ブラック。吸魂鬼がお前とキスするのを楽しみにしているぞ」

「スネイプ、違うんだ。シリウスは無実だった。ピーターが鼠に化けて隠れていた。こいつが裏切り者だったんだ」

「違うんだ！　リーマス！　ハリー！　シリウスとスネイプが二人で僕を殺しに来たんだ！」

「ペティグリュー、貴様もブラックの後を追わせてやる。だから腰巾着は黙っている。

さて、ルーピン、貴様は奴らの中でも多少マシだと思っていたが、どうやら我輩——私の見込み違いだったようだな。仮に貴様が何も知らなかったとして、こいつらが共謀して裏切ったとは何故考えない？　ついに頭にまでウエアウルフィー人狼症が回ったのか？」

「スニベルス、俺の親友を馬鹿にするな！」

「親友！ 親友とは！ 私はてつきり、貴様にとってルーピンは召使いか何かだと思っ  
ていたぞ。」

——グリフィンドールでは、事故を装って他人を謀殺するための道具を『親友』と呼ぶのか？

少なくとも友誼を重んじるスリザリンではそんなものは親友とは呼ばぬが、騎士道とはかくも奇怪なものですな」

「その件については私とシリウスの間で決着がついている。無関係な人間に言われる筋合いはない」

「だからなんだ？ こいつとポッターが私を殺そうとしたのは事実だ。少なくとも当事者たる私は謝罪の一つも受け取ってはいない」

「ガキの頃の話をごちぐち言いやがって。当然の見せしめだ。今お前は生きているからいいじゃねえか」

「そうだな。ポッターのやつが怖気付いた結果だ。ブラック、貴様は私を殺すことに一切躊躇しなかった。今だからこそ思うが、『マローダーズ』の中でも特に貴様は異常だった。」

——人狼を使って半純血を殺しても良い、というのはブラック家の教えか？ 『純血

よ永遠なれ』。人狼も半純血も『混じり物』に違いはないのか?」

「俺を、あいつらと一緒にするな——」

「ハリー! 僕は君に傷一つつけなかった! そんな僕が裏切り者なわけがないだろう!?!」

情報の氾濫。

シリウス・ブラックは両親を死に追いやった裏切り者だと思われていたが、それは誤りだった。しかし、スネイプを殺そうとしたのは事実であり、本人も認めている。

セブルス・スネイプはハリーとは気の合わないと言っただけの教師だった。しかし、彼は『死喰い人』の一員であったとブラックは語り、本人も否定しない。

ピーター・ペティグリューは死んだものと思われていたが、彼は実は生き延びていて、その上裏切り者だとブラックとスネイプの双方が言う。しかし、彼自身が主張するように、少なくともこの3年間ハリーはかすり傷ひとつ受けていない。

唯一、リーマス・ルーピンだけは誰からも強く疑われていない。彼は「人狼」なる存在らしいが、ハリーはそれについての知識を持っていなかった。この中では比較的信頼がおけるだろう。しかし、彼はブラックと意見を同じくしている。この男がブラックの仲間ではない保証——そこまで言わずともブラックに騙されていない保証はどこにもない。

異なる世界、異なる前提。

もし、仮に、この中にハリーにとって一人でも信頼できる大人がいたならば、彼はその人物に味方しただろう。

しかし、ここにいる人間のうち、二人は初対面であり、一人はハリーと険悪な仲であり、残りの一人は人間としては今日初めて出会った。

判断材料が全く不足していた。

ブラックはスネイプに杖を向けられ動けない。

スネイプはルーピンを警戒し動けない。

ルーピンはペティグリューに目を配る必要があり動けない。

そしてペティグリューも動かない。

状況はいっそ奇妙なまでに硬直していた。

彼らと比べれば些細な戦力ではあるが、事実上ハリーたちはキャスティングボートを握っていた。

「ムーニー！ ピーターから目を離すなよ！ 何かあればそいつは逃げ出すぞ！」

「他人の心配をする余裕があるのか、ブラック？ 私はお前に会える日をずっと楽しみにしていたぞ……。私を殺そうとし、リリーを裏切った貴様には、然るべき報いが必要だ……」

しかし、ハリーには解法が浮かばない。状況を動かす『智』を持たない。「はっ、リリーのケツを追いかけていたスニベリーくんは今度は俺にご執心なのか？」

——お前、すげえ気持ち悪いぞ」

「最期の言葉はそれでいいんだな？ 安心したまえ、すぐに貴様の腰巾着を送ってやるとも。」

セクタム——」

「——あの！」

なればこそ、『智』は彼女の領域だった。

「スラグホーン先生です！ 彼なら真実薬を——」

状況が動いた。

ペティグリユーが瞬時にその身体をネズミに変え逃走を図る。

ルーピンがペティグリユーに妨害呪文を打ち込み彼の動きを遅延させる。

スネイプはブラックに向けていた杖をペティグリユーに向け直し、切断呪文を放つて。

そして這いつくばっていたブラックは自らを黒犬に変え、必死の動きで切断呪文を躲したペティグリユーをその前足で捕らえた。

「——持っているわ……」

ハーマイオニーが言葉を言い切る頃には、状況は終結していた。

真実薬を用いずとも、今や真実は明らかだった。

スネイプとルーピンは黒犬に近づく。空気が少しだけあつたかくなつたようにハリーは感じた。

「ミス・グレインジャー、残念ながらお勉強が足りませんな。真実薬はあくまで『本人が思う真実』を明らかにする魔法薬だ。狡猾な魔法使いなら対策の一つや二つ用意しているが故に、ウイゼンガモットは薬の証拠能力を信賴していない」

「スネイプ、誰も彼もが君のように魔法薬学に精通しているわけじゃないんだ。彼女が知り得なかつたとしても、それを責めるべきじゃない」

「ルーピン、教師じゃない貴様は知らんだろうが、この小娘はマグル生まれにしてはなかなかに優しゆ——」

口を滑らせた。

「——とにかく、ペティグリューは『確実に』裏切り者であり、真実薬について三年生程度の知識しかない愚か者だつたというわけだ。そら、ブラック、何をしている？ 貴様が無実だと言うのなら、さつさとそいつを喰い殺したまえ」

言われずとも。そう言わんばかりに黒犬は歓喜の咆哮をあげる。完全に押さえつけられた鼠は全く動けなかつた。



止めたのはやはりハーマイオニーだった。

「——それは、ダメだと思えます。真実薬に証拠能力がなかったとしても、『自分は裏切り者だった』とペティグリュー自身が認識していれば、少なくともブラックさんの犯行動機の前提がなくなります。そうすれば、ブラックさんの再捜査は行われるはずですよ。今ペティグリューがいなくなれば、ブラックさんに弁明の機会がなくなるかと……」

「そうだ、パッドフット。君は自由になれるんだ！」

「——グリフィンドール、ホグワーツに戻ったら、無断で学校を抜け出した罪により一人五十点ずつ減点する」

ちつ、とばかりにスネイプは澁面を浮かべる。

ハーマイオニーが口を挟まなければ、今、確実にブラックはペティグリューを喰い殺していた。

そうして無実の証拠がなくなったブラックは一生罪を晴らすことができなくなっていた。

スネイプはごく自然にブラックを社会的に謀殺しようとしていたのだ。

ハリーは彼らの間に横たわるどす黒い因縁にゾツとした。

黒犬が人間の姿へと変わる。

ブラック——シリウスはハーマイオニーに謝辞を述べた。

「——ありがとう、お嬢さん。……俺は、アズカバンでピーターを殺すことだけをずっと考えていた。それだけしか考えていなかった。無実だったらアズカバンを釈放される、つてことすら考えられなかった。ピーターを殺した後、幸せに暮らせるだなんて一度も考えなかった。」

……そうか、ピーターが裏切り者だつて証明できれば、俺は自由か。自由か——」  
シリウスはその言葉が信じられないように、何度も自由、自由、自由、と繰り返す。  
突如爆笑。ニヤリ、と笑つてルーピンに語りかけた。

「よう、ムーニー！ 俺つて自由だったらしいぜ！ いやいや、吸魂鬼に頭をやられていたかな。無実だつてことと自由になれるつてことが全く結びついてなかった！」

お前も悪いやつだな、ムーニー。わかつていたなら先に言つてくれよ！」

「すまないね、パッドフット。ただね、私には今のままで、君とピーター、どっちが『確実に』裏切り者かを判断できなかったんだ。君を殺す可能性があるのに、君が自由になつた先を語るのには酷だろう？」

「酷いな。そこは信賴して欲しかったぜ。」

しかし、自由か。自由だな。さて、何をするか。とりあえず『漏れ鍋』かどこかでフアイヤ・ウイスキーを引つ掛けて、いい女を見つけて一発——」

「——ブラック、貴様が犬らしく盛るのは結構だが、我輩としては、ホグワーツ三年生の

前でそれを語るのには些か問題と思うがね」

「なんのことだ？ さあ？」

「ハリーとロンは顔を見合わせる。」

「ハーマイオニーは「私に聞かないでよ！」とばかりに顔をぷいと背けた。」

「おそらく現時点でスネイプ教授に最も感謝したグリフィードル生はハーマイオニー・グレンジャーだった。」

「えっ——僕はあなたと暮らすことができませんか！」

「ああ、君が望むならだが……。もちろん君が今の暮らしがいいというなら無理強いはいらない——」

「——いいえ、僕、僕！ あなたと一緒に暮らしたいです！ 家がありますか？ 夏休みからすぐ引越せますか？」

「全てが解決した帰り道。」

「彼らは一団となってホグワーツへと向かっていった。」

「ピーター・ペティグリュウは人型に戻され、ロンとルーピンに片腕ずつ手錠で繋がれ歩かされた。スネイプは「インペリオ」なる呪文を使うことを提案したが、ハーマイオニーはそれは許されないことだと主張し、シリウスたちもそれに同意していた。ロンで

さえ、「インペリオ」のことに詳しいようで、青い顔をしてぶんぶんと首を振っていた。「インペリオ」について、ハリーは後でこっさり誰かに聞こうと思った。

先頭をクルツクシャンクス、そのすぐ後ろをペティグリューたちが歩く。シリウスとスネイプはどちらも前を歩きたくないと主張し、最終的にハリーとハーマイオニーが間に挟まることで渋々シリウスが折れた。

洞窟を抜けると、すでに外は真つ暗だった。

そのまま校庭を無言で歩く。ホグワーツ城からは灯りが漏れていて、ハリーはとても暖かな気持ちになった。

城からだけでなく、空からも光が降り注いだ。月明かりだ。満月が彼らを見つめていた。

突如、先頭集団が立ち止まる。

背後から声が聞こえた。

「……待て、ブラック、ルーピンの奴は『薬』を飲んでいるのだろうか?」

恐る恐る、というスネイプの声を、ハリーは初めて聞いた。

シリウスはそれにあっけらかんと答えた。

「ああ、当たり前だろう? リーマスは馬鹿じゃない。毎月『夜の闇横丁』の人狼ネットワークから『薬』を仕入れ——」

「——この、愚か者どもが！ 我輩でさえ作るのに苦労する『脱狼薬』を、どこぞの馬の骨が毎月正確に作れるわけがなかるうが！ 粗悪品だ——」

スネイクの罵倒は、狼の遠吠えにかき消される。

先頭を歩いていたはずのルーピン。彼の身体が肥大化し、全身から毛が生え出し、手からは鉤爪が生える。

「人狼」。その意味をハリーは身をもって知った。

さらに、事態は動く。

男は機会をじつと伺っていた。

男は前にも追い詰められたが、危機において輝く才能を持っていた。

男はかつて、周囲の人間を犠牲にすることで逃げ延びた実績があった。

だから、男は成功体験に従った。

「クルーシオ！ 苦しめ！ セクタムセンプラ！ 切り裂け！」

男——ピーター・ペティグリューはロンになんらかの呪いをかけ、自分と人狼を結ぶ手錠を切断した。

人狼に腕を繋がれたまま、ロンが聞いたことのないような絶叫をあげる。ペティグリューは聞いたことのないような調子外れの笑い声をあげる。

「ばかな、ワンドレスで『磔の呪文』だなんて、ピーターにできるはずがない！」

動揺。哄笑。

「パッドフット、12年間君がアズカバンにいた間、僕はずーつとネズミだったんだ。わかるか？ 12年だぞ!? 辛かった、ああ、辛かったとも！ 12年もペットとして過ごすのは、ああ、辛かった！ 人間として生きられないのはこの上なく辛かった！

だから、少しでも人間らしく生きるために、杖が無くても魔法を使えるように練習したんだ！ ベラトリックスが自慢げに言ったように、『本気』になれば『磔の呪文』を使うことなんて簡単さ！

ああ、そうだよ！ もう、僕は君よりも、プロングスよりも、アニメーガスとしても、魔法使いとしても、ずつと、ずーつと優秀なんだ！」

そうだ、ベラトリックス、ベラトリックス。

ハリーを見つめる目は、暗く澱んでいた。

「プロングス、君も君だ。この三年間、僕はとても怖かった！ パッドフットから逃げ切ったのに、今度はベラトリックスが僕を追いかけてきた！ 僕はずーつと君に助けてもらいたかったのに、君はベラトリックスなんかと仲良くしやがって！ ふざけるなよ!？」

ベラトリックス？ 誰だ？

ハリーの疑問をよそに妄言は続く。

「だいたいなんでベラトリックスと君が仲良くしているんだ！ 君にはリリーがいるだろう！ 僕の親友がそんなに薄情な奴だとは思わなかったぞ！ リリーは優しかった。なのに、なぜ君はリリーを裏切るような真似をするんだ！」

「——アバダ ケダブラー！」

ハリリーの後方から、緑色の閃光がピーター目掛けて飛び——。  
ぐにやり。

ハリリーの目には、ペティグリューの上半身が消えたように見えた。  
いや、違う。

ペティグリューの腰より上から、ネズミの上半身がネズミの大きさのまままで生えていた。

普通のネズミから人間の手足が生えていた。

ハリリーはあまりにも「まともじゃない」光景に吐き気を覚えた。  
緑色の光線をかわしたピーターはスネイプを嗤う。

「スニベルス、スニベルス！ 残念だったな！ 君なんかよりも、僕の方が『闇の帝王』には相応しい！ じゃあな！ 僕はもう行くぞ！ 僕こそが『闇の帝王』の一番の配下！ ベラトリックスよりも！ スニベルスよりも！」

そう言って、ペティグリューは奇怪な笑い声を上げながら走り逃げる。

一件落着からあまりにも急転直下すぎる。

硬直するハリーとハーマイオニー。彼らを再び動かしたのは、二人の魔法使いだった。

「——スネイプ！ ピーターを追え！ ハリー！ 絶対にそこを動かすなよ！」

「——ブラック！ ルーピンからウィーズリーを引き離せ！ 『磔』を受けている今ウエアウルフィーを流し込まれたら死ぬぞ！ ポッター！ 貴様は動くな！」

スネイプは逃げるペティグリューの背に赤や緑、白の魔法を放つ。しかしどれも当たらない！ ペティグリューは身体の一部だけを器用にネズミに変え、人間に戻し、それを繰り返しながら『禁じられた森』へと消えていく。スネイプもそれを追っていなくなった。

シリウスは黒犬に変身し、人狼へと突撃する。手錠の鎖を咬え、力任せに噛み切り口ンを解放した。

その代償に、彼は鉤爪で大きく切り裂かれる。しかし、黒犬はそれにも構わず人狼に体当たりし、離れたところへと押し出した。

残されたのはロン一人。彼は血反吐を吐くようにのたうち回っていた。

動くな？ ハリーもハーマイオニーもそんな言葉は聞いてすらいなかった。彼らはシリウスがルーピンを吹き飛ばすや否や親友の元へ駆け寄った。



ロンの元にたどり着くと、一分か二分しか経っていないのにロンはひどく衰弱していた。

パラパラと降り始めた小粒の雨ですら濡れそうなほどに息絶え絶えだった。

ハーマイオニーが彼の頭を膝に乗せ治療を始める。

「ロン、ロン！ 気をしつかり！」

エネルベート！ リナベイト！ エピスキー！ アナプニオ！ フィニート・インカ

ンターテム！」

「ハーマイオニー！ ロンは何の呪文にやられたの!？」

『磔の呪い』よ！ 『許されざる呪文』の一つ！ ああ、あの人！ なんて——なんて恩

知らず！ 助けるべきじゃなかった！ シリウスの無罪を掴む方法なんて他にいくら

でもあった！」

「——ハーマイオニー！ しつかりしてくれ！ 君だけが頼みなんだ！ 治療法は!？」

ハリーの問いかけに、ハーマイオニーは半ば絶叫するように答えた。

「無いのよ！ 無いの！ 『磔の呪文』は傷じやなくて痛みだけを与える魔法なの！ 効

果が切れるまで耐えるしかないの！ 早く止めないと心が壊れ……その前にシヨック

死しちゃうわ！」

なんだ、それは。そんな馬鹿な話があるものか。

認められない。ハリーは過去を呼び起こす。

ベゾール石、賢者の石、マンドレイク、盾の呪文、チョコレート、骨抜き呪文と骨生え薬、不死鳥の涙——。

浮かんでは消えていく治療法。

効果のないものがあり、間に合わなかったものがあり、用意できないものがあり。

やがて——。

「ハリー、何を!？」

ハリーは杖をロンの胸に当て、深く息を吸った。

記憶の果て。

「さつ、ハリー。少しの間休憩しましょう? はい、今回のお菓子はマカロンです。ダン

ブルドア先生が昔ご友人からいただいた由緒ある銘柄だそうですね?」

あれは、そう。一月頃だったか。

『必要の部屋』で『彼女』と「守護霊の呪文」を練習していた時のこと。

話の種として、ハリーは「守護霊の呪文」について尋ねた時のことだ。

アクシオ、と少女が唱えると、「通常の呪いとその逆呪い概論」、「闇の魔術の裏をか  
く」、「自己防衛呪文学」、「呪われた人のための呪い」などの書籍が周囲の本棚からドサ  
ドサと飛来する。

少女はその中の一冊を手に取りページをめくり、語り出す。

一つ。魔法的な技量は関係なく、その個人の「幸福な思い出」を依代に発動する。

二つ。吸魂鬼を撃退する効果を持つ。

三つ。レシフオールドなる、人を窒息死させる魔法生物を撃退する効果を持つ——机上の空論ではあるが。

四つ。遠隔地へと伝令を行う。

五つ。基本的に守護霊の姿は決まっているものの、ごく稀に姿が変わる事例が報告されている。

六つ。心の調子を崩した人には守護霊を作り出せない。作り出しても奇妙な形になる。

七つ。どんなに優秀な存在であっても、闇の魔法使いに「守護霊の呪文」は使えない。

本に書かれていること、書かれていないこと。混ぜこぜに少女は楽しそうに話す。

そうして詳細を知った上で、ハリーの当初からの疑問は解決しなかった。

ハリーは思い切って疑問を口にする。

「ねえ、この呪文、やっぱり変じやない？ 魔法の効果が多いつていうか……」

浮遊、閃光、全身金縛り、盾、武装解除、風……。

これまでハリーが知り、学び、使ってきた魔法。

その全ては、「二魔法一効果」を原則としていた。

もちろん、例えばルーモスの呪文であつても、暗闇を照らすだけでなく目眩しに使うことだってできる。

しかし、それはあくまで出力を変化させただけ、「杖の先に光を灯す」という魔法効果を拡大しただけに過ぎない。

「闇の魔法生物を撃退する」と「離れた相手に言葉を伝える」では全く用途が違う。どちらかの解釈を捻じ曲げたとしても、ハリーにはこの二つがイコールで結びつくとは思えなかった。

そんなハリーの疑問にしばしの間少女は小首をかしげ、考えがまとまったのか話し始めた。

「——そもそも、『守護霊の呪文』は吸魂鬼対策の魔法ではない、とわたくしは考えています」

え、とハリーの口から思わず声が漏れた。

「ごめんなさい、言葉が足りませんでしたわね。私が言いたかったのは、『守護霊の呪文』

は吸魂鬼を撃退できる魔法ではあるものの、吸魂鬼を撃退するために作られた魔法ではないということですよ」

少し、魔法史の勉強をしましょうか。

そう言つて少女は再びアクシオ、と唱え、「魔法史」の本を呼び寄せた。彼女はパラパラとページをめくり、やがて止まる。

そこには、北海に浮かぶ孤島とそこに立つた要塞の写真が載っていた。

「吸魂鬼の発生については諸説ありますが、現在最も有力な説は、『魔術師エクリジスを作り上げた人造魔法生物』というものです。15世紀にアズカバン島を根城にしたエクリジスは、さまざまな闇の魔術を開発し、吸魂鬼もその研究結果の一つとされています。一方で、『守護霊の呪文』については、それがいつ、どこで作られた魔法か明らかになっていません。発掘された壁画や遺物に描かれていたことから、少なくとも歴史が編纂される以前より存在する古代の魔法だと言われています」

少女はティーカップを手に取り、口を潤す。

「ね？ 年代が合わないでしょう？」

少なくとも、吸魂鬼が生まれるはるか昔から、『守護霊の呪文』は使われてきた、ということは明らかなのです」

ここからは、わたくしの妄想話になりますが、お付き合いくださいませんか？

そうやって、少女はハリーの目を見つめた。

これまでも度々目にしてきた表情だ。この少女は、魔法、呪文について話す時、目を輝かせて語りだす。

気恥ずかしくなって、少年は急いで続きを促した。

「わたくしは、『守護霊の呪文』の本質は、むしろ『誰かに想いを伝える』方にあると思っています。」

吸魂鬼を撃退できるのは、彼らの許容量を超えた『幸福』は毒に等しいから。

守護霊の形が変わってしまうのは、守護霊が変わるほどの強い『想い』を抱いたから。

心を崩した魔法使いには守護霊を作り出すほどの強い『幸福』、『想い』を生み出す気力がないから。心を歪めて『想い』がおかしくなった魔法使いは、守護霊の形も不安定になるといいます。アニメーガスと同じですわね。

闇の魔法使いに守護霊が創り出せないのは、もはや彼らが誰かに『幸福』を伝えようとすら考えることができなくなったから。

レシフォールドを撃退できるのは、彼らが本質的に一人でいる『孤独な人間』を捕食する性質だから——なんてどうです？ 『歌う魔女』のお父様は有体の守護霊を出せないのに、マグルの奥方を助けたそうですよ？？」

——最後には流石に無理がないか？

そんなハリーの視線に、「わたくしが魔法生物に詳しくないことなんて知ってますわよね!? レシフォールドの『正解』を知りたいならスキヤマンダー教授にでも連絡をとってくださいな!」と少女は声を荒げる。

その顔はほんのり赤く染まっていた。

こほん。

空咳一つで気を取り直して。

ね? だんだん見えてきませんか?

そう少女はまともに入った。

「最初に『守護霊』を作り出した方は、きっと思ったのでしょうか。」

『自分の親しい誰かに、自分の幸せを知ってほしい』と。

——つまりは、『愛』ですわ、ハリー。そうだったら、素敵ではありません?」

「エクスペクト・パトローナム! 守護霊よ!」

ハリーは守護霊をロンの胸の奥、『心』に流し込んだ。

ハーマイオニーが驚愕の声を上げるが気にしない。

『彼女』もそんな使い方があるなんて言っていないが気にしない。

ハーリー自身、これがとんでもなく分の悪い賭けだと分かっているが気にしない！

ハーリーはロンに想いを流し込む。

装填するは一つの『幸福』。

ハーリー・ポッターは十一歳の誕生日を迎えるまで、孤独だった。叔父夫妻は彼をやつかみ、従兄弟は彼を対等とみなさず、周囲の誰もが助けてくれなかった。

ハグリッドに出会ったことは『幸福』だったが、彼は父性——父親としての側面が強かった。

『ここ空いてる？ 他はどこもいっぱいなんだ』

「君、ほんとにハーリー・ポッターなの？」

「まあ、いいや。これからよろしく、ハーリー」

なればこそ、最初の友達にして一番の親友たるロンに出会ったことは、紛れもなく、誰がなんと言おうと、彼の誇るべき『幸福』だ——。

思いを、想いを、幸福を流し込む。

ハーマイオニーが呪いを看破し、『彼女』が打破の構想を与え。

ハーリーはいつだって友人に支えられてきた。



「リリー、ハリーを連れて逃げる！」

「ハリーだけは！ ハリーだけは！」

この一年嫌になる程聞いた幻聴が聴こえた。

『生き残った男の子』なんて、糞食らえた。

自分一人だけ『生き残って』もなんの価値もない！

「ロン。頼むよ、ロン。起きてくれ！ 君と友達になれたことは、僕にとって一番の『幸福』だ——！」

そうして、精魂尽き果てて。

ハリーは夢見心地になる。

「ハリー、ハリー！ 凄いわ！ ロンが落ち着いたの！」

ハーマイオニーの声が聞こえた。

よかった。安心した。

ハリーはゆっくりと目を閉じる。

意識を失う直前、遠くで吸魂鬼を白銀の牡鹿が吹き飛ばすのがちらりと見えた。

「やあ、おはよう、ハリー」

目が覚めると、恰幅の良い白髪の男がハリーを覗き込んでいた。

見覚えがある——そうだった。魔法大臣だった。

コーネリウス・ファッジであることをハリーは認めた。

ファッジはハリーに労るように話しかける。

「ハリー、大丈夫か？ 痛むところはあるか？」

「いえ、僕は大丈夫です——そうだ！ ロン！ ロンは無事ですか？」

よくよく見れば、ファッジの後ろにはスネイプが立っていた。ハリーは状況に詳しいであろうスネイプに問いかけたつもりだったが、ファッジが答えた。

「大丈夫だ。問題ない。大丈夫だ。ウィーズリーくんは先ほど少し起きて、一杯水を飲んだ。話をしたマダムが言うには、受け答えはしつかりしていて緊急の影響は無いとのことだ。」

あとは時間が解決するのを待つしか無い」

ファッジは少し目を伏せ、やがて明るく振る舞った。

「しかし、ハリー、君たちもひどい目にあつたね。まさかあのシリウス・ブラックに襲われただなんて！ それも未成年に『磔』をかけるだなんて人間とは思えない！」

「——違います！ ペティグリューが！ 奴が生きていたんです！ 奴がロンに『磔の呪い』をかけたんです！」

ハリーは叫んだ。

あまりにも声を荒げてしまったために、彼は大きくむせる。

そんなハリーをファッジは痛ましげに見つめ、少年の背をさすった。

「ハリー、いいんだ、もういい、もう終わったことだ。ブラックには間もなく刑が執行される。

——スネイプ教授、ありがとう。君たちの協力のおかげで、ブラックを捕まえることができた」

「——いえ、我輩はできることをしたまでです。むしろ、ウィーズリーが『磔の呪文』を掛けられ、ポッターたちが『錯乱』される前に助けられなかったことは、大きな失態でした」

「そう完璧を求めることはない。君はよくやったよ。ハリー、十分に休むといい。きつとウィーズリーくんも良くなる。だから、心配するな」

「さて」

魔法大臣が去った後。

今にも飛びかからんばかりのハリーをよそにスネイプは保健室の椅子に座った。

「ポッター、グレンジャー。初めに言っておくが、今晩起こったことは全て事実だ。諸君

らは『錯乱』などしていない。

その後ペティグリュウは『闇の帝王』の元へ返り、ルーピンは『禁じられた森』の中へと消え、人狼と吸魂鬼と戦ったブラックは精魂尽き果てたところをフリットウィック教授に捕縛された。

考えうる限り最悪の結末だ」

ハーマイオニーがスネイプに抗議する。

「待つてください！ 貴方が、ペティグリュウさえ、ペティグリュウさえ捕まえていれば！ なんとかなったはずではありませんか!？」

「——そうだな。それは我が輩の落ち度である。認めよう。セブルス・スネイプはピーター・ペティグリュウに敗北した。耐え難い屈辱だ。

その上で、敗者の我が輩に言わせていただければ、我が輩は幾度となくペティグリュウの奴を無力化しろ、と提案したと思うがね。我が輩の意見を幾度となく切り捨てたのは、グレンジャー、君の小賢しい浅知恵ではありませんでしたかな？」

いつものように皮肉を言っているが、スネイプはかなり堪えているようにハリーには見えた。

「終わったのだ。終わったのだよ、グレンジャー。我々はペティグリュウを取り逃し、ブラックは吸魂鬼のキスを受ける。

過去を戻るなんてことができない限り、ブラックの奴は吸魂鬼に殺される。これは決まったことだ。もつとも、我が輩にとつては、ブラックの奴を始末できただけでも不幸中の幸いだがね。

このあと、我が輩は八階のフリットウィック先生の部屋へと向かう。奴の遺言は聞かせてやるとも。

それでは、グレンジャー。君がクローカーの論文を読んでいることを願うのみだ」

そう言つてスネイプが立ち去つた後、うんうんと唸つていたハーマイオニーが突然立ち上がった。

「——ハリー！　　そうよ！　　過去に戻るのよ！　　私たちにはまだ、時間が残されているわ！」

「——なんと。わしがおらぬ間にそんなことがあつたとは」

「失礼ながら、校長。あなたは全てを見通していたのでは？」

「そんなことはないよ、セブルス。わしは他のものより少しだけ長生きし、他のものよりそれなりに賢いだけの、ただの老人に過ぎぬ」

どうだか。

セブルス・スネイプは心の中で悪態をついた。

優れた開心術・閉心術師であるセブルスであっても、ダンブルドアの心は読めず、心を読まれているかもわからない。

底知れぬ老人であった。

老人はレモン・キャンデーを男に勧める。男は固辞した。

老人はそれを口に入れ、旨そうに頬を緩めた。

「——ところで、セブルス。よかつたのかの？」

「何がですか？」

「ハリーたちを誘導してシリウスを逃したことじゃ。わしとしては非常に助かるが、君にとつては、ほら、のつびきならぬ関係じやろう？」

ああ、そのことか。

セブルスは鼻を鳴らして答えた。

「問題ありません。グレンジャーはよくやってくれました」

あの小娘はうまくやり遂げてくれた。校長の話の聞くにペティグリューはあの場から絶対に逃げられたという。ならば、この結果は最善だろう。

口にはしないが、セブルスは大半のスリザリン生のようにマグル生まれである彼女を

嫌ってはいなかった。授業を自らのシヨーステージと勘違いしている傲慢さには腹が立つが、「魔法薬学が得意なマグル生まれの魔女」を嫌いにはなりきれなかった。

口にはしないが。

「うむ、しかし、シリウスはお主を殺そうとしたじゃろう？　これがリーマスならわかる。人狼であることに罪はない。ジエームズでも理解しよう。結果だけ言えば、彼はお主の命を——」

「——校長。戯言を申されるならお休みになられては？」

「——そうじゃな。話を戻そう。わしにはお主がシリウスを助けようとした理由がわからぬ。むしろ嬉々としてシリウスを殺そうとすると思っておった」

セブルスは皮肉げに口を歪めた。

「校長。やはりあなたのお見込みは正しい。私はブラックを殺してやりたいと思つていきますし、機会があれば殺そうと思ひます」

「ならば何故——」

「——ブラックはリリーの仇ではなかった。ペティグリユーこそが裏切り者だった。それでは不十分ですか？」

そう、セブルスにとっては当然の帰結だった。

真理だった。

「我々が誰一人として知らなかった、ペティグリュウが裏切っていたことを知っていたのは奴ですし、ペティグリュウを見つけ出したのも奴です。

奴は猟犬としては使えます。ここで首を絞めるよりも、鼠狩りにでも使ったほうが賢いかと」

それに、奴の無罪が証明されなかった今、奴にはペティグリュウを捕まえるより先はない。駄犬でも鼻先に餌をぶら下げれば走ります。死んでも死喰い人疑いの脱獄犯が消えるだけ、使い潰しましょう。

セブルスは提案した。

「——セブルス。わしは可能であれば誰も死なぬように取り計らうが、それでもよいのか？」

「存じております」

そんなことは知っている。ダンブルドアは非情であり、甘くもある男だ。そんなことは手駒であるセブルス自身が分かっていた。

セブルスは酷く苦々しげに認めた。

「——ええ、ダンブルドア。リリーの仇を討ち、奴がそれに貢献したのであれば、私はブラックがのうのと生き延びても良い、と考えています」

リリーを裏切り死に追いやったことに比べれば、自分を殺そうとしたことなど比べる



までもなく軽い。

そんな彼の言葉に、ダンブルドアが驚愕するように表情を歪めた。

何を不思議がる必要がある？ セブルスにはわからなかった。

「お主は……お主は、自分を殺そうとした男が幸せになつても良いというのか」

「語弊がありますな。ブラックはすぐにでも死んでほしいし、なるべく苦しみ抜いてほしいですが、ペティグリューを捕らえりリーの仇を討つた後なら、認めてやる、というだけです」

ダンブルドアは申いた。

「セブルス、お主はそこまで——」

校長室から戻る途中、ふと窓を覗くと。

セブルスは学校の端で吸魂鬼が一匹蠢いているのを見つけた。

アスカバンは吸魂鬼の管理もできぬらしい。そんなんだからブラックの奴を逃すのだ。

「エクスペクト・パトローナム」

セブルスは守護霊を放ち、吸魂鬼を狩らせた。

牝鹿は青空を駆け、消えていった。

ハリー・ポッターと??の??編

22/? くイディッチ・ワールドカップ・バザール  
で

——皆さん、ご無沙汰しております。

悶絶分霊箱専属調教師のズイラと申します。今回のハリー・ポッター第三巻はいかがでしたでしょうか？ ハリー・ポッター中期作品は、比較的オーソドックスなガバがたくさん盛り込まれていたかと思えます。これからお見せする書き下ろし小説も、クツソガバガバなチャート遵守をお見せしたいと思います（犯行予告）。

今回調教する少年はセドリックつ。ハンサムなマスクと、均整のとれた体。まだ16歳（当時）のこの少年は、わたくしの調教に耐える事が出来るでしょうか？

それでは、ご覧下さい。

エタるとかやめたら？　こんなRTA……ほんまあほらし……なRTA、はい、よいスタート（棒読み）。

さて、前回分霊箱・ゴーンの指輪を回収し、ついでにダンブルドアと「破れぬ誓い」を結んだところでした。続きから始めます。前回までのあらすじを忘れた方は114514回読み直して、どうぞ。

……ちよつと待つて!? 「破れぬ誓い」結んだとかガバガバやん！ とお思いの方、ご安心ください。これについては予測できる事故の一つでした。

再三申し上げていますが、アルバス・ダンブルドアにはマクスステータスとして、爺値、正式名称「よGreat大erき Good善値の」が設定されています。この数値が高くなればなるほど彼は「より大きな善のために」行動することとなります（再掲）。

残念ながら、これまでのレズちゃんの行動は怪しまれるに足る行動だったと言わざるをえません。三年生が分霊箱二つも見つけ出して配達できるわけないだろ！ いい加減にしろ！

かつてトム・リドルという巨悪の誕生を見過ごした経験から、GG値が高くなっているダンブルドアは、怪しい生徒に対し首輪をかけようとしてきます。ただし、その場合でも直接排除したりはせず、十分に取り返しのつくように取り計らつてくれます。「破れぬ誓い」は氏に直結する危険な誓約ですが、逆に言えば「誓い」さえ破らなければほとんどノーリスク。忌避感を除けば全く問題になりません。そんなんじや甘いよ（辛

辣)。

今回結んだ「誓い」は二つ。

「ズイラ・レストレンジはヴォルデモート卿討伐に関することでハリー・ポッターを裏切らない」

「ヴォルデモート卿討伐後、ホグワーツ 大広間にて、アルバス・ダンブルドアとズイラ・レストレンジの連名でパーティーを開く。その際、ハリー・ポッターを主賓とする」

この二つが「誓い」となります。

一つ目については、本RTAがお辞儀様の再札を目標とする以上何の問題ですか？

何の問題もないね♂(ラミレスビーチの誓い)

最終的にヴォルデモートくんをぶっ頃す行為であれば、多少の問題行動は引つ掛かりません。破れぬ誓いについては攻略wikiでも検証が十全に進んでいないため未検証の分野が多いですが、先日発表されたプロデューサーノートからも類推されるように、どうにもシステム側が判定を行なっている節があります。とすれば、システムくんをゴマを擦り続ければダンブルドアを欺くことは可能でしょう。5年生イベントで若干の利敵行為を働きますが(ネタバレ)、ここで誓約氏することはありません。検証済みです。

二つ目の「誓い」ですが、むしろRTAにとってプラスとまでいえます。

この誓約が存在する限り、生徒想いであるダンブルドアは積極的な自氏を選ぶことはありません。仮に選ぶとしても勝ちが確定してからとなります。

つまりこれは、最終決戦である「神祕部の戦い」において最強無敵をパーティに加入可能なことを意味しています。天下無双爺がいればヴォルデモート相手でも無双可能……にはちよつと、ちよつとこれじゃ全然足りないんじゃないですか？（不安）

……まあ、お辞儀様が神の公式設定の5本の指が入るほど強いとはいえ、予言補正込みならなんとかなるでしょう！　ヘーキヘーキ、ヘーキだから（自己暗示）。

「破れぬ誓い」イベントについては、今は亡き蛇寮チャートにおいては十分に想定できる事故であつたため、対策も万全、チャートにちゃんとして書いてあつたわけですね（激ウマガヤグ）。

なので気にせず進めていきましよう。

さて、そうこう解説している間に、プレイ画面では「ゴーンの屋敷」から帰還したレズちゃんたちが学期末イベントを終え、ホグワーツ特急に乗り込んで帰宅するところまで進んでいました。

……そういえば、ハリーたちがペティグリュークンが無事逃したか聞いていませんでしたね。

ちよつと尋ねてみましょう。落ち込んでるけどどーしたの？

「あのね、ズイラ。実は——」

はえー、すつごい。

シリウス・ブラックくんは無実だったんですね（すつとぼけ）。

それでそれで？

「ああ、まったく。死ぬかと思ったよ。ハリーがいなければ間違いなく死んでたさ」

ふむふむ。

吸魂鬼に精神値を削られかけたロンをハリーが「守護霊の呪文」で救助したと。

——ええ……（困惑）。守護霊くんにそんな使い方もあったんですか。そんな仕様知

らなかつたです。

慣れたプレイヤーほど守護霊くみを伝令フクロウ代わりに使いがちですし、多少はね

？

……なお、編集中に確認したところ攻略wikiにはちやーんと書かれてました。

チャートにもちやーんと書き写しておきましょう。

ま、ま、エアロ。次！

「犯人はピーター・ペティグリューだったんだ。やつはずつと僕たちの近くにいたんだ

——」

怖い、やだ、やめてください、アイアンマン！（クロスオーバー）

あんな奴が近くにいたなんて怖すぎますわ！（すつとぼけ）

レズちゃんも母親譲りの美人さんですし、襲われたらどうするつもりですの！（すつとぼけ）

まあこのゲームはR15なのでそういうイベントは起こりませんが。やったぜ。

……ところで。話を聞いているとルーピンくんも緊急参戦した上スネイプくんと部分的に和解して3人体制で護送してみたいなんです、なんで逃げられてるんですかね？

「……あいつはとんでもなく強かったんだ。杖なしで、その……『許されざる呪文』を使ってた」

はえー、すつごい強い。

……というより強すぎる、強すぎない？

ピーターくんが見た目と比較して思ったよりも強いというのは事実ですが、ワンドレスクルーシオを使えるほどに強くはなかったはずですよ。

なんらかの強化イベントが差し込まれている可能性があります。場合によっては危険なので掘り下げていきましよう。

——じゃあ、脅威って言うのはいくつくらいあるの？

「あの人、他にもむちやくちやに変身させていたのよ。呪文に合わせて頭だけネズミにしたり、腰から下だけネズミにしたり。

あんなこと、いくらアニメーガスとはいえ絶対、少なくともマクゴナガル先生なら絶対しないわ!

……あの人と目があつたけど焦点の合わない真っ白な目で、怖かったわ。多分正気を失つてたと思う」

なあんかもう…… (肉体が) バ、バラマキさ、されそうで怖いっすねなんかね。

——ん? ん??

魔法力が異常に増大する、身体が奇妙に変形を繰り返す、目が白い、枕がデカイ。

なーんか聞き覚えがある症例ですね……。

ただあれは「魔法の使えない抑うつされた環境下で、激しい感情や異常なストレスに晒された」魔法使いが陥る疾患だったはずです。幼児期以外では確認されてませんし、ピーターくんがそんな環境にいたわけでもないはずです。ここまでピーターくんに通常プレイと違った接し方をしてませんし。

……まあ、ダンブルドアとお辞儀様の頂上決戦を前には誤差だよ誤差! 大鍋ケーキでも食べましょう!

コンコン。



コンコンコン。

コンコンコンコン。

——うるせえ!!

汽車に揺られてレズちゃんが眠っていると、窓ガラスを外から叩く音が聞こえてきました。ハリーが窓を開けると、外から豆みたいなフクロウが手紙を持ってきました。あ、あこんなイベントもありましたね。

シリウスくんがハリーにホグズミード入村許可証を出すイベントです。あと炎の雷を譲渡したことも正式に明らかになりましたね。

まあどうでもいいわ♂　もうひと眠りしましょう……。

「追伸だ。ズイラ、君にだよ」

はい読みます。

なになに……。

追伸、親愛なる従姪殿。

君が母親に心まで似てなくてよかった。

これからもハリーと仲良くしてやってほしい。

君の従叔父より

はい。どうやら敵対しなくてすみそうですね。

……ところで、わたくしの『忍びの地図』はどこにいきました？

なに？ シリウスが持ってたけどその後はわからない？

……あつたまきました。二度とこの世界にいられないようにしてやる！（犯行予告）こんなクソ以下の紙切れ送ってくるなら地図寄越せやオラア！

だから返してください、オナシヤス！ センセンシャル！ なんでもしますから！

おうちびフクロウ寝てんじやねえあの犬つころの居場所を吐くんだよお！ エピス

キー！ 癒えよ！ リナバイト！ 蘇生せよ！

なお、この後起きることはなかったので加速します。

「お帰りくださいませ！ お嬢様！」

ようやっと、自宅に戻りました。体感的には2年間くらい3年生をやった気がしますね。留年したわけでもないのに不思議ですね（すつとぼけ）。

はてさて。いよいよ次は運命の四年生編『炎のゴブレット』編となります！

お辞儀様が復活する年、準備期間最後の年。

来年度やるべきことは無数にあります。絶対にやらなくてはいけないことがあります。

それはなにか？

ハリーの育成？ レズちゃんの育成？ 分霊箱の搜索と破壊？ 最終戦の戦力の増

強？

もちろんそれらもやるべきです。

ですが、それらよりもっと重要なことをやらなければなりません。

それは——『分霊箱：ハリー・ポッターの破壊方法の決定』です。

ちよつと待つて!? そんなのチャート時点で決めることやん！ 親父殿に連絡させてもらうね、とお思いのホモの兄ちゃん姉ちゃんもいらつしやるでしょうが、トランキーロ！ あっせんなよ！

これについては、チャート上で確定することが困難なため、フレキシブルチャートにせざるを得ませんでした。

一応汎用ルートとして『ニワトコの杖裏切りチャート』は用意していますが、このルートの欠点としてダブルドアの弱体化が挙げられます。

だから、より良い破壊方法を模索する必要がありますがあつたんですね。

肝心の破壊方法については、今後その都度説明していきます。

ということで、夏休み。

いつものように呪文練習を進めます。

昨年度のスネイプくんの授業により無言呪文の熟練度が伸びてきたのでそろそろ実戦に用いることができそうです。

これからはワンドレス・マジックの取得も目指していきましょう。都合よくいけば最終戦には間に合うはずです。あとは『闇の魔術』熟練度も溜まってきたので、服従の呪文からそろそろ悪霊の火にも切り替えていく頃合いですかね。

こちら辺のスキルツリー開拓が一番楽しいです（小並感）。

禁じられた呪文！ 防御呪文！ セクタムセンブラ！

禁じられた呪文！ 防御呪文！ セクタムセンブラ！ って感じで練習していきま

——少女練習中——

夏休みも中盤に差し掛かり。

呪文習熟も進み、デミガイズ透明マント等各種アイテム補充も済ませたころ。ウィーブリー家より『隠れ穴』への招待状が届きました。

なお、手紙にはクイディッチ・ワールドカップへの同行の誘いが記載されています。やっただぜ。

というわけで保護者兼見張り役のガウエインくん！ ウィーズリー家とワールドカップに行つていいですか！

「ああ、問題ないとも。ウィーズリーさんのところなら間違いなく許可は下りるだろうし、ワールドカップには是非とも行つて欲しいね」

ふむふむ。その心は？

「——一応君は今でも重要参考人だ。だつたら僕が監視と護衛のためにワールドカップに行くことも不思議じゃないだろう？ なんだつて仕事なんだから」

ちよつと待つて、局長に許可と出張申請出してくる。

そういつてガウエインくんは足早に去つていきました。やつぱりクイディッチ狂いじゃないか（呆れ）。

まあいいです。あの熱意なら許可をもぎ取つてくるはずですよ。身支度しておきましょう。といつても我が検知不可能拡大リュックに詰め込むだけです。

「ズイラー!? 取れたぞ!」

ファツ?!?!? これはチケット入手RTA走者ガウエイン・ロバーズくんですな間違いない。警備スタッフの枠にねじ込んだんですかね？

というわけで『隠れ穴』にイクゾー! デツデツデデデ。カーン（屋敷しもべ妖精）くんはお留守番です。

「久しぶり、ズイラ。元気だった？」

お久しぶりです。

どうやら最後の合流だったみたいですね。ハリーやハーマイオニーも既に到着していました。

ハリーくん最近どうなん？

「変わりないよ。ちよつと変な夢を見たけど元気さ」

変な夢。ほうほう。ワームテールらしき男とヴォルデモートらしきナニかがマグルの老人を傾す夢ですか。

ちなみに傷跡は痛みましたか……？

「……少しね。ただ、うん。多分気のせいだよ。まさかプリペット通りにヴォルデモートがいるわけもないし」

まあそうですわよねー。いや、ごめんなさいねハリーのことがわたくし心配で。

ちよつと席をはずしますわね。

ふう。エクスペクト・パトローナム！ 守護霊よ来たれ！

ようし守護霊のロバくん。今の一件を丸々ダブルドアに伝えてくるんだ！

情報共有は大事、はつきりわかんかね。

このハリーの夢見で「ヴォルデモート卿が蛇のナギニを分霊箱にした」ことが確定いたしました！

ある意味では本RTA『分霊箱全破壊、お辞儀様再札チャート』はここから本番を迎えたとも言えます！ 頑張ってくださいオラア！

加速してしばらく。『隠れ穴』について数日後、いよいよクイディッチ・ワールドカッブ前日となりました。

近くのキャンプ場で一泊するため本日出発となります。なお、流石に『隠れ穴』で魔法を使っているのがバレたらモリーおばさんにご飯抜きにされるのでやってません。育成が遅れるけど仕方ないね。

キャンプ場に着くまでにデイゴリー親子に会ったけどどうでもいいわ。いやどうでもよくない（反語）。

この二人、特に息子のセドリックくんは本RTA屈指の鎖マン枠です。忘れないようにしましょう。理由は後述します。ヒントはDLC『呪いの子』適用済み。

「やあ、アーサー。元気かい？」

「ああ、ガウエイン。君は仕事かな？」

「ああ、休日返上でそこのお嬢様の監視さ。全く大変だよ。同行させてもらっても？」

「もちろん、構わないとも。——で、本音は？」

「それはここでは言えないな。同僚に聞かれたら呪われかねない」

キャンペーン場にて、ガウエインさんと合流しました。アーサー達は各種関係者に挨拶周りをしていて、ハリー達もそれについて行こうとしています。

……ヨシ！ 今です！

リュックの中から取り出したるは三種の神器の一角『幸運の液体』！

こいつをここで1時間分解禁します！ ぐびりと飲めば広がる全能感万能感！ まさしく最高に「ハイ！」ってやつです！

さあ今なら誰にも見つかからないので行動を始めましょう。

クイディッチ・ワールドカップ・バザールへ乗り込めー！

クイディッチ・ワールドカップ・バザールとは、一言で言えば行商の出店のことです。ここでは、クイディッチ・ワールドカップに関係あるものから関係ないものまで多種多様な商品が売られています。

当然ながらなんの役にも立たないクイディッチ関連品はいりませんので、それ以外の有用な商品を漁っていくこととなります。

さて、早速お伝えしなければならぬ事実ですが、ここで手に入るものはほとんど値



段以下のガラクタ・売り逃げ品です。出店らしいですね。

攻略wikiからの引用ですが75%の値段以下のガラクタ、20%の値段相応の品、1%の有用品です。

残り4%は何かつて？

「さあそれでは！　ここで火蟹を競りたいと思うんですよ。まず、30ガリオンから！　コイツの出来る技は、火炎放射はもちろん、噛みつき、断ち切り、それから……大鍋にも、宝石鉱脈にも、加工次第では出来るかもしれませんよ？　まず、30ガリオンから！　さあお客さんどうぞ！」

おつ、早速やっていますね。

多分見ていればわかります。

「40!」「40!」

「50!」「50!（ろっ……）もう一声！」

「60!」「60!　もう一声いないか！」

「70!」「70もう少し欲しいなあコイツは、こう見えても、身体は、しつかりして……バツチリの筋肉質ですよ。さあもう一声どうぞだ！」

「75!」「もう一声！」

「90!」「90!　もう一声！　歯切れのいい所で！」

「100!」「はい! 100お客様さんに決まりだ!」

「ああうつ……」

「お客様さんどうもありがとうございますさあ! そしたら触っていつてみてくださいよ、し、まず品定めして、納得いくように! 何でも出来ますよコイツは!」

「魔法省だ!」

はい。

残り4%は法に触れる禁制品です。

これらは効果こそ最高品質ですが、もれなく御用となります。

ただでさえ脛に傷持つレズちゃんです。これ以上無駄に弱点を作るとはやめましょう。

というわけで商品選別を始めます。

通常プレイなら延々とリロードを繰り返していいものがあるまで粘るところですが、RTAではやってられません。そもそも通しプレイのレギュレーションで禁止されますし。

なので幸運の液体を解禁しました。

残り50分。幸運薬の赴くままに、金に糸目をつけずに買いましょう。

『インスタント煙幕(ペルー産)』!

最強格の目眩しアイテムです！ 3ダース購入！

『吠えメール便箋（日本産）』！

書いた文章を自動で奥ゆかしい罵倒に書き換えてくれるアイテムです！ 100枚綴りを買つとききます！

『鰓昆布（イスラエル産）』！

はい第二の試練攻略完了！ 当然購入！

『世界各地の特産バタービール』！

個人的に買い！ まだまだいきます！

『両面鏡（アメリカ産）』！

対応する鏡を持つている人間と通話可能なアイテム！ これ林檎のマーク入ってるんですが……。協賛企業かな？ 買い！

『モークトカゲの革製ポーチ（オーストリア産）』！

入れたアイテムを本人にしか取り出せなくなる巾着袋！ しかも検知不可能拡大呪文かかっているとか神かな？ リュックサックくんはダサいのでクビだクビだクビだ！

……………ふう。

無駄に買い過ぎてしまいました。多分これこんなに使わないと思います。

まま、エアロ。レスレトンジ家の資産なんて使い潰す気で行くんだよ！

残り少しです。まだまだ回りましょう。

お次はアクセサリー店ですね。どんなものがあるのかな？

……ふむふむ。幸運葉はここにある眼鏡を指し示しています。

店員さんこれどんな感じですか？

「ああ、これか？ これは、防水防煙防災呪がかかった伊達メガネだ。曇り止め機能ももちろんある」

ふーん。

曇り止め機能のある防水防煙防災呪……防災!? 防呪!? えつなにそれは(困惑)。「私がとある魔法生物を研究したときに作った副産物だ。大抵の魔法、邪視の類は防げる」

まじすか。えっ呪文試していいですか？ オーケー？

ならインセンディオ！ レダクト！ ステューピファイ！

……傷一つないとはなんだこれはたまげたなあ。

ちよつとかけさせていたでいて……ルーマス・ソレム 太陽の光よ！

——ええ……。サングラス効果もあるのか(困惑)。ぶつ壊れアイテムかな？

デザイン性もかわい系からスタイリッシュ系、メンズ用レディース用まで揃ってるとかもう眼鏡屋ですねクオレハ……。

「というわけで一般通過魔女から伊達メガネ? を購入いたしました。早速装備しましょう。防具は装備しないと意味がないぞ！」

「気を取り直して。最後に幸運薬が指し示したのは本屋さん? 入ります。」

「さてなにかあるかな。おつ魔法学校の教科書あんじゃーん！」

「このゲームをプレイされた方ならお分かりでしょうが、各魔法学校に所属すると、流派『○○』のスキルツリーが解禁され、学年を経るごとにランクが上がります。」

「これらの流派の熟練度を上げることと各種ステータスに補正がかかるようになります。詳しくは以下の通りです（wiki丸写し）。」

「四竜古城ホグワーツ」……全ての魔法に少しの補正

「美庭花城ボーバトン」……癒しの魔法、儀式魔法

「衝嵐闇城ダームストラング」……闇の魔術、隠蔽魔法

「燕海善城魔法処」……守護霊や盾をはじめとする「善なる」魔法、箒飛翔

「霊林金城カステロブルーシユ」……薬草学、魔法動物学

「夢月山城ワガドウ」……ワンドレス・マジック、変身術

「四緑新城イルヴァーモーニー」……全ての魔法に僅かな補正、マグル学に大きな補正  
ところで、この流派スキルについてですが、とある隠された仕様が存在します。

それは、「スキルツリー解禁そのものは各学校で用いられる教科書を用いて学習する

ことで解禁される」ということです。えっなにそれは。

この仕様が発見されるまでは、カステロブルーシュー主催の留学イベントを用いるしか複数流派解禁はできなかったのですが、この仕様以後全ての補正を受けることができようになるしました。

それでも他の国の指定教科書を入手するのは困難なのですが、はい、ここはクイディッチ・ワールドカップ・バザールです。世界中の品物が合法違法問わず集まります。というわけで全ての学校の教科書を買ひ占めます！ 多分カステロブルーシューとかわらないけど、金ならある！

さて早速読んでみましょう。

まずはこの魔法処の教科書から失礼して……。

――。

――。

――。

―― 難解だ！ というか読めません！

レズちゃん日本語技能0だからね、仕方ないね♫

さて困りました。これでは宝の持ち腐れです。このままではホグワーツの下位互換（問題発言）であるイルヴァーモーニーの本しか読めません！

……大丈夫だって安心しろよ。解決策はもうここにあるってそれ一番言われてるから。

というわけで今回はここまで！ ご笑読ありがとうございました！

……ラドクリフ兄貴 feat. 金曜ロードショーが「神秘部の戦いまで」完走したってこれマジ!? RTAの投稿ペース遅すぎんだろ……。反省したので次回以降は早めに出します（適当）。

## 23/? ~ 「三大魔法学校対抗試合」クエスト開始まで

金！ 金！ 金！ 魔法使いとして恥ずかしくないのか！ なRTA、もう始まつてる！

今回はバザールで爆買いしたところまで進めました。引き続き行くぞオラア♫

「どこに行つてたの、ズイラ!? 心配したのよ! ……ところで、その眼鏡どうしたの?」

イメチェンです(適当)。

というわけで、ハリーたちと無事合流しました。これから先は一緒に行動しましょう。

話を聞いてみると、どうやら彼らはちようどアーサーさんの挨拶回りが終わつて、これからバザールへ繰り出していく予定だったみたいです。

はい。ハリーたちとバザール巡りにイクゾー! (1時間ぶり二度目)

わあ、これがクイディッチ・ワールドカップ・バザールですかー。色んな道具がありますねー。こんなに揃つてるとは思わなかったあ(すつとぼけ)。



まあめぼしいものは買ってしまったので完全に付き合いとなります。仕方ないね♫  
ロンくんは踊るクローバーの帽子と緑のデカイロザリオ、ビクトール・クラム兄貴の人形を買っています。値段不相応のカスみたいな代物ですが、まあ、エアロ。これも祭りの醍醐味です。

一方で、ハリーくんは一個当たり10ガリオンで売られていた万眼鏡オムニオキュラーを他の3人の分も含めて四つ買っていました。ありがとナス！

ちなみにこの買い物の評価としては……（目利き）やりますねえ！ これは値段相応の普通の品物です。リアルタイムで映像を録画し、スローモーション再生、コマ送り、巻き戻し等の機能があり、ついでに視界内でクイディッチの技が決められるとその解説が画面端に表示される機能まであります。全ての機能がクイディッチ観戦に特化しているため監視カメラのような形で悪用できないのが弱点です。悲しいなあ……。

さて。そうこうして時間を潰していると、どこからか鐘の音が聞こえて、競技場への道がライトアップされました。

いよいよ試合開始時間です。中に入りましょう。

「特等席！ アーサー、あなた達は一番上の貴賓席よ。いい観戦を！」

受付の魔女の言葉に従い、最上段の席に向かうと……ボックス席に何か座っていますね。屋敷しもべ妖精でしょうか。ハリーが話しかけていくので見守ります。

「ドビー?」

「旦那さまはあたしのこと、ドビーってお呼びになりましたか? あたしはウィンキーでございます!」

お前のことが好きだったんだよ! (迫真)

ご紹介いたします。彼女こそ本RTAにおける便利枠、屋敷しもべ妖精のウィンキーさんです。屋敷しもべ妖精が有能なことはいまでもありませんが、彼女はそんな中でも特級! とある特殊技能を有しているため、後々ご厄介になります。敬意を払って馬車馬のように働かせて差し上げろ (慈悲)。

なお、クイディッチの試合にそのものには見所さんはありません (無慈悲)。これ一応RTAだからね、仕方ないね。

通常プレイならここで入手できるレプラコーンの偽造ガリオンを用いたロンダリング金策やウロンスキー・フェイントのような超高等技能箒スキル解放イベントなどありますが、レズちゃんはお金持ちだし、箒技能はトロール級のクソザコナメクジなので、多少はね?

なので試合展開は超スピード!? で飛ばします。クイディッチだけに飛ばします (激ウマガヤグ)。

「——起きなさい、二人とも！」

その日の夜のことです。ハーマイオニーちゃんと二人でテントで寝ていると、モリー姉貴が叩き起こしにきました。どうしたん騒がしい……。

「緊急事態よ、早く外に！」

身支度する間もなく、ネグリジエにコート一枚で外に放り出されました。外ではアーサーちゃんとガウエインくんが深刻そうな話してますね。近づいてみましょう。

「——で、これは本当に例の一団なのか？」

「わからない。おそらくは酔った馬鹿たちが暴れ出したんだろう。ただ『油断大敵』だ。もし残党が暴れ出したとしたら——おっと、二人とも、おはよう。悪いね、こんな夜分に」

おはようございます、で何があつたんですか？

「ちよつと厄介な事態になつてしまった。その……」

はい。どうぞ行つてくださいまし。

「——すまない。杖は持つてるね？ うん、危険だと思つたら躊躇せずに魔法を使うように」

というわけで始まりました。死喰い人襲撃イベントです。このイベントではストーリーの導線に沿つて逃げましょう。回収したい要素がいくつかあります。

あつ、そうだ（唐突）。

普段はトネリコくんとナナカマドくんの杖二刀流構成のレスちゃんですが、このイベント中はトネリコくんにはお休みいただく必要があります。ポーチの中に隠しておきましょう。

というわけで逃げるんだよオ！

——マルフォイクンおっすおっす！ お父様は元気ですか？ 薄汚いマグルの婆さんのスカートの中覗き込んで喜ぶだなんて純血紳士として恥ずかしくないの？

——そこら辺のテントが燃えてますが、『悪霊の火』ではなくただのインセンディオ由来の炎ですね。適当に打ち消しながら逃げます。アグアメンティ！ アグアメンティ！

——ボーバトン魔法アカデミーの生徒らしき一団とすれ違いました。すまねえフランス語はさっぱりなんだ。世界標準語たる英語で話してくれませんか？

——ハリーくんが杖を落としたそうです。はあーつかえ！ やめたら魔法使い、ほんまアホらし……。イベント進行ありがとナス！ 基本的にはここで杖を紛失するイベントが挿入されますが、もしなくしていない場合にはどきどきに紛れて紛失させましょう。

と、順番に逃走中の各種イベントをこなしていますが、ここで一つお伝えしなければ

ならないことがあります。

実はこの死喰い人襲撃イベントですが、発生こそ防げないものの、離脱だけなら今のレズちゃんなら比較的容易にできます。えっ、なにそれは……。

屋敷しもべ妖精のカーンくんを呼び出してもいいし、「姿をくramsキャビネット柵」を解禁してもいい、なんならガウエインくんにおねだりして安全な場所に逃してもらってもいいです。

それでも、逃げなかったことにはとある理由が存在します。

「モースモードル！」

おっと、そうこうしている間に、その辺の木陰に隠れているクラウチさん!? の息子さんがハリリーの杖を用いて闇の印をぶち上げましたね。

さて、唐突ですが、このゲームにおける呪文と熟練度の関係について、お話しします。

このゲームの呪文習得解禁タイミングは、ずばり「その呪文について認識した時」となります。しかし、熟練度が足りなければ効果が満足に発揮されず、また上位となる呪文は解禁されているものの、前提呪文がなければ実際に取得することはできません。

例として、プロテゴ(盾の呪文)系統の呪文で説明しましょう。プロテゴ系には、「プロテゴ 護れ」、「プロテゴ・トタラム 万全の護り」、「プロテゴ・ホリピリス 恐ろしきものから守れ」、「プロテゴ・ディアポリカ 悪魔の護り」の四つが該当します。勘違

いしやすいですが、「プロテゴ・マキシマ 最大の防御」はプロテゴに魔法最大化スキルを用いた魔法ですので、効果はこの二つの魔法・スキルの熟練度を用いて算出されます。

これらの魔法について、魔法解禁については容易にできます。例えば、本を読む、教えてもらう、誰かが使っているのを目撃する、と言った行動でも解禁自体はされず。

公式プレイをご存知の方ならばハリーがプリンス本を読んで呪文の効果を知らずに発動した、同じくハリーがクルーシオの呪文を使用経験なく発動できたことから体感的に知っていることでしょう。

一方で、プロテゴ以外の三種の呪文については、プロテゴの熟練度が一定以上でなければ使用できません。それ以外にも、例えばプロテゴ・ディアボリカなら「闇の魔術」等の前提スキルが必要とされるなど高位魔法ほど取得条件は困難となります。

余談ですが、プロテゴ・ディアボリカはレズちゃんを使う予定の魔法の最終ラインナップの一つとなります。熟練度稼ぎはどう、間に合いそう？（不安）

と説明しまして、本題です。

今、レズちゃんは「モースモードル 闇の印を」の呪文を認識し、スキルを解禁しました。この呪文には教科書等がないことから解禁方法が限られる、普通に闇の印を浮かべるだけなら呪文熟練度は0でも発動可能などさまざま特別な仕様が存在します。

つまり、今この時点でも、その気になれば闇の印を打ち上げることがレズちゃんには

可能となりました。

もちろん死喰い人や野獣先輩と違って、善人にして人間の鑑であるレズちゃんがそんなひどいことをするはずがありません。当たり前だよなあ？

さて、話を画面に戻しましょう。

「まずいわ、あれ『闇の印』……例のあの人の印よ——」

ハーマイオニーちゃんがそんなことを言った瞬間、ポン！ と音がして30弱でしうかねえ、そのくらいの魔法使いが「姿現し」してきました。全員がこちらに杖を向けています。なんだこいつら!?! (驚愕)

流石に多勢に無勢！ 基本的に魔法戦は一発被弾で終了のため数の暴力<sup>B</sup>！ 暴力<sup>B</sup>！ 暴力<sup>B</sup>！にはまず勝てません！ 大人しく伏せてやり過ぎしましょう！

「ステューピファイ 麻痺せよ！」

「やめろ！ やめてくれ！ 私の息子だ！」

「どけ、アーサー」

頭上を魔法光線がバンバン飛び交う中、ハーマイオニーちゃんを宥めていると、何やら声がしてきました。

アーサーくんとクラウチさん（父）が口喧嘩しているようですね。……つと、クラウチさんがこちらにやってきました。

「誰がやった？ お前たちの誰かが——レストレンジ、貴様か」

なんの問題ですか？（不安）

……しかしクラウチさん的にはなんの問題もないね♫とラミレスビーチの誓い締結とはいかない模様です。

おまえは息子が死喰い人で、わたくしはカツチャマが死喰い人だ！ そこになんの違ひもありやしねえだろうが！（BRKNJYNA）

抵抗も虚しく、鬼気迫る表情で詰め寄られたところ……別の場所からポンつ、とまたもや姿現しの音が聞こえました。

「——クラウチ元局長。その子は我々闇祓い局の保護下にあります。今は国際魔法協力部部長のあなたがどのような権限で尋問を行なっているのか教えていただけますか？」

ガウエインくんのようなです。駆け寄ってきた彼の背中に隠れましょう。

「ガウエインか、状況は？」

「……被害なし、マグルの保護と記憶処理は完了、犯人は取り押さえましたがそこらのチンピラでした。おそらく主犯には逃げられました」

「そうか。追跡は？」

「滞りなく——と、部長。そんなことより、その子を離してください」

「この者たちは現行犯だ。その上、死喰い人の関係者まで揃っている」



「しかし、どんなに顔が似ていても、この子はズイラであり、ベラトリックスではない。あなたがあなた以外の別人ではないように」

「——その通りだ。その通りだとも、ガウエイン・ロバーズ。だが、子は親に似て、親は子に似る。それもまた事実だ」

「部長、あなたは何を……」

すいまっせへえくん！ レストレンジですけどお、まあくだ時間かかりそうですかね  
く？

面倒になってきたので、端的な無罪証明をしましょう。

おう見ろよ見ろよ。杖を投げ渡します。

「……いいのかい？ ズイラ」

ええぞ！ ええぞ！

というわけで、レズちゃんが投げてよこしたナナカマドの杖に、クラウチさんが直前呪文をかけるようです。みんな見とけよ。

「ブライオア・インカンタート！ 直前呪文！」

盾、水、浮遊、守護霊……。

クラウチさん！ これを見て下さい！ この杖！ 悪いことをする杖じゃないで  
しょう！

「部長。疑いは晴れましたか？」

……ガウエインくんに庇っていただいているところ恐縮なのですが、ここでの呪文チエックは、服従や悪霊の火を持っていないと、捕まってしまう。

だからトネリコの杖を隠しておく必要があったんですね（一敗）。

以降は無事真犯人（大嘘）のウインキーちゃんが解雇されるのを見届けて終わりです。お疲れ様でした。

……ちなみにですが、本イベント中のクラウチ氏は軽度の錯乱状態に陥っています。普段なら、ここまで強権的かつ直情的に振る舞うことはありません。曲がりなりにも政争でトップに立ちかけた男だし当たり前だよなあ？ 彼が常軌を逸している理由は、服従状態に置いていたはずの息子さんが自力で魔法を解呪し、その直後に闇の印が打ち上がったからです。

この時の彼の情動については、プレイヤーキャラが魔法省職員として勤務するとサブクエストとして明らかになります。一見の価値はあるでしょう。

余談を重ねますが、クラウチジュニアくんが服従を解呪した理由の一つとして、「もともと解けかけた服従な上、好きだったクイディッチを見て精神が高揚したから」となっています。

服従の呪文は、呪文により与えられる擬似的な幸福を跳ね除けるだけの精神状態を維

持している時だと、弾かれてしまいます。だから、定期的に磔の呪文をかける必要があつたんですね（頭死喰い人）。

ここから先の夏休みですが、ホグワーツに戻るまで特にめばしいイベント等はありません。デミガイズマント等補充品も調達済みですので、残りは呪文練習にひたすら費やしましょう。

おっと、ホグワーツからフクロロウが送りつけられてきましたね。今年の教科書等準備物の目録が送られてきました。今年度特有の注意点として、各種教科書のほかに、ドロースロープが必要となります。一応後日のカタログでの注文も可能ですが、このタイムミングでの調達を絶対に忘れてはいけません（無敗）。

ホグワーツからの連絡フクロロウが来たら即ダイアゴン横丁に飛びましょう。目指すはマダム・マルキンの洋装店です！

よし、最速で来たためまだ客はまばらです。マルキン姉貴に頼みましょう。おうおばちゃん！ わたくしにぴったりの優秀な装備見繕ってくださいな！

「あらあらあら！ お久しぶりねお嬢さん。いいわよ、あなたにぴったりのドレスを作ってあげるわ！」

というわけでマルキン姉貴に3時間くらい遊ばれた結果、黒を基調としたシックなド

レスになるそうです。ありがとナス！

このゲームでは、魅力値は例によって例の如くマスクデータです。あのさあ……。そのほかにも、特定の人物には好まれても、特定の人物には好まれない服装などが存在します。一応攻略wikiと照らし合わせれば類推は可能ですが、確度は不明です。

なので内部の判定おばさんに任せました。マルキン姉貴はキャラに最適なオーダーメイドを用意してくれます。ここで作られたドレスは「最も魅力補正が高く、最も多くの人物に好まれる衣装」が選択されます。はえーすごい。後日のカタログ注文では、品質が保証されないレディメイドになってしまいます。

オーダーメイドの欠点としては、ホグワーツからの情報入手後最速で行かないと締め切ってしまうということくらいでしょうか。初見プレイでこのイベントに遭遇した方はちよつと自慢していいですよ。

ということではんとのほんとに夏休みにやること全部終わり！ 今年も何事もないいい夏休みでした！ ホグワーツまで超倍速でいざあ♫

——倍速停止！

はい、ホグワーツに辿り着きました。現在は組み分けと食事のタイミングです。ハーマイオニーちゃんがホグワーツの食事の真実を知って絶句しているところですよ。

「——まさかホグワーツでも屋敷しもべ妖精を酷使してたなんて！ 信じられないわ！ 奴隷労働よ、奴隷労働！」

おつ、そうだな。ところでこのへんにい、自宅で屋敷しもべ妖精使ってるやついるらしいつすよ？（自白）

屋敷しもべに関連する一連の会話イベントにより、厨房への侵入フラグが立ちました。近日向かいます（宣戦布告）。

「さてー」

しばらくレズちゃんが演説を聞き流しながらデザートを貪っていると……始まりましたね。ダンブルドアの伝達事項です。

「皆が思いつき掻っ込んだところで、二言、三言話すことがある」

毎年恒例のフィルチ管理人によるいたずら道具のカタログリストはキャンセルだ。

「次に、新しい先生をご紹介しよう。」

まずは、昨年度魔法薬学を務めてくださったスラグホーン先生じやが、やはり寄る年波には勝てぬとのことじやった。よって、昨年度闇の魔術<sup>D</sup>に対する防衛術<sup>A</sup>を担当したスネイプ先生には、再度魔法薬学を担当していただくこととなった。——おお、スリザリンの皆、喜んでくれて嬉しいよ」

「ああん？ なんで？」「ちよっと待って!? お辞儀様の呪いが効いてないやん！

ツール利用とかUNEIに連絡させてもらうね……」とお思いの皆さま、大丈夫です。これはゲーム的には正常な挙動となります。

お辞儀様がホグワーツDADA教師の就職試験に落ちた腹いせに職業に対する呪いかけたことはあまりにも有名ですが、その仕様については意外と知られていません。簡単に挙動を解説します。

「闇の魔術<sup>D</sup>に対する防衛術<sup>A</sup>の教職には、誰も一年以上就くことはできない」

もはや呪いとも言えぬ何かですが、これは文字通り、あらゆる事象を無視してDADA教授職に誰かが一年以上務めることを禁じています。例えば二人での隔年交代制、例えば数ヶ月単位などに単位を区切ることによる対策、例えば強大な魔法使いによるゴリ押し、etc. あらゆる対策は無意味と考えられています。……厳密に言えば、強大な魔法使いという攻略法は未だ未検証ではありますが。少なくともヴォルデモート級は無理ですが、創始者級ならいける可能性もあります。というわけでこの件に関する情報保有者兄貴はwikiの編集オナシヤス！ センセンシャル！

一方で、これはあくまでもDADAという授業並びにDADA教授という職に対する呪いです。ホグワーツ城への滞在及び他の職への着任にはなんら影響しません。それらは魔法省でもましてはお辞儀様の影響によるものでもなく、ホグワーツ校長にのみ与えられた純然たる職権です。

よって、このように役職スライドを使うことで一年間ですがD A D A教授の層の薄さを誤魔化すことができます。

ホグワーツ校長プレイ時には必須テクニックなのでこれを機に覚えて帰ってくださいね。

などと解説を入れている間に、いつのまにか大広間に浮浪者のおっさんレベルMAXみたいな人が乱入しました。誰だよ（すつとぼけ）。

「紹介しよう。闇の魔術に対する防衛術の新しい先生、アラスター・ムーディ先生です」  
バーテミス・クラウチ・ジュニアくん、バーテミス・クラウチ・ジュニアくんオツオツス！（ネタバレ）

ごくごく稀にこのムーディ先生は本物で、クラウチくんが別人に化けて侵入してくる通称どこでもクラウチシステムが解禁されますが、基本的にはクラウチくん確定です。後々シリウスから「忍びの地図」を取り返してさっくり暴いて差し上げる。

ムーディくん（？）が推定ポリジューズ菓をスキットルからグビグビ飲んでるのをよそに、ダンブルドアが話を進めます。聞きましよう。

「……実に喜ばしいことじゃ。百年の沈黙を破るのがここホグワーツであり、わしも一助となることができるとは。さて、これから数ヶ月、わしらは見たこともない心躍るイベントを目の当たりにする。

——今年、ホグワーツで、三大魔法学校対抗試合トライウィザード・トーナメントを行う」といっ  
うわけで、グランドクエスト『三大魔法学校対抗試合トライウィザード・トーナメント』が解禁されたところで今  
回はここまで！ 御笑読ありがとうございます！